

イタパール詩集

بانگِ درا

「隊商の旅立ちを告げる銅鑼の音」

اقبال

イクハール詩集

しんぶん

白
陵南の夜立ちを告げる銅鑼の音

片岡弘次記法

Bāng-e-Darā

Translated into Japanese by
Prof. Hiroji Kataoka
25 May 2008



Daito Bunka University
Faculty of International Relations
560 Iwadono Higashimatsuyamashi
Saitamaken 355-8501
JAPAN

イタパール持草
鎌^が南^の旅^を立^して
え^がけ^る鉛^の鏡^の書^目

目次



はじめに (Pashūr) Az Himgi Katakka

序文 (Dibāchah) Az Shaikh 'Abd-ul-Qādir 22

第一部 (一九〇五年まで) (Paklā Hissah, 1905 tak)

- 1 ヒマラヤ (Himālak) 27
- 2 著やかな花 (Gul-e-vangīā) 25
- 3 幼年時代 (Ahd-e-tiflī) 26
- 4 ミルザー・ガーン (Mirzā Ghānī) 31
- 5 山の窟 (Ab-e-kohsār) 23
- 6 蜘蛛と魂 (Ek Makrā aur Makkhī) 24
- 7 シェリス (Ek pahār aur Gulsharī) 26
- 8 雌牛と山羊 (Ek Gāe aur Bakrī) 28
- 9 子供たちの祈り (Bachche kī Dufā) 20
- 10 同情 (Hamdardī) 27
- 11 母親の夢 (Mān ka Khwab) 22
- 12 小鳥の嘆息 (Parindē ki Faryād) 24
- 13 地に眠る者たち (Kān-e-ghāib) (Khatirān-e-khāk se Istifār) 22
- 14 灯明と旗 (Shamā'-o-parvānah) 27
- 15 知性とは (Aql-o-dil) 22

16	苦痛の聲	(Sada-e-dard)	15
17	太陽	(Afzāb)	15
18	蟻場	(Shama)	15
19	一ツの腹	(Ek Ārzu)	15
20	朝の太陽	(Afzāb-e-subh)	15
21	志の痛み	(Dard-e-'ishq)	18
22	萎れた花	(Gul-e-pashmurdak)	19
23	ナル・サイヤムの哀歌	(Sairiyā ki Lauh-e-tarbat)	19
24	新月	(Māh-e-mau)	19
25	人間と自然の宴	(Inṣān aur Bazm-e-qudrat)	20
26	朝のメロデー	(Payām-e-subh)	23
27	愛と死	('Ishq aur Maut)	19
28	葉紋と夜	(Zakh aur Rishdi)	28
29	詩人	(Shair)	11
30	心	(Dil)	11
31	海り流	(Mauj-e-daryā)	22
32	世の宴からのお水	(Rukhṣat Ae Bazm-e-Jahān)	23
33	乳餃子	(Tfil-e-shirkawar)	24
34	芭蕉の絵	(Tasvir-e-dard)	24
35	別れの嘆き	(Nalāh-e-firāq)	28
16	丹	(Dānd)	28

37	ビラール	(Bilāl)	98
38	人間の上流	(Sarijagaste-e-ādām)	88
39	インドの歌	(Tarānah-e-hind)	81
40	学	(Jugnā)	90
41	朝の學	(Subh ka sīrārah)	72
42	インドの子供たちの歌	(Hindustāni Bāchhon ka Gīt)	74
43	新しいキ	(Naya Shīvīlah)	56
44	ダーグ	(Dāgh)	76
45	雲	(Abr)	88
46	鳥と學	(Ek Jugnā aur Prīndah)	66
47	子供と燈籠	(Bāchdh aur Shama)	90
48	ラーグイー	(Kīār-e-Rāwī)	101
49	旅人の願	(Itijā-e-musāfir)	82
50	ガザル	(Ghazalyāt)	
	ガザル 1	(Gulār-e-hast-o-bād...)	72
	ガザル 2	(Nah Aye Hamen Je mein...)	91
	ガザル 3	(Ajab Wāsiq ki Dīdarī...)	90
	ガザル 4	(Lāon Wuh Tāke Kāhīn...)	
	ガザル 5	(Kyā Kahon Apne Claman...)	
	ガザル 6	(Anokī Wāza Hai Un...)	101
	ガザル 7	(Zāhir ki Nākh se...)	110

カナル 10 ほんごう (Kahō Kyō Anzu-e-beki...) 111
 カナル 9 せんごう (Senkō Nain Dōndōrā tō...) 112
 カナル 10 あたはをこりたなく (Tere 'Ishq ki Iechā...') 113
 カナル 11 何を必死としなす者か (Kushadakh Dast-e-karm Jab...) 114
 カナル 12 ゆたははにり苦しませ (Sakhtyānī Kartā Hīs Dī...)
 カナル 13 マジヌーは何を捨てた (Majnunī ne Shāh Chōrā...) 116

第二部 (一九〇五—一九〇八年) (Higāh-e-dawam 1905 se 1908 tak)

- 57 愛 (Mahabbat) 121
- 58 美の妻実 (Haqiqat-e-husn) 122
- 59 メッセージ (Payām) 123
- 60 スワームイー・ラーム・ヤマーニート (Suvañī Rām Trīth) 124
- 61 アラーガール・カレム・カレム (Ālāghā-e-'alīghar kalij ke nām) 125
- 62 明けの明星 (Akhṭar-e-sūbh) 126
- 63 美し愛 (Husn-o-'ishq) 127
- 64 ...の膝に猫を見ま (---ki Gūd men Bīṭ Dēh Kar) 128
- 65 薔 (Kāf) 129
- 66 月の尾 (Chānd aur Tāyē) 130
- 67 出会う (Wiśāl) 131
- 68 サルマー (Salimā) 132

- 63 理ある志する人 (Ashiq-e-harjāt) 132
 64 終わりなき聲カ (Koshish-e-nātmān) 135
 65 狂しみの声 (Nawā-e-shām) 138
 66 今日の敵衆 (Ishrat-e-Imruz) 139
 67 人間 (Insān) 140
 68 美の現れ (Jalwah-e-kusn) 143
 69 夕暮れ (Ek sham) 147
 70 孤独 (Tahāt) 148
 71 愛のメッセージ (Payām-e-ishq) 141
 72 別語 (Hiraq) 144
 73 アブトル・カーニールに宛てて (‘Abd-ul-Qādir ke Nām) 142
 74 スイクローリヤ (シシリー島) (Sigliyah) 145
 75 ガザル (Ghazaliyat) 146
 ガズル 1 人生とは人間の (Zindagi Insān ki Ik...) 147
 ガズル 2 神と 出来たもう一つの世に (Allāh ‘Aql Ki Jastak Re...) 148
 ガズル 3 世の人は分るるだう (Zamānah Dehge’s Jāb Mere...) 149
 ガズル 4 あなたの輝きけの光に (Dānak Teri ‘Ayni Bij...) 150
 ガズル 5 世の愛と 愛をえう取わらば (Yān to Ae Bazm-e-jān...) 151
 ガズル 6 杯の中の酒り輝は回りの光に (Misāl-e-partau-e-māe...) 152
 ガズル 7 へールを取ら時か来た (Zamānah Aya Hai Behijābi...) 153

第三部 (一八九〇年以降) (Hisrah-e-savirn)

76	イスラーフ	(Bilād-e-Islāmiyah)	31
77	星	(Sitarak)	31
78	ニッコロ	(Do Sitarē)	31
79	王家の墓	(Garristān-e-Shāhī)	31
80	朝の到来	(Namūd-e-Subh)	31
81	アニスティー	(Anīsī)	31
82	花の野	(Falsafah-e-Gharn)	31
83	イスラーフ	(Pā'ī ka Takfah 'Atā Horā par)	31
84	祖国愛	(Watanīyat)	31
85	マディーナ	(Madīnah-e-Madīnah)	31
86	カタール	(Qatar)	31
87	神への不平	(Shikwah)	31
88	月	(Chānd)	31
89	夜と詩人	(Rāt aur Shā'ir)	31
90	星の宴	(Bāz-e-Ranjūm)	31
91	天への旅	(Sair-e-falak)	31
92	忠告	(Nasīhat)	31
93	ラーム	(Rām)	31

- 115 一ツの詩話 (Ek Mukālamah) 227
- 116 俺ちかきん (Main aur-Tu) 227 (Tazmina bar Shir Abu Talib Kalim)
- 117 アブータラフ・カールの歌をよむにんげん (Shibi-o-Haji) 223
- 118 レブリーヒハリー (Shibi-o-Haji) 223
- 119 進展 (Intiqāʿ) 221
- 120 スイデーイク (Sadīq) 221
- 121 現代文明 (Tahzib-e-Hizir) 232
- 122 七き母の思ふ歌 (Wāhidah-e-marhūmah ki yād mein) 223
- 123 太陽光線 (Shuʿā-e-Tfāb) 222
- 124 ウルファイ (Ur-fī) 222
- 125 ある手紙への回答 (Ek khat ke jawāb mein) 222
- 126 ナーナク (Nanak) 222
- 127 不信仰とイスラーム (Kufy-o-Islam) 222
- 128 ビラール (Bilāl) 222
- 129 イスラーム教徒と現代教徒 (Muslimān aur Talim-e-Jadid) 227
- 130 花々の王女 (Pūlon ki Shakhzādī) 222
- 131 サイブの詩をよむにんげん (Tazmin bar Shir Saib) 222
- 132 天国での詩話 (Firādaus mein Ek Mukālamah) 222
- 133 宗教 (Marzhab) 222
- 134 ヤムルーク戦争中の詩話 (Tang-e-yarmūk ka Ek Wazifa) 222
- 135 宗教 (Marzhab) 222

136	木にフゝして春々者ぞを待て	(Rains-takrah Shajar se Usaid Bahar Rakh)	87	
137	メーラーシの夜	(Shab-e-mirraj)	87	
138	花	(Phal)	87	
139	シエイクスピア	(Sheikspiyar)	158	
140	わたしとあなた	(Main aur Tu)	212	
141	瑞田	(Asin)	272	
142	カリフの地位の物語	(Dayyazak-e- <u>khilafat</u>)	157	
143	フマーユーン	(Humayūn)	83	
144	道案内のヒズル	(Kispe-rah)	53	
145	イスラームの再興	(Tulā-e-islām)	88	
146	ヤズル	(Gharaliyat)		
147	ガズル 1	朝思は 心をなくすまを また春風が吹いてきた	(Ye Bad-e-Sabā Kāhī-wale...)	212
148	ガズル 2	さじ鶴と夜遊の夜に	(Yeh Sarod-e-gumri-o-kulbul...)	212
149	ガズル 3	狂った夜遊者よ	(Nālak Hai Bulbul-e-sharālah...)	212
150	ガズル 4	へいんを頼から取り	(Pardā Chāhē se Ukhā...)	177
151	ガズル 5	また春風が吹いてきた	(Phir Bad-e-bahār Aī...)	272
152	ガズル 6	待と焦れかられていらぬ	(Kāhī Ae Hāqiqat-e-mukāshir...)	282
153	ガズル 7	網にかからぬことを望む	(Tāh Dām Bhi Gharāz...)	282
154	ガズル 8	ムスリムよ	(Gardh to Zindāgi Aesāb...)	282
155	高麗詩	(Dāstānah)		
156	モッ	東洋では原則が	(Mashriq mein Usūl-e-dīn...)	87

- その2 少女たちは英話者 (Lafiyān Park Rahi Hain---) 182
- その3 シヤイフモマルダー (Shaikh Sahib Bhi to---) 222
- その4 問もなくこういうことにはな (Yeh Kū Dīn ki---) 282
- その5 西洋の教育は (Tālim-e-madharib Hai Bahut---) 282
- その6 導師が金に困つても (Kuchh Ghām Nahīn Jo---) 283
- その7 西洋文化に酔者の病人に (Tahzīb ke Mariz ko---) 283
- その8 これに終わりがあるか (Intihā Bhi Usi ke---) 287
- その9 われら東洋の貧しい住民 (Hum Mashiq ke Maskin---) 287
- その10 「現象と証人」 (Ahl-e-shuhūd-o-shāhid-o-mashhūd---) 287
- その11 われわれの手元から (Hathon se Aprē Dāman---) 288
- その12 われれが自殺の意志を (Wah Mae Bolī Iyādah---) 288
- その13 アラアのカガ分がらぬ程 (Nāānī The Is Qadr---) 292
- その14 インドにおいて (Hindustān mein Juzū-e-Fukūmat---) 292
- その15 帝國議會が議定したる (Mansabī Amīryal Kānsulī ki---) 297
- その16 忠誠の証紙は (Dāli-e-mīh-o-wafa---) 297
- その17 導師はイスラームを徒の行動のこころ (Fārmā Rahē The Shāikh---) 298
- その18 さあ見る 東洋の導師は (Dehīe Qatī Hī Mashiq---) 298
- その19 睡牛はよろ路駝は (Gāe Ik Roz Hui---) 299
- その20 ある夜 蚊がわたしに言った (Rāe Maachhar ne Kahē---) 299
- その21 この新しい一筋が監獄から (Yeh Agh-e-nāz Jal---) 299
- その22 命が消えても真定は (Jān jāe Hāth se---) 299

インドにおいてイクバル（一八七六—一九三八年）とタゴール（一八六一—一九四一年）はほとんど同時代に生きた、インドの文学の最高峰をなす二つの巨峰としてそびえ立っていた。そして両者と人間が到達しうる最高の天才を異現した。しかしイクバルはタゴールはタゴールが世界で知られてゐる程、世界の人々に知られてゐない。わが国においてもタゴールは広く紹介されてその名声は知られてゐるが、イクバルは一般にはほとんど知られてゐないと言つて可い。タゴールの天才とイクバルのそれと根本的な差異があつた。即ちタゴールは詩人であつたが、イクバルは民族の盛衰を引き起こす不慮なる法則の代弁者であり、その詩作は真剣な思考とその法則の研究より生まれた。そしてイクバルの根柢を流れるものはクルアーンであり、クルアーンこそイクバルの師であつた。神の啓示と予言とを守れば万人の恐れも悲しみもなく正しい道を進めるとし、その中で國家の運命について進退、理想、未來を熟考した。そして人間に与えられた最もすばらしい教示をもつとされてゐるイスラーム教徒が衰退の道をたどつてゐるのを憂へ、その再生と覺醒のメッセージを詩に託して伝へようとした。

一九四七年八月、インドがイギリスから、ヒンドゥー教徒が多数を占めるインドとイスラーム教徒が多数を占めるパキスタンとに二つの國に分かれて獨立すると、パキスタン人の多くはイクバルをパキスタン人の建國詩人とみなした。確かにイクバルは一九三〇年のムスリム連盟アラブハーバード大會の議長を務め、ムスリム多作地、域を合併して單一國家を成立させる構想を述べた。当時これは重大な問題として取り上げられたが、四十年代以降の重大な争点となるパキスタン構想の直接の先驅となり、大會の十七年後、パキスタンが説

生れた。このまうな記でイクバルはわか固では此もすれは政治家に見られが、そのまう
な構想を表現する新のイクバルの詩の中は、そのまうな考へか多数あらわれしている。

現在ではイクバルの詩はパーキスターの心々り心々り一部となつてゐる、しかしわか固で
はウルドゥー語原書が少なく、今までイクバルの詩がまとつたかたちで紹介されること
はなかつた、そこで今回パーキスターでアルアーンに述べた發行部数を語るイクバルの最初
の詩集、陵南の旅とらを告げる詩の音の翻訳紹介を試みた。

詩人がカーリブ（一七九七—一八六七年）の後、インドで再びウルトラ語の詩に新しい精神を吹き込み、カーリブのような無類の想像力とユニークな書き手が生まれ、ウルトラ文学の隆盛の原因をなすような人物が誕生してくるには説も夢にも思わなかった。しかし当時イクトール（一八七〇—一九三八年）のような詩人に恵まれ、その作品の通貨ともいうべき物がインド中のウルトラ語使用者の心に居場所を得て、その名声がイランや小アジアばかりか西欧にまで達したことは、ウルトラ語の運命と言っても言い過ぎではない。

カーリブとイクトールには多くの点で共通点がある。もしわたしが転生ということを信じるなら、ミルデー・アアドララー・ハイン・ガリーブがウルトラ語やバルシア語の詩に抱いた愛、それは是固でもカーリブの靈魂を使うべきを与えず、ガリーブが既に諸々の伴れ宿り、詩の灌漑をしなければならぬとされ、カーリブはハンジャートのスイヤールコートという一階に再居安を表明し、ムハンマド・イクバルのいう名前を得るとゆたしは言いたい。

シヤイフ・ムハンマド・イクバルの敬愛とその慈母は生れ来て来た子供に名前をつけること、その名と命を命名どおりに幸運となった。この幸運な息子はいンドで昔尾よく學業を終ると、イギーリ又に戻った。ケレブアッジといいて成功裡に勉學を修め、今度はドイツに向うことになった。そこで優秀な成績をあげることにでき、帰国した。シヤイフ・ムハンマド・イクバルは西歐滞在中、多数のバルシア語文獻を渉獵して、その研究成果を學術的著作として出版した。それはイラン哲學の鋭い歴史研究と考えてよい。その著作を見てドイツの人々（ヘミンツァン大学）はシヤイフ・ムハンマド・イクバルに博士の學位を授与した。イギーリ又政府は南洋の諸言語及び學問に深い充分に直接知る手段を欠いていたので、博士の詩が世界の名

声を得ていることが分かつたのは驚くしてからであつた。だがそれがかつてイギリス政府もその功績を認め、サー(卿)の爵位を与へた。現在イクバールはトクター・サー・ムハンマド・イクバールの名で有名である。このように名刺にトクターやサーなどの称号がついてゐるが、実際は本名のイクバールだけの者が一般的で有名である。

スイヤールコートにカレッジがあり、そこで先学の継承者で博学のモールヴィー・サイヤト・ミール・ハサンという人が東洋学を教へてゐる。最近政府よりマシム・アル・ウラママー(學者たちの太陽)という称号を得たが、彼が教育方針は彼よりヘルシヤ語やアラビア語を學ぶ者は誰でもヘルシヤ語やアラビア語に興味を置くようにさせるということだつた。イクバールはもとより文學好きであつたが、そのような人からのヘルシヤ語やアラビア語の習得で文學の美しさを更にも追求することになつた。イクバールは學生の頃から詩を書き始めた。ハンジヤールにウルトゥー語の普及が盛み、各都市でウルトゥー語での詩作がはやつた。イクバールの學生時代、スイヤールコートでも詩會が盛んであつた。そこでイクバールも時々がザルを詠ふようになった。ウルトゥー語で當時テリーのナワーブ・ミルサー・ハーン・サーヒブ・ダーグ(一八三〇—一八五九)が有名でデカシの太守の御にらむと彼の名声は更に増した。彼のもとに行けない者は大道で遠方かう師弟関係を結んだ。がザルは郵送で彼のものと送られ、添削の後、送り返された。郵便制度のなかつた前の時代では、どんなに優れた詩人でも多くの弟子を持つことはなかつた。今はこの郵便制度がふ隆で優れた詩人は種を合せることなく沢山の弟子を持つてゐるようになった。このやうな親戚が御にもそのための使用人や事務所も置かねばならぬ程だつた。シヤイフ・ムハンマド・イクバールも彼に手紙を書き、何編かうがザルを添削のため送つた。このやうにしてイクバールもがザルに書いて言葉の使い方が美しきでは当代隨一を誇る師と師弟関係を結ぶことができた。その初期のがザルには、まだ後年の作品が得た名刺のやうなものになつたが、ハンジヤールが片田舎出身のこの學生が普通のがザル

旅券でないことはダークにはすぐ分かった。ダークは即座に決断の余地がないと言つて送り返すつもりで、師弟関係はそれ程長く続かなかつた。しかしこの子若關係の思ひ出は兩者にとつて忘れがたいものゝうだつた。ダークの名前はウルドゥー語に於いて非常の有名なつたので、イクバールの心にはダークとの短期間で親交を命ぜらるゝことのはかたがた關係ではあつたが、師に對する尊敬の念は強かつた。一方ダークも人生の中でイクバールは大なる賞讃の的であつた。ダークは自分を漆削をした弟子の中はイクバールが合つていたことを誇りとしていた。わたしはダークと偶然に會つた機会があつたが、ダークの口からさうさうな自慢話を直接聞くことがあつた。

スイヤールコートのカレッジでF・Aが終つると、B・Aのためシヤイフ・ムハンマド・イクバールはラーホールに行くことになつた。イクバールは哲學の勉強に燃えていた。そしてマラーダラールの教授たちの中で極めて優れた教師も出会うことができた。彼はイクバールの哲學に對する能力を見て、特別注意を払つて教へ始めた。現在トーマス・アーノルド卿となつてイギリスに住んでゐるアーノルド教授で、彼は大層人氣のある教授であつた。優れた書き手として、學問的洞察分野で現代の筆法に通じていた。彼は弟子に自分の好みや任才を教えることが好きで、それでかなり結果をあげてゐた。最初アーナル・カレッジの教授時代、友人シプリーの學問を見事に開花させ、今こゝにはもう一つの価値ある室を見出した。それを輝やかさせた願望が心に生ずれば、師と弟子との間に生じた友情と愛情とがつかひ弟子を師の後継者かゆせ、イギリスにまで連れていくことになつた。そしてそこで兩者の師弟關係は更に強まり、それが今日へ一カニ四年にまで続いている。アーノルド教授はその努力が定り始め、弟子が學問の世界で自分ゝためにも名譽と誇りの原因となつたと喜んでゐる。イクバール自身も、學問の基礎をまずヒル・ハタシに置き、その後ダークから大體を通じて学び、最後の段階でこのアーノルド教授の傳へた指導を受けたことを認めてゐる。

イクバルは學問の道で長き研究者に恵まれ、それらの人達を知り深めた。それらの人々の甲にケンブリッヂ大學教授マクダケリー、アラウレ、ニコルソン等としてソルレイなどの教授がいる。ニコルソン教授はイクバルの有名な詩、「自然の秘義」を英訳し、序文を書きヨロロバやアメリカのイクバルを紹介したことは特筆に値する。こうようにインドの學問の世帯でも當時著名な者、例えばンブリー（一八四六—一九一四年）、ハリー（一八三七—一九一四年）、アクバル（一八四六—一九二一年）などとイクバルは親交を結ぶことができた。彼等の影響がイクバルの作品に、またイクバルの影響が彼等にもある。シブリーはだくさんの手紙で、アクバルは手紙だけでなく詩でイクバルの優秀性を認めている。そしてイクバルを詩の中でこれら先達たちの賞讃を繰り返した。

習作の初めの時期を除いてイクバルの詩作は二〇世紀初めから少し前から始まる。一九〇一年の初め、二年前、わたしは初めてイクバルをラーホールの詩会で見かけた。その詩会は何人かの友達と連れ添って来てあり、かれらはイクバルにカザルを詠ませた。それまでラーホールの人々はイクバルを知らなかった。カザルは短かく、簡單な単語で出来たもので、カザル全体は難しくはなかった。加作のいはユーマアと書き即抄の所があった。聴衆はみんな喜んだ。その後二、三度詩会でカザルを詠むと人々は希望の新人か否かを付いた。それまでイクバルの腕前はラーホールのカレウジの学生や、學問研究に携っていた人達だけの間に知られてゐるだけだった。やがて文學サークルができて、著名な人達も始め、詩をけでなく散文も書かれた。シャイフ・ムハンマド・イクバルはその集会でヒマラヤに語りかける詩を詠んだ。その中にはイギリス的の思想があり、文法はナルシア語的で、詩の美点は祖國愛であった。時代の傾向にあり、またその必要に依つてゐるので又層好詩であった。そして多くの人々からこのかた掲載するようになるほどの要望があった、しかしシャイフ・ムハンマド・イクバルはまた掲載の余地があるとして、持ち帰つてしよい掲載されなかった。この伊が

頼はことわざを得なかつた。同様に某会などの参加要請もことわりわけならなかつた。ただ
ラーホールのイヌスラム擁護協会の大会だけのものは別で、何年かも返つてしまひでおいだ詩を
詠んでもういふ者運に恵まれた。

初期の頃、普通の飲食で詠まれたものは字義通りに詠すべからず、その仕方でも味があつた。
しかしある時友達にイクバールの調子をつけて詠んだらと勧めた。彼ら声は高くもともとも
声だつた。それに節をつけて詠む仕方とくさん知つてゐる。その仕方でも詠むと聴衆はし
んとたり身をすくめて聞いた。その結果、二つうことが起つた。一つは、その後イクバールの
字義通りに詠むのが難しく附つた。聴衆はイクバールが詠むたびに節をつけて詠むように要求
するようになった。もう一つうことは、以前は詩が命令するだけイクバールの詩を理解した
し評価したが、今度は指でもが魅了され始めた。ラーホールでイヌスラム擁護協会の大会でイ
クバールが詩を詠むのが分かるし、数千人の人が一度に集まるようになった。そして詩が詠ま
れだすといふ人は静まり返つて聞いた。詩を理解する者は一層夢中になり、また理解できない者
でも夢中になつた。

一九〇五年より一九〇八年までの間はイクバールの詩の第二期となる。それは彼が日
ロツバで過ごした時期で、詩作のため時間比較的少ない時であつた。そこで滞在中に書かれ
た作品の数は多くない。しかしそれらの中に一つの特徴が見える。当時彼の考への中に二つう
大きな変化が起つた。その三年間のうち二年間はわたしもそこについて、彼といつても合える時
であつた。ある日イクバールはわたしの詩作を止めろと言つた。そして詩作に費す時間を
他の何か有用なことに使いたいと言つた。わたしは彼にさう言つた。あなたも詩は止めない
ればならぬいよ、なものでなく、作品には影響力がある。それで困窮してゐるゆゑが、ゆゑ
不運な固の病魔の治療かである。その水攻めやうな文賦の女を使わず無駄にしてしまつては
くならない。イクバールはそう言葉に多少うなずいたが、アーノルド教授の意見を聞いてかつた

断せしむる、もし彼があなたと同意見なら詩作を止める事の考えは取り止める、もし自分と一致するやう詩作を止めると言つた、だが幸いにも、イクバルが詩作を止めることは適宜でなく、彼が詩作に費す時間はいかに有り、回やんぱに止めても有益であるしアーノルが教授とわたり意見が一致した。それは學問の世界に於てこそ幸運であつた。わたりは考ふる筈の變化は小さなまゝ、かやで始まつたが、結果的には史きな事にはなつた。即ちイクバルの詩作がウルドゥー語に代わつてヘルシア語が表現手段に正れるようになつたのである。

ヘルシア語で詩作しようとする氣持の變化はイクバルの考への中が幾つかの原因から生じたのであらう、しかしわたしはイクバルが自分の著作、即ち神話と義に關するものを書くための大學肩書が重要を原因の一つであつたと思ふ。それ以外にも餘り哲學についての研究が深まり微妙な思想の表現を望むようになると、ヘルシア語に對してウルドゥー語でなければ困難する言葉も少なく、またウルドゥー語で書くのが容易でない成句や文がヘルシア語でなら容易に書ける利点があるのが分かつた。それでイクバルはヘルシア語に傾いたと思ふ。しかしヘルシア語で詩作をするようになつた直接の因は何かある時友人の詩人招待された時の出立事による、そこでヘルシア語で詩を詠むことを覆され、イクバルはヘルシア語で詠め方がどう指導せられた。だが半句を書く以外したことがなかつたのでヘルシア語で詠むことになつてこぼか、たし言ひを借りかけた。しかしその日、その年より言葉はつぎやうな行動を取らせた。イクバルは招待から帰ると横にダリヘルシア語で詩を考へた。翌朝起すやれし昨日書いたがザルを閉入せてくれ。イクバルはその時以來、ヘルシア語で詩を考へる自分の能力を疑つたといふのである。それ以前とちやうなことはなかつたが、その後ダリから帰るにウルドゥー語で書きながら、感持はヘルシア語で詩を作つて行つてゐた。イクバルの詩作の第三の時期である。それは一九〇八年に始まり今も続いている。この時期、ウルドゥー語の傑作となるたゞさんの詩を書きその評判が広くおれられた。だがイクバルが全身全靈

を込めて向つたりはバルシア語での叙事詩「自我の秘義」の執筆であつた。その構想は長い
間頭にあつたが、除々に頭から出て原稿に書かれ始めた。そのついでついに一冊の字の形で現れた。
それによりイクバルの名はインド以外でも知られ、有名になつた。

今日(一九二四年)までイクバルによりバルシア語で三冊の本が書かれた。『自我の秘義』
『忘我の秘義』そして『回東洋からメッセージ』である。最初のものがうた、次のものがより波
と韻を追うことと言葉が詩理でより明瞭になつてゐる。そして三冊目は二冊目より平易になつ
てゐる。イクバルのウルトゥー詩愛好者は彼のバルシア語の詩を見て心配したに違ひない。
しかしバルシア語はウルトゥー語でうつくしく表現できなかったことの付わりをさと考へればな
らなひ、それではイクバルの作品はバルシア語が存在するイスラームの世界に居ることになつ
た。その結果、ヨーロッパやアメリカの人々がわれわれの優れた著者の様子を知つた。日東
洋のウルク、セーシ語の中でヨーロッパの著名な詩人ゲーテの『西洋のあいさつ』に對する答
之を書いた。その中で哲學的考へが極めて美しく表現されてゐる。その好句の中で「真理の代
く述べらるゝていながら、た多くの難問が解けた。長い間、雑誌や新聞でイクバルは「真理の代
弁者」の称号を授けられたが、それらの本の好句でその称号を呼ばれるのがふさわしいこと
が実証された。また誰かがこの称号をイクバルのために使い始めたが、それも何の誇張でも
ないことも証明された。

バルシア語を使い出してからイクバルのウルトゥー詩の作品には、第三期に書かれたウルト
トゥー詩の多くはバルシア語の稿文やバルシア語の文体のよしだが前期のものより多く、それ
バルシア語の好句が多く出てくる。ちよとバルシア語の平原で進む馬とその手綱がウルト
ー詩の方へある程度まげられてゐる。でもいふよゝたである。

一九〇一年から今日(一九二四年)まで雑誌や新聞に掲載され、また大会で詠られたイクバ
ールの作品、それらを集大成したものの出版が多くの人々によつて待ち望まれてきた。イクバ

1ルの定んたらもその全集が出版されることを願つてきた。しかしさきほどの理由を以て自らまで延び延びとなつていた。やゝと今、神の不陰でウルトラ詩に閉心を持つ人々の願ひが叶うことにはなつた。そしてイクバルのウルトラ詩の全集が出版された。それは二九二頁から成り、三つの部分に分かれてゐる。第一期が初めから二九〇五年までの作品、第二期が一九〇五年から一九〇八年まで、第三期が一九〇八年から今日（一九二四年）までの作品である。今日までその中心思想の重要なる存在し、意味と意図が一つどころにまとめられ、四半世紀の長さの研究、分析、観察のワークセンスがつまみ旅の結果であると言つて可い。論ずる価値があると言へる。詩の中の一つの一つの行句、及び片句は、その一つずつに別して論ずる価値があるといへる。しかし序文として書いたこの文で、そこにあるさきほどの詩の批評あるいはさきほどの詩群の詩を比較する余裕はない。そのため出来るならそれについてば後日他の機会を探したい。当然イクバルのウルトラ詩が文學愛好家多量から、雑誌やアジアンロージックのようなかたちで取り扱ふになつてしまふかわりに、一冊の全集のかたちで現れたことは祝福すべきことである。そして長い間、その作めを一堂に集めてみたいとの願望を抱いていた人々、それらの人々がこの全集を興味を持って見て、心からこれを評価することを期待したい。

最後にウルトラ詩のたぬイクバルにこうお願ひしたい。彼が心血をそそぎ、ウルトラ詩に必要とせぬ、ふさわしいとそれ自身を与えてくれるように。イクバル自身、カリカリの愛護の持つ中で、いくつかり連ね分けて書いているが、その一つの行句はウルトラ詩の状況の正しい様子を示すものである。

ウルトラの巻き巻は今も 揚を心愛としていら
この環海は戦つ身と焼く情熱を求めていら (「ミルサー・ガリブレより」)

われわれはこの打句を読んだ後で彼にこうに言いたい。ニク打句を彼に言わせな気持、その
気持で彼がまた暫くしてウルトラの巻を髪をくしける方に関心を向けますように。そして
われわれが長い間待ち望み出版されたものかウルトラの他の全集の発刊版となるような機会
を与えてくれますように。

第一期（一九〇五年まで）

ヒマラヤ

おまへはマラヤよ インドの國の城壁よ
天は身を屈めて おまへの額に口づけする

おまへには年老いた跡が少しも見えない

おまへは朝夕の巡りの守でいつも若々しい

一度 神の顕現があったが、シナイ山のムーサーに

おまへは神の現れを 賢明な人の目に

おまへは見た目には山脈

だがおまへは見張り役 おまへはインドの城壁

おまへは最初の打句か夫であるその言葉

心の孤独の場所へ人間を導いていく おまへは
雪か雪かたのターバンを差まつけた おまへの頭へ

それはあざ笑っている 世界を照らす太陽の帽子を
おまへの冠を云った時の一瞬 人の世は

おまへの溪谷に思案が漂う

おまへの頂まはブレアデス星団との話に夢中

おまへは大地に座り 広い天かおまへの故郷

おまへの裾野より出ている泉は 流れる鏡

風の波の裾は泉のためめりハンカチーフ

雲の手に風の馬のためめり

鞭を与えた 山脈の頂まの稲妻は

1 「解説」この詩はヒマラヤの山脈なる

堂々たる山脈に、神の創造力のマヒ

反映して、神の顔の美しさを、イ

クバルの洞窟に明らかになり、

ヒマラヤの美しさを倍大に感銘

した。彼れはヒマラヤは神の創

造力と芸術的手腕の多くの傑作の

一つに見え、と同時に神の外野

への顕示である。

② 原文での巻首はヒマラヤで詩源は

サンスクリット語でヒマチアルで

意味は雪の家。

③ 原文ではカリーム（神と話しを

する者）でムーサーのこと。ム

ーサーはシナイ山で神の啓の現れ

を要求し、光となって現れた神の

姿に感動する。

④ おまへの冠は詩中で出ている詩

集と仮定すれば、高きうぶよりそ

の持は天の高さと同じり意。

⑤ イスラームの社会で教育の最高点

に達するとターバンをかぶる。学問修得の高さを表す。

おふヒマラヤよ 何かおまえは劇場のようだ それを
自然の手が 地・水・火・風のために造った

なんという喜びに雲は湧きあがっているか

鎖を切った象のようにながれがながれ回っている

刺風のそよぎが揺りかぶるなり

花のつぼみが春の胸餅で揺れる

花びらでつぼみの静けさか言っている

「わたしは今まご花ふる人の手の様を見たことがないし

わか沈黙かわたしの話を語る

自然の独居の陽かわか住け処

小川が山の高き所より歌いたから流れる

天園のコーサルヒタスニームの風の涙を恥じらっている

小川の水は自然の志人に鏡を見せながら

流れの中で時に石をよけ時に石に当りながら

心に響いてくる歌う幸か音を鳴らせ

旅人よ わか心はおまえの声を理解する

夜のライラーが長い巻を巻をほどく時

滝の音は わか心を癒える

夜の静けさ そりせいで話を止む

木々の上にも深い思いが広がる

夕焼けの色はふりよぐふるえている

その頬紅はおまえの頬を美しくする

①天園にある二つの泉。同時に天園
ある川の名前であるが水があま
りにもきれいなので恥じ入ってい
る。

②ネジトりの高原でマシニーンが志
した志人。また夜の意味もある。

おまじマラヤよ あの時を何か聞かせてくれ
おまじの裾野がわが祖先の住み処になった頃の
少し語ってくれ あの時のかたあつた生活の様子を
見せかけの頬紅の染みあとのなかつた時の

見させてくれ 想像かよ もう一度あの朝夕を
あの時の方へ戻してくれ 日々り移り去りて

(一九〇一年四月)

2 華やかな花

おまじは難しい結ひ目をほどく痛みを知らない
華やかな花よ おまじの胸にはさうと心がない
おまじは掌の飾り 空り眩ぎに赤わっていい
この気華ではこの世の樂宮でわたしは得ていない
この花園でわたしはずうかり願望にさいなまれ

おまじの人生は願望の望しみに縁がなくて
おまじを抜かう望るのばわたしは望いでない
この月は美しい姿の人を見ることが以外のものがない
あま華やかな花よ これは園丁のむごい手ではない
どうしたうおまじに分からせられぬか わたし加園丁ではないことを

根掘り葉掘りしつこく見出す目でわたしはことに當るか
²夜驚鳥の目で わたしはおまじの姿を見ている

③ ヒマラヤの太古の時代を指す。カ
シミの地才は紀元前二千五
百人の住みか、ヒンドゥー教の聖
者が美の樂歌を受けヒマラヤの山
中で「ゴゴ」を唱えて書いた。

2

① 解説は自然詩のように見えるが化
のイタバール詩のようには自然の
妙味の基本、即ち神の創造の中で
人間が優れたものとして作られて
いる考えを表している。神の創造
の中でバラは神の創造のヤブ草
の香かであるが、真意を理解しよ
うとする願望を欠くものとして書
かれてくる。

② 人間を他の物から区別するそのの
一つは願望である。

③ ウルトラ一文字ヤヘルシヤ文字
甲で花の認識の志人。今詩的を見
方ではなく全体的に見る見方。

百の子を持つてても、ふまえれば池淵をよしとする
その秘密は何か、ふまえの胸に隠している

わたしのようは、ふまえもツル山の庭園の花びら
わたしは花園から遠い、ふまえも花園から遠い

ふまえは安心しまつてゐる、わたしは匂いのように不安だ
わたしは探求の悦びの剣で傷つてゐる

わたしのこの悶えが、安心を求むる原因にたれたいだろうか
この肝臓の熱が、良樹の家や家の灯台にたれたいだろうか

わたしの無刀が、力のそとにたれたいだろうか
わたしの驚きの鏡が、ジャムシード王の杯に嫉妬とたれたいだろうか

この絶えざる探求こそ、世界を明るくする灯
と、水こそ人聞知恵の馬を駆け巡らせるもゆだ

(一九〇一年五月)

3. 幼年時代

大地と空は、見えぬ曲町々であつた、わたしはぼんやり
母親の胸のふわりだけが一つの世界だ、た、わたしには

あやまれるのがわたしには楽しく、
わたしは言葉は意味のないものであつた、わたしは

子供の時、もし何かで注かされる
肩の鎖の音に悪夢があつた、わたしには

① 花びらの花をよきとしてゐる。

② ムーサーが神の顕現を求めたこと、
て理れた神によつて、氣絶した。

③ 私は霊が死から復活まで、
ま、アいる世界からこの世にた

ふまえは無の世界からこの世にた
てきた、ふまえは両者共に自分の故

界から離れてゐる。

④ とき付ベルシアその保護上のユウツ、
その中ル王はどこでも見たい物

を見ることがあつたという。

⑤ この最後の灯台はイクトバルの燈

の燈である。

3 「解説」芸術的に見ると幼境に
マのテーマのように見えるが、ま

たかテーマは神の創造による美し

真実の探求こそ人間に与えら

た願望の一つであるというこ

である、この能が子供時代から

えられながら守衛の秘密をみるこ

とにたるといふこと。

目を凝らし、月を見ることは、なんとよみあったか。

月は足音をたてず、雲間を待った。

緑り返し、幾度となく聞いてみた。そこはある砂漠や山を

うきうき踊らせた煙の語であつたか。驚きもあつた。

目は見ることに夢中で、唇は話そう話そうとした。

恋にまどむ心になく、ただ賢問の喜びだけがあつた。

(一九〇一年七月)

4. ミルガリー・ガリーブ

4 (解説) 文詩人ガリーブ (一八七九—一九一七)

一八六九年に生ずる詩人であ

ると同時に、インドを大陸にふい

マムスリム文化の曙光として、テ

リーの境を越し、イスラームである。

志は、イスラームが帝国皇帝バルド

ル・ジャー・ガールはガリーブの

天才の認識に及んでゐた。

意味、この表面的なことは分かるか

洞窟のたいてい人が分らない。

③この世のすべてが形を去つた神の

表れであるという考え、神の唯一

性。イタバルの初期は、この考

えであつたが、後には変わる。

人間の思考について、あなたも存在で明らかになつた

想像力という鳥の翼で到達か、こゝまで可能かか

あなたは詩魂の国まりなつた。あなたは五体か詩念だつたら

空の輝きでもあつた。掌から湧き出ていることもあつたか

あなたの目は、その美を見ることを好んだ

人生にかけたる熱となつて、すべての中の、中に隠されてゐる美を

この世の宴はあなたへのハーブの音で満ちてゐる

小川の調べで山の静けさが増すように

あなたも想像力という天國のせいで自然に春がある

あなたも英知という田畑のせいで世界が青々とする

あなたも語りかかた言葉のユーモアの中に人生が隠されてゐる

あなたの語りかかた言葉の中の唇にも語りかける力がある。

陳述力はあなたりの奇跡に満ちた層に百舌の誇りを持つ
スバル星はあなたりの思考の飛躍の高さに驚く

⑤ 優れた書き手もあなたりの技法の前では形無しか
デリーの薔はシラーズの花をあざ笑い

あの あなたは甚慮したデリー^⑥の地に眠る
ワイマールの花園にはあなたと同類の火が眠っているか

芸術の楽しみをあなたと共に演じるのは不可能
完全な思考力と想像力を持つあなたり仲間にならないう限り
あゝ残念 今インシトの地はどうなつてしまつたのか
秘教を理解することを教えてくれる目を持つ人よ

ウルドゥーの巻を綴は今も 節を必要としてゐる

⑦ この蠟燭は城の身を焼く情熱を求めてゐる

あのジャハーン・アーバードよ 知識と文明の揺籃の地よ
おまえの館の扉上や門戸 音をたてずに嘆いてゐる

月や太陽がおまえの土の中で眠つてしまつた
あふれ出る月心の真珠がおまえの地中に隠されてしまつた

だがおまえの中に誰かおまへを埋葬されてゐるが このようお誇りとなる人か
おまえの中に何かは隠されてゐるか このようお輝やく真珠か

(一九〇一年九月)

⑥ デリーを指す。

⑦ イランのシラーズを指す。

⑧ ハーネズ(一八八九年没)のこゝと、ガデルを大成する。

⑨ ドイツの詩人、ゲーテ(一七四九

一八三二年)を指す。

⑩ ジャハーン・アーバード

の略でデリーのものと名、身を争シ

デリーの館を指すと同時、ここ

はルネサンスのジャハーン・アーバード

も連れる。

⑪ 数十年前までさかづきはゆるデリーの

文化文明をさす。

5 山の雲

わが住み処は高く 天に口がけしている
わたしは山の雲 わが裾は花をまき散らしている
時に砂漠が 時に花園が わが住み処
町や荒野が 海や森が わたしのみ
むにかの谷間で休みたくなるを

山の緑がビロードのわたしの寝具

自然がわたしの真珠を降らすようにを教えてく水た
わたしは恵みの雲の塵芥を袋の歌う歌い人
腹まきふさいだ心の悲しみを遠ざける者
花園の美しい木々の宴席に押まをうむ者

わたしは蒼き髪となつて世の頬にふりかふる
わたしは風の波の掬で髪をくしげずる

遠くから期待して待つ目を焦らしてやる
どこかの葉落り上をこゝそり通り過ぎる時には
散髪で肌のはじりに行く時は

流水に濁るまの耳飾りをつけてやる

わたしは封しく芽の出る畑を待たせむ
わたしは海で生まれ 太陽に去りてうれた者
わたしは山り泉水に海をわめきを作った
小鳥たちね 夢を夢中で歌わせた

5 「解説」雲は幸福と神の慈悲の源泉

であり、神の才への案内をすうこ
とを示している。

① 雲であるが雨を降らすと地面か
ら色とりどりの花が咲く。花は雲
のつくる奇蹟である。

② 小雨の時は川面に濁り静かである、
強い雨だと洪水の川に濁るまで

③ 太陽の光は海の水は蒸発し雲
になることを示す。

④ わたしは降らす強い雨をせいで。

神はあなたを感れ入っている

あなたを一目見て

あなたの目はダイヤのほうに輝やま

神はあなたの魂をとさかで飾ってくれた

この美しさ この衣装 この大事業 この清らかな

せらにその上 飛びながら歌うとほすばらしい

魂はこのふだてを閉くと心を和らげ

わたしはあなたに配なびしていませんと言った

断る癖は悪いことだと思つておりました

確かに誰か心を踏みだしてしまふのけよくないことですよ

こう言ふと魂はいた所から飛びたつた

魂は近づくも魂は一瞬にして空を捕まえた

魂は何日間も空腹だった 今またした魂を

葉にしまつて ゆっくり食べさせてしまつた

ワ山とリス 一子作りための

山がリスにこうに言っていた

恥があるなら水に入つて死んでしまえ

小さいくせして傲慢だ なんというこゝ

そんな知恵で そんな顔で そんな心で なんとというこゝ

ワ〔解説〕人間は傲慢にならず、また

自尊心にとらわれず自分の義務や

仕事をすべしとの教へん。

詩の基本的考へはアメリカの詩

人ラルフ・ワルド・エマソンハ

一八〇三〜一八二九の詩による。

なんとも不思議 取るに足りない者が一人前の顔をして
たはも命からめ者が命をかりをして
わが輝きの影であまえり様子は なんだ

わが栄光の前で 地の奥までよ
わたしの申しあるもの それがおまえのとこにある

どこにこんな偉大な山がある ちっ掛けが生きておめ
これを聞くとりえ言った 少しは口を慎め

それは言い過ぎた そんなの心から捨ててしまえ
わたしかおまえのように大きくなくとも 何か気になる
おまえがわたしのまうれ小さくなくとも 何か気になる

すべてに神の力が宿っている
大きいのもあれば小さいのもある これが神の知恵だ

この世でおまえを大きく作ったのも神
わたしは木登りを教えてくれたのも神

おまえには足を上げる力はない
確かに大きい 確かに美しい だがほかにおまえは何かある

おまえは大きいが てはわたしのようば技をおたしに見せてくれ
このびんろうの字をちぎって割ってわたしに見せてくれ

この世ではおんな箱も無駄でない
神の仕業には悪いことは何もない

8. 雌牛と山羊 一子侯のための

牧草地はどこも青々としていた

そこはすっかり春であつた

その春の様子は何と言えはいいか

四方に滲んだ小川が流れていて

数えざ氷ない程のサクロの木々

菩提樹のオ々は影をふとして

涼しい風が吹き

小鳥たちのさえずりがしていた

小川のはとりに一匹の山羊が

草をばみながら、いこからかやつて来た

足を止め逆りを見直す

そばに一頭 雌牛がたたずんでいた

すずかかんで寝静をした

それかう礼儀正しく言った

ごきげんいかがですか おぼさん

お陰さまで と雌牛は答えてから言った

世知辛い毎日です

わたしの人生は困難っぱさです

いやになつてしまひます ほんとは

運が悪いです ほんとに

8 (解説) 地上に住む者の繁栄と平和

は、神によつて与えられた資源の

適切なる管理によつてある。その

ような管理とは神によつて与えら

れた人間の能力の賢明な使用によ

り、^神まじい結果を生む。しかし、^神かき

る、人間は神の創造の傑作であり

他のより優れている。

神さまの^①感光は目をこらしていきす。わたしは
無理強いする者たちを呪つていきす。わたしは
哀れな者には力がありません。

運命の申れ書かれたことが起きてしまひました。
人間などにはいいことをしなさいかいいです。

それと係わりを持つことなごまごまなにかいいです。
牛乳のおが少なうとなく怒ります。

やせてくると売つてしまひます。

これでもかかれずもかこも使ひます。

さまたまな任掛けで服従させます。
その子供たちを養つてやつておくれさう。わたしは
牛乳で命を育ててやつております。わたしは

いいことの代り悪いことをしてくれるだけだす。

神さま どうか お助けください。

山羊はこの話を一部しじゅう聞いて

言つた。そんな不平はよくないことだす。

確かい。おもしろくないことではじょうか。

だがわたしはこうに言ひたいです。神さまは知つていらつしやると

この牧場。この冷たい風。

この青草。そしてこの木陰。

このようなきかほはどこにあるでしょう。

口も利けないものにとつて。他にどこにあるでしょう。

① 誰かいいことをする人、誰かに悪い
ことをする神の感光。
② 自分や自分のお身に利益をかける者
たち。

これらの幸せは人間の幸福かす
すべての楽しみは夢の泡陰です

そこで生活は夢の泡陰です

東洋がいいか、自由主義がいいか、あたしたちにとって

いろいろの危険があります、森の中は

どうか神さき、きんさきかありませんように

わたしたちには人間への信義があります、

それによ句を言うのはよくありません

もし安心を重んじるなら

人間の光句を決して言つてはいけません

誰かこの言葉を聞いて恥じつた

人間の文句を言ったことを後悔した

そこで密かに事のよしあしを考えた

そして誰か思ひ直して言った

山さきの休は小さいか
山さきの言葉は身にしみず

9. 子供たちの祈りー子供のためにー

わたしの願いが祈りとなって
神さま わたしの一室を灯明のように
わたしの祈りとなって
わたしの祈りとなって
わたしの祈りとなって

今「解説」イスラームの子供たちの理
想的な願望である。インド、パ
キスタン、イスラーム教徒の子
供たちに教えられ、暗記されてい
る。

わたしりせいで世の闇が遠のきますように
わたしの輝きでどこもかしこも明るくになりますように

わたしのせいで回の飾りか

花園の飾りが花でなっているようになりましますように

わたしの人生が燦々ようでありましますように 神さま

わたしが学問の灯明を受取るようになりましますように 神さま

わたしの務めが楽しい人々の助けもなりましますように

苦しんでいる人々 弱っている人々を愛せるようになりましますように

神さま 恵の道よりお救いください わたしを

善行の道 その道を歩ませてください わたしに

10 同情

木の小屋に一匹

夜鷺鳥が悲しそうに止まっていた

夜鷺鳥は言った 夜になつてしまった

飛んだり餌をついばんだりして一日が過ぎてしまった

どうしたら巢に戻れるだろう

あたり一面 暗闇にわたってしまった

夜鷺鳥のこの嘆きを聞いて

雲がそばから言った

10「解説」基本的考へは英詩人ウィリ

ム・コーパー(一七三二—一八〇

〇年)の詩による。

助けにまいりませう 一生懸命

とつても小さな虫ですけれど、わたしは

夜、暗くても、心配ないです。

わたしは道を通り道を明るくします。

神さまがわたしに光をさそてくわました

わたしを光らせて灯明にしてくわました

世の中でよい人とは

他の人の役に立つ人のことです

11 母親の夢

ある晩寝てからこのういう夢を見ました

わたしは不安はそれでさらに増えました

わたしはいなかへ行く途中でした

途中であたりがぼやけて暗で道が分からなくなつてしまいました

怖くて髪の毛が立つていました

足を上げることにも恐ろしくて出来ませんでした

勇気を出して前に進みました

多るも少年たちの行列が見えませんでした

まをめた衣服を着て

みな手に灯明台を持っていました

11 解説 この語り教師はイースラーム

教徒はどんな逆境でも忍耐強く、

平静を保ちぬがらば、逆境で

泣くことは誰れとつてもいいこと

にらぬ。目クルアーン 27 章

153 節 参照。

基本的な考えは英詩人ウィリアム

コーパーによる。

彼らは黙つたまま前へ進んでおりました
どこへ行くのか分かりませんでした

そうこうするうちに、わたしの息子が

その列の中にいるのが見えました

息子は一言うしろで遠く歩けませんでした

息子の手の灯明台には明かりがついておりません

わたしは息子を呼び止めようとした、いえいえ

わたしを置きざりにして、どっしりてこん所に来ているの

かまよと別れてかうわたしはじつとしていらぬ

毎日涙の首飾りに涙の粒を溜めています

おまへはわたしのことを少しも気遣わなかった

置きざりにして行ってしまった、それが親を紅なり

子供はわたしの悲しい怒りを見ました

子供は顔を向けて言いました

わたしの胸にはあなたを泣かせています

でもそうだとしどもどかすこともできません

こう言うと彼はしばらく黙ってました

今度は灯明台を見せて言ひ出し始めました

あなたはお分かりですか、これがけうひたか

あなたの子供がこれをお消したんですよ

12 小鳥の嘆き

過ぎし日をわたりは思い出す、)

花園のあの春 仲間たちのあのさえずり

わが巣にあっては自由は今どこに

喜んで戻つて来た 喜んで飛んで行ったあの

それを思い出すと心が痛む

雲の流り上に つぼみの笑い声

かわいらしいあの姿 愛うしいあの形

そのせいでわが巣はにぎわつていた

そのさえずりは今わが鳥籠には来ない

おあ自由が今 わが力の中にあれば

なんと不運か わたしは わたしはもとの住み処を切望する

わが里に反かいる わたしは鳥籠の中に入れられて

春が来ると 花うつほみは笑っている

わたしはこの時い所でわが運命を泣いている

この揃らぬ話の話を誰に聞かせよう

ここ鳥籠の中は恐ろしく 悲しみて死んでしまわぬか

花園に別れた時から この状態はなつた

心は悲しみを哀れみ 悲しみは心を哀れんで

これをわたしの歌と考えて喜ばないでくれ 聞くんよ

この音は苦しむ者の心の嘆きだ

12

(解説) 下は明らかに政治的諷刺の意

思と政治的諷刺の意を伝える。

この詩が書かれた20世紀初頭、

この詩の内容は当時リンドを大

陸の政治的情勢に合っていたが、

今でも政治的諷刺に於いてのメソ

セージと見る。

基本的考へは英詩人ウイリアム・

ゴッパールの詩による。

わたしを放して自由にしてくれ 捕えろんよ
わたしは声なき囚人 わたしを放して祝福を得よ おまへは

13 地に眠る者たちへの質問

輝く太陽が隠れた ク方の頬はベールを取った

この世の肩の上に 夕方の暮さ憂が広がった

喪服のこの準備は誰かを悲しんでいる

だが自然の宴は太陽を悲しんでいる

空は話す唇に魔法をかけている

夜の魔術の視線は目覚めた目に注がれている

池照り川の中に見る波も沈んでしまった

だが遠くからこゝろ呼び鈴の音がする

わが心は愛の切なさで世間から逃れている

わたしを世の混乱から遠くへ連れ来てしまつた

わたしは不運な眺めを見ている

わたしは墓の孤独の隅に葬られている人の仲間である

そしてここで止まれ わたしをここに居させてくれ

忘れた酒に酔う者よ おまへはこゝにいる

少し語ってくれ おまへがいるところより有様を

14 解脱一月に見えない来世、天上の

世界は地上の生活と違ふうう人間

はもう不可解を解くことができない

い・だがクルアーンを通しての神

の導きがその真実を解かしてくれ

る。

そこも今日 明日かある何か驚きの家なのか

こゝしてさまたまな要素の無いの何か見世物がある所なのか

その裏面の地がも人間に心は無力なのか

そこでも灯明の熱で城は焼け花めのか

そここの花園にも花と夜鶯の物語はあるのか

ここには一つの片句で心臓が飛び出す

詩の熱さでそこでも心臓が飛び出すのか

ここでの親戚や友達を捨てる程のやつかいさ

そここの花園でもそのような鋭い刺はあるのか

この世では日々の糧を得る難しさと困難があるのか

その裏面の地でも精神がこの種の心配に煩わせられるのか

そこにも雷はあるのか 塵土はいるのか 収穫はあるのか

敵討はあるのか 追討はいるのか

そこでも麦わらを集めるのか 粟のため

煉瓦や花の心配をするのか 家のため

そこでも人間はその人間性を知らないのか

宗教や憎むの境いの気遣いのないのか

そこでも夜鶯の啼きに花園の人は泣かないのか

この地上でのようい そこでも心の痛みはないのか

天国とは一つの園なのか それとも安息の地なのか

あるいば 神の美のバルグーをつけていない顔の呼び名なのか

心と志の物語

人間は人類の唯一性の考えを知ら
ない。人間は自分や自分の周囲、
国のためにだけ利益を上げること
に精をこめて、クルアーン第95章の
節を記す。

最後の審判の日、天園での神の
眺めは完全な人間に打ちつける最善の
報酬である。クルアーン第95章ク
ルアーン第95章の節、人間は
三つに命ぜられ、最善の人が天園
に行き、神の報を見ることかである。

地獄とは罪人を焼きたての赤銅の地獄か
火の釜の中に懲罰の目的が隠されて居るのか
その地では歩くかゆり 震ぶのか
地上の者が死というこの その秘密は何か
ここでの暮らうしは心の混乱の原因となるか

人間の知識はそこでも限られて居るのか
見ることで怒のを得られるか 別れた者う心は
あるいは見ることを拒否されるのか そのソールムでも

そこでも精神は探宥を安心を得るのか
そこでも人間は疑問のきびで死ぬ程にたふるか
ああ その地も暗黒が満ちているのか

それとも愛の顕現が先に満ちているのか
おまえ 詰ってくれ 回る元にある秘密を
死とは人間の心に突きささった刺である

14 灯明と蛾

灯明よ 蛾はおまえにどうして恋い焦れるのだ
この闇を命はおまえにどうして身を捧げるのだ
おまえの猫舌はお水を氷銀のように震えさせている
おまえはお水に恋の仁草を教えたのか

(一九〇二年二月)

①ムーサーはソールム出で神の顕現を
求めたか、おまえはわたしの姿を
見ることでまじいと神にすわれ
た、クルアーン章、例、節、無題、
②愛がたぐく。

14 解説は詩人は灯明に訴ふる蛾の愛
を神に訴ふるイスラーム教徒の愛
に昇華させている。このおまえを神
うて読まれると意味がでてくる。

それはおまえの輝く星の回りを回っている
それはおまえの電光の呪文を吹きかけられてか
死の苦しみの中にそれは命の安らぎを持つのか
おまえの夢の中に永遠の人生があるのか
この世の悲しみの家におまえの輝きがないなら
先ず心が燃える願望の本は青々と繁らぬ
おまえの面前で焼け焦るのはそれの祈りだ
その小さなには情熱の収束がある
幾分その中に塵埃の美を感ずる情熱がある
おまえは小さなソールムで、一方それは小モラセである
眼と明かりを見ようとする気力よ
小モラセと明かりの願望よ

15 知性といふ

知性はある日 心にこう言った
わたしは道に迷った人の案内人だ
地上にいるがわたしは空まで登れる
さあわたしはどこまで達するか見よ
ミラセでわたしの仕事は案内人
健脚のヒズルのような わたしは

(一九〇二年四月)

① 莫の志人、すなわち神の是を見ようとする情熱

② ツールムで神の顕現を要求し、先
とどって現れた神を見て気絶した
モラセのようには輝きおまえを神を
見ようとする願望とを待つている。

③ 小モラセの中に、小程の願望の強
さがあるにもかかわらず人間には
神を見ようとする願望は少ない。

15 「御説」イタカリは知より心の方

を優先させている。知とはそれ
より人間が新しいことを発見する
とし、心とは直感を確信するの
後で之を考えている。この考えを
基にしてイタカリは自我の攻撃
を繰り返す、このやさしい詩で述べた
こと、つまり知り知より愛や心の優先が

わたしは人生という本の注釈者

偉大なる神の輝きを示す者 わたしは

心よ、おまえは血が流れた だが

わたしは高価なルビーを越える者

心はこれを聞くと言った 破れん

だがわたしを見よ わたしがどうか

おまえは人生の秘密を理解する

だがわたしは目で見る

おまえは目に見えるものし関係を持つ

だがわたしは内なるものを知っている

世の人はおまえから知識を わたしから認識を得る

おまえは神を探す人 わたしは神を見せる人

知識の極限は不安である

だがわたしはそれが病いの事実

あなたは真理の宝を輝かす

わたしは美の宝の明かりだ

おまえは時や場に補われたいら

わたしは、^心天を飛ぶ鳥だ

わたしはの位置はどんなに高いか

わたしは神のいる所より高い所にいる

イクルバールのその後の作品の中に
さまざまの言葉で述べらるるこ
に
なる。

預言者の一人て道案内で有名。そ
れよりも知力は進み、モーセを
案内している。イクルバール
は幸々しく参照。

⑤ さまざまの知識は人々を混乱させ
るだけ、心こそ目的地に人々を導
く。

(一九〇二年五月)

イクルバール第三章十四節参照。
*天は第七天の木の神までいける
が、勿論わたしはそれ以上も行け
る。だが知は知識世界だけ。

16 苦痛の声

心は熱く、いかにして心安らざば得られない
 ガンジエの流水よ、わたしをここに沈めさせてくれ
 わか祖國は天地異変の不知を来たしている
 ここでの合一とは、離れ気味になることか
 一つ色になる代わりの不一致は惨劇だ
 一つ脱鞍場にある鞍が鞍が散り散りは惨劇だ
 花々の間に左胡閑作りの空気がない
 花々の花園での歌はほんた味のわかない
 近づきや集しみぎめたしげなくなされてい
 波と岸辺の女カウレ惑わされていわたしは
 神の奇跡を演じる詩人は脱鞍場を明らかにする鞍だ
 だが脱鞍場がないなら、その鞍が存在は何だ
 見ようとする人かいない詩、美を見せ何になら
 宴かたの時、灯明をつけて何の悲味がある
 詩への興味を沈黙に任せたいのか
 わが鏡からその空かな世出てしまわぬいっか
 いっ口をあげたか、わが話しや集しむは
 それは鞍の火花が花園を吹き飛ばした時

(一九〇四年八月)

16 (解説) この詩集でイクバールが
50

核的感情を表した最初の詩である。
 イクバールはムスリムとヒンドゥー
 ーの友好関係の欠点を嘆いている。
 それがいかり又からう独を違ら
 せていると考へ、早急の独立のた
 めに両者の友好関係の確立を望ん
 だ。
 ヒンドゥー教徒ヒイスラーム教徒
 が一併になつた所と考へる。

17 太陽

太陽よ あなたは世界の命令であり生活の妻だ
 あなたは宇宙の森羅万象をまじめる縷じ紐だ
 あなたが存在の非存在の現れの原因となる
 あなたの息使いによつてこの世の花園が青々となる
 さまざまな要素からなる見せ物はあなたによる
 すべての物の人生の源泉はあなたによる
 あらゆることがあなたより顕現でなっている
 あなたによつて導かれる苦悶も人生である
 この世で光と輝る太陽と輝る心である
 太陽よ われらに知性や輝きを与えよ
 知恵の目にその顕現で光を与えよ
 あなたこそ人生の宝の籠りを用意する者だ
 あなたこそ人生の浮沈を用意する火の神だ
 それぞれ生き物の存在はあなたより傑作
 木の葉の連なりにもあなたより現れがある
 あなたは生きとし生ける物の首脳者
 あなたは光で出来たもつたちの長
 生まれをせず 生かされて
 終始せしめられず あなたの輝きは

17

解説 この詩はイクバルよりも
 記されたリクガニーダのメントラ
 の一部がある。それ故この中には
 イクバルの個人的見解は付する
 ない。
 しかし内容に太陽の讃歌で、太
 陽から得られる恩恵について述べ
 られている。

(一九〇二年八月)

蟻燭よ わたしもこの世の宴で苦痛に満ちている

わか嘆まは べンルーダの種が割れるような音である

愛ほおまえに心の悲哀の熱を与えた

そしてわたしを夕焼けのうらな流の花売りにした

おまえは飲華の宴の蟻燭か その水とも墓場の蟻燭か

いずれにしても悲しみの流と抱きあっている おまえは

おまえの視線は神の秘密を知る志する者のようだ

わが眼差しは巨剣の混乱に捕われいている

おまえの輝きはカアバでも偶像殿でも同じ

わたしは寛秋の寺院にメッカの聖域の区別は捕われいている

おまえから立ち上る灰色の煙は唾まの跡がある

おまえは燃えている 神の顔現の稲妻から遠くにあるので

おまえは燃えている おまえの問えを火と替えている

おまえの目は見えてはいるが 目今の蟻燭心に目がいってはいない

わたしは身を焦す情熱で氷銀のようだった

そして不安な心の動揺を知っている

それほ何か悪人の顔態であった

わたしは身をしろげさせる感じを手とてくわん

与えている。しかし人を殺すまらせる
理解は人間五人種や色の色調の
膚にした。そこには人間ばかりでな
く神の宇宙の半信り認識を置して
達成させる善いを失なわせる結果
となった。

この詩はロマクサン田志編集長
に掲載時に難かしやると言われ、
しかしイクバルは思考が微妙で難
かしい時言葉をやさしくすること
は不可能であると答えている。

丁 辛子粒を灰の中に入れろとそれは
強かにバチバチと音をたてる、そ
の音を不平にたてている。

三 蟻燭の添けるのを流を法すとして
いる。

三 神の唯一性を知るもの。

わたしのこの認識がわたしを落さずかたぐさせている
この火花の宇にたくさんり火壇が眠っている
高いか低いかわりこころに別れ違いはそれかまら
花の中の音り 酒の中の酔いはそれかまら

花園の 夜鶯あり 花園の遠いはこの認識から

わたしはあまの音りの平懐もこの認識から
大地創造の朝 絶好うまが愛う心を奪うそりした、た時
「肩水」の音がすると 愛の命に熱中といふことを教えた

その鎌命令かまら 肩水れの音聲が生きれた花園を見よしり
一つの目を使ったたさんか不安な夢を見よとの
わたしは聞くな 神の存在がバールの中をいかなるか
別水の夜はなつた わたしの現水の朝は

その日々は過ぎてしまった わたしはこころのま縛を知らずか
わかればシナイ山の木々の飾りをなつた
わたしは捕り水り身だ鳥籠を花園と考えている わたしは

異邦人の存在を祖国と考えている わたしは
祖国を思い出すことは寂もばく憂うつな話もなる
形は何見てもみなくなり 時は探してみたくなり

蠟燭の 思考の幻影の極限を見よ
天の作人たるが 踏踏した者の結玉を見よ

わたしは 別離が主題 ががブレアアア又學居だ わたしは
この世につりて 著作する人の高待のあらわ水だ わたしは

① 神が人間に与えてく水は志哉。

② 神が人間に与えてく水はたろ。これ
が人間の間にて王はまな村正を作
り出させている。

③ 神紀主皇孫の考えては、最初はま
すなわち神以外は何もなかつた。
是は認められることを望み、自分
を護る者を作るために宇宙を
作り、諸星者を作つたことをな。

④ 神紀主皇孫をしのびたうに、すべ
その物の中絶同を念進生は目かみ
なめで。

⑤ わたしはこころの世に生みれる以前は
神の所にあつた。生み、生み、生み、
たろが神の所より離れた。志。レ
かし詞家力があつた。こころせか白
き神を見ることかである。

⑥ 限りある命の間に人間は永遠と考
えている。高い地位を得ていると
人間は考えていた。天使は踊舞せ
ぬ。

⑦ 神と別かれていた。だがその地位
は自分では高いとしていた。こころ

神がわたしたついで多く時、わたしを哀すことを望んだ

わたしの名を人生という詩集の冒頭に掲げて書いた

② 真珠は土の一握りの中にあることを望んかいる

③ 文任のまはば、尤やりして、自分が主眼の程度は、赤い

正しく物が見えな、いつは、目のせいで

④ 世帯は慈悲の力がある者は、先輝を放つ眺めた

時と場所の連続はある種の、わがしにてある

それは見せ、知らか、好きな美人の首にかけた首飾である

わたしは目的地が好きだ、だが道に迷っている

⑤ 遺囑は、わたしは目に騙されて、囚人だ

仲人もその通り、暴力の裏もその通り

⑥ アバ聖殿の屋根も、その屋根の鳥もその通り

わたしは、女まな、か、それとも、水か、水で、すう、方の、志、た、か

わたしは、猫、態、仔、か、それとも、犬、類、い、する、か、行、か、分、か、ら、行、か

だが、唇、は、の、せて、は、なら、ない、さ、め、か、し、い、針、密、は

また、始、めて、は、なら、ない、あ、り、首、つ、り、の、利、と、光、の、綱、の、話、は

(一九二二年三月)

19 一つの願い

世の集より花をとりし、神よわたしは
空の何が導しいか、心が消えて、大時
喧騒から逃がれて、わが心は探している
話も無駄になつてしまふような静けさを

① 神は人間を最も愛し、とりとて作

り、高い地位を手に入れた。

② 神は自分を真珠とし、人間の甲

それを置いた

③ 一握りの土を夫の美、真珠を主題

の南には論じている

④ 遺囑を度は、目にはあり、暴力の眺められ

ない。

⑤ 人間は時、囚人である

⑥ 愛のための媚態、愛のための懇願
などの言葉。

19 (解説) この詩は現実の社会からの

逃避ではない。イカバルには現実
の人生や問題から逃れることを望
まず常に闘かおうとした。このこ
とは彼の重要なメッセージであり
アドハイスである。都市生活は物
質的の底層は与えるか心や良心を

わたしは静けさが好き、わたしの願いとけい
山の麓に小こけ屋を建てたこと
心配がなくなり、既居して日が過せるように
世の起しみの朝を心から抜いて

音楽の響しみがあろう、小鳥たらつさえずりに
息の流れる響きの音が響き

花の蕾が動いて、誰かかういふ位があるよう
静かなたかもわたしたちの世界を夏せるものとなるよう
手が手紙となり、草が寝床となり

人込みを取らず、かたさ覚える様子、孤独の中にあるよう
わたしの望に夜鶯鳥かなつて

その小こけ屋にわたしたちを忘れる様子、かたさよう
小屋の両側には草米が青々と茂り

小川の氷は影を映し
山り眺め、人を慰み入りさせよう

小川の氷も小波を立てて背伸びをして見ているよう
大地に抱かれ、緑の草木は眠り

森の中を氷は巡って、輝やき
バウの小枝は氷にしがたかかり

美しき人が鏡をのぞいているか、あつた
夕日か夜の花嫁に、メレンゲをめぐり

いへくの花や衣裳は赤味がかった金色になり

満足させない、それに反し、世界の
生活は直観の生活で人間に心の活
きを与えるものとしている。

花を林に映して、いぬ、ジャムシ
トモの林には世界が映って見えた
ときわめている。

三浦祥のヘレナが女性が結婚をどう
祝いの時、手や足に紋様を描く。

他毎 旅をしまゝいる者が寝れ果てるし その時

後らの希望にわが家の壊れた灯台がたり

層が光る時 彼らにわが荒崖が見えるように

四方の空を黒雲が覆う時に

明け方の郭公 それに朝の祈りを告げる夜侍の声

わたしはそれと一緒に歌おう それをわたしと一緒に歌うだろう

寺院や聖殿の祈りはわが耳に耳障り

掘立小屋の穴こそ わたしに朝を告げるもの

花々を露が浄めに来る時

水が流くことこそ浄めとなれ 嘆きかゆが祈りとなれ

その静寂の中 わが嘆きが赤くなれ

星々の隊商の列にわが声か銅鑼の音となれ

苦痛に満ちている心を わが泣き声か泣かさせよ

志誠を打くしれた舌をきくと 起すように

20 朝の太陽

人間の泡場での混沌から離れて上にいる おまえは

天上の雲を仰っている杯だ おまえは

夜明けの花嫁の耳についている真珠だ おまえは

地平線が頬が捧り込んでいる空だ おまえは

20 (解説) 太陽と人間を較べて、人間

には虚空の苦しみがあるが、太陽

にはそれがないとしている。この

詩がエッセンスは最後の方の対

句である。

① 明け方寺院では鐘かなんか、イヤ
スラム聖殿ではアザシの音が
する。

② 祈り即ち礼拝の祈りは小流浄とい
って身を浄める。

(一九〇二年十月)

日々の夏から夕への暗さの傷が消えた

空から書き損いの空のよりの星々が消えた

おまへの美しさが天空の屋根から輝き出すし

目から色はなくなる 夢の酒の跡形が

眠めの唇は光で満ちる

だがおまへの光は外の目を開けてやる

目か徐すもろは 見世物

内なる目が開くのは 神の顕現

この世で自由になろうとした確いはずせられなかつた

生涯 世のしからみの鎖の中には捕われている

おまへの目には上も下も、いいも悪いもみな同じ

わたしもそれという物の見方の目をもつて

わが目は他り人の悲しみで涙の住み処であれ

宗教や法の区別を捕われず心は自由であれ

わが言葉が特別の色に染まらないように

守りての人間かわが再稼であれ 世界をゆがかわが祖国であれ

内なる目に自然の成り立ちの秘密が明らかになれ

わが思想の燈塔の煙が天を知るようであれ

頑固な顔が目をほくことがわたしの起るべきでないように

愛を起こせざるまがすべての中に見えてこないうちに

花の葉にもし風の衝撃が起こるなら

わが目から涙はなつて憂鬱が流れるだらう

① 太陽昇ることによって、

② 眠りを酒で比喩。目が覚める。ま目の志で物が見え始める。

③ 常に何かは捕われ、送っていた。

④ さよさらば関係でクルトが出現すること。

⑤ 宇宙のとは一つで同じあると考へる。

心に愛の情熱の輝きが出るように

その光で直実の秘密の様子が分かるように

自然の美の鏡と成れ、おかしな心でなく

誰に人問れ打する同情を隠さ、どんな取り引きもなくあれ

もしおまえが世の混濁を耐えることかたてまないなら

大空でいちばん光を放つ者よ、他は超越した光の輝きとほなれない

世界を創るものとしての役割に、おまえが気がついていないなら

人間の家の戸口に、ある止ばこりの一語にも答るを

天使たちが眺めた光、それは光景を見ようとして一生懸命だ

だがおまえは明日の来り方を待っているだけだ

直実の光を求める願望が、おまえが人間の心にある

枕栗の探突のライラーの家は、ここラクダの背の柔らかなる

難しい結が目をほじくことは何と楽しいことか

得られる多くの業し、おまえは何も得られぬわが試みにある

疑問を持つ苦痛を、おまえの心にもない

直実の秘密を探突する言を、おまえは知らない

21 直実の痛み

直実の痛みよ、おまえは輝く真珠だ

おまえのことを知らない人々のために、おまえを明かすな

① 人間をまよ

② その依りせいで、今も救いを待て

いない。

21「解説」詩の中で、愛は語りかけている。そして愛の重要性や価値を明らかにした。その中に、後年イクバルの哲学の基礎となる神秘主義が見える。

③ 直実の身元は、直実にだけ分かる。

おまえの目を見せ場は無れ暮に隠れてある

現代の寧ろ人々の視線は、外見の崇拜に向つて、
新しい風が吹き始めた。この世の園に

恋の痛みよ、今それを見せせて見せ甲斐がはい
いか、自分を表わそうとせよとするな

夜鶯鳥の啼きなきに同情をせよとせよとするな
チューリップは愛の酒を欠くだろう

雲の涙の呼び名は水の溜りたるだろう
おまえの秘密は胸のどこかに隠しておけ

財臓が塗り出す涙がおまえの陰口をしないように
華やかな持人の言葉の言い方も口にする所

笛の音に別れの不平が隠されていはいか
今のせはあら捜しの時、どこかに隠れていよ

おまえが任んでいる心の中、そこに隠れていよ
現代科学が生んだ愛は、おまえに無闇心である、見よ

真実に到達しない日は、おまえの探査者でない、見よ
真理の探査に高い思考を積ませよ

知恵ある目を驚きの甲に残せ

おまえが春とあるのは、さういふ花園でない
こゝにはおまえが輝き出るのにふさわしくない

この尊より、飯の見かけだけのものがある
おまえの目の目的地は真実が隠されている場所だ

①恋の傷

②現代は物質主義であり恋の痛みが
いふかうない。

③誠意や善志がなくなったので。

④チューリップは思いこみがあり、
水を注ぐ人は恋の傷と考へる、今
チューリップにチューリップといふ
る時代は、チューリップといふ

⑤涙は表面的には水であるが、涙は
は痛みを伴うので水より高貴な物。

⑥恋の苦しみなど語病っぽい。

⑦科学や技術では本質はよく見えず
水ない。それ達するは本質が必
要である。

それぞれ^①の心は思想^②の酒り酔いで酔ってしまっている
昨今の^③ムーサーたちや仁者は幾分違うものになつてゐる

22 萎れた花

萎れてしまつた花よ どの言葉でおまえを花と言ふう
じのようによつておまえを夜鷺島の心の憧れと言ふう
かつて風の波がおまえの揺り籠^④だつた
花園の中で笑いの花がおまえの呼び名だつた

朝風はおまえの恩恵を受けていた

花園はおまえの息であたかも香水箱りようだつた

今 おまえの上に露の涙を流している 物が泣いている目が
おまえの憂うつそうな様子に隠れている 物が消滅した心が
わたしの落ちた様子を映す小さな鏡 おまえは
わか人生は正に夢だつた その説明がおまえ

竹管りように私をゆか不幸の話をする

花よ聞け 私を志人との別れた話をし

① 愛を過小評価し無視している。
② 「神と話をする者」すなわちシナ
イ山でのムーサー。

22 解説) 花かその枝から別れた後、
萎むようじん人間の精神も其愛の
心はずなれど神より別れることにて
衰弱してしまふことを表わしてい
る。これも神妙を義の考へか見
ゆるが、初難よりある神妙を義的
傾向は父親の影響とも言われる。

③ ルミール(ヘーニ。七三三三)ベル
シテ文学最不の神秘主義詩人の詩
より。

23 サル・サイヤト墓碑

息の綱に捕えられてゐる命の鳥よ
籠の中に捕えられてゐる魂の鳥よ

この花園の歌うたいたる自由を見よ
荒廢した町 その復興を見よ

これこそ ゆたしが貫通してゐた寧

これこそ 忍耐と努力の畑からの收穫

水が墓石が語る。まあ見よ

内なる目をもつて、少しこの碑文を

あなた目的がもしこの世で宗教教育なら

おのれの最良に世界を捨ててゐることを教えるな

コミュニケーションのため口を閉くな

最後の審判の日の混戦がそこに潜んでゐる

結合と交流の基礎が生じるように、あなたも書き物で

さあ、どの心も痛ま打くなるように、あなた様の演説で

新しい電席で古くさい物語はするな

もしあなた政治家なら、わたしの声を聴け

政治家り才の杖とは、勇気である

目的の要求に躊躇とはあなたに相応しくない

あなた意図が正しいなら何かに配か

23 (解説) この詩はイクバルがパリ

イカル文学のモスクに於けるサル・
サイヤト(一八一八—一九一八年)
の墓を訪れた時の詩。サル・サイ
ヤトは十九世紀一八五年の後、イ
ンドのムスリムの物質的、政治的

な支持者であつた。モララーナ、
ムハマド・カシムがデオー・バン
ドムスリムの生を残りのためれカ
レッシュをつくらせ、サイヤトもその
志してアリアーガルにカレッシュをつく
つた。イクバルはサル・サイヤト

の人生と近代改革を提示し、作
から受け取ら影、それをサイヤトの
墓碑の文章で、この詩の中を現
した。

① サル・サイヤトの墓に墓参りした
人に向つて、

② アリアーガルの地、この地にサル・
サイヤトは大学を創設してイストラ
ーム教徒の若者の教育に當つた。

その努力によりイストラームの復興
が起る。

敬虔なムスリムは恐怖や偽善がなく清らかな
統治者のカマ前でも大胆である

もしあなたが手にペンの奇蹟があるなら

もしあなたが心の鏡がジャムシード王子杯のようなら

言葉なき水にせよ あなたは神の弟子

あなたの声か聴えらうずいならないように注意せよ

眠れる者を起こせ 持の奇蹟で

偽りの収穫は燃やしてしまえ 声の炎で

(一九〇三年一月)

24 新月

大陽り小船が壊れてナイル河に沈んだ

破片ク一つが浮みんでいる ナイルの水面に

天の不意に崩り落ちている 夕焼けのまっかた血が

神力のメスが太陽の動脈を切り裂いたか

天空和夜の花塚の耳飾りをかすめ取つたか

それとそ ナイル河の中にすむ銀色の小魚か

星々から落ちた石の隊商が行く 鈴り音の合図をなく

人間の耳に聞えてこない あなたの足音は

満ち欠けの種子をゆめらの月に見せる

あなたの故郷はどこ どの方面の あなたは

① イスラーム以前、ハルシアの
ヤムシード皇帝の持っていた杯
の奇蹟で、皇帝はその杯の甲に
全世界を見ることのできた。

24

(解説) この詩はナイル河の水の上

に出た新月の光景を見て神の創造

を愛する者から思わす出た奇蹟の

表現である。神秘主義者が神の創

造の美をえていかに迷っている

か、そしてそれから靈感を得てい

るかを示わしている。クライマフ

クスは最後の詩句である。

② 新月は尋々の隊商の隊長である。

立ち止まっているよ、に見える月よ、連れて行ってくれ
悲しみの刺の苦痛か今もするもので、わたしは

光を求めている、この世界では困惑している、わたしは
落ちつきのない子供だ、人生という字が家で、わたしは

25 人間と自然の愛

朝、輝やく太陽を見た時、わたしは

このせう賑やかな空に聞いた、わたしは

あなただけの輝きは太陽の光のせいだろうか

25

解説) この詩は宇宙における人間の地位を扱っている。最初の几個の文句は古い、イストラム以前の哲学を表している。後半の9個の文句は自然の哲学、すなわち人間は最も尊い被造物であるということを表している。その中に精神的進歩の無限の能力が隠されている。とイクバルは述べている。

エロクルアーレの第9太陽章を指す。

これは初期のメッカ啓示で、自然の美を示し、人間の精神的責任を覚悟する必要を人間に示している。それは果世についてその教に注意しない者に厳しい警告で終っている。

あなたへの価値は大きく、あなたへの威厳は高く

光の幕に、あなたの手でか隠さ水でいる

朝にたると神々しい悪声かすやてを覆い

太陽うもてで、暗く影すうない

わたしもこの光の世界の住人、だが

どうして燃えつぎてしまったのか、わたしが運命の皇は

わたしは光から遠く離れ、暗黒の世界に捕らわれていく

わたしは暗い毎日、暗い運命、辛い務めの中、ぼろろのか、わたしは

わたしがこころをうと、どこからか、声かして来た、

天上の屋根からか、地の底からか、どこからか声かして来た

おまえの光とわたしが存在する無しとは関係がある

おまえの存在はこの花園で、庭師である

おまえが愛の本なら、わたしはおまえの注釈者だ

わたしの壊された仕事を、おまえは破して上げた

わたしが持ち上げ、おまえが持った、花、それを、おまえは持ち上げた

わたしが存在は太陽の光は事欠くありま

だがおまえの輝きは太陽の恩恵はいらう

もし太陽がなければ、わたしが園は荒廃

慈みの場にかあり、わたしが呼ぶ名は申叙となる

明々白白なる秘密を理解せぬ者

願望の扉の輪にはまりこんでしまつた者

⑤人間を指している。

⑥真の美は不平等で、わたしが有り、受けた。

⑦

⑧「クルアーン」の管の皇令、事、計、観、其、照、それの子れば、クルアーンに、
日、夜、管の人間は、それらの事、
力、堅固さに対し、評判である、こ
ろの山々より、高い力、堅固さ、
示した。

急げ者め おまえの目け飯家は捕らわれたいる

おまえは鼻あやだつた だがおまえは嘆願するなり

もしおまえがおまえの真理を知つてゐるなら

暗い日々はない 暗い仕事もない

26 朝のメッセージ ー ロング・フェローから引用ー

夜の領から金銀の飾りの輝きが消えた時

人々のそよ風は笑ひながら夜明けの伝言を待たせてや、てまた

華やかな声の夜鶯鳥を巢の中で目覚めさせ

畑のわざにいた農夫の肩をそよ風がたたいた

夜が閉り魔法が太陽の光で壊れさせ

寝室の燭台の炎が金短が暗闇の中で飛び散つた

仏教寺院で寝てゐる者を見覚めりのマントラを讀み

バラモンに輝やく太陽の伝言を伝えた

カアバの屋根まで来るにアサーン唱ふる者れ言つた

輝やく太陽の現水が怒く打いか

花園の燈り上に立つてこゝ叫んだ

花の蕾を明け、おまえは花園でアサーン唱ふる者だ

庭ではこう命じた、おあ敵敵者、出発

光野のイハマの塵が舞ひ下つて輝きたすを、

⑤人間が最も被造物とされていること。

26へ解説「この詩は基本的な考えはア

メリカの詩人ロング・フェローハ

ーハロースーハニニをの詩「夜

明け」より得てゐる。また各々の

生活が時間に見えられてゐること

を述べてゐる。

⑥早々の輝きを消える。

⑦ロクレーンと管線御光事と御光

照。

⑧神秘的効果をもち呪文。

⑨イスラム教徒を礼拝に誘う詩。

⑩太陽が出た後ではアサーン唱ふる

ことができない、また祈りを祈

ることができないので。

⑪おれは著者のせいであるが、著者の

旅がむずかしくなる。

住んでいる人々の住み処から美しい人たちの暮り方へ吹くこ
そよ風は沈黙した町の眺めを見てきつた

今にゆくゆくは積になつて休め、わたしはまた（早よ）
世界の人を眠らそう、そして暮らふまを起こそう

27 愛と死

トロイド・アフレッド・テニスンから引用

宇宙の現れの時、魅刀のついであつた
人々の智は微笑をたたえていた
太陽は黄金の輝を得ていた

月には月明かりが透けられて、
夜は、黒い衣がささるられて、

層々には輝きを散えられた
存在の小枝には葉がつけられて
人生の蕾はほころんだ

天使は露に注ぐことを教え

花が笑はず笑つた

詩人の心には苦痛が施され
自我は無我の酒の湯きだつた

まず切の愚童が涙を起こり
誰かまたが黒髪をとま、立っているふうだった

500クルアーノの第7面壁草野、
第10面壁草野、第11面壁草野、審判の
目撃してか新しく生を返させら
れる。

27 解説

この詩は英詩人テニスンへ
一八〇九年の詩集『草野』を
書かれてゐる。中に『マ』の詩集
での創造物は神の愛を除き滅ぶる
運命にあるということがある。
イクバルは愛の上れ死の力の及
ばないことを述べている。『マ』はイ
クバルの詩の基を『マ』である。

ほとんどの人間は苦痛なくしては自分
の個性を置けて、他の苦痛を感じ
ることはない。
人間は全体的に人生を知らなかつ
た、その時で。

②大地は主張した。わたしはえんじ
家と言った。わたしは家を越えたもうたし

見ている主人も眺めと見る程だつた。

天使たちはふりかへり飛翔を試し
頼みより永遠の光を輝かせたがら

名前の愛である天使知れたか

その道案内はみんなにしり頼りもなつた
だがその天使とは異なる者だつた

天使として見れば天使。暮らさるまじく点から見れば水銀ラよう

天国への旅に行くとこらだつた
途でたまたま死に会つた

やこで聞いた。あなたうふ名前。何をしていふの。さうか

まじもい見られません。あなたも愛は

天の天使はそれを聞くや言つた

わたしは死せず。わたしは仕事はほつきりしています

存在というものを論じられてしまつた。わたしは

生という火花を消してしまつた。わたしは

わたしの目には消滅の魔術があります

死ラメッサージです。そのしろしけ

しかレニッ世界に一つ存在がまうまう

それは火です。その前ではわたしは。水銀のまうまう

正名た空留が鉛筆が加つていない状
態だつたのでたま生じていたか
た。

③また場所や空間にも距離がなかつ
た。
④我を心水で見てもその様子か
から見れば像ラようであつた。

正名まじもい怒い様子だつた。

20

火花と打って人間の心の中に存在しきす

それは完全なる光の目の星で

目から流れて落ちて あるいは出てをオオ

それはたかさが心地よい涙です

「愛は」「死」の詩を聞く

唇に笑みを浮かべた

その微笑の指環が「死」の上を落した

光の中で 闇がとどまらぬか

永遠を見た時 それは死んだ

死が起きた 死は死の餌食になった

28 禁欲と硬直

あるモリス・ガイールのか話をいたします

話と手ほどしころを見せし「うな」とは思つておられません

その方の神秘をききたいへん有名でした

自分の高い位にいかかゆるずみんがをう方を尊敬しておりました

その方はイスラーム法は神秘主義に隠れていると言つてました

さうとうと幾つかの語句の中に志願が潜んでいゝらうにです

その方の心の氷差しに敬虔な酒が溢れておりました

しかれその底には多少の賢者に見える涙もありました

20 愛と打って

29 聖堂の人生(愛)をさす

(一九〇三年十一月)

28 (解説) イクバルはイスラーム神

学者たちを子イモアと皮肉を込めて

「神秘的な述べている。即ち彼ら

の形式主義の指示を尊大ぶりを露

露している。イクバルはこの詩

の中に自分の初期の人生の模子も

表わしている。この詩の最後部分

句はイバルの考えが鮮明に出

ているが、これを彼は自分の心を知

らんだけが神を認識できるとい

ふ神を我の考へによる。

その方は奇蹟に長けてゐるほどのことでもありません

そのことが弟子の数を増やすことにもなりおした

しばらくはわかぬが近づくに任んでありおした

この教誨者はその敬虔な方と久しくつきあひがかりました

その方はわたしの友人にこの間を承知せられ

イクバルとほつがのホルとまを訂分のさむ偽めさうなものでずか

イスラーム法についてりまきりまをひう考えてゐるのさしよ

その持はかりム・ハマダーニーも嫉妬する程なりです

こゝにも聞いておりましたか。ヒンドゥー教徒を異端視してない

そのような信条とは神学の教誨をせいなのでしよ

その氣置はシニア派のこともあるとのこと

その言葉はアリーの再考があるとも聞いておりました

書塾と宗教的実践に入るも考えてゐるらしく

その志願は宗教の耶揄ですか

踊り子との遊戯も恥すかしく思つてゐないらしく

それはこの詩人たちの者からの慣わしでしよ

夜に歌を夜明けにクルアーンを誦すとは

その秘祭の志願は今もつてわたしたちは分かりません

おかげが弟子たちからこゝも聞いておりました

その若い時は夜明けのさしよばんの染みもなつた

その頃の魂です。イクバルといふことがなく

心は折衷の本。氣置は精神分裂症

多すりとした輩の友人、
さつげのそれ思ふる島。
さつげのそれ思ふる島。

放蕩を知っており イスラーム法も知っているとか
神祕主義はついて聞いて見ると 世第二のマレニールのようですよとか
⑤自分を神であると主張した

この男の真面目なところが分らない
何か他のイスラームの教祖でもあるのだろうか

悪すぎるん その教祖を長々としたらしい
その立派な話は長時間 連続と続いた

こんな町での噂 講水の身にも入りませう

わたしも 友人からその言葉を聞くことになりました

だがある日 道でその聖者に会った

才九郎の中に 才九郎のことが出て来ました

そしてこうおっしゃった あつた文句は愛しているからです あつたを

わたしの務めは イスラーム法の道を示すことでした

わたしは言いおしん わたしの不平もごまかせん

わたしはあんなに降んで それがあつたの自由ですから

あつたの前ね わたしはあつたの御世に生かす

わたしはあつたか わたしはあつたことか 分らないとして

あつたの降世のつさこのことでは、ごまかせん

あつたし自身でも自分の真実が分かります

あつたしの思想の海も深いです

わたしはイクトバルに会ってみたい気持ちで、聞いて
彼と別かれてしまふ涙を流してあります

イクバルモイクバルが分かっておりません
からかっている設ではございませぬ。本意は合まつておりませぬ
(一九〇三年十二月)

29 詩人

民族が存なら 人々は民族の諸君を
産堂の道を行く者は 民族の手足である
政若う支配秩序は 民族のまじり類で
細やかなしい詩人とは 民族の賢明な目である
ゆゑに文体の一部でも痛むと 日は涙も浮かべ
日は伴うすべてになんともなくさん同情するか

(一九〇三年十二月)

30 心

紋首台と緞の語は心はヒリ子侯の遊び
神よその姿を見せよの要をば心の物語を始める見出し
神よ あの杯は、げいの酒は、けうんなるだろ
永遠の国へり道である 心の中の舟と表わす親は
恵みの雲を、たか、それをも愛の稲妻だつたか 神よ
人生の畑が焼けてしまつた 心の種子が育つた

29「解説」民族の問題の中で詩人の果

ずは認められてはゐる。目か
作の中で重要な役割を果たすように
詩人は民族の問題をとりとめる
ことで重要な役割を果たす。

① 眞の詩人とはすべての人々の苦痛
と共にあり、同情する。

30「解説」人間の心は物質の世界と関

係を持つてゐない。それ故、物質
主義の法則は心に課せられない。

② 「我は神なり」とす、イマノエー
ルは処刑されたが、忠する者な此
つては忠人のためは犠牲に成るこ
とは容易である。
③ ムーラーはシナイ山で神の姿
を見せることを要求したがそのよ
うに神を心で求めた。

あはれは味り高価な宝庫を得たならう

あはれはアルハートにも心り荒廃とけるものを握りかた

こころは神の聲のようなら 時にまたカアバのようなら

神よ わたしの心の館に誰の住み妙か

心に熱気があり わたしにも狂気があう

心は誰か他に懸せられ わたしにも心に懸せられ

愚かな傷者よ あはれはそれか分かつていない

心り解つた一度りよろめきは 百回の脱却に勝る

土塊の山を雲萃にする

そつういふ効果を持つ 心といふ織の灰は

心が愛の嵐にはまるし自由になる

雲が落ちると このなつめ柳は緑になる

(一九〇三年三月)

引海の波

わが不安な心がわたしをまかす苦しませている

水鏡のように揺れるこころわたしの人生

わが名は波 海を歩いて渡れる わたしには

舟の輪がわたしの足の鎖にはなれない

水の甲 風りよるにゆが駿馬は行く

わが蒙は 魚の木骨むとにひかけられぬ

22

①少しの酒を飲んで永遠の人生を得

らぬなら、もし多量に飲んだら

どういふことになるのか。林見

云々 彼も人間を永遠にする手段で

なく道と考へてゐる。

②アルメニアの女王、シリーアの

命でバストーン山を揺る。完成さ

せれば女王を得られるとの条件の

もとで。しかし完成後を得られな

かつた。

③心は神に、わたしは恋人に。

④愛は土塊を金にする。

⑤自分命の真実の場を得る。

⑥普通、電が落ちると木が燃える。

⑦心のこころ。

31「解説」ダイナミズムはイクバル

の思想の中で重要な主題である。

海は波はこの詩の中で、どのようにカ

ラズを表現したか、一つである。詩

は行動のための機会が失われ、

時、ダイナミックな人はいかに落

ちつげぬかを示している。最後

の行句はそれが表わされている。

わたしは飛び跳ねる 時に満月の方で
勢いあまって頭をぶっつける 時に岸辺に
わたしは歩いたり止まったりしていく旅人
どうしてあかく水 誰か聞いてくれ ぬか心に

川の狭さから逃れる わたしは
海の色さから離れることか心配だ わたしは

32 せう宴からくり別れ

世の宴と ちりなを後にしてわたしは生まれ故郷の方に行く
けはげばしいこり住み処はあつたしほを感づいている

わたしはよさいだ心 こう宴には価値がない
あまえけわたしたに相応しくなく わたしあまえに相応しくない
王との謁見の間 大臣たちの寝室は 宙獄だ
黄金の鎖につなかれた囚人たちはそれを断ち切らなくて捨て置くだろう
あまえの顔では見た目には楽しそう

だかあまえの交友に他人行儀がある

長いこと あまえの自惚れはつきあって来た
長いこと それは漁り放りように落ちてた
長いことあまえの教養の躰の中はいた わたしは
時黒の甲で明るさを隠していた わたしは

① 満月や時に海面は月の方へ引っぱられる。

32〔解説〕

この詩の中心テーマはエマソン詩によるものとされている。しかし、そのなかから「イクバル」の初期の考えを提示するものである。この詩の中にも「前集」の詩「一つの願ひ」と同じような傾向が見える。最後の行句は、この全体の意味がよじめられて出されている。

長いこと花の眺めを探して来た 朝の中に

ありありとセフは身に入るなかつた おまゝの形で

戸惑った目は今 ほかの眺めを探している

暴風に巻き込まれてゐる者が海岸にたどり着こうとしてゐるさうに

おまゝの花園を香りのようには わたしは去る

世の寧よ おまゝを後にしてわたしは生るれ故郷の方に行く

山の麓の静かな所に家を造つた

ああこの快感に 諸の音楽の中でどこにあるか

水仙と一語 わたしは花より夜達だ

わが故郷は花園 わたしは夜鶯の隣人だ

夜 泉の音がゆたしを寝つかせる

朝 草の褥から郭公がわたしを目覚めさせる

この世の寧の中 人は寧の飾りを好む

だが詩人の心は 独居を好む

わたしは狂人か わたしが人望を疎つてゐるやうで

わたしは誰を探し回つてゐるやうか 山嶮の谷間で

誰えの愛がわたしを練の野原を駆けずり回させてゐるやうか

そして泉のほとりであたしを寝つかせてゐるやうか

おまゝは神難する わたしが隠棲の心酔者だ

寝ぼけた奴め わたしは自然の寧のメッセージを伝ふる者だ

ニレのオト同郷 わたしは キジ鴉の秘密を知つてゐる

その花園の静けさの中で 耳をそばだたせてゐる

①子任の頃、エジプトの市場で売ら

れてしまつた種言者。コクモア

シロガネは毒草の心。

おまゝは私にセフを置いたか

たが覚えなかつた。脚を不安な

る人々を取りつていたが得られぬ

の意。

聞くものは他の人に聞かせるために

見るものは他の人に見せるために

① 心は隠棲の熱愛者、わが家を語りにする、わたしは

ダーラーヤスィカンドルの玉座を笑ってしまふ、わたしは

木の下に横たわらせ、魔法の力が

夜の星をそろそろ視線が向くようになる時

② 知識の驚きの愛のひらにあらか、その表もか

花の葉っぱの中にも見えざる、存在の秘密が

(一九〇四年四月)

33 乳飲み子

わたしはナイフをおまえから取るよか、おまえは泣きわめく
わたしは親切のつどりのね、わたしを不親切だと思つてゐる。
また伏して泣くだろ、悲しみの園に来た子よ

刺さらないように剣を上げよ、ペン先はとがっている

おまえ、おまえ、苦痛を与える物が好きなりか、おまえは

この紙切れで遊べ、これなら怪我をしないから

おまえのボールは、中国の猫は、ここにやっただけ

頭の水を拭きまわす、あり小まな小猫は

おまえの鏡には履の埃がついてなかつた

目が開くや願いの火花が輝やいた

33 (解説)

① 大人も乳飲みのように語り、
よく見ると大人も悪かたで、子供使
に泣きを取らぬ、大人も一時的
業しみの解、一時的なまの獲
得で真実を忘れてゐる。

② 心のこゝろ

身の在華に 目つこれ 隠れてゐる

おまへのように おまへの胸いも生れられたて

おまへの人をは差別の處より自由

何れでわたした腹をたてると泣き喚く おまへの

何れという光景か 眉皺で喜ぶくせして おまへの

ああわたしもこの習慣でおまへの同じ

おまへの氣紛れ わたしも氣紛れ

その場その場を樂しみの膚ですぐ喚く わたしも

すぐ怒りこすく喜ぶ わたしも

うわへの美しさは わたしりの目は捕えられぬ

おまへの無知よりわたしの無知の才が少ないことはない

おまへのようはわたしも 時に笑ひ時に笑う

見た目はわたしは若者 だがわたしも無邪氣な子供

(一九〇四年二月)

改苦療の絵

えていす

わが話け誰から聞かせるもらう恩を蒙つていす

無言が対話 言葉がそこそこそれわが言葉である

この話せなへ習慣とは いかなるか

ここで話すことを切望している わが言は

34 (解説) この長詩は八連から成り、

インド聖大陸の隷屬と独立を得と

うとする聖子の欠如を述べている。

最初の連は人々の苦難を見ての不

満や抱望を述べる。第二連は、自

分自身を理解できない人間の不能

力を述べる。第三連はインドの人

々々の中には新しい生命を吹きこもつ

チニリーツフモ水仙もバラもオホク水仙花身を聞いた
 花園の四方にわが物持が広がってしまつた
 キジ鴨も鵜も雁もわが鳥もわがしから嘆きをかすめ取つた
 花園のこころのならはわが瞳まの位置を遠く取つた
 ろうそくよ 流してつて蛾の目から涙が落ちたよ
 わたしは苦痛の塊、わが物持は悲しみの満ちてゐる
 神よ、こころの世界で生きる時は何か
 わが永遠の人生をなく、空然と死を待つては
 泣くのわが一人のモロでなく、花園せんぶりである
 わたしはその花、わが秋は花園の花よこの秋がある
 早このせて長い間、わたしは鏡の魂の中ゆらぐ
 が如心の鼓動のせいで、わが不平の音知してこないし
 この世の花園での歡樂の宴をわたしは知る存い
 喜びにも涙してしもう者で、喜びも享受でまない
 わが壊れた運命を弁舌は泣き
 口ごもる声で聞き争の耳に達せず恥ずかし
 わたしは散らばつてしまふ土の一握り、だが合からぬ
 アレクサンドロスだのわが鏡か、それとも埃か、わたしは
 すべてその通り、しかしわが存在は神の意図であり
 わたしは石の本質が完全な光であるが、暗黒である
 わたしは空庫だ、破滅の土の一握りかわたしを隠していら
 誰かを知つてゐるか、わたしはじこにゐるか、誰の當か

とすうイクバールの詩的要素への
 示唆がある。オホクはまた他を得
 ようとする闘争や行面や欠知はか
 りかインドの政治的隷属と無力を
 見てのイクバールの結核である。
 第四連はインドの人々を覚醒させ
 ようとするイクバールの決意であ
 る。第五連はムスリムの教義の森
 子、第六連は第五連と同じ洋マ
 ンで進んだ連である。第七連、八連
 は全体を総合的に述べ愛り具束し
 その哲学を述べている。
 ① インドはイギリスの植民地支配下
 にならざる論の自由もなかった。
 ② インド中の花が開花すること、
 チニリーツフは傷と考えられれる花
 蕊を、水仙は流の目を、バラは胸
 のみさち切りを見せ、わが苦し
 みを代弁している。また小鳥たち
 を同じくわたしの代弁者である。
 ③ 好むは、ミルザイのバイタルの詩。
 ④ 死後には、
 ⑤ ジヤムリード王の鏡。
 ⑥ 人間は本人の精神次第で何にでも
 つくめるの志。
 ⑦ 人間はこの世りまとなる創造物で

わが日は宇宙の旅をすまふ必要はない
わたしは宇宙の小さな世界 わたし自身外国である
酒でない 酔人でもない 酔いてない 杯でない わたしは
だがわたしは人生のこの居酒屋ですべてのものゝ元である
わたしは内世界の秘密を 心の鏡が見せる

⑧ 目より現れるものゝ水をわたしは詩で述べる

優美な言い回しをすらすらの中であたしは述べ方を与えてくれた
天より屋根に棲む鳥たちもわたしと同じ言葉であるような
さらばわたしは駭きを感じず狂人となったがけ
わが心の鏡が運命の秘密を知るものの中に入ったことわら
インドよ おまえの眺めはわたしを法かせる

おまえの詩はすべて詩の中で教訓的である

わたしは法くことを与えることはすべてを与えてくれたことになる

運命の争作わたしをおまえの哀歌を書く者にしてくれた

花折る者よ この花園に花の葉一まいの跡を残すはわれ

幸運なことには争いが起つてゐるのではないが 庭師たちの間に

天はその袖口に稲妻を隠して待つてゐる

花園の交響曲よ 自命の葉でうかうかしてゐるな

うっかり者よ わたしの確まを聞け 二れは

花園の鳥たちが 毎日神として思つて唱えてゐるような物だ

自命の安全を考へよ 困難が起まつつゝある

天がおまえの崩壊について協議されてゐる

あるが、外見は土塊のような見え
ので。

⑨ 宇宙と戦へると小さいか、わたし
の中は宇宙と同じものがある

⑩ わたしが存在したげれば無心で
である。

⑪ 詩人を指す。

⑫ 天使たちを考へられる。天使は

神の意志を伝える。わたしは言葉

も神の意志を伝えるようなもの。

⑬ 花折る者はイヤリス政府、庭師と

はインドの人々。庭師はインド。

⑭

⑮

⑯

⑰

⑱

⑲

⑳

㉑

㉒

㉓

㉔

㉕

㉖

㉗

㉘

今う 起きていること 起まそうなること 水を見よ
古い時代の話では、一休全休と何が位並つか
この沈黙はいつまでか、不平を言う善いを知れ
地上にいてもなら、おまへの声か天まで届くようにせよ
インドの人々よ、真剣に考え存げれば、消えてしまおうが
物語の中に、おまへの言は蘇形も残らずに、

行脚の道を行く者、自然の心人だ
今日はおまへの隠された傷を明らかなししてしまおう
血涙を流して、空を花園にしてしまおう
心の燭台に、隠れた情熱で火をつけ

おまへの暗い夜に、灯明を並べて明るさを出せよ
だが苦しみを知る者のよ、なにかが生じるように
花園に、瑠璃のわがエをさき散らしてしまおう
一連の数珠に、これらばらばらの粒を遺すことが
難しいなら、その難しさを軽くしてしまおう

友よ、わたしを嘆くままにして、おいてくれ
わたしは愛の傷をあからさまにしてしまえるように
わたしが見たものを、世の人に見せてしまおう
あなたを鏡のように、驚かせてしまおう

暮の後に隠れているものを、賢明な目が見られるように
時代の様子の要求を、見てしまえるように

① イギリスの圧制によって生じた傷。

② 暗いインドのこと。

③ 老人はいざ知らず、苦しみを理解する
若者が生じるように。

④ 民族を分断した様子。

かまえば心に高潔さの快感を知らせなかつた。
かまえば足跡のようになんか卑下し年月を重ねてきてしまつた
かまえばたゞ心の寧だけにとらわれたい。その目
外の寧の驚きを知らせなかつた。

心は美人の媚態り虜になつていた。
だがかまえば心の鏡の中に自分の姿態を見つかつた
偏見を捨てよ。愚か者め。この世の鏡の間にある
この水ろの鏡は、かまえばか悪いと考へてゐる。鏡は
人生の景虚に抗議する。嘆息を化身とせよ。

かまえば身を粧ひようになんか身を縛つてしまつてゐる
心の清潔さは外面の飾りし何の關係があるか。
愚か者よ。かまえば鏡にヒナリを塗つてゐる。
大地も空もかまえばの曲つた根性を泣いてゐる。

クルアインの諸節を十字架にしてしまつたとはひどい
言葉で「神の唯一性」の主張をした。だが何を待たか
かまえばかかえの思想の偶像をかまえばの神としてしまつた
井戸の中にヒナリを見つけた。かまえば何を待たか
うっかり考へよ。かまえば自由であつた者を閉じこめてしまつた。

かまえば説教壇で事やかな語を語ることを望んでゐる
だがかまえばの説教はたわいもないほんの作り話である
流いづづいづづに世界中を破壊させる美を見せよ
黙を問はずに、露に涙させるとも

ヒナリの人は自分の長さに気がつ
いてない。また神が赤い目的を
なすつたことも理解してない。

ヒナリは女性か手や足に紋様を
く時に使うもの。

ヒナリはイスラーム教徒のモールヴ
イイの中でイヤリ支配に任じた
者かいたことを指す。

ヒナリはアラビヤの星をまじへて
ちの娘がアラムに投げこられる。
クルアインの第12章から何節か
を参照。

ヒナリは外面だけを覚えてゐる。たゞ物
事の真理を見てない。

その目的はただ眺めるだけてなく、鑑賞者よ

誰かが何かも考えて、人間の目を作ったのだ

もし王が全世界を見たとしても、何を見たか

その杯では、王には自分の真実は何も見えなかった

エミユナリスムは本であり偏見はその果実である

その果実とは、天国からアダムを連れ出されたものである

太陽の引力でも花びら一枚すら持ち上げられなかった

雲を出すと、いうことは高い飛翔の願望のせいである

愛の傷には治療のために歩ま回らない

この傷は、自らその重華を信ず

愛の炎で心は余す所がない輝きを得る

少しの愛の種でツルル山が花園になる

苦痛の薬とは願望の創り傷をもつことである

傷の治療とは縫い合すことをしなへることである

忘れたの酒で天までわれしの飛翔がある

かたしは色を失ない匂いと残り存在することをせんだ

祖国への哀悼で、涙の目は止むか

詩人の目の務めとはいつも涙を流していることである

自分の筆と考えて、花の板の上に夢を作れるか

あるこの花園にいられるか、この不面目である時に

おまえは分かるはず、自由は愛の中に隠れていると

わかおまの区別の膚になると謀從關係が生じる也

①創造主である神が人間が真実を悟

解するようには、

②ジャムシード王。

③イタパトルタメアセーシはここに

ナリダムを耕させることと「神の

唯一性の注目させることであつた。

④コルアーレン第2章が「詩節考

題。

⑤色を失はうことか即ち虚の無や人

種、世族の偏見をなくすること、

人間は同じであることを実感する。

⑥インドを指す。当時のインドはイ

ギリヤスの植民地下にあり、謀從の

状態であつた。人々が多かかその

ことを知らずついていって来た。

泡は水の中で杯をひっくり返して満ちてい

おまえも小川の中で泡のようになつてい月ければならぬ
自分の同胞に無関心でなくあれ それがおまえにいいことだ
としこの世で生を続けたら 互いに素気なくいる者よ

人間の愛は精神を活気づける酒である
それゆゑたし杯や瓶を以て酔いを飲ませてくれた

愛により病んだ長枝は治癒力を得た
愛により病んだ長枝は眠りをあけていた運命も目覚めさせた

愛の荒野は異脚の荒地でもあり花園でもある

この廃墟は鳥籠でもあり巣でもあり花園でもある
愛は月の地にもなれば砂浜にもなる舞台である

それは旅立ちを告げる鐘や激流の道案内人や追いつかぬ
すべりの人が愛を病むと言う だがその病むとは

その中に古い天の転回から起る不運の治癒も隠されて
心が嫉妬で燃えるとき全光となる

それは一つのまてである だがすべりのものの中には見ゆる
それはシューリーンであったり バストロム 石エでもある

宗教や慣習の違いが諸民族を壊滅させた
わか固の人々の中に固を思ふ気がかあるのか

苦痛に満ちた長話は沈黙を強いる さまなれば
わか固の中には舌もある 話して言う力もある

天配者を罵るすなわ、雷や冬雪を
期待するな、イギリスから自由を
期待するななびの意。

天の終りは天災や災難を起すこと
信じられていた。

シューリーンを忘れた石エファルハ
ードは後女を得たさに、後女の言
うまに岩山のバストーン山を貫
通する運河を築る。

て

わが昔の細は短かく打かゝりて、そのまゝにしたり
わが物語は終りつゝ、たゞのて、黙つたまゝ話したし

(一九〇四年三月)

ワルシアの詩人、ナスイリー、
ニシャーアイリーの詩より。

35 別れの嘆き

寂よ おまゝに人ばとうとう西の國へ行ってしまつた
残念 あの方こそ東洋の地が好まぬならなかつた

今日わが心はその真実を確信した
夜の闇より別れの日の暗さが少なくなつた

別れの抑鬱で、驚きの傷ができた時より
消えなうさくさくのように、日中には悲果が眠つてゐるし

わたしは孤独が好き、人込みの中では混乱する
わたしは志に狂つて、町から荒野に出て行く

過ぎ去つた日々を思い出して、わたしは心を強かせる
望みしように、家よわたしはおまゝの方に向つて走る

目はおまゝの戸や壁を知つてゐるといふ
わが涙を舞ひよるよえしさを表わしてゐる

わが心の一片は太陽の恩恵で輝き出すところだつた
壊れた鏡は世界が見え出すところだつた

わがなつめ椰子の木は緑になるところだつた
残念 わたしが何だ、死か、何になつてしまつたか、誰をも分からなかつた

36 解説「イクバールが師としていた
トーマス・アーノルド卿がインド
王さまにあたり書いた情熱の詩、
師に打つた愛と尊敬の念がある。

37 打つたワルシア語での打句、ミ
ルサー・アトル・ヌー・カイ、
バイダルの打句より。

38 壊れた鏡、即ちイクバールのまだ
丸々に割れていない部分、ア
ーノルドの指導のもとで完全にな
るどころだつた。

思みの雲はわたしの花園から引きあげて行つてしまつた

願望の雲の上は少し雨を降らすだけで行つてしまつた

あなたは今どこにいる、知識がシナイ山のムーンよ

あなたより息の波は、知識を埋入せたくする風だつた

今どこにある、知識の砂漠の中を進む熱意は

あなたの息によりわが頭にも、知識への志欲があつた

ライターの時は今どこ、狂人の踊る舞いをするのは誰

マジターンの工を、砂漠の心の埃とせよ

狂人の手が運命の糸を解くだろ

パンジャーブの鎖を絶ち切つて、あなたよりも人行こう

狼狽した目が、あなたを空を見ろ

だが話したい気持をどのように満たせるか

早話すかを持たない、空夏の口は

沈黙というもの、それが空夏の言葉

(一九〇四年)

36月

わたしの荒野からあなたにくにはずくと離れている

だが心の海はあなたの魅力で漲らつてゐる

どの雲り方に行くつか、どの雲から来つて来たのか

まっし長旅のせいであなただけ青く染めてゐるのか

全対句はベルシア語より対句、

ガバメント・カレワジでイクバー

ルとアーノルドとウチヤ関係の期

間は長くはたかた

全アーノルドを指す。

全対句はベルシア語より対句、ミ

ルザー・バイケル対句より。

全対句はベルシア語より対句、ミ

〔解説〕神による創造物の中で人間の優れた位置を示すイヴァールの哲学を述べられてゐる。それは神により人間は与えられた精神であるという。最後の三つの対句にそれ

が表されてゐる。

生まれはあなたは全身が光 わたしは闇

この暗い生活にもかかわらずわたしはあなたと同じ運命

ああ わたしは燃えている 神を見たさう願望で

あなたは太陽のお蔭で傷で燃えている

あなたの動きがもし軌道の上にあるというなら

わたしの巡りもコンパスでの回転のようである

あなたは人生の道で頭を垂れている わたしは驚いている

あなたはこの世の空で輝やいている わたしは燃えている

わたしは旅の途上にある あなたも旅の途上にある

あなたは何かにを探している わたしも同じようである

あなたの光は月光 わたしの光は愛

わたしは祈りをこぼした一つの集まりがある

あなたは集まりで孤独なら わたしも孤独

あなたはひとり 太陽の光は死のメッセーヂ

至高神の光の輝きは わたしを救済する

にもかかわらず月光を放つ月よ わたしとあなたは別

悲痛かまてくるその胸 その胸は互いに別

わたしは完全に暗黒 おまえが光であるにもかかわらず

だがあなたは遠くに輝いている 認識の味を求めている

わたしは自分の人生の目的 それを知っている

あなたの頬が欠くもりは この輝きである

①その理由を分々から順々に述べ
ている。

②月は自らの光で輝やいているので
なく太陽の光のせいなので。

③月は新月から満月に到る途中で見
えたり隠れたりするので。

④太陽が出てくると月は見えなくな
る。

(一九〇四年五月)

おまえの運命の星を輝いた時

① ハブシからおまえを買ひあげ、^② ジャー！ズに連れて来た
これによりおまえが、^③ 苦痛に満ちた家に販ゆいか始まつた
おまえの運命は千の自由を賭す

その聖者廟に入り口からおまえは一瞬たりも立ち去らなかつた
誰かへの思いでおまえは他の者かゝりの志地悪を染しんだ

愛での虐待 それは虐待にあらうぞ

志にいじめがないなら、^④ じんな味もない

おまえの視線にはサルマリンのような洞察力があつた
⑤ 眼の油でおまえの湯まは癒まはれずさうに増した

おまえはムーサーのように神の顕現を求めた

⑥ だが、^⑦ フイスは預言者を見る力を求めていらただけだつた
⑧ メデイナはあたかもおまえの眼差しの中で光のさゝがつた

おまえはとりこの砂漠はあたかもツール山のようだつた

おまえの目はじんばに預言者を見て、^⑨ も見たりなかつた
神の愛は揺るえ、^⑩ 一瞬たりとも他の揺るえは止まなかつた

その稲妻がおまえの我儘しきれない魂を打つと

おまえの思はれムーサーの手を笑つた

⑪ 炎で揺れを起こさせ、^⑫ そゝて心を満せさせ

愛の聲はおまえの存在を一尊に焼いて灰にしな

37 (解説) ビラールはムハンマドの時

代、礼拝の告知をする人であつた、
彼は悪人で奴隷であつた、その主人は残虐で預言者アブー・バクル

が彼を買い取り自由の身とさせた、
彼は預言者ムハンマドを熱愛した、

イフバールは預言者ムハンマドの
彼の秘愛をこの詩の主題とした、

① 悪人の因

② 聖地メッカ、メデイナのある地域

③ メッカに奉てイスラームを受け入

れ人を分けることになつた、空とは心

④ 預言者に心が補われたいること

⑤ 預言者への思い

⑥ イラン出身で預言者の教友の一人

⑦ 神を見ることを油に象してゐる、

⑧ ツール山で神の顕現を求めた、

⑨ 盲目の年老いた母親の世話をせぬ

おまへの高潔より預言者に会ひに
行けなかつた、

⑩ 黒い者がムーサーの奇蹟の奇蹟

神の光で自ら輝やいた、

⑪ 灯台はハルシマ語

⑫ 炎で揺れを起こさせ

預言者を見るおまへの態度は敬虔的であつた
善かを見つけていることがおまへの祈りだつた
アデーンは初めからおまへの愛の旗になつた
アマースは預言者を見る口実の一ツになつた

なんともいふ時代であつたが、ヤスリブがその佳境であつた時は忍マディーナの旧名。
なんともいふ時代であつたが、その凄かいつともあつた時は、

(一九〇四年九月)

38 人間の花の註

誰かわたしの花の註を聞いてください、
わたしは最初の約束の註を忘れてしまひました
わたしは花園の愛者があまよせんでした
わたしが知恵の深い酒を飲んだ時
わたしはこの世での真実を探し始めました
わたしは空で居る思慕の高さを見せました
わたしは心変わりかする性格を得ました
そして世界の心にも安心しませんでした
時にカアバから石像をおこせました
時に石像をワアバの中に埋めさせました
時にわたしは神と討をしたく、ツール山に登りました
時にわたしは袂の下に永遠の光を隠しました

③九杆の告知、

④祈り、

⑤忍マディーナの旧名、

38 解説 アダムとイブの時代から今

日に到るまでの人間の探索や思慕

の歴史を要約している。その人間

は詩り中でたまごまの、わたしにな

つて現れ、その最終目標は真実の

探索である。その努力は知恵の山

を築いた。しかし究極の目標はた

ふ見つからぬ。この詩の五カセ

ンは最後二つの寸句である。

① アダムとその妻が地上に降されそ

の後の話、ヨクルアーン第2章

から第3章参照。

② アッラーが預言者たちと交した約

束。人間は忘れている。ヨクルア

ーン第3章から第5章参照。

③ アダムを指す。

時に仲間がわたしを十字架に掛けました
 さうで地を捨ててわたしは天の方へ旅立ちました
 時にわたしはヒラーの洞穴に何年を籠りました
 世の人々にわたしは最後の遺言を遺すました
 インドに行き神の音楽を聴かせました
 時にアリシヤの地を好みました
 インドの人々がわたしの声に耳を傾けなくなると
 わたしは日オヤ中国の方に行き住みました
 時にわたしは世界は原子の構造で出来ていると
 宗教家の教えには反する言ひ方をしました
 教え切れない程の大地を血で赤く染めさせました
 世界の中 知性や宗教を混雑させて わたしは
 星々の真実を理解できなかった
 わたしは一つ一つのうに考えて幾度も過しました
 教会の剣もわたしを脅すことはできませんでした
 わたしは地球の回転を唱へ
 引力の秘密を人々に明らかにしました
 望遠鏡を使って わたしは
 太陽光線や葉の征う感もわかるとしました
 わたしはこの大地を天国に作り望みの地にしました
 だが残念なことにこの世の秘密は分かりませんでした
 先患によりこの世界を華やかに飾ってみましたか わたしは

- ① イブライヒムを指す。
- ② アーザルを指す。
- ③ ムーサーを指す。
- ④ ムーサーの奇蹟のみ。見た者の目には眩んだ。ヨクルアーンを著す事カスル節を指す。
- ⑤ キリストを指す。
- ⑥ 預言者ムハンマドを指す。
- ⑦ ヨクルアーンを指す。
- ⑧ クリシチア神を指す。
- ⑨ さうでアラトンを真初の信道士とする。
- ⑩ 仏教を指す。
- ⑪ テモクラウテスを指す。
- ⑫ ガリレオを指す。
- ⑬ コッセルニクスを指す。
- ⑭ ニュートンを指す。

物質崇拜からとうとう目が覚めてみると
それゆゑわたしの心の家の住人になつていろのか分かりました

(一九〇四年九月)

39 インドの歌

世界はゆうどいよりよい わが国インドは
われらはこの夜鶯島 そこがわれらの花園
異郷にあつても 心は故園にあり
わが心があるところ そこにわが存在がある
そこにある山は世界でいちばん高く 空の隣人
そればわれらの番人 そればわれらの見張り
その山は抱かれ 数千の小川がたわむ水流れ
その息使いて大國も羨むほどだ われらの花園を
カシジヌ河の水よ その日を憶えているか あまえは
あまえの岸辺は着いた時の日を われらの稼刈が
宗教は互いに相争うことを教えていない
われらすべてがインド人 わが祖國はインド
ギリシヤもエジプトもローマもすべてこの世かう消え
だが今を残している われらの名や印は
さうは何があるか わが存在が土埃でなりという秘密か
幾世紀にもわたり 時代の流水は われらに敵するものであつたか

39

解説) イクバルはこの詩を二人
の愛國主義者として統一インドが
すべてだとして書いています。
イクバルの初期の考えは英國支配
からの解放が第一であつた。最
後うたがひその気持が述べられて
いる。

ヒムスリムが八世紀の後半から表は
じめ定着していったこと。

イクバルよ、この世に秘蔵を打ち明けられる人はいない。モイザース植肉地下でのイザリスへの隷属の苦しみを。

（一九〇四年八月、十月）

知堂

庭園に螢の光があるのだからか

花園に螢燭の灯が一ついてるのだからか

空から星が飛んで来たのだからか

月の光の中に命が生きたのだからか

それと老夜の王国に悪魔の大使が来ているのだからか

自分の園では名もなかつたが、異國にきて輝きだしたのだからか

月の長衣のホタンが落ちて来ているのだからか

それとも埃が太陽の服を着て輝きだしているのだからか

これは神の美の隠れた姿の一つの輝きだ。たか

神が天より世界からこの世にもたらした

この小さな月には暗きも明るさもある

時に蝕から出て、時に蝕になる

蝕も虫、堂も虫

だが蝕は光を求め、堂は全身が光

この世のすべてを求め、神は恩力を与え、

蝕には熱甲を、堂には光を与えた

知門解説 この詩は三節に分かれ、異

った調子で普通な堂を過して神社

と義の考えを提示している。第一

連でモイザースの任方で堂の足と激

賞し、イクバルの神像の力の高さ

を示している。波の二連は神の創

造物の中にその創造性がいかん表

れているかを示す。この詩の中心

あるべきは宇宙のすべてが物のア

ル神の顕現があり、それが異なっ

た姿で表れるといふ。

① 堂が飛び立つと村根を叩くを瞬間

かあり光が消える。また村根を叩

くことと光が出る。

② 蝕は熱甲、即ち燭台の灯の回りを

巡り身を動かす。

言葉を持たない小鳥は、それいかな声もした

バラに花びらを与え、沈黙を教えた

夕焼けの美しさは消えることにはあつた

輝やいこから、その妖精はほんのわずかの間しか与えなかつた

夜明けには花嫁のようになつて

赤い衣装を着せて、霧の小鏡を与えた

木々は木陰を、風には飛翔を与えた

水は流水を、波は暮らつたまなこを

たがこの巨樹はわれらのなしたこと

雲の空間は、われらの夜である

神の星の表れはすべてものに明うかである

人間にはその力が、替にはそれが開花の音である

空の月は持人の心である

そこが月光である、ここには悲哀の痛みである

話し方は人を騙す、さもなければ

夜鳥の白の歌、花のさえずりが白いである

たくさんのものの中は神の唯一性の秘密が隠れている

堂の中にある光、それは花びらに芽香である

この違いがなぜ混乱の原因となるか

すべての中は神の沈黙が隠れている時に

②美の根元は同じで神である、だがその顕現の仕方が異なる。

③夜に人間は寝て休養するが、堂には人間は夜が昼である。

④これら両方とも神の美に基づき、元は同じである。

⑤守室がまた生じた時、沈黙だけが再び混乱はなかつた。

(一九〇四年十二月)

夕朝の屋一明けの明星

月と太陽の隣りである星し分を止めよう

そして朝を告げる俤位を止めよう

わたしにひとり星々の住み処はよくない

この高い所より地上の人々の住む低い所がいい

空か わか古里は 暮場だ そこは

夜明けの百の切れ切れの裾かわか白装束だ

わたしの運命り中にある 毎日 死ぬことと生るることか

この俤位 この名譽 この高さをよくない

一時を輝くより 暗闇がいい

わが運命り中で運命があつたとしたらう

海の底で輝く真珠になつていたたらう

そこでも波の力が心が混乱していら

海を捨てて 誰かの首飾りとなつていたたらう

美女の首飾りとなつて輝くことに楽しさがある

王妃の髪飾りの冠となつて

だが一つの石の運命が聞かれたししてもし

スレイマーンの手の指輪を打つたとしてもし

この世でこころうな物にも崩壊がある

高価の真珠の終わりは崩壊である

夕朝の屋一明けの明星

即ち金星の言葉で人生の不安定を
証言している、もし永遠の人生を
望むなら、自らの中に愛の情熱を
持て金星の言葉で表現しな。さ
らこの詩でイクバールは宇宙のど
んな物より人間の優位性を示し
ている。

夕朝の屋一明けの明星の白さが同
い。

本より人生とは死を知らずの事だ
絶えず死の要求があるのが生きることか
もし世の飾りもなつて終わりがあるなら

どうして露もなつてはれか
花が土に萎びないだらうか

いっそのこと 誰か主人の顔飾りに混つて入つていようか
誰か急死する人の溜め息の火花の中に入つていようか
涙になつて誰かの瞳の光とぶつかりあおうか

その妻の目からどうして落ちないでいらぬか
その夫がよろいご身を固め出陣しようとする

祖国への愛から戦場に向うことを余儀なくされた
絶望や希望を見せなから

その沈黙で言葉も取すか
それには夫の善むが耐える力を与へん

そしてその目に恥じりいかに話す力を奪っている
別れの時 花のように頬は色を失ない

そのよしエの慰めは別れの悲しみでさらに増し
その人は懸命に我慢する わたしの涙になつて落ちよう

涙にあふれたその歪からあふれよう
大地に落ちて 永遠の命を得よう

愛の情熱を世の人に見せていよう

(一九〇四年十二月)

新しい寺院

本多のこゝを言ふ、フラフマンよ、もし心を悪くしないなら

あなた達の寺院の偶像は古くなつてしまつた

あなた達は人々と敬むることを偶像から學んだ

敬むは紛争を聖者も神が教へた

わたしはあなたを愛してしまひたい、この寺院も聖殿も捨てた

聖者の宗教を捨て、あなた達の法話を捨てた

あなたは石像の中へ神がいらして考へてゐる

わたしは、こゝでは國土のみしかけらぬ、神である

⑧ あ、よきよき、その垂れ幕はもう一度取り換へよう

神は神水の考へたりを身び一統にさせ、今難をあげ止めたよ、

長いこと、心の館が荒れはてたよ

さあ、この地、あたらしいシヴアの祭壇を作ろう

世界のこの聖地より高い聖地となるような

その尖塔が空の高さと同じになるような

⑨ 毎朝早起きし、甘露のやうな酒を飲ませよう

神の人を、愛の酒を飲ませよう

カミヤウギも行者の道にある

この地上の住人の救いは愛にある

⑩ (解説) この詩はイザリスから神を

を傳へた、ヒンドクレームスリ

ム、友好に對するイクパールの願望

が表れたものである。

⑪ ヒンドクレー教のアーストで最上位

クン、即ち僧侶。

⑫ イスラーム教徒。

⑬ ヒンドクレー教の神々。

⑭ イスラーム教の神。

⑮ ヒンドクレー教徒の人たちに向つて。

⑯ ヒンドクレー教徒だけのための寺院

でなく、すべての方々のための寺院。

⑰ ヒンドクレー教徒、イスラーム教徒

などの区別をしないで。

(一九〇五年三月)

カリーグが侍犬を地に蹴つてから久しい

マヘデーイー・マシルーフも沈黙の町の住人である

死がアミールの酒かみを危懼で壊してしまつた

寧ろの人々の目には今もアミールの酒の酔いがある

だが今日あか夜よ 庭中が喪に服してしまつてゐる

明ろい燭台の灯は消え 寧ろの草よりは喪に服してしまつてゐる

ダリーの夜驚鳥はその花園に聲を作つてしまつた

この世のすゝめつ詩人たちが讒人となつてゐる

残念ダーグは行つてしまつた その遺体は人々の肩の飾り

とうとう詩人は シェハリーナーバードの沈黙を成してゐる

今あつた気絶を ありさういひ出しの機知は

老翁の襟袖のやには若さの光が隠れてゐる

ダーグの言葉の上にあつた願望 それを石人の心の中にある

ライラーの意匠はそこではペールなし

今 朝底に誰か聞くか バラの花う沈黙の秘密を

誰か今かきたらう 花園での夜驚鳥の境の秘密が

真実を 跡にするこゝろは 思考の飛翔にふいて

鳥の目付鳥の巢にあつた 産むとらなからむ

これから他の人が見せてくゝるだらう テーマの繊細さを

ウィットに當んだ言ひ方の高い跳躍を

44 (解説) イクハールは6つの表裏を

書いた。コグレイグは「悲しみの哲堂」

七世母の思ひ出し「コグレイグ」

・ピント・アブドララールである

死に際して書かれた挽歌で「ダー

グの天才に対する賛辞である

詩人が「コグレイグ」へ七九七一八六

九年のころ、ムカル朝最後のウ

ルドラーとシルシア語の大詩人

詩人カリーグの弟子。一八九二年

没。

③ ラクナラ出身のダーグのライバル

デカンのハイデラーバードで一七

〇〇年没。

④ 詩人カリーグのこと。

⑤ 何人かの人か墓前で遺体を掘くの

で盾の飾りとした。

⑥ 自髪を襟袖に巻いてゐる。襟袖は

冷たい特徴があり、熱を冷ます

たがダーグの情熱は冷まされな

まき残つてゐた。

幸い時代の絵を描き人を泣かせらるだろう。
思想が新しい世界を人に見せてくれるだろう。

この花園に①シラーズの遊鷲鳥を生よれらるだろう。
数百人もの言葉の魔術師も現れて来るだろう。
数千人のアーザルが詩の寺院から射て来るだろう。
新しい酌人が新しい盃で酒を飲ませるだろう。
心の法衣をたくさん穿かれるだろう。

若土夢よ、おまえの解説もとされるだろう。
しかし愛の絵を描かそつくりそのまゝ描くだろう。

射手は信、てしまつた。誰か心臓に矢を射るだろう。

わたしは涙の種子を持つ地に播く

おまえも泣け、テリーの地よ。わたしはターグを泣く

ああジャハーナーナードよ、詩の宴の源泉よ

また今日、秋の日の荒涼とした野になつてしまつた。おまえの園は

おまえの華やかさ、おまえの花は香りうようん去つてしまつた

ああウルドラーの住み処はターグを欠いてしまつた

このようにな故園の地は、人の心をひくそのかたくなつてしまつた

あの新月は、デカンの地に隠れてしまつた

そこにいた酌人は行つてしまつた。酒屋は廢れてしまつた

テリーの暮の名残りとして、ただハリーリだけが残された

死の泉が希望に血の涙を流させる
死の神人は暗闇で矢を放つ

①老人ライラーク著。ターグの詩

では外に表れ見えないか、他の人の

とこまで、外に表れて見えぬ、

即ちターグはすべてを明瞭に誰

でも分かるように表現する。

②ターグの詩作における苦心等は、

常に真実に基づいていた。足下を

しっかりと見つめての詩作であつた。

③イラヴの秋、文学やオサールの巨匠

とされるサード、デー、ハー、ニー、

とされるターグ、ヤサールの最上峰は

④著者であるハリー、ス、ハー、

⑤一九〇〇年頃、たゞを指す。

⑥種々のイマラー、ヒームの父で偶像

作りで有名。

⑦ターグはこの地に埋葬されてゐる。

⑧カリブの師事した洋人で教之家

（一八三七—一九〇四年）。

レカレカが口は不平のためは聞けられぬ
秘の各も 花園の存在の理由となつていたので

すやてのことが守宙の法則の影響を受ける

花園から花の匂いの来ること この世から花売り人のまろこと

(一九〇五年四月)

45 雲

今日また東の空からあの黒雲が滯り上り加つてまた
またサルバンの山が黒衣をまとつてしまつた

雲の裾の下に太陽の顔が隠れてしまふ

冷たい風も雲の駿馬に乗つて吹いてきた
だが雷鳴がなぐ この黒雲は静かである

この黒雲は疑もたない不思議な酒場を作つてゐる

花園に常に変らぬ喜びをもちたうしく水でている

花の衣装に真珠を縫いつけるために東てく水でいる

日照りて著水てしまつた花がほそ返つた

地面に落ち地の中を動つていたものを芽を出した

風つまよしの雲は昇り、舞つて飛んだ

さういふ黒雲が来てまた 見よ雲が雨となつた

山が枝々々天幕はずはうしい

谷間を巡る者も泊まり場はこことなれ

(一九〇四年)

②死に打して、死が水に生かす
らうで。

45 (解説) この詩はイクバルがアホ

タパートで書かれた、その人旅行に
行つた時のこと、目の前のサルバ

ンの山がそびえていたという。

インド亜大陸における雨期クキ

節の描写である。

③アホタパートの近くにある山。

小鳥と雲

夕方 飛を飛う小鳥が一羽

枝にとまり さえずっていろした

一ツの輝やくまうと地面の上に見て

小鳥はそれを望む思つて若り路りをした

雲は言ひ出した 声のいい小鳥さん

かわいそうな者か雲を向けたいでください

あなたにさえずりも 花に匂い色を与えてください

その神さまが わたしの光を与えてください

だから光の衣装で身をまかしてありたい

蛾や虫たちの世界でウツル 出のまゝであらう

あなたにさえずりが 耳にヒリ天國のようなら

わたしの輝きも 目にとり天國のようなら

神さまがわたしの羽根に光を与えてください

あなたに そのお方がまゝ声を与えてください

あなたにの口はしに歌を教えてください

わたしの花を 花園の灯台にしてください

わたしの情熱を 与えてください

情熱な 音楽の歌でほごいません

この世で音楽の仲間が情熱です

46

〔解説〕この世で情熱と音楽の両方

が共調すること、輝きがあるとい

クバールは言う。人間に華しみに

足は苦痛がないなら人々の秘密が

分かりない、喜びと悲しみの両方

があること、人間は逆歩の段階を

経ていける。

① 食心とうたむと思ふ。

ミソール山でムーサーの要求した

で神が光となって現れた神の顕現

かあるたかか水をわがわがわが

うにわがわがわがわがわがわが

わがわがわがわがわがわがわが

世の實の存在はそれらによつてなつておわりませう
世の浮世の表れはそれらによつてなつておわりませう

この世の實とは調和がなつておわりませう
世の花園の春はそれらによつてなつておわりませう

切子侯と蠟燭

何という眩ましき 蛾のさうな気質を持つ切子侯よ

蠟燭の光を長い間いと見つめてゐる おまゝに

わたしの膝に座りて体をゆすつてゐるのか

おまゝの願いは 明かりと抱擁するこゝろか

この光景におまゝの小さげ胸は驚いてゐる

いなかで前に見や 見覚えのあるものなりか

蠟燭は一つの炎である だがおまゝも完全な光である

ああこの空で蠟燭は裸で おまゝは衣裝をまじつてゐる

神つきはそれを灯せ様にしたか

おまゝを黒いこの覆いの中になぞ隠したか

おまゝの光は志士の袖の覆いの下に隠れた

見る目にひとり埃だ 志士の帯は

人生というその それは忘却である

夢ごあり怠惰であり酔いであり死絶である 人生とは

世それ故、鳥よ、あわてて私を食べる
灯、われわれ水両方かぬわれわれに
必要で役に立つのだ。

幻の解説「簡章その二」見えること許は

洗練された神秘主義がつまづいてお
り理解が難しい。それは存在一現
論と現象一元論に基づいてゐる。

この汗の主題は人間の絶対的な美
を求めることの熱中である。この
宇宙には絶対的な美が存在する。

人間はその美を求めようとするが
それを感ずる霊的認識の目を欠き
なかなかに求められぬ。このこ
とをイタバールは他り作のてそ述
べてゐる。

①神かおまゝの体の中に置いた物を
おまゝは知らぬ。
②志士のせいにて人間は自分の中の光
を見ることかできない。

③人間が自らを真実を理解するなら、
完全に人間が光であるのか分かる
筈である。だが財や欲望だけの追
求にとらぬれらる。

神の園は美の限りない海である

目を上げればそれそれの淵の中に美の台風がある

山の悠ろしい程の静けさの中に美がある

太陽が日光の故郷にも夜の暗闇の中にも美がある

透明の空の清澄の中にもこれがある

花の間に夕焼けの花殻りの中にこれがある

在りし日の信太の崩れた遺蹟の中に

幼だ呪の話をしようとする魁命の姿の中に

花園の住人たちの一緒にさえずる声の中にもある

小島たちの華作りの中にもある

山の鬼にも川の流水の奔放さにも美がある

町にも砂漠にも荒野にも人里にも美がある

しかれ人間の精神はこころようば無くしてしまつた物を求めている

さもたげればこの砂漠がだぜ隊商の鈴の音のようには嘆いているか

笑つてこころあつたりの顕現でもその精神は不安である

その人生は水のない魚のようである

(一九〇五年九月)うとする。

①それらは自然の美の中は隠れてい
る。しかしそれらを見つるために
霊的認識の目が必要である。

②人間の精神はそれらの美しい眺め
では安心せず、それらの源を知る

88 ラーグアイ川の岸辺で

夕方の静けさの中 ラーグアイ川は喜樂にひたつてい
るが心の様子がいかなるかなどと わたしたは問わな
いでくれ

88 (解説) ラーグアイ川はインダス盆

地とパシヤグ地方を形成する
五河の一つである。それはラーホ
ールを流れて流氷、その流域を

川の流水の音はわたしに詠詩への誘いを感じさせる
あたり一面 わたしにメックカの鬱陶感を感ぜさせる

流れる川の岸辺にわたしは立ちどまっている

だが分かうばい、わたしはかじこに立っていろか

甘い酒で夕方の顔は色づいていろ

天才聖人は歌えろ手の中に益を持っている

蒼蒼と巡る日りにキラキラは日々に終わりへと向かっている

それは夕映えでなく、あなたも太陽の花のようだ

遠くにある孤獨の栄光がそかみ立つ

ムカル皇帝の既成墳墓の地の塔が

時代の交わり激しさを語る その宮殿は

過ぎし日の物語を記す本 その宮殿は

この場所は一体何か、おなじく静かな音楽のよう

木々は 木々は沈黙の人の集まりのよう

小舟が一艘 川面を走る

その船頭は懸命に波をたたく

小舟は静まりやうい早瀬を行く

視界から消えて遠ざかる

人間の一生が船をこぎように進む

永遠の海にこのように生ずる、このように消える

それは決して敗北しはなう

目から隠れる、だが消え去ることはない

目から隠れる、だが消え去ることはない

(一九〇五年十一月)

活の一部をなす、イクバルは
その美しさと逆りの静かな魂を
を正やた後より深い思ひに沈む。
灯台、クラン、インド、ムガル
帝国時代のムスリムの消えてしま
った栄光を要約する。その時、
ホルン、ジャハール、ギール皇帝
在位一六〇五〜二七年)の統治の
間、首都であった。しかしこの詩
の意図する所は最後の二つの灯台
である。それによると、死後人間
生活の終わりでなく場所と形のは
なり変化である。この哲学を最後
の生活へ拡大するとこれら灯台の
終わりでなくむしろそれが再び活
動すればその栄光は戻るといふこ
のである。こゝ考えばイクバル
の多くの作品の中に表われている。
「中」の思ひ出しもそのような作
である。
↓ 水場のこと。

神教人の香願い(デリー・ハズラト・ニヤーム・デー・ン・オーリヤの著)

文徳たらか唱えろくは、そればあなた御者

あなた願は借えて、あなた思ひはあまぬまわたる

愛の星々はあなた引カにまゝ、てな、ていも

あなた神制は太陽系のようにである

あなた廟への参詣は心の淨化になる

あなた心は、おほりストヤニズルより高い

あなた愛の中は、愛の光が臨んでゐる

その輝きは大きく、あなたへの尊敬の気持は大い

まし、心が思いなら、あなたにはあなたの手よりラフアッ忘

こゝろが頬が笑うなら、あなたにはあなたの手より春の花

少しは花園を捨てて出て来てしまつた、花の匂いのように

わたしは忍耐の試練を試してみたい

祖国の絵画館から連れ寄せて来てしまつた

忘懐という酒の樂しみが、あなたを引こつたながら

わたしの目は意々の雲の上にある、わたしは砂漠のまら木

神はわたしの庭の不足を感じてゐなかつた

わたしはこの世で太陽のように天に座する者になりたい

あなた祈りやあなたにその椅子を占めたまへ

あなた場所がわか同好者よりを前にあるまうに

キヤラバンの人達があなたを目的と看するよう

に

29(解説)この著の背景はイタバル

ガヨロタバ第巻に際し、デリー

に行きそこでニヤーム・クワデー

ン・オーリアの廟を計来た、イ

タバルは聖者にイスラーム教徒

としての徳を手えてほしいこと

無事の帰国を祈願した、イタバ

ルは宗派スティー、聖者を尊敬

していた。

ニヤーム・デー・ン・オーリヤの著

ム・デー・ン・オーリヤの著

ニヤーム・デー・ン・オーリヤの著

あつたし、ハシロ言葉で誰もの心が痛みませんように

この空の下で誰みても不平の言葉がわたりぬ向ける水もせんように

その如き目で人々の心を柳のように分けられるようにな

そつういふ嘆きをあつたの廟からわたりしを得られずようにな

わたしは草くずを一本いっばん集めて作った

その草が花園でまたわたしたしに見えて来ますように

再び産り両親の足もとに跪けようとする

愛の秘密をわたしに教えてくれた両親の

ムズタラー一族の顔の訂明

その入口はわたしにヒッマツカの聖域のようでありました

それとの交わりの恩恵でわが願望の芽が芽を出て

その愛を大さかあつたしを聲明にさせてくれまじしたか

祈つてくれようよ、天と地が

再びその地を語せさせ、わたしを喜ばせてくれようよ

そのわが第二のヨセフよ、その愛の室の蟻場よ

その愛は俺を祈の区別を流やしてしまひ

その愛は俺を祈の区別を流やしてしまひ

その愛は俺を祈の区別を流やしてしまひ

その愛は俺を祈の区別を流やしてしまひ

その愛は俺を祈の区別を流やしてしまひ

その愛は俺を祈の区別を流やしてしまひ

父と母や愛する人達から別れて

① 悲しみの下での苦しみと誰しみた

い。恵けり雨を降らすこと

は神が庭師が役割としてくれるの

で。

② 学問についての。

③ ヨーロッパへの留学から帰国して

ムズタラーはシーア派初イマ

リムで、正統カリフ第四代イマ

ムズの孫である。その一族の甲に

イクバルが師とするミール・ハ

サンがいた。打切はミール・ハ

サン・ハサンに向けての祈り。

④ アッラー(神)を指す。

⑤ ヨーロッパ留学から帰国して。

⑥ イクバルの兄アター・ムハンマ

ドを指す。その兄は父親を預言者

モセフがその父ヤコブを愛する根

に愛した。ヨルイクバルを愛する

るのれヨセフが弟ハレヤーンを

愛した様子を愛したの、なす分

は、おぼえに付けて祈り。

旅人のこの願いが受け入れられますように

(一九〇五年十月)

50 ガザル詩

ガザル 1

この世の花園を見ず知らずの人のように見らる
 この世は見る価値がある。この水を繰り返し見よ
 見よ。この世はたまえば火花のように生まれ
 不確かな世帯にたまえぬ。よく見よ
 わたしにおまえを見る価値がほいのは今かいている
 わたしの願いを見よ。わたしがおまえを待つのを見よ
 もし見たいとする願望がたまえう目を開かせたなら
 道ごといある友の足跡の模様をよく見よ

ガザル 2

葉がくたつていい。その水を繰り返して
 約束してくれたから。何が恥ずかしかったか
 あなたが使いがすべりの秘密を明かして
 その手違いは。わたしの対応のせいであつたか
 賑やかな夜。その日の朝まで見分けて
 あつたの目は。蘇つてもたんと目ごとか

50ハ解説「ここにガザルがある。

これらガザルはイタバリの初
 期のもので、イタバリの本集の
 序を著すものでは無い。

1. 神の目。私はつまり人間であ
 り、おまえは神なりで、あるいは
 また現世の悪人ともいえる。
 2. 心の目で見れば、そこは神の蹟現か
 ある。

2. 解説「このガザルはダークに徹
 たものである。イタバリの影
 が表れている。イタバリの影
 の作品だけである。イタバリの
 思想は、断片的なガザルで
 は達していない。このガザルで
 は、少しは私の思想を染み込
 んだものがある。

あれは来ることを拒んでいたか。使者よ。
だが言ってくれ。こじわつた任方はどうだったか。
あのツルムリの方へムーサーを引連れて行った
見ることも望む願望よ。おまゝの強さはなんと強かったか
イクバルよ。蒼であつたの噂がある
何か魔法のようだったと言ふか。話はどうだったか

カザル3

説教師の敬虔さば不思議な
彼は全世界を敵にしてゐる
今もって誰も分かつない人間とい
ひにからずして、じこへ行くのか
夜になると暗さを得る
學々が輝きを得た所から
われらには自分の苦痛の話を
してゐる。それが秘密を知る者に
説教師の音動は分かつたらし
アデーンの声にも振るゑる。いとく

①われわれ二人の志の秘密。
②自タリ姿の美しさ酒に酔つた、
③その任方を志人の様子が推測で
きる。
④ムーサーは神の姿が見えなかつた。
ツルムリの方でまざままな神祀を
見る。ヨクルアデーンの功章クサ
節、28章22節、23節参照。

3 ③そこに愛や寛容さが意外と見えず
人々は宗教からう離れてしまふ。

④光も闇も、喜びも悲しみも神の作
つたものである。それ故不平を言
うべきでなく、甘受すべきである。
⑤友達。
⑥説教師はアデーンの響きに感銘し
た振りをする位、教壇の所がある。
⑦礼拝は只知。

ヒニかゝる麦わらを持つてこゝろ 葉のため
稲妻も焚らつかなりかゝる水を燃やすため

あゝ残念 矢はそれを見て稱アてしまった

わたしが見て選んだ小枝を 葉のため

ふるふの日ばセニの分派と合ふ

ふるふの一つの杯はすへての時代のため

心の中に何か大きな願いを抱く

天が喜ぶほどり わたしの願いを壊すかに

ます鼓を運んで走束を伴れ

そゝうすれば雷が落ちよう 燃やすために

狩人の落胆の思ひがあつた わが故よ

こもつければもう一産術んで来るか 一粒の穀粒のため

この園では心の鳥よ 自由の歌は歌うな

残念 この園はふさわしくない そろよふは歌のため

(一九〇一年九月) ① 狩人に蹴られて悲しませたくなかつたので。
② この世紀和語のイヤリスの種民地
③ 支配下にもつたインド。

なんと言ふうか わが花園よりわたしはなせ別れて来たか
そして雷の輪の虜にわたしはなせなつてしまつたか

4 雷の雷が落ち、心の葉を燃やす時
心が心とみる、人々の時は雷火、
で心を燃やすことにある。

① 天は雷火をまたらすもつ。

② すへての宗教や民権に押し同じ態
度を認め、世界のすへての民権
に押し調和を感じる。

③ アル・クルアーンは神聖の書集う
照。

④ アムムの花園からの遠故を指す、
⑤ 人間の心、それは物質愛材に
通じる。

驚くべきことは

わたしは全時代を通して悪かった
だからわたしは高貴なる恩賜の御衣をなせ与えられたか
見るか、見せよの要求がツール山であった
おろそか合かっているか心よ 決定かなせあったか

願いのことをしなさい要求も一つの願ひである
心の鳥は願望の鳥よりいかほ日中に行れたか

神よ 見る人けこでもあなたを見て
最後の審判の日の約束はだからどうして苦痛だったか
完全な美がその幕のない理由でないなら

幕の中に隠れていたものがなせ自らを表したか
死という怨才がまだ残っている 別れの苦痛よ

治療する者は狂人か わたしにどうして葉がなかつたか
あなただけ野に見たことがあるか 賢明な目よ 花か

土から出てきて なせ華やかな衣装をまとったか
物が何處に聞ける賢達目的ばわたしの侮辱だったか

さしつけ水けすやてか明白 どうしてあつたか
わたしが消える眺めは一見すべきものだった

なんと言おうか あれとわたしは出会いはかと思つたか

(一九一三年二月)

心人間は神の故造物の中で、
のとき考えられ、
モトセは神の蹟を要求する神の方
からおろそかにけわがたを見ようか
ないとの返答を受けたか更に要求
する。神は働くとたつて頭の中、
モトセはそれには耐えられず比失神
する。クレアリーの幕は燃え尽
くると完全に達すると隠れはま
ざいられ行く時。
馬鹿か
人間心も考えられる。

心会うやいなやわたしは消滅した。
つぎは心する者の人生は他人の前
では残らない。

振る舞いが異様だ。じの人達とも違つて

これら志する者は神よ。じの住み処の住人が

苦痛の治療でも苦痛の味を楽しむ

肉刺にさこつた刺。針の先で取り出す

神よ。わが希望の園を茂らせてくれ

肝臓の血を予えてそれら若木を育ててきた

夜。星々の静けえがわたしを泣かせる

わが愛は他と異なる。わが嘆きも他と異なる

わたしに家を壊す喜びを聞かぬ。てく水

数百年の業を作ったが。わたしはサケ火をつけてしまつた

旅の道連れとして。毒、死なさげよくない

大花よ止まな。わたしも結局は消えるもろいだ

天女を得る期待が導師にすかてを教える

この方は見掛けは素朴で純朴。誠実である

わが語がイクパールよ。なせ愛らしくけいのまつて

こねは粉々にばつたわが心の苦痛の嘆きだ

たんと考えてム。サーはツール出て強情をばつたか

見る力があるも誰でも主張するのりか

6
苦痛、志人との距離で遠く、ここ

では静けえを泣く、セージとな

っているか、こら沈黙は神への思

いを静しくさせている。

可憐に狂つて。

人間も大花のように一瞬のうちに

生を終える。

天女世で天国に行き、天女を得るこ

とを承らつておくり、水が行動の

もとになつてゐる。実際は腹黒い

いと考えらわている。

神にその姿を見せることも要ら

明いた目では誰もが見るこゝろかでない
見たいなら 誰も心の目を明けよ

マンスートルにとり話す唇は死のメッセーヂ

今 誰か誰かへの愛の主張かできるか

見たい時があるなら目をつぶれ

見る仕方とは誰も 見ようとしなないことである

わたしは愛の極点に達している おまえは美の極点に

さあ見よ おまえかわたしか 誰もが見ようとするのは

恋人の愛は愛の罪の弁解となる

審判の日 誰もあたらしく弁解はしないだろう

わが友よ 愛の目は隠せない

とはいえ どのようなあれを見ればいいのか 誰も

恋人を見る時 既を動かすうはよくない

水仙の目でたれもおまえを見ろうかい

分かるだろう ほんなれ半ししか 恋することはい

二、三日でも 誰でも わたしだてでもないから 恋してみよ

ク心目の目が明ければ宇宙すべてに神

の顕現が見える。

① マンスートルは「我は神なる」と言

ったため比喩を用いた。

② 今は何事もないまま黙する以外、

言葉のない時代である。

③ 神を見る仕方。

④ 外を見る目を閉じること。心の目

で見ること。

⑤ 恋人(神)を見ることと弁解、

⑥ それで犯罪人になるかもしれない

が。

⑦ 水仙は目に喰えろれるか明き言

ので隠かゆることはない。

⑧ 恋される者は世道、自分のまから

恋さないとして水ている。

なんと言ふ 心をなくす願望の強さか心の位か
ゆが市場の輝きは 損失の多さによつて量られる

わたしは酒の輝きで自から花團となる酒飲みだ
花を愛するのには 不親切な人ヒク別れから

狩人はわがよき声がある限り 花園をにぎわす
雷の不安も わが葉がある限り あり続ける

わたしは土境 心配のせいで砂漠のようた
その広さは聞くたかれ 地よりえまぐり

ゆたしは隊商の出發を告げる鐘 わが血管には眠っている不平がある
この沈黙も わたしの隊商の出發まで

③ 心の安寧と成功の道具を作れ
④ 淵の中心は流れる水がある限り

愛の園で沈黙は死だ 夜鶯鳥よ

ここでの人生は嘆きの習いの縛りがある限り

若さんは会う事か 期待の楽しきもある

わが家の輝きは他人の居る間まで

今身でやゝと悪名で過えてきた だが残念 分かうないとは
わたしは思う わが愛は わが親友にしからうない

(一九〇三年)

⑤ 愛を利業に換えれば忘る者付

常に困難に耐え、苦しみ我慢をし

て損手を受けている。しかし損を

多い程、善やかなる心である。

⑥ 単に夢を見て、いつ葉を燃やしてし

まぶうがと。

⑦ 水の流れが止めば淵も消える。

⑧ 若さと老人で愛欲。

⑨ 慈悲のせいぞ。

空や大地でもたしが探していたもの
水が心の真、瞳の任み心かう出てきた

真実が目の上に現れた時

われわれの心の館の空に住人が出てきた

カアバの敷石が跪拜の姿を知っていたら

カアバの敷石も跪拜をする者の仲間だったろう

マジメーシよ おまへは自分を見つけたことかあるらう

花楸の数ヶ月は数時間うらうらに過さる
だが水の敷時間ば数ヶ月しなうて過さる

船頭よ おまへはわたしに溺れるのを止められるか

溺れる人達は 船に乗ってても溺れてしまう

預言者ムーサーからその姿を隠した者は

その者の輝きは増進りの中の顕現である

消えた隠陽に心ある人の息の流は火をつけられる

神よ これら心ある人の胸の甲に何が見えられてるか

この真珠は 王の宗座からでは得られない

秘れた衣服を着ている様子は聞いて聞かない

彼らを見よ 奇蹟の白い息を小じこらに注入して居る

9 正真実の志人、即ち神。

① 神の任み心。神を知る他オトは、
人間が自分自身を知ることである。

② 自分自身の姿の姿かかろうかい。

③ 神や志人との別れ。

④ 正真実の志人即ち神に志する者はた
とえ常格の座に座してても神の愛
に拘束する。本々のものは外見で付
く心との関係である。

⑤ 神の顕現は志人の顔、また心花は
ひと列々に現れる。

⑥ 神。

⑦ 神秘主義の托鉢僧で神に志する人。
⑧ 正真実の愛の振立はまや大臣の機
嫌取りでは得られない。

⑨ その手で死んだ心を生き返らせ、
神の愛の酒を酔わせることまでさ
る。

① 眞實に到達できない月か見ながら能の

この世でその標をば、自ら進道者たりの中にある

なにか花で心という教を施やしてしよえ

愛を主とするは境ゆる心を探せ

愛は薄いがラスビレ入っている酒だ

その美の秘愛者が完全なる美になる

前ががたまえの、我は分るらないしり答えれきこんだ

あまえの位階は、イバての覆き者たりのより赤くなら

長いことおまんれついでの批評がある

② 心に黙れ、密で騒がたてるのげよくない

あの人定を思ふか、わたしはそうげたまふい

わたし自身イクバールよ、自分に文句を言う程か、

あんなにこの上なく思ふしたい

わが素丹さを見よ、何を欲しているか

へん人間の日

③ 神の顕現を見ようとするなら、こゝと僧との方法の中に見られる。

④ 深くして秘めて人間の心となつて、その中に神の顕現がある。

⑤ 愛とはエヤ石でできている空器に、入っている油でない。

⑥ アララー(神)がいる。他に預言者ムハンマド。

⑦ 文句は預言者ムハンマドを賞讃する灯台。

⑧ アルクルアーンを幸ひ神を賞讃する。

⑨ 預言者ムハンマドについて、哲学者や賢者の間で批判がある。

⑩ そうすれば無礼なことには生かれない。

⑪ 愛の道で他人に文句を言うよりは一番の罪である。

⑫ 愛の道である。

⑬ 愛の道である。

⑭ 今まで誰も得なかつた程のたまえからの愛を望む。

⑮ 今まで誰も得なかつた程のたまえからの愛を望む。

意地悪であらうとペールを顔から取ってくれることであらうと
とにかく耐えることを欲している

天国とは、導路にとつてはいい所らしい
だがわたしは、この世でおまえと会うことを欲している

わたしは臆病者だが、草目でもある

おまえの口から、神かムーサーに言われた言葉を聞いてみたい
わたしは一時の客人、空の人たちよ

わたしは夜明けの灯台、今また消えようとしている

窓でわたしは、秘密の話をしつづけた
わたしは無礼な奴、どうか罰してほしい

がザルII

(一九〇四年一月)

何と必要としない者が、愚みの手を差し伸べるとき
不頼にする者はどうして無力を誇らぬのか

導路よ、あなただけが天上に登らせかけている

その神とは何ぞ、僕たちから遠ざかっている

わが月には、それは救済者にあらず、影人よ

正身と胸辭を区別する者は

常に耳を心の上げ置き、これは準備だから
壊れるし、秘密の音を出さず

② 志での忍耐の中は、準備が
③ アルクルアーン、
④ 準備が

⑤ シナイムでムーサーが神のその姿
を見て、くわと覆むと、神はさ
「おまえは私を見ることができな
い」の返事と雷鳴があり、ムーサ
ー雷鳴に打たれて失神した。
⑥ アルクルアーン、
⑦ 準備が
⑧ 志人と同じ言葉の前に現
れ、言てくわは、志人を見
見ゆるが。

II 正神

① 正神は神をまつた、遠く遠く、
② 第一に神は天上に居た
③ 第二、神は僕
④ 第三、神は僕
⑤ 第四、神は僕
⑥ 第五、神は僕
⑦ 第六、神は僕
⑧ 第七、神は僕
⑨ 第八、神は僕
⑩ 第九、神は僕
⑪ 第十、神は僕

誰か聞いてみるといひ 導師にどなたが被堂があるか
よき行ないをしない者にも神がその恵みを施したら
神子 詩の甲の熱はどこから来るのか

それは 石をも溶かしてしまふものである

チヨリツツアとバラの區別で松鷲鳥の啼きがある
このせでは 區別する日は聞けない方がいい

敬虔その懐心が導師に敬ぶせてしまつていろ

神の儀たちに打し えずぶつてしまふことを
インドの方から風を吹かせよ、心くもるよ

わたしを飛ばせて ヒジャーズの道の埃にするよ

ガブルは

(一九〇四年六月)

ガブルカヤとグイナのある地方。イ
クバールはその入り口の願望を
この部分で表している。

わたしは心の苦しみを解えています 他の方には無関心です
だからんとうまく言う あたれは わたしは急死で 無名ですか

わたしは存在した あなたが望むが見えるまで

わたしは真理の現れで消える偽りなのだ

知識の海から潜水夫は手紙と真珠を持って出て来た
あな残念 わたしは川岸に立ち小石を拾っているだけ

水が湧き出せば われらの心置きの証である

わたしは天使たちを渡すその無知を心取っている

よき行ないをしない者には神の恵
みを得られぬといふのが導師の
いふその言葉、神はすべてに恵み
を施す。

松鷲鳥はバラの花に志する、それ
と別れると嘆きの声を上げる。

わたしは自分の存在が弱くなった
てしまふように。また朝、雷の音
を聞く太陽の前になくなくなってしまふ

よき行ないをしない者には神の恵
みを得られぬといふのが導師の
いふその言葉、神はすべてに恵み
を施す。

わたしは天使たちを渡すその無知を心取っている
その人間は自分の位置を忘れた

人生の雲よ その終りをみることを語るな
死すとは單なる終 としておたしこそ實だ
イクハールよ わたしは自分自身を探している
アノイ自ら旅人 自ら目的の地だ わたしは

(一九〇四年十二月)

カザルは

マシマーンは町を捨てた なら沙漠を捨てよ
神を見たいなら ライラーを捨てよ

導師よ 願望の完全は放棄でこそ目的か遠せらる

この世を捨てたなら 来世の考えも捨てよ

遠慮の仕方より自益の方がよい

遠く探せ ヒズルの考えも捨てよ

ペンのようにおなたの言葉の上は他の人の言葉がある

よそ者のものを使ったの不当な誇りは捨てよ

心は愛の痛みが打ち時 詩に面白味があるか

生け贄が打ちなら 震えることも止めよ

露のように花に涙し 花園から去れ

この園に 永遠にある考えも捨てよ

求愛の仕方とは 人々から離れていること
寺院も カアバも 教会も捨てよ

牙の底鏡と成った。

②他の被造物より人間が高級である
という事。

③人生という家の先はただ人間の思
からなっている。

④わたしは誰なのか、天保たら
に跪拜される者なのか、神の性質

を持つ者なのか、地上で神の代理

人になるのか、地上で神の代理

の被造物より優れているのか、他

これは府老ではなへ、神への礼拝だ
 悪か若よ、報酬の期待は捨てよ
 理性の見張りが心と笑みあるのはいい
 だが時だけ、心^をを単独で放してやれ
 他の人より著えに從って生きるとは何か
 名事による人生に頼ることも捨てよ
 総り返す問は、失礼である、ムリサーよ
 神の賛成を得るには、要求をも捨てよ
 導師が酒の許可を与えるなら
 イクバルはさ張する、飲むことも止めよと

(一九〇五年五月)

此時に大股に振るまわせばならない
 ことも起り、理性の番人も夜まは
 なくこともある、
 至今日はよく言われても明日はどう
 に言われるか分らない、それ故
 自分の行為に重きを置け。
 神秘主義者や詩人などは道徳の言
 動にしほしほ反対の態度を取る。

第三期（一九〇五—一九〇八年）

夜の花破の芳を髪はさだカールを知らなかつた
空り星は遊ばず榮しみに身をかへなかつた

月はその新しい衣裳に身を包み他のもつちうようは見えん
今もつて自然の法則を知らなかつた

今、無の暗闇の倉から 静しく世帯が生み出れた
だが人生り恒華は、このせり広がりの中に隠されたうまだつた

この世の終座の完成も間近のようだった
指輪の目から宝石の願望があらわれた

天上の世界の中に誰か鏡金術師かいたと聞いている
その足のエレはジャムエラケラス以上の清さがあった

神の座り座もたに靈草の燃えかきかかれでいた
天使たちばそれをアダムから見から隠しえた

しかし鏡金術師の自ほじりそれをうかかっていた
彼はその心方策を神の特権の物より偉大と考えていた

神の名を唱える口実で神のもとに行つた
絶えざる努力で、心で欲していたものを得た

心方策にある謂今風の成金を求めて世界を駆け巡つた
神の御心を、知つて、何をも隠せるか

星から輝きを求めた、月から肝臓の痛みを求めた
夜の乱れた老ま髪から少しの時を得た

57 (解説) 愛がないなら行動はない、

行動がないなら宇宙もない、つまり
この世の存在は愛によるもの、神、

秘まれの考えをこの詩で暗示した、
イクバールの日は美、直愛、善

この部分は愛という一つのもの
の部分である、

この詩はケンブリッジは有名な
標はこの頃定まり、以後愛の教え
のため比生涯を過したとも言える、

宇宙である指輪はあつたが指輪に
入水るガイヤ即ち自然の法則は
かつたがそれに対する願望が起
つた、

一粒クエムジムシトド王のガラス
よりも魅力的なモノにしてしまつ
た不ジャムシート王のガラスと
ぼそれ世界中の様子で分かつた

い水れる依北上のガラスタ
至、天使の中のある一人、

至人間は忠する心と心(肝臓)に
傷を食うように、月も神に忠し傷
を負うと詩的に考えられている、

雷がうけやう昇降を 天女から純潔を得た

イリヤの息子 キリストの息からまたたかさを得た

神かう多少 慈愛の輝き

天便から謙慮を 露の運命よりけかなさを得た

そいでこ水うの物を命を泉の水に流かした

その合成物は 神の産より愛という名を得た

錬金術師はこの水と 生まれたマツ庄に振りかざした

その是事な手際はこの世のもつれを解くようだった

孫水が現水 一つずつの物は夢や楽しみを捨てて目覚め

立ち上りかゝて それを水の交と胸を合わせ始めた

太陽も身々し 優華に振る舞う在方を学んだ

管は花がらを聞き 千ニリーリップの花園は傷を得た

(一九〇六年一月)

52 美の真実

美はある日 神はつぎの問を發した

この世であなはなにせわたしを不滅にしにくれなかつたかのですか

するしつきのふうな回答を得た この世とは絵画館だ

この世は消滅の長い夜の物語だ

その哀水が変化する色である時

その真実が長遠であるよえがある

を互いに愛し結んだの意。

② 宇宙のすべりの物が愛のせいで動き始めた。

52

「解説」この詩ラヒントをドイツの散文の中より採たという、詩の題は最初「美の衰退」であつた

といふ。詩集を編む際此の詩の題は変へたといふ。イクトハイルは美の消滅につき正へてゐるが、あらゆるものが消滅し神だけが永遠である。これは「クルアイン」のメッセージである。「クルアイン」

2章詩節、28章詩節などを参照。

2章詩節、28章詩節などを参照。

どこかその近くに月がいたがこの通り取りを月も聞いた
その話はずいさうに伝わり、明けの明星も聞いた

花明けはそれを星から聞くに響け聞かせた

響は天の語を大地の親友に語った

響かうタメッセルで、花の涙がこぼれた

響の小さな心が悲しみに赤くなった

春の季節は花園から泣きながら出た

若さが教歩に歩いていたが、悲嘆にくれた

おメッセル

愛があなたに聞えの事しさを知らせてたら

愛の人々にも愛の環場のようには聞えの楽しさをとえよ

難しい結を目を解く愛は、神の恵みによる

寺院や聖殿の人々限りず、神は望む人には誰にでも与える

環場のようは光の夜を得ない

神がこっそり命令を溶かす暖さを与えない者は

早にも月にも夜明けの輝きの中に隠れぬ

眺める目の中に区別のケルズを、つけるな

愛は、結の習いより早く上を行く

もし差が上のごに御祈していろ、なうおまえも上品まで答えて

① 本物でなく模倣である。

② 花々。

③ 目命令もそうなるかと思つて。

(一九〇六年三月)

④ 解説「ヨロロハ」保留中、思想的

変化が起ころ詩にメッセルと酒を

持つ詩が書かれ出し、それの最初

の詩なのである。初期よりつた神

の唯一性が表れている。

⑤ 心の中に民族や国境があるいは人間

性に好するを援の感情がせいかな

その感情は同胞にも生じるので。

⑥ 光の閃光、世の明かりとなるもの。

⑦ 神の輝き、神の愛。

⑧ 層層ること、表面的な違いにどう

ゆれるかの意。

酒屋サカヤのまじり イギリス酒の旨さば相違なきもの
だが中に越しみの零回気がない わたしは自家製のものを息子とよ

おまえは知らないか 古い要は変ゆつてしまつた
さあどうか 彼らに偽ものの酒は与えるな

（一九〇六年二月）

スワーム・ラーン・テイラト

暮ら着まなを漸々 おまえは外と花をあつてしまつた

以前は単なる真珠だつたが今うは偉かたい真珠になつてしまつた
なんともよい仕方でおまえはこのせう秘密の扉を開けたか

わたしは今でもこの世の区別を知らぬ
人生の賑わいが終わり 最後の審判の大混戦になつた

その火花が消えるよ アーガルの父の家になつた
賢明なる人の人生の終わりは一大奇蹟である

イツラッラーの真珠は ラーラの川の中に隠れてしまつた
昔日の日は人生の終わりの意味が隠されてゐる

取まへが終つた時 水銀は単なる銀になる
愛のイツラッラーヒムは存在の偶像を壊す

あなたも愛の天國の川の畔りが正気の葉であるかのようか
（一九〇七年一月）

イスラーム教後の指導者よ、
西洋の教育を止め、

イスラーム文明を知らせよもの、
の統治者であつたが今は主場がま

わり被統治者になつてしまつた、
「解説」詩の題となつてゐる人物は

イカバールの友人、彼は一九〇六
年十月、カンジス川で溺れ死んだ、

その遺体は彼は一皮を付じていた、
は実行するタイアだ、た、それ

溺れ死ぬことになつた、
神である川と今一してしまつた、

おまえと違ひ世のしかうみの今も
度である、

預言者イブ・ラーヒムイブの父で偶像
崇拜者、スワームは死後その他

霊が生前より高くなつた、
自分自身を滅するためり用意ある、

者は、唯一神の存在を証明でき、
神と合一が出来る、

イツラッラーは神を除き、ラー
に無の意、すなはち消滅する川

の中、神の証である真珠が隠さ
れてゐる、

55 アリーガル・カレッジの学生へ

他の人と わたしのメッセージは別である
 愛の苦痛の、それだけの証へ方は別である
 嵐にかかつた島の嘆きを聞いたろう、おまえも
 たかこれを知り、屋上に上りまゝ、鳥の嘆きは別である
 山からこぼれがした、人生の秘密は安息だとの
 だが弱い嘘は言つていた、歩く歩みは別である
 ヒジャーズの集まりの輝きはメッカ聖域への熱情からある
 この立場、この組織は、他の高枝うとは別である
 絶えてる悦楽は死、探宄の楽しみがなかり
 人間の転回と再び回らぬは別である
 夜明けの壇場は言った、人生の楽は情熱だと
 への苦しみの往み勉に永遠に存する、冬存は別である
 酒はいづだ熱成せず、酔吐もいまだぬかず
 酒樽うふたりよに教会という、煉瓦は置いておけ、今もなお、

(一九〇七年六月)

56 明けの明星

明けの明星は泣いていた、そしてこうに言った
 月影は停んでいるが、眺める隙がない

57 (解説) アリーガル大学学生を道

してインストロメントを運つてゐる。そ
 先にメッセージを送つてゐる。そ
 彼はイギリスへの忠誠を誓はる他の
 メッセージとは違ふといふ。
 ① 他人の知を、わたしのは受て
 ある。
 ② 植民地下で奴隷状態の人々の様子。
 ③ 思想的にイギリス支配から自由で、
 物質主義の教育を行つてゐる者。
 ④ エッカヤメディナの地域を指す。
 ⑤ イスラム世界は心の中を聖域へ
 の愛の感情がある時に幸運と繁栄
 の栄光がある。
 ⑥ 人間の努力は個人でできるが、林
 の回しあいには射人を必要とする。
 ⑦ 探偵心である。

58 (解説) もし神でも不滅に作りたい

願望があるなら愛の任方を取れと
 いう。その証ととして自分の詩を
 提示してゐる。そして愛こそが彼

太陽の力ですべてが全き返る
だがわたしは群の足もとでせうきを待たない

明けの明星の立場とは結局何か

水沓の危か 水沓ととも花の輝きか

わたしは言つた「夜明けの頼り飾りよ」

ふまえは消滅を悲しむのか ならげ天の天空より降りて来よ

天空の高きより響き共に落ちてこい

わか詩の園はあたり一帯 ぶさえを活気づける所

わたしは庭師、その春の愛の

その基礎は永遠に続く愛の

夕美と愛

月の銀色の小舟が沈むように

夜明けの混濁時 太陽の光り後の甲に

光のチャートとルリ端を取って消え入るように

月、晩 月と同じ色をした蓮の花か

ツノルムでの神の顕現に際してのムイサーの白い手うように

花園の白いの波の中での帯の音のよう

わか心はそのようにもなたへの愛の流木の中心なる

わか詩の基礎を永遠のようには長持
させているという。
じ神から。

② わたしの詩は決して朽ちること
ない。

③ 解説 純粋な愛の詩の例である。

愛は宇宙の基礎である。宇宙が部

分の互いの関係は愛の感情の上に

依っている。愛なしでは宇宙の存

在は不可能であり、それなしでは

人間の生活はあらゆる種類の耐

と興奮に欠ける。人間性を戒戒よ

りかけているのは愛である。

④ 婦人のシノール。
ムイサーの手は小とこからと
と白く輝いていた。しかしシノール

あなただか望なう わたしは寧ろ眠わい

あなただが美の稲妻なう わたしは愛の收穫物

あなたか朝なう わたしの流ばあななたう雲

もしわたしが夏祭の夕べなう あなたはわたしの夕焼け

わたしの心の中にあなたの老を髪り乱れかある

あななたう絵によりわたしの聲あななまよふ

あななたう美か頂点に達するもわたしの愛は頂点に達する

わたしの詩作り花園にとり あなたは春風

わたしの僅少の想像力に あなたは安心を与えた

あななたへの愛が胸に生じた時から

わたしの鏡の中に新しい空石か生まれた

愛の本質は是れより完全と云ふ勳章をもむ

あななたのせいで わたしの希望の木々は青々とほつた

あななたは目的地にたつて安心した

58: の膝に猫を見て

猫は ネコに空を見り任せて誰か教えた

愛の胎動の横目アかいを誰か教えた

あななたの仁愛で愛がぼんち多く生まれるか

あななたの青い目かうする聲さかなんち多く出ているか

此は神の顕現かあうしムーサーの

輝きあるやも顕現の光の中に消滅

してしまつたといつたクルア

山第20章に記、第20章第2節を認

ふ稲妻とは志人のこと、志にふいて

志する者は志之れる者に消滅させ

らる。

⑤ そのようにわが心は乱れている。

⑥ あなたへ美しさを傳ふことにより。

58 (解説) 愛とはすべてこの生命あるこ

のに傳られる生まれつき感情で

ある。この神秘的真理は宇宙のす

べての物の中に在する神の愛の普

遍性である。宇宙のすべてが物

は神の愛に陶酔してあり、それな

時々目を向け、時々恥ぢらしいの様子を
また時に背伸びをし、また横たわつて眠りをする
ふふえの目は鏡りようは驚くのか

総明さの光りせいでふふえの合動力が押やくのか

前足で押さえるのか、怒っているのか、これが愛の仕草なのか

それか、怒っているのか、これが愛の仕草なのか

その人の胸の花を誇すとしたんか、何を望んでいるのか

あまふふえ、そういふ心で心はわわわわのか

美の感じとは人間だけに限られたものでない

これ心となつてすべて物の中に存するのだ

時付という瓶の中で愛はまじりけりない酒うよ

愛は太陽の魂、月や血管の中の血だ

すべて物の心の中にその痛みが隠れている

こればすべて物の中でその輝きである光だ

愛は時にさびかき、セージ、断れ悲しみの糸を紡ぐ

愛は時に真珠であり、時に流し、時に翼である

自然と思わず神の愛憎と信々として
述べてしよう。ワケルアインの
59、61、62、64章の最後の冬節巻
照

朝がその輝かしい顔を見せると

① 管はその金色の胸を開く

それは朝の酒場で神の蹟現飲みである

その生涯は太陽の杯による

太陽の前でその心臓を切水切水らし

② 万と胸の切り裂かむることを味わっている

わが太陽よ 時にはおまえとそのハールを上げよ

不埒なる目はおまえ見たさに揺れている

おまえの管の宿る場がわが胸の中となれ

おまえの面影がわが鏡の中にあれ

おまえの光果がわが心にとり人生とけ水

おまえの輝きがわが心にとり揺る響となれ

わが切れ切水が人生のまぶさな星をくせ水

心臓の寶石の中に人生の熱情が現れまうように

わたしは遠くからわが太陽を見よ

管のよう光を捉擁したい

不安なる命の真実を明かしてしまおう

心の隠れた思いを 裸にしてしまおう

59 (解説) 管が太陽の光の恩恵を受け

るように、自分も他人の蹟現で恩

恵を受けたい。

① 管の中は黄色の花粉がある。

② 管は太陽の光線である酒を飲み、

花開き新鮮さを生じる。

恐る恐る 夜明けに

月には月と言ひ始めの月した

「空には同じ眺めが有りませう

われらは疲れてしまひました 輝き続けて

われらの枯れは 朝晩動くこととす

動く動く ただ動き続けることとす

この世のすべてが落ちつかないです

安心というものは 心にはありませぬ

すべてが旅の困難に耐えていませぬ

人も 人間も 木々も すべてか

、この旅はいつか終わるのだから

月には空を眺めた 一夜よ

夜の間から柔しさを取る者よ

この世での人生とは動きまわらう

この世の習いとは昔から続いている

時代の馬を走る

探検の鞭を握りながら

この道での停滞はよくない

停滞には死が隠されている

60〔解説〕イクバルはこの詩で自分の

の哲学を述べている。即ち人生は

は行動と努力の別名で、絶えず

行為を止むことはいふ努力こそが人

生を養育に必要である。イクバ

ールの哲学はワグレルアーンに依

るが、最後の詩集での詩に到るま

で努力の必要性を述べている。

行動する者は遠んでいく
少しでも止まる者は消えていく

この歩みの返報は美である
その始まりは愛で 最後の目的地は美である

61 出合い

夜鶯鳥よ わたしがやっさになつて寝ていた花
幸いなことに わたしはとうとうその花を手に入れた

自今でもどきどきしてゐるが わたしは花園の者をどきどきさせた
おまえの華やかな声で歌つてゐるのか分かつた時 ゆたしは恥ぢずかしくなつた

ゆたしは所にならざる不安な心かたわりのことでもなく
愛の罪を犯かすために わたしは不安だつた
花の蜜でわたしの舌尻は有るだつた

わたしの頬はまっくら闇の夜の鏡りぶようであつた
ゆたしは血まじりの胸の中 吐く息は乱切齒であつた
ゆたしは沈黙には最後の審判の日の混死が隠されてゐた

ゆたしは心情的に世界に以前よりよく心配がなくなつた
花園のまわりはつきかアルを競むのは辛くはない
愛の熱さで わたしの火水くればさとなつた
ゆたしは嘆息は今 電光石火を踏めた

61 (解説) この詩をミコンヘンで書いた

た。そこで哲学の博士号を取ら
てゐる。志する者にとり恋人の果
縛は自由であり、

人々か志にふいて
志する者の随筆と
見るとつは志する

者の目にはにむかいと見える。愛
は志する者を物質主義から精神的
に上に引き上げる。

おまえは鳥でありながら恋人であ
る。バラの花の前でさえずつて目的
を果してゐる。たかゆたしは人間
でありながら志を得ていながら
死ので。

志人たちの集まりで。

愛の白粉でこの黒土が鏡となつてゐる

そして鏡の中の像が、かつての自分となつてゐる

虚名となつてわたしは自由を得た

心を奪われ、わたしが家の騒いとなつた

その太陽の光でわたしが星は輝やいてゐる

月光も道の境を和らげ、つてしまふ程

わたしが恋よ、わたしを一目し、わたしに消滅を教えてくれた

わたしを幸せに日だつた、わが干し草を燃やしてしまつてくれた

（一九〇八年）

62 スライマー

天文学者の目が見た輝きだ

太陽の口は、月の中に、星々の集まりに

神秘主義者如心の闇の窟で待たせられた

詩人が自然の摂理の中に見たものだ

生うれたその輝き、現れ出たその匂いだ

雲の真珠の中、花々の衣の中に

泡散りなつて砂漠をつくらせたものだ

その息使いで花園のすみみを賑わせたものだ

その美は、このようにすなへたり物の中に見えてゐる

スライマーよ、その絶頂はあまのこゝろの中にある

① 打白くはハルシア詩の対句。

② わたしの黒い土の上の白粉がはう

れ、鏡のように透明になり、その

上へわたしが恋人の像を輝き出した。

③ 心の息。

④ 打白くはハルシア詩の対句。

62 解説

宇宙のすなへたり物の中に神

の美がある。その中で一番の美事

を見せる物は、最も貴い被造物

である人間である。

詩人の恋人について詩を考へこ

と付イスラム以前のアラブのし

まらりや、恋人はアラブの間人

水の何人かの伝統的な美人の一人

に例えられ、スライマーもその一

人の一人。この詩の伝統はイスラ

ーム教徒の詩人、特にスリーフィー

に由来する。

① 神の美。

イクハールよ おまえは異様だ あい反するもウケ集まりだ
 おまえには寧ろはむやみな輝きとあられ 孤独である
 華やかな声を持つ狂人よ おまえの騒がせいで
 花園に飾りもどきれば 荒野に光も生じる
 飛脚。高きで おまえは厚々と同じ仲間だ
 地を歩く君子 おまえの足取りは空を走る
 酒を飲むうに おまえの癖は酔狂をする人のだ
 おまえの仕方には酒を飲むことも入っている
 花の匂いのように おまえは色づきをつけて輝いた
 おまえは賢いのでもあるが狂人のようでもある
 足跡をつけて波りように目的の地の方に行く
 だが川岸のように止まったりすることもある
 おまえにはソノ女性を羨しはせぬ光がある
 おまえは不思議なことはおまえの愛は無間心にもある
 おまえの人生の軌道はいろいろと一休みの上にある
 時におまえは一つの踏み石の種類をぬかすけることがあるのか
 おまえの轍をばさむの中で忠誠を知らぬ者
 心がかりとする者よ おまえは有名だが意名を高い

ル自身のことを述べている。
 第一部で自分の性格の中にけ
 る矛盾、すげわら神を愛する鬼神
 と同時人間を愛めた多くの創造
 物の愛にとうわわっているという予
 盾を述べている。
 第二部では第一部で述べたこと
 には矛盾がないこと、そして創造
 に対しての理解や愛を神に對する使
 の愛の理由で示し、それが俗を究
 極のゴールに導いていると説明し
 ている。

① 正派な詩を書く詩人よ。
 ② 花園と荒野は相反するもの。
 ③ その考えは高い。
 ④ 酒を飲む時、おまえの飲め方は酔
 狂するようだが酔狂と違ってゆる
 り酒を飲むことが得意となくで、
 方法である。即ち酒の入った瓶を
 逆さにして酒を注ぐと、その球子
 が酔狂しているように見えるので。

この世にあらざる水鏡の影を舞いを持ち、つまらぬ夢うつまなげい犠牲者よ、おす之は不忠義な夢うつまなげい人だ

2

愛の混沌が砂漠にしてしまつたその

そのよう^な土の一握りを抱たしは胸の下に隠している

その様子は寸草の別、それそれの面の色は別々

胸の中にあたしは今、物ごなれられたグイヤを持ち、

地でない、詩人の心は、さよごまの抹消の最後の審判の日だ

まよふに命があるが、わたしが胸の中に何を持っているか

それだけの感じの中は一つずつ新しい輝きの種がある

わたしは混沌している、わたしは安心の心を持たない

わが目の目的はいつでも新しい美を求めているとけい

美と忠誠の間に約束を交している、わたしは

わが性根である怒りは、必要ならもうや若えよりせじている

それ故、探求の情熱を、そよ風のようにわたしは持つ

安心を求めるには死ぬか散る火花を見ることでは

幼ま月がない、なぜなら電光を知つていれる心を持つので

愛の性質のすべてが静まるような

ああその完全な現れを待ち望む、わたしは

すべてを探究がわたしをいろいろな所へ連れ回す

美は限りがなく、あたしは草の幼かない苦痛を持つ

愛の心臓が私を人間性をすたすた

にしてしまった。今、腹の下に隠

してあるのは肉体ではなく荒野と

化した土の一握りである。

愛の不安が私の人間性の中に限界

を越えれもう輝きを待た、

（今、私は宇宙の中にいない、宇

宙が私に侵襲している）

死人もをま返えらせられ、救いを

受ける日で大混沌が起こる日、

偽善は要らない、即ち単なる人

は要らない。絶たうよである神を

求めているので。

②その一日が私を電光のように焼い

てく水も現れ。

わが人生は愛の終わりなき苦痛からなる

だが志を世間の習いを越えたものとも考えらる

もし本歩のことに尋ねるうらなり 忠誠とは想像力の空想

心にいつを新しい混乱を持つてゐる わたしは

動人の實大さば露り一海^① 心の空若は海をこぼす

暇の乾きは終らざる 足裏には火がついたヨネ

わたしを作った者は自己批判をしたか

わたしは絵だ わたしはわたしを画家の文句を言う

この世の家でまの物まが一瞬であつた時

なんのために限定なしの考えをわたしは持つか

願望の荒野でつねに努力してゐる わたしは

わたしの海^②の波 自分の敗北を肩のせてゐる わたしは

終りなき努力

朝は日の出との別れで混乱してゐる

夕焼けの目け宵の明星のために血を流してゐる

昼のカイスは夜のライラーを望む

明けの明星は永遠に光ろうとして苛まうてゐる

空に浮かぶ恒星は星々の隊列に言つてゐた

友よわたしは 動く楽しみを得たいと願つてゐる

① 普遍は現世的な愛であるが、私には神を求むる愛である。

② 現実を求めず、其の愛を持つて、単なる神の映しであることが想像できない。

③ 人間を作った神は灯して。

④ 神はわたしに無制限の美の考えをなせ持たせたか、即ち完全な美の獲得の願望をなせ心の中心に与えられたか。神を求めたためである。

⑤ 敗北も新しい人生のための資本。

⑥ 解説の筆が行動へ入る。セージを送つてゐる。守衛うすむての物かたは筆が愛は是づいて生きてゐると述べる。

⑦ 春間はいつたなうたら夜にひるかと夜の来るのを待たせむの意。カ

イスとは志人ライラーを求めて砂漠中を流浪する。またライラーは

は夜といふ意味からなる。

⑧ 友よわたしは 動く楽しみを得たいと願つてゐる。

⑨ 友よわたしは 動く楽しみを得たいと願つてゐる。

⑩ 友よわたしは 動く楽しみを得たいと願つてゐる。

⑪ 友よわたしは 動く楽しみを得たいと願つてゐる。

泉は川を望み 川は海を望み
海の波は満月を照らす

チーリッアやバラツハールに隠れてゐる 永遠の美は
言つてゐる 輝きを表わすために不夜である

人生の秘密を言せなむヒカルに聞け
① どんり物でも言える 終わりなき誓ひで

65 悲しみの声

わが人生は昔くさいラバーブのようである
その響はさよさよと歌で満ちてゐる

この宇宙は星々には沈黙の旋律が強いから
その一本ずつの弦には数百年の鼓動がある
その静けさこそこの世の天地異変をつかまひり
そしてその静けさには必死な大混戦の責任もな

あま残念 しが愛の願いは一度も満ちず

この楽器は一度も琴爪が掻き鳴らしをしなかつた

だがツルムの花園からそよ風が時おり吹き
その方から 天女の息の匂い 何時か時おり来る
わが生の弦は静かに響き出し

そして人生は捕らわぬ精神が解き放たれる

② 預言者一人で人々に道を示す
- 案内人として有名。
③ ヒズルの回答である。

65 解説に愛う悲しみや悶えは人間
本性の志さを示すものとして述べて
ゐる。この愛の悲しみや悶えはバ
ーレルの他の詩の中でも述べられて
ゐる。人間はいつでも何かしらの
悲しみにとらわれてふり、悲しみを
知らない者は、人生の真実を知
ることができない。

④ ムーサーが神の顕現を見た山、

夕人間

自然うんたのう、残酷さか

人間は秘密を求めざる者にさせん
だが秘密を人間の目から隠してしまつた
真実を明うかんとする興味で人間は路を著かた
だが人々の秘密は解けない

灼めも終わりを驚きである
鏡の家はほかに何かがあるか

川は小波をたまたま流れてゐる

川は海へ海へと向つてゐる

風は雲を飛ばし

その肩に雲をのせて行く

早大は軍令の酒に酔つてゐる

天の監獄の中で足は鎖をつけてゐるかのうら
早起きで破産な太陽は

世の間に起まよしのメッセーを待つてくる

西の山中に隠れて

夕焼けり酒の壺を飲んでゐる

あつゆるものが花の葉しみを得てゐる

あらゆるものが頭示の酒に酔つてゐる

人間は同情する者は誰をいぬ

ああ、人間の日は何と辛いかな

ああ、人間の日は何と辛いかな

夕(解説) 中宙に於けるすへての物が、
自らの個性を明うかたしよととし
てゐる。そしてその出現をそれぞ
れ以上の目的とする。だが人間は
即ち自らの真実と宇宙の真実、こ
れら両方を知らんことを望んでゐる。

夕(神のこと) 神は恵み深りものであ
り、残酷さといふ言葉が對てく
らうで神と言えず「自然」といふ
語をその代用してゐる。

夕(アッラー)を讀ませよの意。

68 美の現れ

美の現れ それにより心か不安になる
 若くはそれが想像力の勝元である
 それでこの消滅の世界が永遠となる
 それで若き時代が華やかで物語となる
 それがゆめならぬ教える 瞑想すること
 現実の世界の様から起れることを
 それで各人の弱点が遠く
 それで知力が影の奴隷となる
 ああどういふまかにここにあるのか
 神よ この世の指輪にどういふ宝石が
 付いているのかないや

69 夕暮れ

月の光は静かだ
 木々の枝々も静かだ
 谷間の深い手なれば静かだ
 ふたで緑をまじう者たうが静かだ
 あたりは気を受けない
 夜に抱かれ眠っている

68 解説

永遠の美すなわち神に對す
 吾詩人の愛の思わず出た表現と、
 それを見たいとする強い願望の表
 現が込められてゐる。

69 解説

ネケル日ケルハイソウマ
 流である。トイワの有名で都中ハ
 イナルヘルグはこの左側に位置す
 る。この詩はイクバルの詩集の
 序文を得るためトイワは行進、
 きーシヘン等から、一九〇七年
 八月、ハイナルヘルグ大学の図書
 館を使ったためにそこへ行つた時書
 かれたものである。

静けその度雨は深い

ネカレ河の流水もゆらい

岸々の隊雨も静か

隊雨には鈴の音もなし

山も荒蕪も川も静か

またかもし自然が瞑想にふけつていろかのような

心よ おまえも静かであれ

胸に悲しみを抱いて眠れ

加孤独

夜の孤独の中 けにか懸れいか
星々か おまえの仲間ではないか

こ水は静かな空り高み

眠っている大地 静かな世界?

この月 この芝野 この山

あたり一面すべてが花園りようだ

こ水はよま色り真珠

おまえり涙の星だ

心よ おまえはこり上はるをせむをか

心よ 自然はおまえの友達だ

(一九〇七年)

① ハイナルバルグを流れる川。イク
バルグはミシシッピ川より入し
はるく夢地にきて滞在する。

② 詩人の心は何かりせいで混乱して
いる。そこでこの言葉が出たので
あろう。

③ 「解説」イクバルグは深夜の祈りと
嘆願がなまであった。この詩げそ
の時の様子を書いたもの。

可愛メアセージ

脇腹に痛みを求める者よ 私にナイズ おまえはニアーズに花
 私心のソムナートのサズナグイよ おまえはアヤトズの化身となれ
 この空のまじ 完璧なシリーダの輝まとは関係がない
 すべての材料はあまへの胸の中にある おまえは灯台をふくれ
 人生の戦いの目的はあまへの三日月が満月になることである
 世界の昔かろうの義務である おまえも祈りのようにおれをせよ
 描んだ花だけで満足する花痴人になるな それがおまえの輝きが出るよう
 花園にたくさんの花があるなら おまえは精進してすべてを棄めるとなれ
 かつまの目だけ終わった 今は砂漠を放浪する時ではない
 世界の中で燃えていける燦爛のやうに空で燃えよ
 個人の存在とは仮である 民族の存在こそ真実である
 イスラーム共同体は身を替へよ 仮の魔法は火をかける人となれ
 イクバルよ インドでグルーカを作らねばアーカーのようになれ
 さあ 偶像より杖を別けてヒジャブの方に行け

(一九〇七年)

72 別離

独りになれる場所を探して
 この山の麓にまで来てしやい わたしは隠れている

凡人解説 この詩でイクバル

は初めてムスリムに預言者

への愛の教へを示した。イ

クバルはヒンドゥーとム

スリムの方が一纏りなつ

て一ツの両方を形成させて

いことを感じている。

おれが志せようとするナイズで

あるので私の心を動かすレ

っかりした志するニア

ーズになれ

ヒントゥー、教の聖地、そこ

の寺院の偶像をスルタン、

マフムドが壊す。

空中央アジアからインドまで

を征服したマフムドの

とハカ大カース・ロ・ニ・を

聖間を尊重し学者のフクトロ

ンにもなる。

スルタン・マフムドの存

名を破壊して誠実な者。

預言者イブラーヒームの父

親で偶像崇拜者。

ムスリムが義務は命派もあ

る止めてイスラームは没観

するこじ。

泉を流れる水の跡 切れ跡 切れの音に引かれてゐる
さながら草葉を愛えぬめたばかりの子供の祈りのようだ
夕焼けの赤い合の上には夕方の星々の行列ができてゐる
見る人の目に夕方のこの光景を美しせば花園である

別れの夕べの中より静けさか言ひ記になつた わたしの
誰かか思い出かわたしは愛を教わさせてくれたことの
わたしの不安な様子ばわたかも
一人づきりやゝいる幼な頃のようである

暗闇の夜が愛を教へ
そが聲をほかり人の声と思ふようだ

このよゝはわたしはわたしに元氣つける言葉をおけてゐる
別れの夜 あたかもわたしは自分で自分を騙すようにして

73 アドル・カーディルに宛てて

立て 闇が深き起つてゐるから 車の地平線の上に
空を鋭くあかせる 歌で明るくしてしまふ
わが能力とは空の黒い種子よりよゝな不平だけ
その騒音で空を引つ返してしまふ
愛の人々に見せてやれ 愛の磨きの幼めはいつか
今日の巻石を明日の鏡にしてしまふ

72

「ハ解説」ヨーロッパに滞在し、自国
から歸れての心を癒すを表明している。

72 ハ解説「イクハールはこの詩を一九

八年、友人でウルトラ・リテラチュア
人で当時ロマクザン山の編集長で
あつたアドル・カーディル宛て
に書いた、この詩は重要著作イク
ハールがムスクムに於いて自分の
目的、即ちイスラームの復興と
促進を明かしたことであり、従
つてこの以後幾多の30年間の人生

なくなつてしまつたゴーストの輝きを人必に見せてやろう
ズライハ一の血で熱い氣持を高ぶらせてやろう
その花園に成長の任才を教えて

あるかなまかの露の滴を川にしてしまふ

その命の衣を中西の偶像寺院から取り上げてしまふ

すべからざるをサーディーヤサルマの箱の心酔者にしてしまふ

見よ、ヤスリブではライターの駱駝は役立たなくなつてしまふ

カイスに新しい憧れを知らせてやろう

酒は古くてよい、だが熱い方がいい

コツアヤグラス、盃の心臓を溶かしてしまふ

西洋の冷たさの中でわれわれを熱くした傷

胸を切り裂いて、その水を人々に見せてしまふ

曠野のように生さよう、世界の掌で

自から燃えよう、他の人の目を明かせてしまふ

心の中を過ぐるほんのこゝろ曠野はその舌で表す

燃えることは曠野が考へを隠し持つことではない

(一九〇八年十月) 詩の引用

ワスイクローリアツシシリ島

血の流を流す目よ、泣け、悲し、勿り
あれば、ヒジャーラス地方の文化の靈廟のように見える

はそれを証明するたぬ量やこれ
ることになる。一九〇八年に
この決定は詩「遠き人ヒムル
ヤフイスラームの私の名」にも示
されてくる。

① 邪視を逞い私うため、この燈をた

く。② 若石は何を映らないか磨りて過

去、現在、来未の映る鏡にすぎ。

③ 預言者ユースフのこゝろ、先男で有

名、ズライハ一が彼に忠告した。

④ 先人でユースフを逞いかけた。

⑤ イスラーム文化の伝統を持たない

地域り急。

⑥ アラブの先人たちのそれその名。

⑦ マデデーナの旧名。

⑧ カイスを狂おせた美談。

⑨ 最後の二行、打句はミルデー、アブ

ドゥル、カール、デーラのトルシヤ語の

詩の引用。

ワハ解説) ニリ詩をイクハールは三年
滞遊したヨロロバ留學の帰りに
書いた。そのころの滞在はイクハ
ルにイスラームに向かぬせる思想
的変化を起こさせた。スイクロー

ここでこれら砂漠に住む人達の乱れがわかってあつた
海はそれら人々の船のかつての遊樂場であつた

それら人々により諸王の宮殿に地震があつた

それら人々の剣の光は新しい世界への一つのメッセージであつた

古い時代がそれら人々の剣で切れぬ水にされた

死んだ世界がそれら人々の口立ての音で生き返つた

そして人々は迷宮の鏡より解き放たれた

それら人々の魂がまた入るべき年心に地へい

だかあの祈りは今もはもう永久に沈黙をまなぶか

シンダー島よ。あまのせいで海は誇りを持ってゐる

さすれば雲内人のまはこり此の海原にまゝてゐる

海は頼にういた黒子となつて飢うた水

私海する者があまの輝まで安心があるように

旅人の目にあまの光が常に震れしくあれ

流はかまの岸辺の上で常に踊る

あまの輝は時にこころを旅の文の端りかどつた

その光を見る者を焼き尽してしまふ程のまじさだつた

シンダー島の夜霧はバググートに嘆いた

グラーグは血の涙をシンダー島に流した

大がクラナガを壊滅させる

イアンバトルへの感さゆまつた心は嘆いた

アトはアラビア海でシンダー島の
こと。アラブはこの島をハ七八年
に征服し一〇七二年まで統治し、
オスマンヤ・アリフ時代に重なる
地獄であつた。ヨーロッパの歴史
家はアラブがこの島を統治の期、
文化や文明として學術や工業でこ
の島を賑わせたと思つてゐる。イ
クハールはシンダー島をヒジャ
ズの文明の港と見えて、アラブ
の統治時代を思んでゐる。

イクハールはもつと衰弱を言
てゐるが「グラーグ」はつゞこれに
二番目のものがある。

聖地メソカヤメナイナがある地域。

女神の許しのもとにイナヘマリ
ヤの王キリストは死者をよみが
えらす。日クルアーンに第五の章の節

参照。

マルシア語詩人サレデーロのこゝ
に「聖地メソカヤ」を言ふ。

(一七三三—一七九一年)

グラーグハ一八三三—一八五五年)

あまえへの道は悲運のイクパールが告てよめた
運命はあまえの様子をよむ知るその心を選んだ

あまえの運命にほんな物語が隠されてるのや

あまえの岸辺の静けさの中に話す力はあまのや

あまえの苦しみをわたしに話してくれ わたしも苦しむ

あまえが目的の地とした わたしはその隊内を見張る人だ

昔の絵の色をつけて わたしに見せてくれ

昔の話をして わたしを聞かせてくれ

わたしはあまえからの贈物をインドへ持っていく

ここで独りて泣く 向うでみんなを泣かせてやる

(一九〇八年七月)

ガザル

ガザル

人生とは人間の息の一息以外なものはない
息とは風の波だ 漂う以外なものはない

① 一八五七年インド大反乱での
デリーの衰退を評し、その名を
② デリーの旧名シャージャハトナー
パードの縮小を述べた詩
③ スハイン南部の地。一八三八年以
後アンダマン最後のイスラム王
の首都として築かれた。一四九二
年王朝が滅びるとスハインでのイ
スラム支配は終わった。
④ アラビアの詩人。アラブの環境
に際して哀詩を書いた。

花は人生を笑いと云つていた。だが

職場は言つた。悲しみの不平等外にもない

人生の秘密は秘密のまま。誰をも分からぬいと

きれが解けても。分かつた者以外。何をない。

イクバルル。カアバの参詣者に聞け

カアバの土産はザムザムの聖水以外に。なれぬか

カアバ

神よ。ご来光りような理性に多少。狂気を教へよ。

衣服の塵水を。縫う願望があるのや。おたしは衣服を。気がない。おわたしは。志に狂、こいるので。

わたしは。愛の情熱を得ると。天地創造の朝。天使は言つた。おわたしは。作らぬで。

おまえは。羞の灯明りようだ。おまえは。誰を。仲間はいない。お悪に狂い。灯明りように。心をいつる。

ここは。じこで。得らぬるか。友が。ハよ。この世は。愛を。知る。ない。おわたしは。わたし。望んで。いる。世は。父の下に。ない。ものを。

ア。ア。ア。の。創造者。は。それを。じこ。とも。異な。う。て。作。つ。た。おわたしは。ア。ア。ア。の。友。か。ア。ア。ア。の。友。か。ア。ア。ア。の。友。か。

おわたしは。ア。ア。ア。の。友。か。ア。ア。ア。の。友。か。ア。ア。ア。の。友。か。ア。ア。ア。の。友。か。ア。ア。ア。の。友。か。

おわたしは。ア。ア。ア。の。友。か。ア。ア。ア。の。友。か。ア。ア。ア。の。友。か。ア。ア。ア。の。友。か。ア。ア。ア。の。友。か。

おわたしは。ア。ア。ア。の。友。か。ア。ア。ア。の。友。か。ア。ア。ア。の。友。か。ア。ア。ア。の。友。か。ア。ア。ア。の。友。か。

1. 職場は。燃える。と。溶けて。それ。が。流。り。こ。う。に。見。える。や。で。

2. 計画。は。ザムザム。の。聖水。を。参詣。の。土産。に。持。つ。て。ま。て。く。外。に。人。を。皮。肉。つ。て。い。る。神。に。お。た。し。の。恐。れ。や。心。の。清。浄。さ。を。持。つ。て。く。る。心。さ。と。い。う。

3. 計画。は。ザムザム。の。聖水。を。参詣。の。土産。に。持。つ。て。ま。て。く。外。に。人。を。皮。肉。つ。て。い。る。神。に。お。た。し。の。恐。れ。や。心。の。清。浄。さ。を。持。つ。て。く。る。心。さ。と。い。う。

4. 計画。は。ザムザム。の。聖水。を。参詣。の。土産。に。持。つ。て。ま。て。く。外。に。人。を。皮。肉。つ。て。い。る。神。に。お。た。し。の。恐。れ。や。心。の。清。浄。さ。を。持。つ。て。く。る。心。さ。と。い。う。

5. 計画。は。ザムザム。の。聖水。を。参詣。の。土産。に。持。つ。て。ま。て。く。外。に。人。を。皮。肉。つ。て。い。る。神。に。お。た。し。の。恐。れ。や。心。の。清。浄。さ。を。持。つ。て。く。る。心。さ。と。い。う。

6. 計画。は。ザムザム。の。聖水。を。参詣。の。土産。に。持。つ。て。ま。て。く。外。に。人。を。皮。肉。つ。て。い。る。神。に。お。た。し。の。恐。れ。や。心。の。清。浄。さ。を。持。つ。て。く。る。心。さ。と。い。う。

7. 計画。は。ザムザム。の。聖水。を。参詣。の。土産。に。持。つ。て。ま。て。く。外。に。人。を。皮。肉。つ。て。い。る。神。に。お。た。し。の。恐。れ。や。心。の。清。浄。さ。を。持。つ。て。く。る。心。さ。と。い。う。

8. 計画。は。ザムザム。の。聖水。を。参詣。の。土産。に。持。つ。て。ま。て。く。外。に。人。を。皮。肉。つ。て。い。る。神。に。お。た。し。の。恐。れ。や。心。の。清。浄。さ。を。持。つ。て。く。る。心。さ。と。い。う。

9. 計画。は。ザムザム。の。聖水。を。参詣。の。土産。に。持。つ。て。ま。て。く。外。に。人。を。皮。肉。つ。て。い。る。神。に。お。た。し。の。恐。れ。や。心。の。清。浄。さ。を。持。つ。て。く。る。心。さ。と。い。う。

10. 計画。は。ザムザム。の。聖水。を。参詣。の。土産。に。持。つ。て。ま。て。く。外。に。人。を。皮。肉。つ。て。い。る。神。に。お。た。し。の。恐。れ。や。心。の。清。浄。さ。を。持。つ。て。く。る。心。さ。と。い。う。

11. 計画。は。ザムザム。の。聖水。を。参詣。の。土産。に。持。つ。て。ま。て。く。外。に。人。を。皮。肉。つ。て。い。る。神。に。お。た。し。の。恐。れ。や。心。の。清。浄。さ。を。持。つ。て。く。る。心。さ。と。い。う。

12. 計画。は。ザムザム。の。聖水。を。参詣。の。土産。に。持。つ。て。ま。て。く。外。に。人。を。皮。肉。つ。て。い。る。神。に。お。た。し。の。恐。れ。や。心。の。清。浄。さ。を。持。つ。て。く。る。心。さ。と。い。う。

13. 計画。は。ザムザム。の。聖水。を。参詣。の。土産。に。持。つ。て。ま。て。く。外。に。人。を。皮。肉。つ。て。い。る。神。に。お。た。し。の。恐。れ。や。心。の。清。浄。さ。を。持。つ。て。く。る。心。さ。と。い。う。

14. 計画。は。ザムザム。の。聖水。を。参詣。の。土産。に。持。つ。て。ま。て。く。外。に。人。を。皮。肉。つ。て。い。る。神。に。お。た。し。の。恐。れ。や。心。の。清。浄。さ。を。持。つ。て。く。る。心。さ。と。い。う。

世の人は分かるだろう。わか心から言葉の審判の日が来れば、^{シマフシヤル}3月21日を生きている人も一度は死
今のは沈黙でなく、あたかも願望のきき聲が暮のようであることが
わが輝きは該でなく、というし川の波がきく

真珠は叫んだ、目の中にいることはわたしにとって誇りごと

その性根に他を愛け入れぬ所かない者は教えず導けない
ちようど川岸にある糸杉の影が水に映つても緑にならないうい

じんな心もえの中は願望が眠つてないようなものは見えない
神よあなただけ世界はいかばるか、われらのは博物館のようだ
死んで分かった、わか人生は完全な絶望の幻想であつた

カーキ色の体し思つていたもの、それか願望の道り境だつた
もし何かか隠れたいなら、どうしてわたしは探すか

目に見えることを望み、心は探すのに狂つてゐる

花園の花びら人に蕾は言つた、人間はじつしてこころを酔いのか
ふまへの目にはとて笑ひである、わか土瓶の壊れるうけは
人生の花園のうつつにどり愛の輝きが生れる

ふまへの花の真実と考えてゐるもの、それこそ香りの混つたもの
おまへの書き物すべてがまぐ言葉が問はず、ている

わたしの中に良さをみるならその後悔批評する力が欠けているせいだ、
感謝は尊敬を養うため、ふまへの恵みは残照さを通り越して、
少しの心を与えてくれ、それも願望を騙されたままのものがだ

おまへの書き物すべてがまぐ言葉が問はず、ている
おまへの恵みは残照さを通り越して、
少しの心を与えてくれ、それも願望を騙されたままのものがだ

存在の唯一性はつゞつとつゞつと明うか
われしは確信する 花の血管から人間も血の潮が流れるのを
模倣の時代は終つた たゞと云はれ止めぬばならぬ
直登が明うかになつて現れると 誰か話す必要があるか
イクパールよ あたしが家から遠く離れていようと悲しむないでくれ
直登のようい 故園から離れていふことは ねがかりの絶頂である

(一九〇六年四月)

直登が海から離れ、美女の胸
に飾りとなつてあるように

ザゼル4

あなただけ輝きは雪の中は だつた中に 火花の中に表れている 女神の。
あなただけの光は 月の中に 太陽の中に 星の中に表れている

空の赤けたる 地の低くにも あなたがいる

海は波の流れるにも 岸辺の波みにも あなたの跡れがある

イスラーム法はなぜ迷心方の優劣を比較するのかわたしは自分の心の意味を比較の中に聴いている

人間の中で目覚めていゝもの それは深い眠りにある

木や 花や 動物や 石や 星の中で

愛の涙の滴り熱さかわたしを燃やさせた

泣き小さな花の中い 怒りの火があった

天国でうねる願望はわたしたちがいない

わたしは損することには利益を見る人だ

人間も他の生き物も生きていること

とは同じ。だが他の物には人間
にある知・情・意はない。

正現せでのま行は来せて報われらる
の考えがある。

世をつまを知らぬいこもこそ水銀の人をた
どんな心の揺れか、神は隠れていろのか、水銀の中は

おまえには見えぬわいの言葉に聞き、イクバールよ、わたしは黙ら
再びお願いするわがじこにあるか、岩水の中では

(一九〇六年十二月) ⑤ 神の頭現を要求したムシオノク
言葉に打ちする神の返答の言葉

がずル

世の空よ、おまえの脈わいは魅力的だった

おまえの眺めにも、多少悲しみがあった

愛の小道に歩いて安心を得た、神の愛とは

長い間、理性の荒野でさまよっていたが

酒よ、おまえはわたしとバールの習いが好きなりか

葡萄の房から出たら、酒瓶の中に入りました

美の宿に知識は及びげなかった

世の知恵者の中さ、知恵者で居り者さ多かったです

イクバールよ、わたしはヨーロッパで探したが無駄だった

インドの美人に会ったところのまじりを

よじこわ世で起しかだけ、喜かだけし

わいのけ打く、両者ともにある、

⑥ 知行や理性だけでは心は安心が得
られない、

⑦ 美には知識を負かす力があること
を知らずい、

⑧ 文化の遠いよりインドにあるもの
が必ずしもヨーロッパにあるとは
限らない、

杯の中酒の輝き回りのように杯の回りを回る
その仕方ではこの祈りを、わたしは朝晩する

神に話をする者よ、それはおまえだけの特権でない
木々も、石も、神と話をする

蠟燭よ、何か新しい世界を探せ、この世では
燃えつぎない熱の熱念を耐えおけなう

はまき歌うたいの者よ、この花園では沈黙がよい
上品な歌い方は、花に補えら水でしよう

酒を飲むことで、その目的が快楽を得ることである者よ
はみ清浄なそのを、不浄なものにして

あなたと一緒に暮らしてどうしてうまくいくだろう
神よ、檻を差していても、若者は魔力があつた
ひと目で、若者を虐にしてしまふ程の

わたしはその人の宴に歌える
宴を夜まで延ばして、世の中で名を得ている人の

マズニ一の回りの大地よ、結んだらなつてあれ
船の上からあなたに挨拶する

礼拝をしつゝ若者が時たま礼拝をする、イクバルよ
わたしを傳使殿から呼んでわたしをイマームにする

わたしを傳使殿から呼んでわたしをイマームにする

(一九〇八年中頃)

① 聖なるものと考へて

② 聖宮の愛の、即ち神への愛の酒を
飲むこと、おまえの毎日の仕事

③ 預言者ムサーイを指す

④ イギリヌ植民地のイレドには政治
的自由があつたか神への愛の表現も
思ひのたまに出来なかつた

⑤ 酒には神の愛へのための酒と快楽
を得るための二種類があり、後者の
のは不浄である

⑥ イタリヤの愛国主義者エースプ
マズニ(一八一八-五二一八七二年)
を指す、即ちここではイタリヤ
をヨーロッパ旅行中の船の上より
⑦ 異教徒の傳使寺院

⑧ イスラーム寺院での礼拝の先導者

カザルク（一九〇七年三月）

パールを取る時が来た、今んたは志人を見るだろ、沈黙が秘密を隠すものであったが今その秘密が噴うかになるだろ

その時代はもう過ぎてしまった、酌人は酒飲みがこつをりと飲んでいた時代は、

全世界が酒場となるであらう、誰でもが酒飲みとなるであらう、

かつて砂漠を放浪していた者が、再びその住み処に来て住むだろ、

はだしの足はそのまゝ、だが新しい朝の荒野となるだろ、

ヒジャーズ、沈黙がとうとう待っている耳にささやいた

砂漠の住人との間で、水と水た契約が再強化されるだろ、

砂漠から出てローマ帝國を壊滅させた、

わたしは天使からこのことを聞いたが、その獅子がまた自覚めるだろ、

酌人が酒の席でおたしう話をすると、酒場のまは聞いてさ、た、あれはすげすげをさうねで下の奴だ

西洋の国の住人よ、神の住み処は店ではない、

あなたか純粋に考えているもの、やがて価値のない物になるだろ、

あなたたりの文化は、自分の剣で自殺をすうだろ、

弱いたに出来ていう事は、決して堅固にはなれないだろ、

が弱いたらう隊列が花びらを船にするだろ、

数千の波の力がかかろうと、水は川を遡ってしりぞくだろ、

花園にあるクローリアは一つずつの蕾に自分の傷を見せるだろ、

そのようにすれば志した心として教えるべきことを知っているのだ、

ワ（解説）この詩は一九〇七年、留學中に書かれた詩で、

在米後のものである。留學中に晩年まで続く思想の變化を

化が完了した最初の作として、

これ以後イクパールは単なる詩人でなく、

イストラーム共同

体の思想を伝える詩人となる。

この詩は形式的にみても、

ふるが長こそ主題の新しい要素

リナスム（長詩）である。

イストラーム共同体の目標。

イギリスを恐れて、

千三百年前、聖地メッカ、

ファイナでイストラームが起ころ

槍の時代がアフガ十九世紀

紀元前の時代となり、

ローマ皇帝ヤエラウの王を、

わが目よ、ふまへは一つであつたものを、数平にしてわがらに見せた
ふつ三の鼓符がそりよう付ら、また何を信じたらいいだろう

わがしがある日、さじ鳩は、ここで自由なもので泥れ足を取られて
いぢしやうと

神を志する者は数千人といふ、そして其の罪をさよと、ていら
だかわたりは、神の僕たちを愛する人、その人の僕となるだろう

心よ、死の害の法則である、まはたまさ之も罪である、こしが
わがらうの誇りは多きだろうか、ここで不安になるなら

わたしは夜の時思ひ中、引さいて歩いていくだろう、ばうばうになつた隊附を
わが溜め息はど花とだろう、わが息は空になるだろう

ふまへの人生の目的が、見せびらかし、外何をたいたら

イクハールの目的地は尋ねるな、今その様子こけ
どこ不道に座わり、待つ苦しみであらう、志しい人を

ふまへは一息で、この世から、火花のように消えぬはだらだいだらう

(一九〇七年三月)

① チューリップの花の黒い花志
を傷としている。

② 偽りの指導者は人々に押し
て自分だけ正統に忠告を僕であ
るまふふで。

③ 神は一つである。すべてのも
りの中に同じ神がいる筈なの
で区別すべきでない。

④ 政府が自由を各々にせよとせよ
たとりは自由でなく、主権であ
る。

⑤ 借入る奉仕で困難に会つて
まひたい目に会つては耐える
ことこそ、名譽であり誇りであ
らう。

⑥ 短期間の世にあつて、やが
て死ぬだけなら。

第三期 八一九〇八一九二四年

テリートの地は熱しき心を持つ人々を籠縛せしめる。その土地の一粒もつぶらう土に祖先の血が滴りてゐる。

この荒廢した花園の地がどうして清い所であるか。この地はイスラームの偉大さの基である。

この大地は偉大なるイスラームの王たちが眠つてゐる。世界の秩序の中心が彼らの統治にある。

今も雲の熱い思い出が心をゆるする。壯麗な建物は静かにまゝに、思い出は今も残る。

シッハ・ナーバトドがイスラーム教徒の聖地であるとはいへぬ。その壮大さには備するのほバグダッドでもある。

この花園にはその誇りとなる。ヒジャヤ・ズウ文化と言われる砂漠のチョーリクアがあつた。

この在み処の地はとうして、イラムの園と同じでないか。その地は遺言者の後継者たちの足跡を見てきた。

その帯は花園の理由とならぬ花園がこれである。ゼーマ人も歴史をたのむいた人々の墓処がこれである。

ゴルトバの地もイスラーム教徒の目の輝きだ。西洋の暗黒の中でシナイ山の噴霧のように輝いてゐた。

ムスリム世界の雲の輝き消えるほど混雑にたつた。だがやがて現代文明のランプが輝きだした。

① 解説 イクバルはこの詩で世界の五つのイスラーム都市テリ、バグダッド、ゴルトバ、イスタンブール、メダイナの過玉にふける。

② 衰退してしまつたイスラーム教徒を覚醒させ、その若者たちの決意と行動を盛り上げようとするために、その祖先の手三百年にわたる業績をホレバ、それを思いださせている。

③ 12世紀以降ムスリムの朝として発展する。一三〇六年より一五二六年まで、デリー諸王朝といわれる政權王朝、ハルジャー朝、トラグルク朝、セイイド朝、ローデヤ朝があり、その後一五二六年より一八五八年までムガル朝があつた。

④ デリーの古い呼び名。

⑤ 18世紀にはムグナ三世紀元はモンゴル軍の侵入があるまでムスリムにはなるアッバース朝が崩壊した。

⑥ 聖地メッカ、メデナを指す。

⑦ イスラーム英同僚。

⑧ 天國に似せて作つた地上の楽園。

⑨ アッバース朝時代、東ローマ帝国(ビザンツ帝国)を攻撃しカリフはそ

神聖なるこの大地はその文明の墓である

① だがそれはヨーロッパの花園の蔓草の蔓は青々としている

② アスタシクニエ十の地すなわちローマ皇帝たちの都市は

③ ハデイ、ウシマの偉大なその永遠なる旗もた

④ この地を聖地のよう神聖だ

⑤ ニシはシヤローローラークの子孫の廟だ

⑥ その地を空気が花の香りのように純潔だ

⑦ アエロブ・アンテアークの墓から声がする

⑧ ムスリムよ この町はイスラーム共同体の心だ

⑨ この町は何百年その法血の賜物だ

⑩ ムスタファアの眠る地よ おまえの地とは

⑪ カアバにもおまえの眺めは大逸れ以上のものだ

⑫ おまえは宇宙という指輪の中で空をうようう輝いている

⑬ おまえの地はわくらムスリムの偉大なその誕生の地だ

⑭ おまえのうちでこの偉大ななる王は安寧を得た

⑮ その荒野の中で世界の所族は平安を得た

⑯ 世界の帝国の支配者とは、この朝敵人は

⑰ ローマ皇帝の後継者も然り、ジャムノードモの座も得た

⑱ もしイスラーム世界が場所には制限があるなら

⑲ その基礎の地はイスラームでもイランでもシリアの地でもない

⑳ やスリブよ おまえこそイスラーム教徒たちの国 おまえこそその家だ

⑳ 西暦七二九年の旧名、

の威信を誇りしとした。

① イバリア半島新邦に在りて三郡あり

② 後ウマイヤ朝の首都として十世紀に繁栄を誇りし。

③ ヨーロッパは大明の灯をコルドバから得て現存大明と言われし文化をせしめた。

④ 小北コノイスタシクニエの地をこのムハンマド。

⑤ カアバのこと。

⑥ 預言者ムハンマドの通称、

⑦ 預言者ムハンマドの教友の一人、

⑧ この地は埋葬されし。

⑨ 一四五三年、オスマン帝国は先代皇帝に對りてサシク帝國を滅ぼし、

⑩ 預言者ムハンマドの通稱、

⑪ 預言者ムハンマドが眠る地を指し、

⑫ 預言者ムハンマドが眠る地を指し、

⑬ 預言者ムハンマドが眠る地を指し、

⑭ 預言者ムハンマドが眠る地を指し、

⑮ 預言者ムハンマドが眠る地を指し、

⑯ 預言者ムハンマドが眠る地を指し、

⑰ 預言者ムハンマドが眠る地を指し、

⑱ 預言者ムハンマドが眠る地を指し、

⑲ 預言者ムハンマドが眠る地を指し、

⑳ 預言者ムハンマドが眠る地を指し、

おまえがこの世にある限り わがうも残り
おまえが朝なら ぬれらばこゝ花園の雲の真珠だ

(一九〇九年四月)

夕星

月が輝いたが それとも朝に付るのか恐ろしいのか おまえは
美の契わりが知らせを付たのか おまえは
光の宿を奪われるのが心配なのか おまえは
火花のうしろに消えさるの不安がかりなのか おまえは
天はおまえの雲を大地から遠く離れた
月のうしろに黄金の衣をおまえに手とさせた

短かい命が輝いたとは 何をされることか
一晩中 おまえは震えて過している

輝いていく旅人よ だかこの任み処は不思議な所だ

一つの純頂があるし 他の葉脈がある

一つの太陽の誕生は 数十万の星の死に連なる

死の眠りは 人生り酒の酔いである

蕾との別れに 花の咲き出す秘密がある

古いものは古いヒトさか 今もヒトさかの存在をえず鏡付のか

自然の任事場で 平穏無事はありえない
変化はこの世で証明済みである

(一九〇九年七月)

〇六 解説) この世では静止しているこ

とは出来ず常に変化が起きている。

これは自然のことであり、誰をも

の变化から逃れることは出来ない。

それ故、変化を恐れるやまではない

とイフバールは言う。ヨクンアービ

でその(1)物ごとは永遠ではなく、神に

よって作られた物か変化、母をよめ

る、(2)最後の審判の日すべてが壊さ

れるとある。ヨクンアービ(4)第10章

第9節、第10節、第11章第10節を照

77 二つの星

二つの星が出会った時
一つは星が他の星に言い始めた

この出会いかいつまでもなうなるといいか
最後まで一緒にいけなうなるといいか

えが少しだけ親切にしてくれなう

わがら両者は一緒に居て輝やけるのは

しかし通り合いのこの願いは

完全には解れりませーじだった

星々の動きは決まっている

それそれの道は決まっている

会いは続けることは夢の夢

別離こそこの世の決まり

79 王家の墓

空は雲の古い衣を身に付けている

月の顔の鏡はどこかしら曇っている

月光はこの静かな肌めの中で薄白く見える

夜明けの光はまた夜り胸の中を眺まっている

(一九〇九年八月)

78 (解説) この詩の意味を最後の句

で述べている。この世の法則とは
何か物が生きていようと、また命

かなくあろうと他の物と永遠に一
緒であることはない。この点をイ

クバールは星々の互いの接近で明
らかにしている。

79 (解説) 一九一〇年六月この詩は田

マクサシに掲載されたがその序が
つぎのようについでいた。『ハイ

ダラーバード・ダカンに短期滞在
中、友人のナザル・アラー・ハ

ダルが私をある庭すばらしい軒に
連れ去ってくれた。そこにスル

本々の沈黙はなんといふ怒ろいさか
自然の筆舌のやわらかい音だが沈黙は

この世の一ツヅツのそのの中は甘痛に満ちている
そして沈黙が酔った屠り上は冷たい溜め息を吐いている

ああアラムギールの練兵場よ、城塞よ
その双肩に数百年の重荷をまわっている

かつてここは入り世の賑いで満ちたが今は静寂の中
この沈黙、この沈黙はその騒むの夢場だ

こゝろればすの作人たちを偲んで
山の頂上は番人のまじり立つている

空の屋根の上にある雲の小窓から
空の緑の星 昂は世界を見る者となっている

この広い世の景物はそれと違って泥んこ
人間の失敗の話をそれはよく覚えて

古来よりこの旅人は目的地向いながら
空からせめ殺し其命を見ている

守空の星のため 休むことはできぬ
しかし死者たちの冥福を祈るの一瞬止まらなければならぬ

大地は地の果てまで華やかな色の花である
大地は数多くなり血を冷めた文明の墓地である

この悲しみに満ちた場所が諸君の墓だ
人の志を解する目は、こゝとて血涙の鏡をぬえ

人の志を解する目は、こゝとて血涙の鏡をぬえ

ターレ王期ウクトラフ・シャーヒー

が斬っていた、夜の静けさ、愛
のある空、雲間から何か音が聞こ
えてくるような月の光は慈悲に満
ちた光景と稱して忘れぬことの持
たす所い気持を予して、つぎの持
たす所い気持を予して、つぎの持

たす所い気持を予して、つぎの持
たす所い気持を予して、つぎの持
たす所い気持を予して、つぎの持

確かに墓であるか。この地はけ空の高さがあつた
だが残念。とれは最悪した所族の、一つの跡形である

墓の跡を尋ねて見ると、
腫れの動きにも目は心しなげればなうない

絶望の様子はその鏡の中で

人里の喧騒から遠く離れ、静かに眺む

失慢で遠く眺望にもかき苦しんだ人里が、
これと太陽の輝きが墓地の間に暮らしてある

それらより若く戸口で天が絶望をしていたが
これがこれら王たちの偉大さの最後か

これら諸王の統治の任方を最悪な形に示していたが
この世にいて中国の皇帝の威厳をローマ皇帝の偉大さも
死である敵の攻撃を遠ざけることか、出来なかつた

諸王が生流にわたる畑り収穫かこんな墓地であるとは
偉大なる者の道の最後り行く末かこんな墓地であるとは

敵軍の害の賑わいか何が、軍兵の調へか何か
この世の苦痛を延ばし嘆いた声か何か

戦場での剣のぶつつかつた音か何か
血潮を熱くした、神は偉大なりこの母を何か

今ばどんな声でも眠る人を起させない
混戦の最中、七くなつてしまつた者の命はもう戻らばい

た。しかし一六八七年ムサル高田
皇帝オーランゲセーア率によつて
滅ぼされた。

多まばうれぬ程。

思ひ切りの各動作のはじめに必ず思ん
う小る。ムスリムはこの言葉を持
念了ることによつて、アッラーの
創造力や支配力および無窮な自己
の存在を認識する。しかしこの言
葉は信仰行動だけでなく、困難に
会った時なれば口から出して助け
を求め、互いに励まし合う言葉と
して使われる。

④人間の子を表わす。

人間の精神は土塊の中でも丘丘には耐えうる
息が線の狭い道を通ると、その息は冬兵にひる
人の一生とは甘い歌を歌う小鳥のようだ
小枝に留まり暫くして囁き飛んだ。いつか
ああ残念、この世の花園に平て去っていつてしまった
人生という枝から音と聞ま、咲いて萎んでしまった

王であれを食であれ夢の正夢は死

この残像の限りを尽くす生迫も公平さう絵
人生の連続はそれの岸が見えない海である
暮とけ、泣かない海の波である

鏡望ルもリフかれてゐる者よ、血の涙を流せ
この人生ははかない
それは火花の笑ひかじり、それは燃えるわり

月とはこのせり絵描きの赤蓮であるが
水銀色り衣服を着て気取つながら歩いている
だが早うかいと空の恐ろしい程の広さの中で
夜明けにすこし、その孤独の穢れを見てみよ

月であつたむか一つの小さな雲りかけらとなつて、
その最後は涙の一滴が萎ちれば消えてしまふ
諸民様の生活もこのようになたしかざである

それらの春は過ぎ去つてしまつた色とりどりの絵だ
この有言な家の中に天のような高さを持つ民権ごと
存在し絶けることは出来ない、永遠に時代の肩に乗つて

⑤死は消滅でなく場所と情念の变化
と考へられる。そして誰も免れら
れない。クルアーン第3章第140節、
第3章第141節参照。

世の人はとれら高族の崩壊には懼れてゐる
世の人ばこれら眺めを無闇心に見てゐる
どんなものでも同じ夢のまゝ止まらぬ
時代の危性の搖盪は 新奇好みである

新しい時代の指輪の寶石には常に新しい名
この世の母は新しい民族の子供を宿す

この道行くまに数々の隊商は知つてゐる

コーエ・マールの目はなんとも多くの王を見てまはるか

エジプトのバビロンも消え 今も影をえそない

この世のまま物の中れそめらう話さえもない
イラシヤの偉大なる太陽も 死の夕べがつかまへん

ギリシヤ、ヤローマの偉大さも 時代が壊滅させた

あゝイスラーム教徒もこの世かこうこゝろに消えてしまつた
空から春の雲か起こり 雨は降り 消えてしまつたように

花びらの筋は朝の涙で真珠の糸にたつた
太陽の光線が雲の中に混じりてしまつた

川面は光線れり揺り籠である

川岸で太陽が眺めはげしんと息を吐いてゐる

糸杉はその花に忙しく 小川は鏡となつてゐる
花の蕾めのために 春のそよ風は鏡を打つてゐる

郭公は庭の草で歌に夢中

葉っぱの家で人目から隠れて

⑤ムガル帝国第五代皇帝シャール・ジ

ハーン(在位一六二八も五八年)

の王冠に用いたダイヤモンド

の名称。この釘はコーエ・ムー

ルを自分の王冠に使つた多くの王

を表わす。これら王は十六七

五六年、インドに西から侵入し

てきたナール・デイル・シヤールを

奪取するまでの皇帝である。ナ

ール・デイル・シヤールも一時保持して

いたが十九世紀の初めにイギリス

に奪われてしまつた。

⑥エジプトは紀元前三千年位までそ

の歴史をたどれるがネウエにベル

シア、ギリシヤ、ローマ、ムスリ

ムを含むものがその栄華を輝か

た。

建鶯鳥は花園のよい声の歌い手

そのせいで花園の空気が生ま生まとなるように

こゝれは愛の混乱した絵

自然の秩序のタツケはだんじふもしろいか

庭園に木々が静かに並ぶ

山の谷から争闘いの子供たちの喚声があがる

この古い世界は人の集まりで活気がある

死の中にも人生の熱回が隠されてゐる

秋に花びらが萎らるゝあなかも

眠つてゐる子供の身かう色つまのあもぢやが萎らるゝように

この真心は溶れた所に染しみが無数にあるとはいへ

わが心は遠きよ、た日の思い出さなくことほなく

わが民族はゆれらり諸王を忘れてはいない

これより巧み果てた戸や壁は涙をさそぐ

わが濡れた目はたえず涙を見てゐる

われらは世に涙を流す目の真珠を与えろ

われらは過すまゝた台風の最後の雲だ

今もこの雲に抱かれて数千の真珠がある

この静かな胸の中には今も雷光が残つてゐる

これは砂漠の土を花の谷に爰えろことか出まら

これは眠りから農夫の願望を自覚めよすことか出まら

⑤ 現在のイラクのテイグリス、ユー

フラテス川にわたるで位置した、

その歴史は紀元前三三〇〇年位

でたどれるが、法律や統治機構で

有名。また天文学、歴史、音楽で

も人々が高い才能を示した。

⑥ 死は新しい生の始まりとの考え

⑦ 神は99の特性を持つが水が二つ

大別できるという、一は神の威

厳や尊敬をよびしめり、もう一つ

が神の美である、イスラームの神

の時期はイスラーム世界を通じて

科学や技術や芸術のよう科学的

両方の輝やかましい光の現れが終つたとして
レかし今も方お美の輝きの現れは残つてゐる

(一九一〇年六月)

停んたを不しんか、精神前、内的
何ものからなるものか分かつた
ものか分、現れられては、その
現れれれこれからある。

80 朝の到来

地平線から現れて来ている
昼夜の間のてまである朝が
まは早より取り入れが終わり暇かできた
東の端で太陽が鏡の役をし始めた
空は太陽が昇るのをせを得る
夜との別水の鏡を雲の肩に組んだ
その細かみの取鏡は太陽の炎
空の農夫が暮れておいた早々の光からの
夜明けの星は祈りの場から出てい、た
夜通し祈つた者が、一番後に出るようには
静々と誰かが
靴の時間から輝やく短剣をぬくように
朝の息吐は日の出の中に隠れている
酒瓶という密所の中には心地よい酒があるように
朝の愛を生む風の袂の下にある
ほら貝の音は、アアインの声と一緒になつて

70 「解説」この詩は何か哲學的だこし
を述べるといふのでなく朝の到来
はついで、比喩や陰喩を使つて述
べているだけである、それ故にそれ
ぞれの語句の覆いを秋水は難かし
くはない。

↓ 昼夜を両親と考えている。

↑ 早々の光が消えて。

① 輝き出し、それで東の方の物か
見え始めた。

② 駢駢の賀り上に旅行用につけた物
で、その上は女性か四方を帯で覆
つて来た。

正仏教寺院から聞えてくる。

③ イスラム寺院からの礼拝への呼
びかけの声。

郭公ウアザンで小鳥たちは目を覚ます

夜明けの強光からまざまざと音をかしてくる

(一九一〇年六月)

21 アニースイ・シャームルの特を見て

いつもわたしは朝風うさうし迷っている

愛は目的地より道を決めていくのが楽しい

わか不安なる心かサシヤルの聖者が地になじり着いた

そこで我慢のできない苦痛が治療が受けられる

わが心う願ひの言葉はまだ唇にすんで出て来ていない

舌は話すかにも願ひしようとしていた

すると夢より声かして来た 聖なる心

おまえに不満を抱いている 父祖の慣いを止めてしまつた者よ

カイスよ どうしておまえの熱情は冷めてしまつたか

ライラールは今を喜び美しさはあるぞ

アッラーは他に神はない 種子はおまえの荒地では芽を出さなかつた

世界でおまえの子だも辱れずかしらばよこ

愚かな者め 命かかっているが おまえの人生がどんなだか

異教徒の笛の音 キリストの声でいつげいだ

おまえの育成は神の家の中でされてはいる

だが狂ったおまえの心は偶像熱愛者になつてはいる

21 (解説) アニースイはトルコ系

のトルシアンで16世紀キリストに

アムガル軍の会計課の役人であつ

たが優れた将軍でもあつた。

イクバルはアニースイの持

の詩句を最後に使ひ、当時のイス

ラーム教徒の裏返の理由をその布

教を止めました。たことにあつ

して、それをインドでマ布教の長

であるサシヤルの聖者ハ

ジャ・ムイヌディーン・チンテ

ー・アジミリーにさわせている。

インドのイスラーム布教の長で

あるハジャ・ムイヌディーン。

(2) カアバ聖殿に在る者の志。

マアラブの古代の文化に在る位

説上の志する人。

カイスは忠告される女性。

イスラーム教での神の唯一性を

表わす言葉。

水戸から忠誠を誓つて、それを他かり事に使つてしまつた
われらから真味を奪つて、それを他の者に捧げてしまつた

おまへは
おまへは

ユダヤ教やキリスト教の人道へ。

82 悲しみの哲学

牟婁士・マイン・フアズル・フサイン

お八解説

この詩はコマクザン四カ一
九一四年に掲載された。その序に
してイアバールは下記のこゝをノ
ートとして書いた。それが日ハング・ゲ
ラーに付付けられた。下記の詩を私は
友人で牟婁士である
マイン・フアズル・フサイン
氏の尊父の突然の死に對し追悼詩
を書いた。わが詩は私的なもので
ありコマクザンに掲載する必要
はなかったが、マイン氏に對し
同情の意を表わす友達にも届ける
ことを望む。

人生の酒は完全に快楽を作り出す酔いとはいへ

人生の雲はその雲霧に流る持、といへ

悲しみの涙の上へ人生の泡が踊る

心痛の草も人をという木の一抔である

花がら一朶でも欠ければ、それは花ではない

秋を見たこゝろのない夜驚鳥、それは夜驚鳥ではない

願望の血で心の物語が色づいている

人間の歌は嘆きなしでは完全でない

聖明な目もひとり悲しみの傷は胸の灯明である

心にとり嘆きの鏡は飾り道具である

悲しみの出草事で人間性は完全と行る

心の鏡の瓦りに疼腫う埃は白粉である

悲しみは夢の葉しめで若さを目覚めさせる

こゝろを悲しみの琴爪で音を弾く

心の鳥りため悲しみは飛翔の主翼

人間の心は秘密、悲しみがこの秘密を暴露させる

人間の心は秘密、悲しみがこの秘密を暴露させる

人間の心は秘密、悲しみがこの秘密を暴露させる

この困難と共々、空業はあり、
まことに困難と共々、空業はあり
のだ」とある。

悲しき日悲しき夜なく 精神の静かな音楽

それは人生の楽の調べし調知する

その人の晩が一神よしという叫びを知らないなら

その人の晩に流る涙が現れていないなら

その人の心の歪が悲しみの影を知らないなら

その人が永遠に染しき酒の酔いのまきなら

その花折りの守加刺の矢から保護されているなら

その人の愛が別れの苦しみを知らないなら

その人生の日夜が悲しみの苦痛から遠くにあつたら

人をう秘密はそつ人の日かう隠されて

あか反ら あなたはこれの世の成り立ちを知っている

どうしてあなたひとり 悲しみの場面が容易で可い

永遠についてり本の序論は愛である

人間の知恵は一時のもの 永遠に生かすは愛である

愛の太陽により死の夜は恥ずかしめられる

愛は人生の情熱で 永遠に生かす

もし恋人の去る息が消えるという事な、たら

恋の情熱を死なざる者の心から離れて行、マ、マ、ただら、

愛は恋人の死によりなくなかない

心の中は悲しみをなして残り、なくなくな

愛の永遠によ、て恋人の永遠が生かされる

恋人の不在を知らずいのが人生である

多因、たり試練に出、た時に使、
言葉、即ち嘆きの声を上げない
ら。

愛にひとり死はない、愛は永遠であ
る。

死とは存在場所を失ふもの、と考
之、消滅と考えていい。死ぬ者
は他、か他の場所、他の場所、存在
すると思える。それ故に情熱があ
りうる。

山の頂上から歌いながら小川が流れる
空の小鳥たちに歌を教えるから

その水の鏡は天女のように輝かしている
だが谷間の岩盤の上には落ち、飛沫をあげる

小川がたまたま砕けて真珠となった

流水蒸らることで水の星は消えた

流れる水銀の川は割れて飛び散った

キラキラ光る水滴の世界が埋れ尽

こけら水滴は秋のじりであるが合一するとの教えがある

二歩離れて見ると小川は再び自銀の糸となる

人生の流れる水路は、その元は一つである

高い所から落ちて人間の間を流るる水は、
下界で会うため、われらに別れる。だが

一時の別れを永遠の別れと、考えてわれらに注ぐ

死ぬ者は死ぬ、しかし消滅はしない

死ぬ者は本當の所決してわれらから離れない

理性が世の混乱に囚われている時

あまのいづ若さの夜の間に隠されている時

心の裾野が善と悪の戦いの場にはなっている時

道の途中で目的地向う旅がむすぶかしの時

夢があるヒナズルが願望から離れている時

思考力が弱まり、良心の音が沈黙している時

念道に迷った人を案内する人々、
コン

では人生の正しい道、目的をヒズ

ルが未だうちは見えない時、
アイン

アインは第1章以前に「われらの

心とりのしは、
ヒナズルとありヒズルと

いう名前を出していない。

人生の谷間や同行の夜がいない時
道を示してくれ方螢の光もない時

死んだ人う類は輝やいていゝ
そんな暗闇でも
星々が輝やいていゝように 暗い晩に

(一九一〇年七月)

83 花の贈り物をもらつて

そのよしさに酔つてゐる人が花園に居ると

それそれの帯の香から新麴の言葉が出来る

神さま、さくら花の中から水尻しを選んでく水子イようしん

そうす水は太陽の花もこんな帯のゆれくしを破滅するでし

おまえはあの人か枝から折つて取る ほんとすせりこじだ 不まえは

花園であふへの志敵たらかみんは疑いでいた

おまゝの衝撃に耐えて 抱擁れりぞ運した

おまゝの人生の目的は完全の域に達した

是を解する人が夢中になつたわが運則花

それこそ誇つていたわが青春の花園は

この花は願ひとの抱擁は一度もなかつた

誰かの華やかな袂を知らなかつた

春ではそれを決して花園かせら水ないだろう
花折る人を待つことかそれを憂うつにさせる

83 「解説」この小詩はロマン詩である。

イクバールは誰か知らない人から

花がフレゼントとして送る水て来

た、その慈悲の目が持んう心にな

んだ感情、その表現がこの詩でま

れてゐる。

おまゝは、4は詩人が帯に向つての

言葉。

おまゝと帯敵の入り混つた気持で、

おまゝから離れる衝撃で、

おまゝの、おまゝは詩人の様子。

おまゝが心の運の花。

おまゝ志ん。

84 イスラーム世界進歩の歌

中国もアラブもみんな インドもみんなわれらの國
 われらはイスラーム教徒 全世界がわれらの故國
 神は唯一の信託が われらの胸にあり
 われらのしるしを消すことは容易でない
 世界の偶像殿のうちの我が神の最初の家
 われらばその番人 われらばわれらの番人
 剣の陰でわれらは育ち若者もなつた
 三月月形の短剣はわれら民族のしるし
 われらのアザンは西洋の合間に響き
 誰もその洪水を止めることばでまなかつた
 天よ われらは塵埃に押し潰されはしない
 敷えよ水ぬ程 ありはわれらを試したか
 アンダルスの國よ あの日々を覚えてるが
 おまえの所の小枝はわれらの葉があつた時の
 マグリブの河の波よ おまえもわれらを見分けられるか
 へうもおまえの川はわれらの語を物語る
 清き國よ おまえの名譽に掛けてわれらは犠牲になつた
 わが血はへうもおまえも血管の中を流れてる
 隊商の頭はヒジャブの長
 その名どり われらの心ば安心を得る

84「解説」この水次前記「インドの歌」といふ題の詩を言ひたが、この詩

はその詩に對する答である。イクトルは當初は地理的親点からイスラームを想定して、シカレーナ、ムスリムを降すクルアーンの中の研究は、イクトルがイスラームの基礎は國ではなく、神の唯一性であるとの確信を得て、一九〇五年以降生涯、その考へをなめり立場を取り、この詩日その考へに浴うものである。
 ① イスラーム教徒は世界中心人が兄弟との考へがあり、國を地理的のもつて限定しない。
 ② カアバ聖殿を指す、クルアーン第三章の節を指す。
 ③ その考へはアルジャズィール、モロコ、スウーダン、フランス、南ヨーロッパ、東ヨーロッパに及ぶ。
 ④ イバディヤ島のイスラーム王朝の領域で七一年より一四九二年までその支配があり、ここを導いて、學問や文化がヨーロッパに及んだ。
 ⑤ その流域のイラクや都市バグダードが、アラブ王朝の首都として栄えた。

イクバルの歌は陸海の出発を告げる鐘の音
由緒の深淵に才花歩み始めの準備がなつた

25 祖国愛 政治的概念としての国

現代は酒が別 盃が別 ^①シヤムシード王が別
酌人は優しさと冷たさで別の振る舞い方をしようになつた
ムスリムはその聖地を別につくつた
文化の彫刻師アーザルは別の偶像をつくつた

こ水から新しい神々り中で一番大きなものは国
その花装しなつてゐるもの 宗教には死装束
新しい文化が作り出した偶像 その水は

預言者の宗教の家を壊すものとなつてゐる
ムスリムよ、ふよ元の腕力は神々の唯一性のカで強い
ふよ元の国はイスラーム ふよ元は預言者の信者者

かつての様子をせうの人にせよ

土の中にえんた偶像は埋めてしよえ 預言者ん従う者よ
あまえか地域といふもの虚になつていれば 結果は破滅だ、

海の中で魚のようにな 国から自由であれ
故国を捨てる それはアツラトを愛する者の仕方だ
あまえを預言者の使徒であることを証せ

① 聖地メッカ・メディーナ。
② 預言者ムハンマドを指す。

26 解説 ① この詩は前の執拗ともすう

べき持である。イスラームの普遍
性の概念の論理的な結果はイスラ
ーム共同体は一つということであ
地理的な存在でなく超国家的存在
である。即ちムスリムがいる所す
べてが同じ祖国となる。この詩の
中で祖国といふものについて批
判がなされてゐる。

② 古代イランの王。王の杯には世界
の様子が映り出るといわれる。

③ イスラームの見解を捨ててユート
ツパ的な様子を振り出した。

④ 預言者イブナーヒームの父で偶像
崇拜者として有名。

⑤ 西洋文化のこと。

⑥ 人々から宗教を遠ざけ関心を持た
なくさせぬ。

⑦ 六二二年ムハンマドがメッカから
マディーナに移つた聖遷のこと。

政治の昔の中での国は別の意味である
預言者の言葉での国は別の意味である

世界の諸民族の中心にこれにより敵意が生じら
通済の目的はこれにより征服が生じる

政治はこれにより莫大に成る
これにより諸者の家も崩壊する

諸民族の中で神の僕たちは、これにより命を奪われ
イスラームの民族の根は、これにより消滅せよと云ふ

カマディーナに向かうとする巡礼者

一行は砂漠で略奪された、だが目的は遠く

その荒野、つまり乾いた海、海岸はまだ遠い

わが同行者たちは追い剥きの剣の餌食になった
助かした者は急死してカアハ聖殿の方に戻りました

だがホハラ出身の若者は喜んで命を捨てた
死の毒水の中で彼は生を得たのだ

追い剥きの剣は彼にはあながちイードの新月のようであつた
アハヤスリブの叫び声に心は唇には神は唯一の叫びがあつた

アスリブの方へ心とりて行くな、と恐怖が言う
おまえはイスラーム教徒だ、恐れず行け、と熱愛の叫びが言う

聖地はムハンマドの言行である。
したがっておまえも預言者の僕であ
あることの真実を証明せよ。ムハ
ンマドはこの世のすべての土地は
アッラーのものであり、従つて世
界のどこへ行つても人生を営める
ことを証明している。

【解説】この情熱的な詩の中で、マ
ディーナ巡礼の一行がその途中で
略奪に会つた。みんな涙を流して、
絶望し果たぬ道を見失つた。そ
の中の一人は自分も戻つてしまつ
ていけものかと自問する。その時
強盗団の剣をイードの三日月を喜
び、アッラーの名を唱えながら命
を捨てた同行者のホハラの若者の光
景が目に浮かぶ、この詩はクライ
マックスは最後の行句である。

預言者ムハンマドの眠るマディー
ナのこと、マッカ巡礼者はそこを
聖地と見え、そこにも行く。

各語をしないでわたしはまたカアバ聖殿の方へ行けるだろうか
⑤マディーナの旧名。

⑥アラブの熱心者たちに最後の審判の日、顔に向けられるだろうか

⑦ジャーズル荒野を歩き回る者は命の恐怖を伴わない

この秘蹟がヤスリブに埋葬された方の聖遺に隠されてい

シリアからの駱駝と一緒に行くのは安全である

だが空の平しみとは命の危険を冒していくことである

ああ、この危険を考えてしようと思えばなんと狡猾な

だが子た人間の変分情然とはなんと大胆で悪気があるか

87 カター

昨日一人の奴隷が預言者の墓で泣きながら言うた

エジプトにインドライスラム教徒はイスラーム共同体の基礎を壊している

カターロハバ聖地を参詣するたくさんり者がわれわれの道徳を汚した

おかしな彼らは何の關係があるか、御座るを知らぬ者では

これから自認不慮の導引たちは空にけしからぬ者、いふかご自分の英同伴の者を救いた子え

あなたイスラーム教徒を欺目にしてこれから者なら自分名譽榮耀を考えてい

、イカバールよ、そんなことを誰が聞く、この社会は変わった

この新時代は、あなたをわらした古いことを聞かせようとしてい

- ①聖地マッカやマディーナのある地
- ②預言者ムハンマドは六二二年カラ
- ③イシシ核の時設計画を述べてマッ
- ④カからマディーナに使徒と英化移
- ⑤毎年ハッジの時、シリアからカ
- ⑥アバや聖者の墓に掛ける聖柱が
- ⑦運ばれる。

87 解説 イスラーム共同体を壊すム
スリム諸國の利己主義的宗教腐
善者の根を食って落胆する。

- ①ヨロロハバの大学やその文化
- ②預言者ムハンマド。

お神への不平

なぜ敗北者の位を渡したければならぬのでしよう 利益を計りることを諦めて
 明日のこころを考へない方がいゝのでしよう 昨夜の悲しみは沈み
 遠鷺鳥の悲しい声に耳を傾けている方がいゝのでしよう 耳をすまじ
 夜よ わたしをバラの花なうでしようか おのふし黙ったままの
 勇気を振るゐる起こす言葉ぐらゐ わたしだつて持つています
 神に言う走何ぐらゐ わたしだつて持つています

確かに諦めはも似た縁で有名 わたしたちは

だがどうしようもなくならぬと幸さも奪してしまふ わたしたちでさへ

昔のしの筈 不平の塊 わたしたちは

だがもし唇に涙がくれば悲しみの声か漏れてくる わたしたちから

神よ この哀れな僕を許えをお聞えください

あなたをお慕いする者からの少しの言葉を不聞ま下さい

永劫の昔よりありました あなたは存在は

だが花は花園を望み見せていただけ 音りは漂いもせず

公平なるを 恩寵を施される神よ

バラの香りはいかに広がりましょう そんな風がなれたら

わたしたちにとりそのまじ教らしは心の喜びでした

さもなげれば わか仲間かあなたを任う程刺さったでしようか

わたしたちが現れる前 あなたの世界の眺望は豊穡なものでした

どこかで石が蹴打され どこかで木々が揺さぶれて

お八解説

これが一九一一年四月のイストラム博

覧協会の年次大会で歌

まれ、世界的に知られ

ている詩である。

イクバルは「苦痛

の終りを書いた後、留

学に出た。一九〇八年

帰国し、その後二、三

年何を詠まなかつた。

イクバルは長年の

持せんとわかかわらぬ

の詩を倒し直し詩詠み

にした。会場からいッ

もクように調子をつけ

て詠んでほしいとの声

があつたが、それでも

も持詠みで続けたい

う。

イクバルがこの詩

を書いた時、世界中の

偶像崇拜にはなれまうていよしん 人の目ば

一体いうして誰かか認めたてしよしんか 目に見えない神の姿など

あなたにばふ分かりのはず 誰かかあなたを御名をお呼びしてよしんか

ムスリムの腕の力でした あなたを御名をこの世に知られわたらせたりは

ここにありよしん せしんニーク人もトウーライン人も

中国には中国の民が イランにはサマーン人が

この繁栄した地には住んでいよしん ギリシヤ人が

この世界に住んでいよしん ユダヤ教徒もキリスト教徒も

だが誰がたてしよしん あなたを御名のため剣を取りあげたりは

朽ちてた世界、それを正そうとしたらば誰だ、たてしよしん

わたしたちはあなたを戦場の戦士でした

時には炎天で戦かい 時には河中で戦かい

アザーンを唱へました 時にはローワの教会で

時にアフリカの焼けつくしよしん原野で

諸王の威厳も目に入らず

白刃の剣のもてで喝えてきましん 「アッラーの他に神はなし」と

生き永らえてまましん 戦いり苦痛にも耐えて

死にまましん あなたを御名を忘れたら

剣を振、まきたりではありましん 支配つきのたれ

死を掛けて回、まきたりではありましん この世を富むごのたれ

この世の富に慰せられたら、あが民族の

偶像をりうかわりになせしたてしよしん 偶像壊しなむ

イスラーム教徒の社会が衰退し混乱の時であ

た。かつての大帝國を

復活、オスマン帝國の

多くの地域はイギリス

スウ支配下となり、イ

ランも、19世紀後半に

以降ロシア、イギリス

の勢力の下にあり、

オスマンがはるばる

の混乱の中にあつた。

インドはイギリス

植民地下にあり、その

支配の中で、イスラ

ム教徒はヒンドゥー教

徒よりひどい扱いを受

けていた。1911年

のイギリスは、

インドを分割し、

イスラーム教徒に限

りない衡量を与えん。

この詩は以上のこと、

イスラーム教徒の状

況の中で書かれた。

逃げはしませんでした。たとへ戦いで死ぬ。とかあつてもし

斜子の足も踏みはじつてきました。戦場から

怒り出した。あなたに逆らう者には誰ある。うと

剣がなんぞし。う。大砲にも立ち向かいました

神は唯一なりしとあらゆ人の心へ語りてきました。わたしは

自刃のもじでもこのメッセージは伝えてきました。わたしは

仰せやうてください。カイバルの門を打ち破ったのは誰だったか

かつてのシーラーの都を征服したりは誰だったか

偶像の類々を粉微塵にしたのは誰だったか

異教徒の軍を蹴散らしたのは誰だったか

誰だったぞ。う。イラシの神火教徒の熱き火を冷やしたのは

誰だったぞ。う。ヤズダシンの話をもう一度あたらしくしたのは

誰だったぞ。う。あなたのために戦いだけを求めてきたぞ。う

あなたのために戦いの苦しみを味わつてきたぞ。う

誰の剣が世界の征服者。世界の支配者になつてきたぞ。う

誰の叫ぶ。アツラーは偉大なりし。掛け声。世界は目覚めたぞ。う

この昔が巻をさしる。二

奴隷も主人も 貧者も富者も 同じでいら
あなたもここに果ればみな 同じでした

世界中の雲という雲 朝な夕な回つて来るした

「神は唯一なりしの酒を盛りよくに持つて回つてきたした
山に荒野にあなたのメッセージを持つて回つてきたした
あなたは何うのですか 時に回つてきたこも無駄だったとでも
荒野は荒野で 海も残さず回つてきたした

暗黒の海の中で馬を走らせて回つてきたした

この世という本の頁より産偽の字を消し取ったれば わたしたち

人類を隸属より解き放したるも わたしたち

かアバ聖殿に跪拜したるも わたしたち

可クルアーン内を人たり胸におし控かせたるも わたしたち

それでも夏めていらつしやる 誠実でないし

わたしたちが誠実でないなら あなたは愛りないふ方

この世にはたくさんの人かおりますか その中には罪人も

弱虫も無頼漢もふります

急げん坊も 忘れん坊も 利口も人もふります

あなたの日御名を聞くだけでも不眠になる人もたくさん

だがあなたのお恵みがあるうちはこれら見知らぬ人の家ばかり

雷が落ちるのば ああ哀れにも われらもスクリムの上ばかり

傷像崇拜の寺院では話してきます ムスリムがいなくなつたと

傷像崇拜の人は喜んでいきます カアバの番人もいなくなつたと

⑤ イスラーム教で礼拝の呼かけ
⑥ スハイブで後期ラマイヤ期へ七
⑦ 一〇三〇年ウラ成立、イス
⑧ アールヴのセント・ソフィアス
⑨ 寺院がアールヴ・ソフィア・マス
⑩ ットルなつたこと、シシア・島へ
⑪ ッアラアの侵入をイクバルは
⑫ 思い泣かへている、

⑬ がズニ朝のマムードへたせハ
一〇三〇年)のこと。命主も北イ
⑭ ントに遷居したが、一〇二〇年ソ
⑮ ムナートを征服し、そこを
⑯ 在ヒントラト寺院を破壊し傷像も
⑰ こわそうとしぬ、すうと僧侶が全
⑱ 銀財宝を差し出しとわさずのこ
⑲ 懸鐘工水ん、しかし最後は審判
⑳ 時、傷像志々とさゆるより傷像
㉑ わしとさゆる方がよいと、それ
㉒ 正ことわつた。

⑳ イスラーム教では信仰の対象とし
㉓ てアッラー以外認めない、
㉔ ㉕ 第四代カリフ・アリト人た五六
㉖ 六八一一年にその堂舎は輝やく、
㉗ ㉘ ビアンツ帝国のフンスタン
㉙ ノー
㉚ ノールのこと、オスマン帝国第七
㉛ リフが一四三三年と改する。

この世から駭然とこの殺声が消えてしまつた

小腸にヨクルアーレンを握えた者も消えてしまつた

まゝ起つてゐるあの不信仰な者の嘲笑 不気味ならぬのでしようか、あなた

「神は唯一なりしやあを考へ、今ももうお持ちなすならぬの神しやうか、あなた

之句を言うのではありません、か出らうの金庫が一椀なりを

あの人達は集まりで口のきき方さへ知らぬのん

腹のたつのは、ムスリムでない者が天女と啓蒙を得ること

哀れ、ムスリムは業世で天世との約束だけ

今はかつての悪心がなく、われらの上にあの悪意がなく

どういふことかし、初めのようでもなしかないのは

なせムスリムに、この世の常なないやでしやう

あなたのお力は限りなく、計り知れないものでしやうに

その氣なら砂漠の真ん中に、泉さへおこせるでしやうに

荒野を旅する人に、塵氣楼の波を本場の洪水にもしてやれるでしやうに

あるのけ見知らぬ人からの嘲笑、侮辱、貧困だけ

あなた御名を唱へ死んで得るものは憐れだけ

今は見ず知らずの他の人の思ひのまゝの世界

残るのは夢まぼろしの幻想の世界

われらが立ち退き、この世をまえてゐるのは赤の他人

だが仰しやうないでください、唯一神の信仰がなくなるといふことか、あなた

わたしは生きています、この世にあなた御名があり続けようとしてありえよう、酌人かいなく蓋だけが残ることが

シロアスクラ教のこと、大正一

サヤノ朝が七び、イスラ

シロアスクラ教の善神、即ち神。

あなただの愛をなくならず、あなただの崇拜者も行つてしまへ
夜半の祈りの溜め息を夜明けの涙の声をなくしてしまへ
あなただを愛し、その報酬を得られぬか

身をも止まされず、おまへよ

やうて来なごれら信仰篤き者は、当てるべからぬ明日の約束で行つてしまへ
さあもう一度、その人達を救ひ出してよ、おまへ、美しい顔の明かりを

ライターの苦しみも前々より、カイスの心を前々より

ネジの支那や正を、度う騒がせるのも前々より

求愛の切ない心も前々より、悪人の怪しい魔術も前々より

預言者の使徒達も集まりも同じ前々より、あなただも同じ神のまま

それなのに、この理由なき不機嫌は、どういふこと

自分を愛する者へ、この怒りの目つさは、どういふこと

あなただを、預言者を、見捨ててしまつたし、仰しや、カウの、どういふこと

偶像作りた、どういふこと、左と仰しやるので、どういふこと、壊すのをやめて

愛を、求愛を、やめてしまつた、たと仰しやるので、どういふこと

使徒サレマインやカランのオワイヌの行いをやめてしまつた、たと仰しやるので、どういふこと

わたしたちは、しつかり胸に押し抱えています、フアンラーは偉大なりし熱き火を

わたしたちは、しつかり抱えています、フアンラーの、どういふこと、生きた方を

確かに切め、どういふこと、燃え尽かぬ、どういふこと

聖かに新行の道は、歩いてはいけません、どういふこと

解かる心は、小さく、キナラの、前に、向いてはいけません、どういふこと

確かに、祈りを、果たして、生きた、はい、ない、どういふこと

① ライラーとカイスは、アラビヤ半島で、悲恋物語の主人公、信憑性なく、19世紀、ネジの、魔術、魔術師、ライラー、の、神話、若者、カイスも、恋仲、にな、る、が、

父、祖、他、の、罪、の前、へ、

は、な、こ、ライラー、を、求め、砂漠、を、

ま、よ、つ、た、と、い、う、こ、こ、で、ライラー、と、は、イスラーム、教、や、クレア、

② ソロアスナー、教、から、イスラーム、に、改、宗、し、ん、ん、ハ、レ、マ、ト、の、親、友、の、

その、愛、を、保、持、す、と、謙、虚、さ、が、有、る、。

③ 預言者、ムハムマド、

は、か、大、き、な、奇、跡、を、示、し、た、が、

心、解、して、い、た、。

時には見ず知らずの人と懇に

② 言う様子はないうが、あなたも案外、洋氣者

フマーラーン山頂でイスラームの教を完成させたのがあなた

魁意の招きで何る何千の心を虜にされたのそあなた

心に愛の火を付けてくださった。たのもあなた

人々の集まりに頬の熱で温かい息を吹きかけてくださった。たのもあなた

それなのに今日ではなせ、わたしたちの胸に火花が花を交わらないでしよう

わたしたちは燃えん火、覚えていらつしやうないでしようが、あなたは

本ジドゥ谷間ル、あの情熱の蹟が消え

カイスがライラーの垂る駱駝を探した、あの狂った目が消え

あの情熱がなかく、わたしたちをなく、心も消え

家も朽ちてしまひました、寧ろ明かりが消え

もう一度あの白を蘇らせてください、わたしたちの祈れ

わたしたちの集まりの場、あつ日の種をま向けください

見知らぬ異教徒が酒に酔い、花園の川の辺りに坐つています

手に盃を持ち、郭公の歌に心地をまげに耳を傾け坐つています

花園の饗宴から他方離れて坐つてゐるのけ

あなたの熱愛者、あなたをうごかす護を待たされた坐つてゐるのけ

もう一度身を焦す喜びを予えてください、あなたを慕いするこから蛾たちに

もう一度燃えたつ魂の命令を予えてください、冷めてしまつたこれら火に

枚浪の民ムスリムは情熱の手綱を取りました、またヒジャーズに向けて

羽振りのない夜、雲鳥を飛ばした、飛翔の情熱が

③ 剛ま一番討ちぬ改宗した人、180

しかし奴隷であつたので、主人

やその子供はイスラームを捨て

ると、町中を引き回されたり火

の燃えこしを伴ひ押し当たられ

たりしたか、あつてもイスラーム

を捨てたことには、あつても

その貴めを見つゝ見る見か

ねて後、初代カリフも、

るアブー・バクルが、

る主人から買ひ取つてや

つたといふ。

④ イスラーム教を説いたヒジャー

ズの地にある小山、その所に

啓示を受けたとされるヒロー

一の洞窟とある。

荒れ果てた庭の薔薇も漂っています。献身の匂いが
撥き鳴らさせてください。疼いて待っている琴の弦は

悲ば震えて待つています。弦から委てられるのを
泣りはそわそわ待っています。その火の中で燃え立てられるのを

わかれうんすりん同胞の困難を軽くしてください
この弱き魂をソロモンの賢者にしてください

愛という苦しみを空くして。またか守ってください
インドの寺院に居る者もスクリムにさせてください

く賢くだす。血の川が長い間、涙を不満から流れて出しています
苦痛の叫びが切られた胸からけとぼしり出ています

花の香りは持っています。花園の外に花園の秘密を
人といふひびいことひしう。花が花園の裏切りをするとい

花の盆には終わり。壊されてしまいました。花園の秘密は
枝々からは飛んできています。花園の歌う歌人達も

なが留まっています。歌うに夢中の夜鶯鳥が一羽。今もなな
その胸には秘められています。さえずりの歌の産卵。今もなな

花のつも落ちて散りヒリになってしま
花園の小道も荒れかけてしま

木々の枝は葉っぱの衣を脱ぎ捨ててしま
だが季節の袖はかきついでしは。この夜鶯鳥のさえずり

ああ誰か。花園の誰かにかかってもうえたら。この夜鶯鳥の苦衷は

花のつも落ちて散りヒリになってしま
花園の小道も荒れかけてしま

①ここにはイスラーム教徒のこと。
ソロモン王がその軍隊を引き連

れ城の谷を通っている時、その

考案は村中に悲しいとあり、その

つた。城の一匹が他の城に踏み

渡すかといふうけ、穴に入ると

他の城に思をしたら、クルアーン

第27章の節を参照

② 横の木の志人とされてあり。

安楽は死んで得らぬものぞしうか 面白味は生きてても勿論ないぞしうか

ただひとつ面白味があるぞしうか 心臓の熱き血を吸うこと

わたしの鏡の中では 震えています たくさんの美点が

わたしの胸の中では 熱くなっています 輝く栄光が

しかしこの花園に 花をを見る人はいないです

胸に傷を持つ者は 花はチエリックツプの花ではないのです

神よ この孤独な夜鷹鳥の声に引き裂かれるようになりませうに 心が

新たな約束で生を返りませうに 心が

また苦ま酒の湯を求めぬ人になりませうに 心が

酒壺はベルシヤ製 だがわが酒はヒジャースの産

歌の言葉はウルトラ一語 だがわが歌の調はヒジャースの調也
(一九一一年四月)

89月

89「解説」この哲學的な詩はイクバールの象徴主義の優れた例である。

この詩のテーマは神の顕現はずべてのものは隠れてあるというものである。だがイクバールは神という語をどこにも使っていない。

月よ あまえの美しきは自然の誇りだ

地球を巡ることけあまえの昔からの習いだ

あまえの胸に傷のようなものが見えているか

あまえは誰かを恋しているか そしてそれは遠くおまの傷か

わたしたち地上でもかま苦しう あまえは天上で暮つかず

あまえも何かを探している わたしも何かを探している

おまへの宴とはその灯が人間であるようにをとりか
わたりか行く方向 それがおまへの自的地か

おまえが厚々の静けさの中に探しているもの

それは恐らく隠れているのだ この世の喧騒の中に
糸糸の中に立っている 緑の葉の中で眠っている

夜鶯鳥の甲に歌とぼつてある 夢の中で黙っている それほ
月よ おまえに見せよう その輝やく顔と

小川の鏡の中で 露の滴の中に

砂漠や荒野 人里や山の中にその眺めがある

人間の心の中に おまへの顔の中に それがある

90 夜と詩人

(1) 夜

なせわが月光の中でおまえは不安そうにうろついているのだ
花のように静かに 白いのようには漂うばかりで

星々の真珠の空を鑑定んか おまえは

めたしの光の川に住む魚か おまえは

あるいはわが頬から落ちたかけらか

高貴な自分を捨てて、この世で選んでいるのか

おまへの宴とはその灯が人間であるようにをとりか
わたりか行く方向 それがおまへの自的地か
おまえが厚々の静けさの中に探しているもの
それは恐らく隠れているのだ この世の喧騒の中に
糸糸の中に立っている 緑の葉の中で眠っている
夜鶯鳥の甲に歌とぼつてある 夢の中で黙っている それほ
月よ おまえに見せよう その輝やく顔と
小川の鏡の中で 露の滴の中に
砂漠や荒野 人里や山の中にその眺めがある
人間の心の中に おまへの顔の中に それがある

90 (解説)

この月光の夜に静けさを描いた詩にイクハールの欲求不満が表されている。彼に欲求不満を起させる三つの問題があった。第一はユーロップの勢力による搾取、第二はムスリム世界の荒れむき状態、第三はインドを大陸に占めるヒンドゥー・ムスリムの友好関係の問題解決が困難である。これら三つの問題のうち、詩人おまへの心は

このせう葉落り強は静まり返ってしまっている
わが鏡の中に この世の夢の絵が映っている
川底で濁り目は眺めてしまっている

岸辺に居て不安なる波を眺めてしまっている
大地の上のすみ処は日中なんも混乱していたか
今人が住んでいないかのうにすべてが寂靜まっ
たしてしまっている

だが詩人の心とは安心と命を知らないうか
どうしてわが魔術では安心が得られぬのか

(2) 詩人

わたしはあなたに月光の畑に真珠をまく
人に隠れて透明けのようになつたは泣く
日中の混乱の中 涙も出るのを恥をかかして
そこを夜の孤独の中でわが涙はこぼれ出る
わたしの胸に隠れてある不平 誰に聞かせよう
愛の心の高鳴りを誰に見せよう

わが胸にマシンの騒音が落ちて泣いている
夕水が見える目はどこに眺めていろかと
死んだ人の妻の灯明りようだ わが妻は
ある愛よ わが目的地はなんと遠いか
その寒れとり今夕水況はみましくない
その寒れとり自らの悪さに気がついていない

愛がメロセージを伝えられ困惑する時
夜よ あなたを輝いている星々にぞれを語って聞かせろ

かゝる、インドの人は残念なこと
今も深い眠りにあるとして、何と
月明りの夜に坐させ、それらを目
に語らせている。

正涙のこし。

ムーンルン山でムーサーは神の魂現を
求めた。それに応じて神は輪車と
なつて現れたが、ムーサーはそれ
に耐え切れず死した。レカレ今
はムーサーのような人はいない。

91 星の宴

太陽は沈みながら黒い夜の夜、
地平線の土皿から子ノッポの花を取って投げつけた

夕焼けは金色の飾りをすべてにむけよせ

自然はその銀色の飾りの全部をはずした

沈黙の駕籠に乗って、暗黒の恋人がやってくる

夜の花嫁の玉珠が愛らしく輝き始めた

この世の混沌から遠く離れているふれり住人

人間は水を自分たちの言葉で「星」と言った

それら天の星たちは空を輝やかすのに没頭した

天上から 天使の声をかして来た

夜り番人よ 天の星々よ

かまえたらずべて 空に座って輝やしている

眠っている者が目を覚ますよう 歌をかき鳴らせ

ふさふさが頼りの輝きは隊商の道案内となる

地上の者たちはかまえたらずべて運命の鏡と考えているわ

まよふかまえたらずべて声を聞くだろう

星でいっぱい空から 静けさが消えた

ふわりと 空じやが星のまんぢんやあふふ水た

星々の魅惑の中には永遠の美が見える

露の滴の指鏡の中に花の影があるような

91 解説 この詩は前の詩に少し補足的な役割をしている。ぶしの詩でイ

クバールは夜の静けさを描いた。

ぶしの詩のようはこの詩にも役割がある。

イスラーム共同体が歩んで来た道をな

なして動いているという星のあり方にならうのかよといっている。

これが星後の灯台に示されている。

↓ 日中、太陽の光が物体が銀色に見える

えている。

ライラーとバネジドの高層ビル群

長の息子カイスを打ちつけた。

その意味は暗黒。

この灯台よりさまで天使の言葉。

この灯台よりさまで天使の言葉。

この灯台よりさまで天使の言葉。

この灯台よりさまで天使の言葉。

この灯台よりさまで天使の言葉。

新しい任才も恐れ、古い任才は固執していて、
そんなのは萬機の進歩は困難を全ける

この世の階級はすばやく進み

その進歩は多くの民衆が押し潰されてきた

わが能めから多くの累々が消えていく

だがその小もわが伊阿門に入っている

地上の者には長いことそれが分かつた

われらには、すぐ分かつたが、そのことが

あつての組織は相互の結合力で成り立っている

この秘密が層々の動きの中に隠されていく

92. 天への旅

想像力がわが旅の道連れである

わが道は天までとびいてしまつた

飛びながら行つた、だが誰もいなかつた

天上にわたしを知る者は

厚くは驚いてわたしを見ていた

わが旅はみんなに隠した秘密だつた

幾たびやの東緯から解き放たれ

この地上の古い任才たりから解き放たれ

⑤ ムスリムに好しては愛をもつてい
よ、そうでないと命断してしまふ
の思ふとなつていく。

92. 解説(1) 地獄は暗く冷たい所という。

地獄の熱さや炎はしつとあるもの
でなく、地獄に落ちた人が自分
で持つて行くことを考へる。即ち自分
の意行が地獄に落ちた炎や火の束ね
ると言う、人間が地獄を自らの手で
作る。

何とすれうか 天国の園は何かなるか
目と耳のすへてり願望をかたえさせてしまふ所だ

天国の園は何かなるか

天国はハールをつげず その箱は見え

よえしと酌人は手に盃を持ち

むつと飲めむつと飲めめ声もする

だがわが目は天国から遠く離れた所に

暗い一軒の家を見た 冷たくひくそりとした

カイスの運命のような暗さ ライラーの蒼き髪のような思ひ

その冷たさほひひく 恥ずかしくなる様

寒帯も顔を見れば 恥ずかしくなる様

めたしめその場所の様よをたすめろし

天使の答えは驚きを増させるものだつた

その冷たい所か地獄です

火も光もあつたはなないです

その炎は借り物です

反省する人も震え上ってしまふ程つめたい

世のこの人たちがここに暮らす時は

自分らと共々一緒に持つて来さうです

三対句を以下最上の所までで四クル

アインの第九巻から九巻のイックバ

イル流の解法である、此節にはフ

法学者や修道士の多くは、偽って

人がこの財産を正さばつ、かれら

をアッラーの道から妨げている。

また金銀をたくわえている者も多

くその小をアッラーの道に任めな

らある、また一部にはフその目、

それらに金銀は地獄の火と熱せら

れ、かれらの頬やわき腹や背に

焼を印さるゝと。

わたしはイクバールの忠告として言った
 おまえは断食をしない、礼拝もしてない
 おまえも修業者として一洗
 心の中はロンドンへの熱望を待てる層にヒジャードの話も浮かべ
 嘘つまで虚言を弄し

お世持のうまさな奇蹟的
 おまえの話は政府の称賛ばかり

おまえの考えは懇願の心を考へただけ
 おまえは純粋者の門はマフムードの館

おまえの政策もアヤズウの教以上のもつれ
 おまえも他の人のように隠すことが上

① 宗教への敵身のペールの中に地位に打ちつける燃望の秘密を
 イートリ日にはマスジャートにも望を見せ
 説教を聞いて涙も流す

② 目の新聞はおまえの手によつて育てられ
 それもつきおまえの賞賛が美稱とされ
 それにも増しておまえは特を上手に書く

おまえの詩の入れ物は、シララースの酒がある
 リードリとして必要、それらすべておまえの中にある
 とするなら、立ち上つて努力をする必要がある、おまえは

③ (解説) この詩をイクバールはイス

ラーム擁護協会が一九一〇年四月
 の年次大会で読み評を傳す。そ
 の後多分を名元同年五月日マク
 ナンに掲載した。

この詩はイクバールは少年時代の
 一、二の詩の出来を見せ、諷刺詩の
 傑作と言へる。

④ 西洋文化を信奉し、イギリスの行
 くことを望む。

⑤ イスラーム教の聖地マッカ、マデ
 イナールのある所。

⑥ イギリス政府を賞讃し、それ以上
 を下げるなげ。

⑦ 自分の名譽と見学の手段とする

⑧ スムタレン・マフムード・ガズナ
 ヴィーの奴隷で、その髪は長髪を
 つけていた。

⑨ 断食明けの祭りで、イスラーム教
 の最大の行事。

⑩ ペルシアの大詩人ハーフィズ和ナ
 ーディーはじょうな詩の魁カガ
 ある。

おまえには教師の恐れはない 羽根やをもあるのて
なの程かまふ勇氣がないのはどう仰う訳か おまえに
結局 すべてのはきは死の谷間に果なければならぬ
さあ今 天の光輝原に大混戦を起してやらなければ

(一九一一年四月)

94 ラーマ

インドの杯は直覚の酒で溢れている
ヨーロッパのすべての哲学はインドに惹きこられている
これはインド人の天まで達する思考の影響である
インドの屋根はその高さかかまうも高い
この園に数千人はも及ぶ天使のような人か生まれ
それらの人の不陰でインドという園は世界で名高い
ラーマの出現をインドの人々は誇る
見放さる人は彼をインドの導師と考える
その導師の灯明の奇蹟とは

この世でインドの夜は朝より明るい
朝の名手であつた 勇毅で彼は彼に勝る者はいなかつた
清潔さや愛情の多さでも彼に較べられず 考へいた方だ

ミリーダトであるのですべてか思い
うまわれなる。
ミヤルシアの詩人ハーフィズのお句
より。

94 (解説) イクバルはこの詩でラ

ーマヤブの主人公シニク
ラーマ・チャンドラに譬喩を授け
た。それ故その存在はインドの誇
りだと思ふ。最終で清潔な人格。
彼は、父親の言葉に従ひ十四年間
森をさまよひ、すべての苦辛を
耐へ忍んだ。インドの祭典、
「ディワリー」にはラーマの救
済から帰つて来たことを祝すこと
に由來する。ラーマの人柄が最
後の部分で述べられてゐる。

95 自動車

ジコグナダル氏は昨日 うまいことを言った
ズルファイカル・アリー・カリーユんの車は静かだと
その動き方は 音をたてないと
電光のように速く 風のように静かだと
わたしは言った それば自動車だけのことでない
人々の道にふいても 速く進む人は静かだ
ベルの音は不平かちの異令り悪い足である
夕いりキヤラバンはその風りようだ
酒の顔はいつもことと音をたてる
だが回される杯の様子は静かだ
詩人の想像力にヒリ 静けさは飛翔の羽根
熱き声の泉 静けさとは

96 人間

花園の光景が美しくても 美しくなくとも
水仙はただ見ているだけ 行動する力がないので
縦の木は動き回る葉しみの感じを知らない
その性格は 願うということを欠いているので

96「解説」この詩は謙虚さ、徳を強調

している。これはイタバルの簡
単な車柄や出巻車を通して、高座
な考えを伝える仕方である。

96「解説」地球上のすべての生物や無

生物と違つて人間には、知力、眼
識力、体力が与えられており、も
し望むなら意識的に人間は情況を
変えていくことが出来るし、考え
をこの詩で示している。

この世に存するものは察認にたれざつて居る人間のさすます力だけがもろもろの要求を出す

その粒は常に城火の欲望を持つて居る

それは土の粒よりなほでなく、恐らく凝縮した砂漠だ

もしこの水が望むなら、花園の様子も変えることも出来る

これは知恵を持つる左、眼力を持つる右、力を持つるもつた

カイスラーム教徒の若者へのスピーチ

若きイスラーム教徒よ、あまえは若きことがあるが、それはほんたに空だったか、あまえがそこで壊れた學に居たのは

あまえをその民族が育てて居た、愛の把握の中であ

それは足でイブンの王を踏みつぶしなされた

文化の創造者、世界の統治の法の制定者だった

そのアラブの砂漠が、つよりラクダ使いの操りかごが

困難を語る様子が富者の威厳の中にあつた

あまえは種はその輝きや顔かたちには何か必要か

物乞ひはなにもかも水には無視ある神の僕であつた

金持ちも物乞ひをする人への恐れで心付けの憂鬱がなかつた

要するに何と言えぬか、あまえに、砂漠を放浪する者は何だつたか

世界を征服し、世界を支配し、世界を守り、世界を美しく保つ者だつた

モウレドラーと学やベルシアと学の中では、その形が固に似て居る、
で物が見えない目にはたこえらるる、
多人間のこと。

97 (解説) この詩は裏返してしまつた

イスラーム共同伴の若者たちから、
するイクバルのメッセージであ
る。即ち現在のイスラーム社会を
隣を極めたい若者たちの時代と較
べてみよと語りかけて居る。詩
句の前半「あまえは若きことあるが」
祖先とは比較にならないか、こ
う詩の命で、若者を罵りかゝる起こさ
せようとして居る。

ちし望まむなり地図を掲いで言葉で教えてもいい
 しかりその眺めはあまの想像よりすと大きい
 おまえはあまより祖先とは比較にならぬ
 おまえは口述者 かの人は行動の人 おまえは理屈屋
 われらは祖先から得た遺産 それをみんな使った
 天はわれらを ずばる星から地に安んずれた
 支配を求めて泣くか それが一時のことだった
 世々習いから誰も抜けぬせる大軍はない
 月が知性とその真珠 わが祖先から得た数々の本
 それらをヨロコッパて見る時 心は引き裂かれる
 ガニーよ カナンの人より暗い日模様を見るよ
 彼の目の光はスライカの日を輝やかせている

98 イードの新月

シヤワールの新月よ 断食をしていた者の目の輝きよ
 おまえをイスラーム教徒は本心に侍らに持つていた
 おまえの頬の上はイードのメッセージが書いてある
 おまえの夕べは それを喜び朝うねりだ
 輝やかしい民衆の鼓栗の おまえは鏡である
 新月よ われらはおまえに昔から愛を持つ

かの人は宣証の人

① 詩人がニー・カーシミーリーを指し、この句はガニーの持より。
 ② ヤコブのこと、没落したイスラーム教徒を指す。ヤコブは盲目。
 ③ 彼ら目の光とは異界の息子ヤコブ。
 ④ ヨセフは志すエジプトの王の侍従長の名、この場合ヨロコッパ人を得し、アラブ文化からヨロコッパ人へ。
 クルアーン第12章23ノ24節参照。

98 (解説) イクバルはこの詩を世界

のイスラーム教徒、特にトルコ、イランのイスラーム教徒に四角から不意の雷が落ちた時書いた。詩人はこの詩の中でイードの新月を語りかけて、それ燃えている心を表している。イスラーム教徒の惨めな様子やその政府の崩壊についてこれ以上、悲痛な叫びはこぼさず、詩人はこれ以上、悲痛な叫びはこぼさず、詩人はこれ以上、悲痛な叫びはこぼさず。

其の麓の陰でわかれが剣を振った

敵の刃でわれらが衣履を穿けた

おまエの運命でけ おまエはその種と失れる

おまエの毎に増えまじえたイスラーム國家の誇りがある

ゆがみは友情に厚く おまエの信も忠實だ

あまエの銀色の衣履は愛の情熱をよこすにせらるもった

しはしエの腹志からこの世の存み処を見やくれ

空の高みからゆめらの家のみずほらしえを見やくれ

深淵のギヤラバシと見よ 身してそ水らの輪まきような遠きも見よ

流れ切つてしまつた旅人たちや目的地は打する倦怠感も見よ

かつておまエを地早線に見ておまエは真珠を振る舞つた

たかごの杯を 今日はおまエの 國籍をも見よ

分派の節りの鎖つ中にイスラーム教徒はつかまつてゐる

月と自らの自由の夢も見よ イスラーム教徒の補らえられた様も見よ

イスラーム寺院や中やジャマイカの教団が切れてしまつたのを見よ

そ中を打し仏教寺院にゐるブラフマノの教団のかんじようをいよ

聖教徒かイスラーム教徒の仲間かうしのかい地りあひを見よ

身してイスラーム教徒の仲間かうしのかい地りあひを見よ

事件といふ石の雨の光景もある

イスラームを同伴といふ家の衣ラエの壁も見よ

自今を自慢する人にも不世帯を言ふ様子を見よ

また前にも懐かぬかゝる者の今の自信ぶりを見よ

①ヒジエラ暦十月のこと

②新月が立ちこして断食が終りるの

で半しみから解放される

③夜が明ければイトになるのだ

④月がイスラームの象徴、その影が印

として輝いてゐる

⑤新月より満月に変わるまで

⑥見よ

⑦イスラームを同伴

⑧新月のちの杯が空のまうれ見よ

われらか話す樂しみと教へん

その話すことを知らなかつた者も熱い話しぶりも見よ

善人の善行の奇をヨーロッパの宮殿の中に聞け

そしてイランでは多少 貴族の準備を見よ

無謀にもトルコはヒラーファットの衣服を引さ裂いた

イスラーム教徒の憎悪の様を見よ そして他の宗教の味と見よ

今日の騒ぎのとうにすべを見よ そして騒がであれ

今日の騒ぎの中で かつての歌にみたれ

99 戰場と詩人

詩人

昨夜わたしはめが荒れ果てた家々の戰場に言つた
あまのさよふきは戦の利根が統かしてゐる
わたしはこゝせで砂漠のチユークワアの明かりのようだ
遠く行くでもなく どのかの家に置かれる運命でもない
長い間わたしはもたえつたように燃え続けました
しかしぬがぬの回りでだけ戦は利根を焼く息をなかつた
わが聲滅した命の叫ぶの頭頂があつた
たゞこゝに宮殿から狂気の心を持つ者は出て来たが、た

あまのさよふはこゝからこの世界を照らす光を奪つた
そのうち分けられた雲にかりこゝの詩の情熱を教えた

3 ヒンドラー教

白一九一一年に、オスマン帝国領で
「あつた」ヒンドラーイタリヤが侵襲し、
翌年この地域の割拠を帝国内に認め
させたイタリヤ・トルコ戦争の

99 (解説) この詩集の心になる

この詩は一九一二年四月イスマ
ーム権威を以て余で誅す水た、大
会後、印刷し一枚のアナマキル
四の巻上げを予定し、その巻上
金でイクバルをイスラーム希教
で日若に派遣する計画を立てた。
イクバルは歩時のイスラーム
教徒の妻に心を痛め、その欲許
作つたりの詩でなく、心の痛を
表現するものとし、戰場と詩人の
会話からなる寓意詩としてこの詩
を書いた。またイクバルの詩に
ナルシア語で、詩人の影射が

魂燭

わたしたちの心は死にかけぬ息の波は死にかけぬ
だがその息の波で身なたり唇は歌う
わたしたちは燃える わが本性に情熱が潜んでいるので
あなただけ輝く 魂があなたを照らすよ

わたしたちは涙を流す 心の中は涙の洪水があるから
あなただけ涙にひたる 花園であなただけ花があるように
水が朝はわか夜の血で新野まじり花である
あなただけ明日はあなただけ今日を知る
夕陽あなただけ光り輝く だが内なる情熱を持つていない
あなただけ頭がかりと砂漠に咲くチニリクワブの灯明のようだ
少し考えてみよ 商人の称名はあなただけとて相心しいかと
甚まりの人は瞳をかうからにして だがあなただけ酒板は空

あなただけの仕方は別 イスラーム共同体の法もまた別
あなただけを照らすあなたも鏡もあなただけ魂の姿に恥い、ている
カアバを心に持ちながら、あなただけ偶像寺院に在っている
善悪は無頓着はあなただけ愛は、たんと在っているか
あなただけの宴に、カイスが生まれるか、そんなことがある筈がない
あなただけ砂漠は狭く、あなただけ駱駝の背の驚鐘にはライオンがいない
輝やいている直譯よ、波の懐で育まれる物よ
だがあなただけ川は、台風の雲かを知らない

今、嘆きの時は何かあるか、あなただけ花園は枯れてしま
あなただけ歌は場違いの歌、あなただけ葉は季節はずれの歌

強く出てくる時期であったので、最初
の連はハルンシア語で書かれてい
る。

詩の中でイスラーム共同体の嘆
かわしい状態の主な原因をヨクル
アーレヒとイスラームの教えから
離れてしまったことにあるとして
いる。その改善は容易なことでは
ないが、再びイスラームの教えに
沿って努力すれば、現在が最悪の
状態から回復され、かつての偉
大さと栄光を取り戻せると魂燭は
希望を語らせている。

詩人は第一連で魂燭は誠はなま
之の祈に果て身を燃え焦げ死むか
あなただけの祈に果てそうならぬ
よ水はとうしてかき問う。詩人は
自身も情熱を持つてはけかきえ
る少者といふたかと言う。

第二連で魂燭は詩人のメナ
質問を答げて詩人だけをた
く民権クリーグの意カ化
を答えとして挙げる。
第三、第四、第五連はイスラ

悪人を見たいという願望を持つた人ならかまわなくてしまつた
すなわちの人が悪人に会えるという朗報を持つてきまか 何にける

寧より酒をうんと飲んだがつての人たちかまわつてしまつた
酌人よ 寧にあらば強い酒を持つてまたか 何にける

ああ 花園の安らぎがなくなつてしまつた時
花に春風が便りか来ても 何にける

夜明け前 忠する者の振へは見るに値した
だが夜が明けて悪人が現れたのでは 何にける

賊が身を焼く準備をした灯明が消えてしまつた
情熱の狂人になつても 何にける

花は見向きもしない おまゝに片断に取らうと取らうと
サヤパンはひくももしない 銅鑼の音がしようにしよ

聖の囂騰もなつてもあなたに情熱がなかつたら
あつたや所に集る賊はその喜びを知らない

あなたに愛の紐に人々を通すことが出来た時
あなたに珠の紐に人々を通すことが出来た時

向うみずりの急気の人にも 高遠な人終の人もいなくなつた
あなたに愛の紐は 狂人も賢人もいなくなつた

あゝの心を燃えさせた様子 あゝの志の火を燃え上らせよう
囂騰の回りの賑わいも なんにもない

あゝの飲んだくれはかえり 今もあゝの飲んだくれはかえり

あゝの飲んだくれはかえり 今もあゝの飲んだくれはかえり

夫同伴の出相環をさす回となつて
いる。

第七連で囂騰の諸人にかが落魄
する所とすう。なせなら民衆の中

に新しい精神が生ずれつてあり
希望の朝が明け始めつてあるから

とすう。更に詩人はメッセイヤ
ーにかがた徳のメッセイヤを人々

へえと勧ます。

第七連からメッセイヤが燃える。

その中で囂騰を降座せしめる仔方も
述べらる。そして信仰と力を得

動があらはれんことも出来ること
とし、以下第八、第九、第十連と

いふものの負度からその目的達成
が述べらる。

最後が第七連は将平八の提言と
なつてゐる。

ミューサーの符号(「神と詩しをす
る者」)。

囂騰は息を吹きかけらるると消え
てしまふ。

今日注いでいる 軒れえ、しまった胡瓶が
昨日までその人の杯は回っていた

今日は沈黙 あの狂人を育てた砂漠が、そこには
踊りのライラーがいた、ライラーに狂った人もいた

あの狂念、キヤラバンの道具もなくなった

キヤラバンの心から、苦しか、た感じもなくなった

それうの騒ぎで、つての荒野が人里もなくなった

だがそれうの者の町は消え、栄えた所が森になった

神の唯一柱の輝きが確まされたが、それらの祈りで

だがそれらの祈りは、インドでバラモンへの贈り物になった

この世に於いて永遠の業しみはイスラーム法を守ることである

波れとり、自由とほがえを、道具となった

神の頭現を、さんでいた人々の

③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

① 多くの花鳥が花園を飛び回っていた

② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

④ 天の底かりの中で稲妻は見る人の目を眩ませた

それか今、脱鞍場の壁の下を照らす花の影が

血の目はどうして花園から恩を受けるか

絶えず続く血の流を、花の眺めは、

だが悲しみの夜は、イトトの朝の知らせを伝える

夜の時息の中に希望の光が見える

③ 暗くならぬよう、一晩中燃え

刺すで続く、即ち燃えろ行為は連

続たがある、それに行しおまふり

愛や法は将来にまで続かす現時点

だけのものである

④ 酔人の酔目は酒を飲まずと、民

族の指導者とは常人と異なる、

指針を示せぬ人である

⑤ 指導者が英同僚と知り有知な有能

を示せば指導者と英同僚の一致が

ある

⑥ カイスはインドの高原を狂人も

かて、人ライラーを連れられた

⑦ 民族を指導するリーダーの無カ

⑧ 偶像崇拜のインドにおいて、イン

ドムスラムは唯一神を礼拝する

とされていながら、今ではそうい

うことを拒んでしまった

⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

昔程だ。ヒジャースの居酒屋で酒を飲ませる者、
しぼりくぶりル。オオエの酒位がたか^①く^②なつた

自軍心の現物かよる者製の酒に依り代金だつたか
またオオエの庄は酒位サの歌り声であつた^③ける

今イシドで月のような人^④の魔術が凄くつづある
また声か上つてゐる。酔人よ自家製の酒を持つてこい

心の熱さを西洋の酒が冷ましてしまつた
歌を歌ん。今が静かにしてゐる時ではない

夜明けの空は太陽のような酒瓶を肩に担いでゐる
他^⑤の者^⑥の悲しみの中で燃えよ。そして他の者を燃やせ

わたしはおおえに輝かしの言葉を言つたか。出来来る石をせよ
詩歌は種々^⑦の地位の^⑧一部に相違すると言わゆるか

聞かせよ。イヌラームの宴の人々^⑨。天使のメッセージを
人々の目を目覚めさせよ。今うごとく約束で

人々の心を言葉の空庫の熱で^⑩燃え返らせよ
鳥籠が強盗け身う安全な好む者になつてしまつた

おまえは砂漠では海であつたか。花園では小川のようになつてしまつた
自らの自由性にまよつていた時。おまえは田舎の輝きだつた

花を後にするよ。匂い^⑪の隊^⑫の^⑬一回は歌り散りになつてしまつた
満の存在は人生の秘密を教える

ある時はそれは真珠になつた。また雲はも涙にもなつた。^⑭

① 鳥籠は人の心の目。
② 花を足はゆせゆせ花園に行く心を
けづいて、自分^③の血が花のようになつてゐるつづ。

④ 断夜明けの歌り。
⑤ イタリヤへの攻撃やオスマン帝国
は打つる西歐諸国、暗謀やイヌラ
ーム秋花は目が覚めた、

⑥ イタリヤと政府の魔術。
⑦ アラブの伝説上のメスマ。即ちイヌ
ラーム文化を表わしてゐる。

⑧ 花の匂いは花の中にある限りの匂い
としてあるが、花を酔小ると消ん
てしまふ。花とは其同伴のこと。

⑨ 思ひの中では真珠は、花がは雲は、
人間の神では涙にもなる。

またどこか心臓を作れ、それほたまな財産だ
もし心臓が弱腰にはかたたら、人生は何たるか

語りはふまえの共同体の結合の輝きであつた

その結合の輝きが打ちなつた時、世界であつた不名考となつた

共同性と関係をもつて個人がある、一人では何の価値もない

海の中で波となる、だが海の外では何の価値もない

心の覆いの中に愛を今隠しておけ

つより自分の酒を瓶のように磨あるな

シナイ山の谷間にカリームのようにはテントを張れ

真理の光の探求のため自分の住処を壊してしまふ

蟻も巣の最後を知りなればならぬ

夜明けのたれに城の灰を使ふ

もし自尊心があるなら、酔人の同情を必要とするな

川の中で泳ぐように杯をひく、くさり返ししておけ

昔の山や砂漠では面白くない

おまへの能気如新しいなら、新しい土地を作れ

土の中にはもし命令かおまへの墓、たらう

種子のまゝに不運から杖を作つてやれ

この古い板の上にはもう花を作れ

花園に人々を慰めるのが歌の場だ

この園で花を育てる後には、花の弟子になるのか

手やち完全な不平等になるのか、音をたてないのか

心感り困難と打交するオカがある。

イスターム英同体は今た自らの耳

的遂行のため燃然してはいないので

自らを人前にさらけ出すな。

預言者アーサー・カンナイムに光を

見て前に進み、神に託さる機会

を得たわけはなく、メッセーシを得

た。他のまゝにするので、おんこの

ふうに正しい知識の獲得に努力す

るこゝで進んである。

蟻場は一晩中燃えて死んで、その蟻

と焼く殺す。蟻場は報復するから、

いぼ灯を消すことである。蟻場は

朝に光を消されるので、焼けた

蟻の白い灰を使って、夜の朝を作つ

てやればよい。

泡は川の土を杯をふせたように、

おまへは花園で悩める雲のようん土をたてたのりだ
口を閉げよ おまへは世界のハーフの歌だろ

おまへは少しは自分の真実の空を知れ

おまへは種である 畑でもある 船でも収獲物でもある

ああ何を求める貴持かおまへをそんな放浪させているのか

おまへは道でも道を行く人でしょよ 道り案内人 その目的地でもあるのに

おまへの心は台風の心配で震えるのか

船頭でも 海でも 船でも 岸道でもあるのか おまへは

さあ胸をかまむる志の道に行つてやめ

カイスでもライラーでも砂漠でも駭駭の北月の驚きももあるのだから おまへは

愚か者 おまへは酌人がいなむしりく

酒でも瓶でも酌人もも愛でもないか おまへは

炭となつて燃やしてしまふ 神以外のごみは

偽物を恐れるのか 偽物に挑む者ごめか つかつか おまへは

おまへはくろめ おまへこそ日々鏡の空だ

おまへこそ この世で神の最後のメッセーだ

自分の真実の気がけ、うっかり者、おまへは

清だ、だが計り知れない海のようである

なせばかびかしい魔法の盾になつていろうか

いいか おまへの甲には台風のごとき威風堂々も隠れている

おまへの胸はそり誇りあるメッセーの要諦の場だ

それは時代の体制の中で生まれ、隠れてもいる

来ているうで出するわち相手の志
みを拒否しているよ、は見える。

おまへはクルアインの所有者だ、

クルアインはこころの最後のメッセー

クルアインを修正するものは何

現れぬいぬい、もしおまへが消

えればクルアインも消える、それ

で世界も変わる、それ故おまへ

存在は必要である。

七つの目を武器として刺突せせてしまふ。

もし考へてみれば、ふまへは、^①「う」式器を持つてゐる

今でも「ブ」ラーイン山の静けさ^②が証人である

不注意な、覚えているはず、その約束があるのを

幾つかの帯に満足してしまつてゐる、愚かな奴

さもなくば、花園で、水鏡の使えもたせらば、す

心の操子は、話、グハールの中で生じる、^③

海に瓶の覆ひの中に隠れても、い、^④、^⑤、^⑥、^⑦、^⑧、^⑨、^⑩、^⑪、^⑫、^⑬、^⑭、^⑮、^⑯、^⑰、^⑱、^⑲、^⑳、^㉑、^㉒、^㉓、^㉔、^㉕、^㉖、^㉗、^㉘、^㉙、^㉚、^㉛、^㉜、^㉝、^㉞、^㉟、^㊱、^㊲、^㊳、^㊴、^㊵、^㊶、^㊷、^㊸、^㊹、^㊺、^㊻、^㊼、^㊽、^㊾、^㊿、[㏀]、[㏁]、[㏂]、[㏃]、[㏄]、[㏅]、[㏆]、[㏇]、[㏈]、[㏉]、[㏊]、[㏋]、[㏌]、[㏍]、[㏎]、[㏏]、[㏐]、[㏑]、[㏒]、[㏓]、[㏔]、[㏕]、[㏖]、[㏗]、[㏘]、[㏙]、[㏚]、[㏛]、[㏜]、[㏝]、[㏞]、[㏟]、[㏠]、[㏡]、[㏢]、[㏣]、[㏤]、[㏥]、[㏦]、[㏧]、[㏨]、[㏩]、[㏪]、[㏫]、[㏬]、[㏭]、[㏮]、[㏯]、[㏰]、[㏱]、[㏲]、[㏳]、[㏴]、[㏵]、[㏶]、[㏷]、[㏸]、[㏹]、[㏺]、[㏻]、[㏼]、[㏽]、[㏾]、[㏿]、^㐀、^㐁、^㐂、^㐃、^㐄、^㐅、^㐆、^㐇、^㐈、^㐉、^㐊、^㐋、^㐌、^㐍、^㐎、^㐏、^㐐、^㐑、^㐒、^㐓、^㐔、^㐕、^㐖、^㐗、^㐘、^㐙、^㐚、^㐛、^㐜、^㐝、^㐞、^㐟、^㐠、^㐡、^㐢、^㐣、^㐤、^㐥、^㐦、^㐧、^㐨、^㐩、^㐪、^㐫、^㐬、^㐭、^㐮、^㐯、^㐰、^㐱、^㐲、^㐳、^㐴、^㐵、^㐶、^㐷、^㐸、^㐹、^㐺、^㐻、^㐼、^㐽、^㐾、^㐿、^㑀、^㑁、^㑂、^㑃、^㑄、^㑅、^㑆、^㑇、^㑈、^㑉、^㑊、^㑋、^㑌、^㑍、^㑎、^㑏、^㑐、^㑑、^㑒、^㑓、^㑔、^㑕、^㑖、^㑗、^㑘、^㑙、^㑚、^㑛、^㑜、^㑝、^㑞、^㑟、^㑠、^㑡、^㑢、^㑣、^㑤、^㑥、^㑦、^㑧、^㑨、^㑩、^㑪、^㑫、^㑬、^㑭、^㑮、^㑯、^㑰、^㑱、^㑲、^㑳、^㑴、^㑵、^㑶、^㑷、^㑸、^㑹、^㑺、^㑻、^㑼、^㑽、^㑾、^㑿、^㒀、^㒁、^㒂、^㒃、^㒄、^㒅、^㒆、^㒇、^㒈、^㒉、^㒊、^㒋、^㒌、^㒍、^㒎、^㒏、^㒐、^㒑、^㒒、^㒓、^㒔、^㒕、^㒖、^㒗、^㒘、^㒙、^㒚、^㒛、^㒜、^㒝、^㒞、^㒟、^㒠、^㒡、^㒢、^㒣、^㒤、^㒥、^㒦、^㒧、^㒨、^㒩、^㒪、^㒫、^㒬、^㒭、^㒮、^㒯、^㒰、^㒱、^㒲、^㒳、^㒴、^㒵、^㒶、^㒷、^㒸、^㒹、^㒺、^㒻、^㒼、^㒽、^㒾、^㒿、^㓀、^㓁、^㓂、^㓃、^㓄、^㓅、^㓆、^㓇、^㓈、^㓉、^㓊、^㓋、^㓌、^㓍、^㓎、^㓏、^㓐、^㓑、^㓒、^㓓、^㓔、^㓕、^㓖、^㓗、^㓘、^㓙、^㓚、^㓛、^㓜、^㓝、^㓞、^㓟、^㓠、^㓡、^㓢、^㓣、^㓤、^㓥、^㓦、^㓧、^㓨、^㓩、^㓪、^㓫、^㓬、^㓭、^㓮、^㓯、^㓰、^㓱、^㓲、^㓳、^㓴、^㓵、^㓶、^㓷、^㓸、^㓹、^㓺、^㓻、^㓼、^㓽、^㓾、^㓿、^㔀、^㔁、^㔂、^㔃、^㔄、^㔅、^㔆、^㔇、^㔈、^㔉、^㔊、^㔋、^㔌、^㔍、^㔎、^㔏、^㔐、^㔑、^㔒、^㔓、^㔔、^㔕、^㔖、^㔗、^㔘、^㔙、^㔚、^㔛、^㔜、^㔝、^㔞、^㔟、^㔠、^㔡、^㔢、^㔣、^㔤、^㔥、^㔦、^㔧、^㔨、^㔩、^㔪、^㔫、^㔬、^㔭、^㔮、^㔯、^㔰、^㔱、^㔲、^㔳、^㔴、^㔵、^㔶、^㔷、^㔸、^㔹、^㔺、^㔻、^㔼、^㔽、^㔾、^㔿、^㕀、^㕁、^㕂、^㕃、^㕄、^㕅、^㕆、^㕇、^㕈、^㕉、^㕊、^㕋、^㕌、^㕍、^㕎、^㕏、^㕐、^㕑、^㕒、^㕓、^㕔、^㕕、^㕖、^㕗、^㕘、^㕙、^㕚、^㕛、^㕜、^㕝、^㕞、^㕟、^㕠、^㕡、^㕢、^㕣、^㕤、^㕥、^㕦、^㕧、^㕨、^㕩、^㕪、^㕫、^㕬、^㕭、^㕮、^㕯、^㕰、^㕱、^㕲、^㕳、^㕴、^㕵、^㕶、^㕷、^㕸、^㕹、^㕺、^㕻、^㕼、^㕽、^㕾、^㕿、^㖀、^㖁、^㖂、^㖃、^㖄、^㖅、^㖆、^㖇、^㖈、^㖉、^㖊、^㖋、^㖌、^㖍、^㖎、^㖏、^㖐、^㖑、^㖒、^㖓、^㖔、^㖕、^㖖、^㖗、^㖘、^㖙、^㖚、^㖛、^㖜、^㖝、^㖞、^㖟、^㖠、^㖡、^㖢、^㖣、^㖤、^㖥、^㖦、^㖧、^㖨、^㖩、^㖪、^㖫、^㖬、^㖭、^㖮、^㖯、^㖰、^㖱、^㖲、^㖳、^㖴、^㖵、^㖶、^㖷、^㖸、^㖹、^㖺、^㖻、^㖼、^㖽、^㖾、^㖿、^㗀、^㗁、^㗂、^㗃、^㗄、^㗅、^㗆、^㗇、^㗈、^㗉、^㗊、^㗋、^㗌、^㗍、^㗎、^㗏、^㗐、^㗑、^㗒、^㗓、^㗔、^㗕、^㗖、^㗗、^㗘、^㗙、^㗚、^㗛、^㗜、^㗝、^㗞、^㗟、^㗠、^㗡、^㗢、^㗣、^㗤、^㗥、^㗦、^㗧、^㗨、^㗩、^㗪、^㗫、^㗬、^㗭、^㗮、^㗯、^㗰、^㗱、^㗲、^㗳、^㗴、^㗵、^㗶、^㗷、^㗸、^㗹、^㗺、^㗻、^㗼、^㗽、^㗾、^㗿、^㘀、^㘁、^㘂、^㘃、^㘄、^㘅、^㘆、^㘇、^㘈、^㘉、^㘊、^㘋、^㘌、^㘍、^㘎、^㘏、^㘐、^㘑、^㘒、^㘓、^㘔、^㘕、^㘖、^㘗、^㘘、^㘙、^㘚、^㘛、^㘜、^㘝、^㘞、^㘟、^㘠、^㘡、^㘢、^㘣、^㘤、^㘥、^㘦、^㘧、^㘨、^㘩、^㘪、^㘫、^㘬、^㘭、^㘮、^㘯、^㘰、^㘱、^㘲、^㘳、^㘴、^㘵、^㘶、^㘷、^㘸、^㘹、^㘺、^㘻、^㘼、^㘽、^㘾、^㘿、^㙀、^㙁、^㙂、^㙃、^㙄、^㙅、^㙆、^㙇、^㙈、^㙉、^㙊、^㙋、^㙌、^㙍、^㙎、^㙏、^㙐、^㙑、^㙒、^㙓、^㙔、^㙕、^㙖、^㙗、^㙘、^㙙、^㙚、^㙛、^㙜、^㙝、^㙞、^㙟、^㙠、^㙡、^㙢、^㙣、^㙤、^㙥、^㙦、^㙧、^㙨、^㙩、^㙪、^㙫、^㙬、^㙭、^㙮、^㙯、^㙰、^㙱、^㙲、^㙳、^㙴、^㙵、^㙶、^㙷、^㙸、^㙹、^㙺、^㙻、^㙼、^㙽、^㙾、^㙿、^㚀、^㚁、^㚂、^㚃、^㚄、^㚅、^㚆、^㚇、^㚈、^㚉、^㚊、^㚋、^㚌、^㚍、^㚎、^㚏、^㚐、^㚑、^㚒、^㚓、^㚔、^㚕、^㚖、^㚗、^㚘、^㚙、^㚚、^㚛、^㚜、^㚝、^㚞、^㚟、^㚠、^㚡、^㚢、^㚣、^㚤、^㚥、^㚦、^㚧、^㚨、^㚩、^㚪、^㚫、^㚬、^㚭、^㚮、^㚯、^㚰、^㚱、^㚲、^㚳、^㚴、^㚵、^㚶、^㚷、^㚸、^㚹、^㚺、^㚻、^㚼、^㚽、^㚾、^㚿、^㜀、^㜁、^㜂、^㜃、^㜄、^㜅、^㜆、^㜇、^㜈、^㜉、^㜊、^㜋、^㜌、^㜍、^㜎、^㜏、^㜐、^㜑、^㜒、^㜓、^㜔、^㜕、^㜖、^㜗、^㜘、^㜙、^㜚、^㜛、^㜜、^㜝、^㜞、^㜟、^㜠、^㜡、^㜢、^㜣、^㜤、^㜥、^㜦、^㜧、^㜨、^㜩、^㜪、^㜫、^㜬、^㜭、^㜮、^㜯、^㜰、^㜱、^㜲、^㜳、^㜴、^㜵、^㜶、^㜷、^㜸、^㜹、^㜺、^㜻、^㜼、^㜽、^㜾、^㜿、^㝀、^㝁、^㝂、^㝃、^㝄、^㝅、^㝆、^㝇、^㝈、^㝉、^㝊、^㝋、^㝌、^㝍、^㝎、^㝏、^㝐、^㝑、^㝒、^㝓、^㝔、^㝕、^㝖、^㝗、^㝘、^㝙、^㝚、^㝛、^㝜、^㝝、^㝞、^㝟、^㝠、^㝡、^㝢、^㝣、^㝤、^㝥、^㝦、^㝧、^㝨、^㝩、^㝪、^㝫、^㝬、^㝭、^㝮、^㝯、^㝰、^㝱、^㝲、^㝳、^㝴、^㝵、^㝶、^㝷、^㝸、^㝹、^㝺、^㝻、^㝼、^㝽、^㝾、^㝿、^㞀、^㞁、^㞂、^㞃、^㞄、^㞅、^㞆、^㞇、^㞈、^㞉、^㞊、^㞋、^㞌、^㞍、^㞎、^㞏、^㞐、^㞑、^㞒、^㞓、^㞔、^㞕、^㞖、^㞗、^㞘、^㞙、^㞚、^㞛、^㞜、^㞝、^㞞、^㞟、^㞠、^㞡、^㞢、^㞣、^㞤、^㞥、^㞦、^㞧、^㞨、^㞩、^㞪、^㞫、^㞬、^㞭、^㞮、^㞯、^㞰、^㞱、^㞲、^㞳、^㞴、^㞵、^㞶、^㞷、^㞸、^㞹、^㞺、^㞻、^㞼、^㞽、^㞾、^㞿、^㟀、^㟁、^㟂、^㟃、^㟄、^㟅、^㟆、^㟇、^㟈、^㟉、^㟊、^㟋、^㟌、^㟍、^㟎、^㟏、^㟐、^㟑、^㟒、^㟓、^㟔、^㟕、^㟖、^㟗、^㟘、^㟙、^㟚、^㟛、^㟜、^㟝、^㟞、^㟟、^㟠、^㟡、^㟢、^㟣、^㟤、^㟥、^㟦、^㟧、^㟨、^㟩、^㟪、^㟫、^㟬、^㟭、^㟮、^㟯、^㟰、^㟱、^㟲、^㟳、^㟴、^㟵、^㟶、^㟷、^㟸、^㟹、^㟺、^㟻、^㟼、^㟽、^㟾、^㟿、^㠀、^㠁、^㠂、^㠃、^㠄、^㠅、^㠆、^㠇、^㠈、^㠉、^㠊、^㠋、^㠌、^㠍、^㠎、^㠏、^㠐、^㠑、^㠒、^㠓、^㠔、^㠕、^㠖、^㠗、^㠘、^㠙、^㠚、^㠛、^㠜、^㠝、^㠞、^㠟、^㠠、^㠡、^㠢、^㠣、^㠤、^㠥、^㠦、^㠧、^㠨、^㠩、^㠪、^㠫、^㠬、^㠭、^㠮、^㠯、^㠰、^㠱、^㠲、^㠳、^㠴、^㠵、^㠶、^㠷、^㠸、^㠹、^㠺、^㠻、^㠼、^㠽、^㠾、^㠿、^㡀、^㡁、^㡂、^㡃、^㡄、^㡅、^㡆、^㡇、^㡈、^㡉、^㡊、^㡋、^㡌、^㡍、^㡎、^㡏、^㡐、^㡑、^㡒、^㡓、^㡔、^㡕、^㡖、^㡗、^㡘、^㡙、^㡚、^㡛、^㡜、^㡝、^㡞、^㡟、^㡠、^㡡、^㡢、^㡣、^㡤、^㡥、^㡦、^㡧、^㡨、^㡩、^㡪、^㡫、^㡬、^㡭、^㡮、^㡯、^㡰、^㡱、^㡲、^㡳、^㡴、^㡵、^㡶、^㡷、^㡸、^㡹、^㡺、^㡻、^㡼、^㡽、^㡾、^㡿、

また心は跪拜のメッセージを思ひ出すだろう)

ヨル類はカアバの土と親しくなるだろう)

獵師の嘆きで鳥たちは喜びの歌を奏し始めるだろう

花折る人の血で帯の衣がまた赤く染まり始めるだろう

日が昇るその 才れば唇の上に幸ってこれた

わたしたちは驚きである 世界がどうなつて行くのか

夜は還むで行くだろう ヤカテ太陽の頭頂がある

そしてこの園はにびわうだろう 神の唯一の歌で

(一九二二年三月)

ヨカアバの地で跪拜をする。

夜アツラウ月かに神はたしの歌。

100 イスラーム教徒

イクバルよ あなたは吐く息は海魚の中に隠されている

あなたの歌える物は不平に満ちている

あなたの心うを琴には希望の歌かたない

われらは知つている テイラーがあなたの駱駝の背の禽籠にはいないのを

あなたがたの耳はあつたり 歌声を擧げている

だがあなたがたの心は今も混乱には足を使わない

花園で飛ぶ鳥たちは花々の話は聞かない

密の人々はあなたがたのかつてのメッセージは聞かない

眠りてしまつた足を持つ 漆黒の銅鑼よ 黙つていよ

100 (解説) この詩を一九二二年三月に

た。その頃イクバルはヨクルア

ーシンの研究に没頭していた。夜

半過ぎの禮拜の詩を聴くとヨクル

アーシンの解釈と注釈を聴いて思ひ

一節一節を讀み感ずるの余り、よく流

の誤謬の結果が一年ほど自分の秘

書、一五年日没後の結果にた

つて世に出た。

このヨクルアーシンの研究によ

りイクバルはイスラーム教徒と

してどうあるべきかが明確になり、

再びその昔くからあった要は生を返れたい
 霊魂で遊ばせてしまつた夜は明るく出来た
 友よ わたしはイスラーム教徒だ 神の唯一性の荷い手だ
 その真実に始めから わたしは公正を期する証人だ
 万物の軌道の中心から熱情が生み出れる
 そしてイスラーム教徒の想愛がこれだから大胆さが溢き出る
 神は神の唯一性を知らせるために世界を作つた
 えしてわたしはその擁護のためを生んだ
 この世で偽善り左利者たちか禁禁された
 だがこの世で面目は潰されはしなかつた
 わか存在は世界という禪の体の衣服である
 わたしがいなくなるにアダムの子孫たち比 不名譽はしない
 イスラーム教徒は世界の運命の輝く星である
 その輝きで夜明けの魔法を託し入つてしまふ
 わか目より上の人生の秘密が現れている
 とはいえわたしが人生の戦いは絶望しているとは言はれない
 悲しみの一瞬の籠りがびょうしてわたしを恐がらせるか
 わたしはわかイスラーム天向体の運命を信託している
 わか世界は絶望の要素はとらわれない
 完全勝利を知らせてくれるので 戦いの熱情が
 確かそれの通り 道を去つた時代のよんわか目を置く、わたしは
 霊の人に昔の物語を語る わたしは

それが今、マヒマラヤ、ヤブ新し
 い寺院のようだ詩と異なり、イ
 スラーム教徒やその教えを主として
 するものに変わつた。そして彼等
 を覚醒させるメッセルジになった。
 打勾タリにそれがはつきり示
 されている。
 ①ネジトの高原でカイスを任わせた
 美事。ここには希望の意。
 ②イスラーム教徒が隆生を扱め元頃、
 ③イスラームの中心の教義、ハアツ、
 ラークはか神はなし✓はトウヒ
 ④トの言葉とせれる。
 ⑤神への奉仕は神の唯一性の固い破
 信を含む。クルアーン第61章第節、
 ⑥わしは信をせせられたか比のみ
 ⑦ジシと人間をつつたのであつた。
 ⑧打勾タリ、及び神の創造り中、人間
 の傳説を示している。クルアーン
 第2章第、第節第節。
 ⑨朝にたると星々を色があせて見え
 る。しかしイスラームの聖書の類さ
 は、朝の光を少なくするかわり、

思ふ云つた時代の思ひ出し わが土に在り韓金術の秘薬
わが国には わが時々の説明だ

イストラム教徒の業をい時代を目撃せし置く わたしは
昨夜の鏡の中に明日を見る わたしは

(一九一三年六月)

101 預言者ムハンマドの詩で

わが身の上にせり混沌が重くのしかかつて来た時
旅の道具を予とめて この世から旅だった
日夜の束縛の中で日々を過して来た とはいえ
この世の仕来たりは皆目知らなかつた

天使はわたしを預言者の雲に連れて行つた
恵み深き預言者の詩にわたしを連れ去つた
預言者は言つた ヒジャーズの園の松陰鳥よ
おまえの熱まを一つ一つ帯が小さくうんだ

いつかわれらの愛の杯に酔つていろ おまえの心は
敬身的に純粋をすく者の美望の的である おまえの謙遜あふれる姿は

地上の世尊かうおまえが天上の世尊の方に転向おとした時
天使たちはおまえに懇切の仕方を教えた

おまえは地上の園から出て 芽音のようになつて来た
われらのためにおまえはじんな贈り物を持つてやつて来た

朝かその星の並んで色があせてしま
うように見えるの意。

101/八 解説

この詩をイクトハールは一九
一一年十月、バルカン戦争でトル
コ支援の義捐金を集めるため、ラ
ーホールのシャーヒービー、マズジ
トで大会が開かれそのとき詠んだ。
集められた義捐金は負傷した人の
救済にコンスタンチノーブルに行
く医療班に託された。それはイス
ラーム教徒に「世界のイスラーム
教徒は皆存を第一の教を思い出
させろものであった。

神よ 現世では安心が得られないです

振している人生が得られないです

しかしわたしは贈り物としてガラスの瓶を持って参りつした
その中にあるものは 天国にもないものです

イスラーム共同体の誇りが輝やいています その中に
とりどりでの殉教者の血があります その中に

(一九九一年九月)

102 ヒジャーズの病院

民衆の指導者がイクバルに言った

ジッダにヒジャーズ病院という名の病院が開院するところだ

あふんのエリーとつづは不安か

あふんの誰かからかヒジャーズの話を聞いた時

あふんの狂人の手を野布の方に向けたら

あふんは有名なから この世で ヒジャーズを志人として

病院がマッカの回りに必要だ

病人の脈はキリストの身の中にあるべきだから

ゆえには言った 人生は死の準備の中にある

真箱は飯粒の中は隠れているように

死の苦い酒の中は忘る者が得死をの

ヒズルはそれを長命の酒のせいで得られなかった

102 (解説)

この詩の背景はこうである、
イギリスがジッダの地に病院を建
てる計画を立てた、それに對し連
託書が必重となりインドでも寄付
金が集められた、しかしイクバル

や他の者たちがイギリスの監督の

もとでの病院建設は反対であった、

従つてその計画は対し反対書で

られ、この詩も反対を表明した一

連のその中の一つであった。

他の人に与えよ、この人生のメッセルシを
わたしはヒジャーズの中（中）で死を控す

あなたば治癒のメッセルシを持って来れり
苦痛を持つ人かイエス・キリストが役立つか

10 不平への答

心から出る言葉は妙き目を持つ

羽根はないか飛翔力を持つ

それば神聖なもの、空の高みまで昇って行く
地より昇り天まで届く

強情、傲慢そして狡猾な、わたしの悪定は

天をふんごま、わたしの大胆な叫びは
年老いた天は聞かぬ、誰かどこかにいるぞ

悪夢か言つた、誰かが大空に

目を言った、ちかちか、地上の誰かだ
天の叫びを言った、誰か聴かしているぞ

俺の不平が分かった奴、それば天の門番

俺を聖園（聖園）から遠い出された者と思つてゐる、それば
この声か何か、天使たちも驚いてゐた

この秘密は何か、天界の人たちも解けなかつた

103 (解説) この詩はライホールのモー

ター・ゲルファーリヤ外で、夕刻

の折りの後で、一九一三年に開か

れた年次大会で詠うべし、詩を詠

む際に詩を印刷して持つてきて数

千枚売らばよし、その売上金をバ

ルカン戦争の義援金として寄せた。

イクバルはイステーム共同作

の興起、崩壊を論じ、その原因を

分析し、その改善策を出したけ

なく、最後に希望をなすメッセル

シを出しているが、小生も同じ種の

ものである。イクバルはイステラ

ーム共同作の崩壊の原因を、西洋

世界の歴史及びイステラーム教の自

身の歴史の二つを考へてゐる。

又、人間は駭け巡れるか
土^ち塵^{じん}で出来た人間はか穢^{けが}れようになつたか

あゝなんと哀れなことの、地上の住人が棲^{すま}ひたを志^{こころ}れましようといふ

いこまで横柄に打つたか、地上のこれら虫けえは

神^{かみ}の恩^{めぐみ}を言^いうは横柄に打つたか
天使^{てんし}が跪^{ひざま}いたりもこれら人間はもどつたか
世間^{よこ}づればしているが物の道理をわきまなき奴
らうで己^{おのれ}が弱^{よわ}さないうさうさう知らない

口^{くち}がさける位で人間はもどつたか、横柄な
物の言^いひ方^{かた}ないてんで知らない、これら者^{もの}はもど

また声^{こゑ}かした、悲^{かな}しみを請^こう話^わだ、おまへの言^いひ
かなき涙^{なみだ}でいつゆりだ、おまへの目^めは

たまご響^{ひび}いて来たか、おまへの陶酔^{たうすい}したやかは
そわにしてもなんぞ恥^{はにか}知らずの言^いひだ、おまへの狂^{くる}った心^{こゝろ}は

だがこれはは礼^{れい}を言^いう、不平^{ふへい}だが聞^きこえ易^{やす}く舞^まりうよく迷^{まよ}はててくれ

神^{かみ}と人間に話^わせてくれた、おまへの
われら神^{かみ}々はいつだ、て恩^{めぐみ}恵^{めぐ}みを施^ほす舞^まりがある、だが危^{あや}う者^{もの}かいないでな

道^{みち}はいかによせばいい、旅^{たび}人がいないのに
教^{おし}え導^{みち}く用意^{ようい}だつてある、おまへの受け入れる考^かみはないでな

人間を造^{つく}つたか、それは土^ち塵^{じん}で造^{つく}つた種^{たね}もりのない
僅^{わずか}くて能力^{のうりき}ある者^{もの}には、王^{わう}の位^ゐさへあげまする
世^よ間^{かん}を求^{もと}める者^{もの}には、新^{あらた}しい世界^{せかい}だつて与^よりまする

この詩は先^まの「神への不平」に
して神^{かみ}の言^いひの回答^{こたへ}である、そ

の詩で「バベルはイス
ラーム」世界^{せかい}と社会^{しゃかい}の哀^{あは}れな状態^{じたい}

を求め、神^{かみ}に不平^{ふへい}を言^いひ助けを求^{もと}め
ていふ、しかしその強^{つよ}い調^{てい}子^しは神^{かみ}

の反^{へん}念^{ねん}を懐^{なつ}く者^{もの}と出^でた、それ故^{ゆゑ}こ
の詩はその反^{へん}念^{ねん}を護^{まも}つて居^ゐる

神^{かみ}の言^いひを書^かいた、その回答^{こたへ}は
イスラーム教徒^{きとく}自身の足^{あし}元に制限^{せいげん}

してある、その足^{あし}元^{もと}は「つぎの道^{みち}
」である。

① イスラーム教徒^{きとく}は「ケルアーン」
、その教^{おし}え、祖^そ父^ふの慣^な習^{じゆ}を止^とめて

しまつた、そして
「忠^{ちゆう}考^{かう}」や「行動^{こうどう}模^も式^{しき}」に
おいて「西^{せい}洋^{やう}派^{はい}」の住^す民^{みん}

② イスラームの相^{あひ}違^{ちが}ひを止^とめた、
③ 不^ふ信^{しん}宗^{しゆう}教^{きやう}的^{てき}政^{せい}治^ち統^{とう}治^ち等^{とう}が現^{げん}れ

た、
④ イスラーム教^{きやう}徒^とは神^{かみ}の言^いひを「唯^{ただ}
神^{かみ}の情^{じやう}熱^{ねつ}をなした、

207

手れば力なく 基督教に心は染まり
こりせば預言者に怒りを起させるも
偶像環しか消え 残るが偶像拜のみか
アブラハムか父で その息子かアーザルか

飲酒を習わしは新しく 酒を杯を新しく
カアバに背を向けることも新しく 偶像もそういうあつても新しく
いつぞや神自身かまの財と成つた目もあつた
花の盛りは野のチニークアは枯らして枯つた
ムスリムであつた者みな アッラーの熱愛者だつた
だがかまへのその崇拜者 今はおまへのとつて浮気者か

それならあつたも任えるかい 一人の者ん
それならあつたも任えるかい 一人の者ん
そんならあつたも任えるかい 預言者ムハンマドの教之に
われらをつねに朝の祈りかあつたか
われらをつねに朝の祈りかあつたか
われらをつねに朝の祈りかあつたか
自由になつた断食の移めも重なるか
心は言つて聞いてみるかい 信仰篤きとばさういう事ではないか

民衆は宗教から 宗教かないならあつたも任えるかい
引力かないところ 星をもない
この世で何も出来ないのであつたも任えるかい
己の民族に愛着を持たないのであつたも任えるかい
雷かほんやりしている船屋 それかあつたも任えるかい
父祖の墓地を売つて食いつないでいるかあつたも任えるかい

① 信託主義に陥つた、
② 神のため活動し開いたとあり、
③ 無愛主義と無敬を活を敢て入れた、
④ イスラーム教のため戦い打
つて情熱を失つた、
⑤ イスラーム社会は紛争と意見の
不一致に苦まふつた、
⑥ イスラーム社会は知的教訓に悩
む。

① アッラーに仕える一種の清浄な空
体でその役割はさうでよ、それは
光から成り、アッラーに絶対服従
する。
② アッラーの言葉により天使ならは
アダムに跪けをしているか、イブ
リースへ悪魔だけをその小を捉る
して預言の徒にした、クルア
ン第2章 255節参照。

墓地ありて堂舎が得られるなら

いうして廟をしないうだ かま某めたる石像で

この世の責から模倣を消したのば誰だつたか
人間を隷属かう解放させたのは誰だつたか

わがカアバに類ナいたのば誰だつたか
わがクレアーシを胸に押し抱りていたのは誰だつたか

それはおごえの祖先でなかつたか だのに今のおごえは
腕組みして 明日を待ちあぐわっているだけだ

何を言う ムスリムのために天女を約束したと
そんな根も葉もない不平等を言うなら 分闘くらいあつてもいいはずだ

主の教は公正だ 初めから
異教徒でも ムスリムの様に生まるなら報いは同じ

おごえの神は今は今もあるか 今げあうムーサーはいない
シナイの神は今は今もあるか 今げあうムーサーはいない

民衆の益は同じ 損も同じ
預言者も宗教も教えも同じ

聖殿もアッラーもクルアーシも同じ
なんじよかつたか ムスリムが一つであつた時

なのになんか千々に分かれて、みんな自分勝手な救いだ
それか、この世での繁栄といふのか

誰だそれか 違はれた預言者の示す戒律を破かした者は
誰だそれか その場しのぎの仕方をも自分のため取つたのは

① 多神教になつてゐるカバラの神の意

複数で神の偉大さ、威光を表わし
てゐる。このような多神教を複数で
表わす仔子カクレアーシの中に
ある。

② イスラエルの始祖、予言者は多神
教的か、アダム以来の昔目で、ク
レアーシの中で30代所以上その記
載がある。偶像破壊もその一つ。

③ アブラハムの父で偶像崇拜者。即
ちここでは人々カアラ、ラーを忘れた
しものたの意。

④ イスラーム教徒にとつて五行のうち
の一つ。イスラーム月の第7番目の
月の二ヶ月間、ゆえり、日、夜から
日没まで一切、食や物を口にしない
行である。

⑤ イクバルの存命中、即ち20世紀
初頭、ラーホルリからこちらクイス
ラーム教徒の墓の上の人々カヤ、
まで、墓を取り払いその上れ家を造
り住んだといふ。

誰の目だ 異教徒の文化に目がたると暗んだのは
誰の目だ おまえの聖者の振る舞いの目をおむいたりは
心意気もなく 精神に落りかなく

ムハンマドの言葉に目を貸さず

マスジッドに行き並んでいるのは食しき者
華んで断食の苦行をするのを食しき者

誰かわれらの名を呼ぶのを見れば食しき者
バルカールをつけ懐しの食食しき者

密に解いわれらるを忘れてるのげ金持ちの聲
イスラームの火が輝くのばこれら食しき者のみかけ

今は民族を導いたあの啓かな思想かなく
知慮にひらめかなく 言葉に炭かなく

アザールの声はするか多ピクラーのよう命かなく
拙学を培る者かいても かがりりの教えはなく

マスジッドは泣いてる 礼拝に来る者かなく
フヨリヒジャーズの要教人々か今なき

弱さが起きてる さうせからムスリムか消えてしまつたと
だかわれらば言う 一体ムスリムはどこにいたか

見かけばクリスチヤン その文句はヒンドゥーの標だし
それでムスリムとは見ておまされよう ユダヤ人でさへ

やれさいヤッドだ ミンガード アフガールだと言つてはいるか
おまえたらか何であるか さあ申してみよ おまえかムスリムか

① 神かムーサトヒシナイ山で話しか
ける祈れ、ムーサトヒシナイ山で
あれた神の顕現・神は常となつて現
われムーサトヒシナイと神する。クルア
ン第21章の節を参照。

② ショール。イスラーム教徒の女性
はこれで顔やましい顔を隠す。

- ③ イスラーム教の礼拝を告げる声。
- ④ 誠実なイスラーム教徒であるがけ
でなく美声の持主で預言者ムハン
マドのマスジッドで礼拝告知者でも
あった。
- ⑤ イランの生母水たスレナ派イスラ
ーム法学者で宗教思想家（100元
ハリーフ）。
- ⑥ 預言者ムハンマドの子孫であるこ
とを表す称号。
- ⑦ 王子、学者をさす称号。
- ⑧ アカカニスターン出身を
表す。

① 胆で誠実さがあつた ムスリムの話をば
かと公正さがあつた その正義感には

② 不みずしく潤つていた ムスリムの心は
その勇敢さには 高潔な生きかたがあつた

酒の礼儀は自らを他人の苦しみに投じてあり
杯は個人の手得から離れてあり

すやてのムスリムは潰瘍のできた血管をさるメス
その人生の鏡に映る行為は堂石あつた

確信していたもの それは腕の力
おさへの恐れは死 父は神を恐れなげだつた

父を息子のふまえを見習わねいら
息子は父と同じ待遇を受ける権利かどこにある

みな酒に酔り空逸に耽つてゐるが
それでもふまえはムスリムか

おまえの中には ハイダルの清貧 ウスマーンは富もいかに
それをおまえは 祖父と心のつながりを持つと言ふか

祖父はこの世ですばらじかつた ムスリムとして
だがおまえは子じめ クルアーンを捨てて

いかに合ひがおまえたち 労わり合ふのが彼らの習い
難渋しがおまえたち かばい合ふのが彼らの習い

スバル座の高みまで登りたいと願うなら
まづは正義を夢見る彼らの心にならな

④ イクバルは初代カリフ・アブ
・バクル(六三二-六四四年)ウ
・誠実さを思ひ浮かべている。

⑤ 第二代カリフ・ウマル(六三二-
六四四年)の正義感を思ひ出して
いる。

⑥ 第三代カリフ・ウスマーンを思ひ
出している。

⑦ 第四代カリフ・アリーを要教さを
思ひ浮かべている。

⑧ 第四代カリフの列名、禁欲、耐乏
生活でも有名。

⑨ 第三代カリフ・ウスマーンは非節
に喜んで金財産をイスラームのた
めに出した。

祖父たちはシナの王位も持っていた、バルシアの王位も継いでいた
口先だけがおまえたち、だからその勇気があるのかどうか、おまえたちん

自殺はおまえたちの習い、かれらは名誉を重んじ自尊心があつた
おまえたちには同胞愛があく、かれらは同胞愛の域性になつた

おまえたちは口が先、かれらは行いが先
おまえたちはたつた一つの帯さへ欲しかるありさす、かれらは抱かれてあつた、花園に

今も覚えてゐるぞ、諸民族はかれらの話も
今もみんどの語り草、かれらの事は

キラ星の様に、おまえたちも萬族の地平線上に輝いていたが
偶像神々のヒンドゥーに心を奪われ、バラモンになり

出ず、ばかりで腫も落ちつたが
ぐうたらになつてしまつた、若者がおまえたちは、宗教に疑いを抱き

、これら若者を新しい文化がすへての掟から解き放ち
ウアバから連れ出し、偶像寺院に住まわせてしまつた

堅意不抜のカイスも砂漠の孤独に絶えられず
町の空気を吸ひ、ジャンゲルの夜浪者かなくなつた

カイスは氣をそぞろ、町にいていいのかいけぬのか
それでも、これほどく当然、ライラーの顔のバルが消えるのは

心変わりを責める声はなく、横衆をいさめる声はなく
愛は気まま、それならと人気があつた、けせ悪い

新時代は電光石火、すへての美事に火がつけられてしまつた
千光を逃れるいんな砂漠も花園もなく

七世紀紀ネドゥの高原で遊牧民の若
者カイスはまたライラーを求めて
放浪する。

遊牧民長の娘ライラーはカイスと一
帯にすす他の男の所へ嫁がせられ
てしまつた。

古き話に按ててこの新しい火の燃料
とていふ預言者の天啓こそが、その火の燃え火がつけられ

だが今日アラハムうような信仰篤き者が生れ出さるやう
原原の火も花園に化し、一面の花園にも燃れるといふその

庭師よ、花園の色あせた色を見て落胆しないかい

ふくらんだ夢の星で、枝は輝き出すとこらだ

枯れ葉からも枯れ枝からも、花園はまれないだらう

バラは咲き出すとこらだ、殉教者の赤い血に染まり

見ゆかい、空の色を、赤く映えた空の色を

あれば日が昇る熱き地を照らす色

このせう花園には、満開の陽枝も

咲き出さぬに、雨枝も、萎れこしまった雨枝もある

椰子の木にも茂る方もあれば枯れる方もあり

またあるものは、今も花園の中で隠れたまま、だが

イスラームの椰子の木は、繁茂のしらし

その実は幾世にわたる、花園で育まれた実

周囲の活れからき水いである、おまえの夜の語は、今もなお

おまえはあのマゼフ、すべての地かおまえの、カナレである

隊商は決してなくたりはしない、おまえの傷ついた隊商は

おまえを告げる銅鑼の音よりほかに、おまえの持ち物はなにか

おまえは然ゆる境、固い芯のある

おまえの祈りで、明日の不安は、灰になる

⑤ 伝承によればアラハムが偶像崇

拝を非難し神の唯一性を説いたの

でアラハムの果敢ミムルード正

に火刑に処せられた。しかし奇蹟

が起り火が水になり、助かった。

クルアーン第2章の節を参照。

⑥ エジプトでの長い滞在の中、ヤコ

ブの子ヨセフがカナレにある自分

の政務を思い出している。本寺の

イスラーム教徒は、入行しようと

行つた先がカナレである。マゼフ

はイスラームが国境の近い全世界

的の中心だから。

あまえは消えてなくなりはしない。たとえイランが消滅しても

酒の酔いがはんや関係もないように。林はは

それは明らかなこと。タートルの侵入の話でも

カアバは門番を待っている。異教徒の寺院から

あまえこそこの世の船頭。真理の船の

今は闇。だがあまえこそ輝く星

先刻のブルガリア人の攻撃。それけ

眠れる者への節操のメッセージ

考えてみるかい。病気の心に必ずついてくるもの。それは

あまえの機軸心や自主心を試すもの

なせ敵の馬の蹄の音に驚く

敵兵の得意ぐういでは消えはしないぞ。この真理の火は

諸君の目から隠されたままだ。あまえの本考の姿は

この世の客では今こそ必要としている。あまえを

時代を生か返らすもの。それはあまえの情熱

可能性を秘めた運命の星。それはあまえのイスラーム帝國

ちやうちよしている暇からこにある。仕事が残っている

神が一ツの教え。その完成が今も残っている

匂いの様に着の中になせ閉じ込められたままだ。撒き散らしながら出て行くかい

① シリア・パレスチナの古名。

② ここでは國の意味。林は関係なく

人は酒で酔う。すなわちイスラーム

はという酒を飲めば國を治るもの

に関係なく酔う。

③ タートルが海中流域からロシア連邦

に侵入して各地に伝えている予

告。中東アジア各地に伝えている予

告。ブルガリアの敵であつたイスラーム

はヒリヤ人の敵であつた。以後、最

大の擁護者となる。

④ ヤリカン戦争（一九一一年）

に於いてブルガリア軍のトルコの

コンスタンチノールへの侵入。

⑤ 匂いの様に着の中になせ閉じ込められたままだ。撒き散らしながら出て行くかい

⑥ だどえあまえの持ち物が少なくて。それで教とするかい

⑦ ささやきの歌から。台風の騒ぎにするかい

受りて すべて低いものを高めるかい

この暗い世を ムハンマドの名で明るくするかい

この若しお花かないなら 夜鶯鳥のさえずりもなく

世の花園には いづになつても蕾の微笑もなく

酌んかいたなら 酒も徳利もなく

唯一神の信仰の集まりもこの世になく お子えをなく

天の天幕は この名で打つている

存在り秋は この名で打つている

森の中に 山々の麓に 平原に

海に 波の懐に 台風の中

中国の町々に モロツコの高原に

隠れている ムハンマドの名か

諸民族の目は その跡を永遠に見るだろう

おれりか高く揚げたムハンマドを見るだろう

大地の目の瞳 つまり魂の黒人の世界は

そこはまよえたるが殉教者を身み出してきた世界

大地の地 新月の世界

愛する人はそれを言う ビラールの世界と

そこはどりの名に震え戦っている 氷銀りように

その園は目つ睨りよる光の中に花がこんでいる

危急こそまよえの指 愛こそまよえの剣
わか花鉢僧よ まよえの制度は世界にわたるを

☆クルアーンを執筆者の節には「まん

州制は、対んじり名を、赤めた

ではなりか、ことある。

☆西遊の外の世界に属する人々を西

段人が経典して言っている。

☆アフリカを描いている。また新月

はイスラームクシホル、

☆アフリカ出身で、預言者ムハンマ

ドのマヌシトで、礼拝生を考であ

ったので、預言者が執掌する人で

おろえの「アッラーは偉大なり」の掛け声は火の命令
おろえがオキムスリムになるなら、おろえがオキムスリムは神の言葉
おろえがオキムスリムハレマドレ思議なり、神もおろえに從う
この世はおろえか、天の台帳、天の筆で書かれたもの
(一九一二年)

104 酔人

酔めて倒すことは誰でもできる
酔めれば倒れる人を支える時もある、酔人よ
古い酒を飲んで、いた者がまじつた
どこからか永遠の命となる水を持ってこい、酔人よ
あなただけは混雑の中で過きてきた
夜明けは近い、アッラーの名を唱えよ、酔人よ

105 教育とその結果

おれらも嬉しい、若者の進歩か、だが
笑いの唇が閉まってくる、不満を一緒に
おれらも覚えていた、教育が良心を失った、おれらも
おれらも覚えていた、同時に背教と出てくる、おれらも

神の契約が書かれる道其であり、
神の契約を保存しておくもの、
ルアー、第廿二、廿三節参照。

104

「解説」こゝ持てイクバルは、
時、宗教や政治の名のもとに自分
比擬してくる人々と個人的利害の
ために使っていた指導者たちを皮
肉でいっている。

「個人的利害」だけのための右往左往
する指導者の指導者の意。

② かつての七曜で立派なイスラーム
教徒が一人一人と数が減っていく。
③ くだらない言葉にふけてきた。

105

「解説」この詩はハルン丁の詩人ア
ルシエ（十七世紀）の詩句を基に
している。彼は非常に醜い子が生
まれると、即座にその村人を誅ん
ぶるという。イクバルは当時の教
育者が人々の良心を汚すことか前
菜ないというメアセージを伝える
ためにその詩句を使った。

192
 19ルガエーゾの家は、レークリーンが現れた
 だか持つて来ている。フアルハートの答も一緒に
 「他の種を手に取って、新しく種をまた蒔こう」
 われらが蒔いたもの、恥ずかしさで収穫できないし

104 王の倒逆

王は臣民の区別を消し去ることはできない
 食食が國王に並ぶことはあり得ない
 この世で主人を崇めることは、隸従の絶頂となる
 主人にがし抑えて、^①の股をまじえ
 しかし目的が王を喜ばせようとするなら
 地位をわう者、志願奴の欲口を得なければならぬ
 古い任才にはたくさんの對かしさがある
 新しい任才には思考の面が足りぬ
 世の空のもとでの過ごし木の亦もしろくはこうである
 たくさんの言葉が口の甲にあつて毛層のそのままで黙つていよう
 人生にふける安全の任才とは
 隔離をわっている者、ハーフィズも、騒ぐなれ
 がが鼠が好まなう、ふいに騒げ
 下酒を飲め、^②のランヤの音にあわせて飲めし

106

①よれ職業を得て経済的に安定する。
 ②イスラーム教を忘れる。
 ③古代イランの王、ホスロー・パル
 ガエーゾ、ここでは學生の意。
 ④王の妃、こゝでは現代教員。
 ⑤妃を志する石工の待つ斧、こゝで
 は學生達の思考や行動を導く道具。
 ①「解説」この詩はハルン・ラシド詩人ハー
 フィズの三つの片句と一つの詩句
 を引用するこゝで出来ている。最
 後のハーフィズの詩句がこの詩の
 核となつてゐる。最初の6つの詩
 句の中で、世俗的の君主や王に違
 従する日知見主義者比喩を述べ
 ている。最後の詩句で、地上のま
 に追従を遂げ物質的利益を得ること
 とに對し、誠實な志願が必重であ
 る神に向う態度を述べてゐる。
 ②主人の好きな色の股。
 ③ハーフィズ(一三二六?一三九〇年
 頃)の詩の引用。ハーフィズはガ
 ザルの最高誇れる君威しれハルシア
 詩人。

全滿家や又臣や王の僅て軍にはとぞうて築よ
物欲しいうたで正氣の鏡はたたまけつてしまえ
ながしーライズの導師のメッセーヂを聞け
これは天使の心の隠れ秘窟である

①丁王の輝やかしい言葉は神の顕現である
おふえが王の運ぶまにたりたりなら 動機を淨化せよし

107 詩人

小川が歌のながら山から流水が降りて来る
春の居酒屋から 赤い酒を飲んで
千鳥足で歩く小川のメッセーヂをしばらく聞け
生きたらば 愛樂と関係ないことだ
谷間をめぐらうか 雲々をくはい小娘が
鏡の帯を志道びをしながら

本の居酒屋から小川は酒の杯をかすめ取り
低くたつたり高くたつたりしげから畑に華を飲ませる
情熱的の詩人かもし正置の心の内を話せば
その恩恵によりこの人を畑は青々と成る
その詩でかりールの輝きがあらわれ
その民族がアーガルの仕方をした時は

- ② ハーフイズの詩の引用。
- ③ ハーフイズの詩の引用。
- ④ インドを起源にする北インドの探
強者たう一様。
- ⑤ ハーフイズのこと。
- ⑥ ハーフイズの詩の引用。

107

①(解読)イクバールはこの詩で自分
の詩作の態度を明らかにしている、
詩作は句唱しのためではなく民衆の
ためであるべきとする。そしてそ
の中に常は真実と誠意とを分けぬ
はならぬ、その詩の泉は心のあ
かきでなければならぬとする。

- ② 聖かう生まれられた小川のこと。
- ③ 預言者イブラーヒームのことで傷
像破壊者。ナムルム王により火
中に投げられたが、神の力で火が
花に転じたという故事の持ち主。
詩人は愚業のすべてを粉々にし
て民族を新しい人生の大道にまき
る。

土地の人々付永遠の人生の処女像を得る
肝臓の血で詩作が育くまれた時は

世の花園にまじり詩の酒の川がけりなら
花もなく草もなく緑もなく花壇もなし

109 夜明けの朝報

夜明けがその舞の中は 草の芽がうざゆめさを持って来ると
生の舞台から 沈黙が旅立ち、ていく

自然の空の静寂が やがて壊される

そして 森羅万象 その営みを現ゆじ始める

小鳥たちは生命のメッセーを得てさえずり、

花も花園で生命の巡礼衣を身に付ける

晴々としているイスラーム教徒よ、起きておすえも騒ぎを起す者になれ

太陽は地平線上に昇って来た おすえも騒ぎ要求をうる者になれ

この世界が広大の中を歩くも太陽のように動き回り

その視野からこの空の黒点を見えなくせよ

また戦いが激化するようには光線の短剣を引まねき

また不正の暗黒に逃げ方を教えよ

おすえは完全なる光 おすえはひとり裸とばけいことだ

裸になつておすえの真の姿を見せよやるかい

と預言者イブラーヒームの父で偶像
崇拜者。后漢が偶像崇拜や他の悪
に没する時に。

108 解説) イクバルは夜明けの朝報

を情態を食する人々。覚醒のスター
トとしている。これに基つてイス

ラーム教徒を刺激しその無念覚悟

態を終わらせイスラームと神の瓦

めは行動しむけるようにしている。

この詩が書かれた時ワトリ、

ハルカ、戦争の最中であつた。

ハルカ

ハルカ

の天信仰と多神教を光で見えなくせよ。

イスラームの教えの剣。

正太陽は光であり、その光をまよな

らず、そのようになすえも神の光

をささ敬らせる。

は、さり現れて、^③ 瑞穂の目に稲穂となれ
宇宙の心の隠れた秘密を、 明らかなる水

(一八二二年)

③瑞穂は晴間の日が見え明かりの甲
では見えぬ、この偽りの目であ
るや信仰者を神の光の稲穂で洗ひ、
てしよ。

109 祈り

109 祈り イラヤトルコのように、ム

神ぞ多 人スリムウの心に居た願いを与えてください
心を熱くさせ、魂をゆるかすような

もう一度、アーラーシタ谷の、アハてに光を与えてください
もう一度見る熱意を、もう一度要求の気持ちを与えてください

見る力を失な、マシオった日に、もう一度賢明な目を与えてください
わたしが見たものを他の人に見せられるよう

迷いの鹿を、もう一度、ツツカのカオに連れて行ってください
この町に住み居られてしまった者に、もう一度砂漠の広さを教えてください

ムスリム、^④ 荒廃した心は、もう一度最後の、日の審判の混乱を起こさせてください
その空いている駱駝の背中の鞍に、もう一度美しい、ライナーを乗せてください

この暗い時代の中で、ゆううつな人の心に
目を惹き入らせて、もう愛の傷を与えてください
高さを、おいて目的が、アラアテス屋と、同じになるように

大洋の、さうな自信を、海が、さうな自由を、与えてください
微水の、ない愛があるように、大胆な真実があるように

胸の中に、輝きを、おとせ、心が、水晶の、ようになら、せせて、ください

④イストラム教が
生み出した、ムッカ
にある山。
ムムサーは神の
顕現をあらわ。
クルアーシヤク
章、195 聖書、
⑤イストラム教徒の
こと。

⑤神をたれて、しよ、
た心。
⑥ネジトの高原で、カ
イスを、熱くし、
世を、ま。

困難の前途を感じ取りせてください

今日の混乱の中で明日のことが考えられずようい

わたしは不平をいう夜鶯鳥 朽ち果てた花園の

わたしは望遠の物乞い人 この求める者れどうかお恵みを

110 イードに詩を書けと云ふ葉への答え

シャイラー・マール・バーグで一夜の枯葉が言っていた

わたしは冬の秘密を知っている花の季節は終つてしまひました

わたしは踏みつけて歩かぬいでください 花園を巡る人よ

わたしは冬をうらみ葉の枝の形見のまうです

葉の言葉は幾分わたしに心を不安にさせぬ

花園の葉でわたしは心かう春を悲しんでいる

秋に冬の季節の思ひ出ばわたしを泣かせぬ

どうしてイードを喜べるか わたしが悲しんでいる時に

昔の居酒屋はすたれてしまつた

かつての酒飲みの名残りだ わたしは

イードの喜びと辛さをゆれらに聞かせようとしている

だかイードのその新月はわれらを嘲笑している

(一九一五年八月)をイスラーム教徒の輝やかな時代。

るわが詩に人々の心を元気づけ、覚醒させる力を与えてほしい。

110 (解説) イスラーム教の傘下、イ

クハールに現状を語り返させ、

同時にも思ひ出させる役割を

しているが、これはイードの時

友人から詩を詠むことを頼まれた。

歩時トルコの北極北極しみをホシ

ていたが、その悲しみはシャイラー

ルにある有名公園シャイラーマ

ール・バーグを訪れることにより

更に深くなる。その公園はムカハ

帝國皇帝ジマール・シキール(在位

一六九五―一七二七)により造られた。

シャイラーは当時ムカハ帝國の都であった。

III ファーティマ・ピント・アポドララー

一九二二年トリポリ戦争にて味方軍の水を飲まず役目を果している間
殉教したアラブの少女

III (解説) イクバルはトリポリ戦争

の殉教者一人に予言の言葉を送
つてゐる。信じて水を運ぶだけ
でなく、イスラーム教徒としての

高貴地位を与えている。こ

の未知の少女が神のたぬ

命を捧げたことはよく殉教

者の称号を授けている。

ファーティマは およばイスラーム共同体の誇りだ
おまへの体の土壌の一コマは清浄無垢のものだ
砂漠の天女よ おまへの運命にはその重運があつた
信仰の身を投じて勇まらぬ水を飲ませることなまへの運命となる
アララーの道で剣や盾を便りず聖戦を戦へたおまへの
殉教の熱望は心と勇氣をふくませるものか
このような教の様子の花園でも 蕾があつた
そのようなど花を 神よ ゆれりの灰の中にあつた
砂漠に多くの鹿が 今も隠れている
稲事は 雨を降らす雲の中を踊つている

と遠くは能のイスラーム共同体

を悔みながら怒りの中を奇蹟を起す

力を残している。

ファーティマよ おまへの悲しみにゆれりの目から涙の露がこぼれている
だが喜びの鼓も追悼の嘆きの中にある

おまへの土壌への踊りは不思議な喜びを生じさせている

一コマの土塊は人生の悲哀にあふれている

おまへの静かな墓の中には何かしらおまのまが
一つの新しい開放がその胸の中で育つてきている

わたしはそれをゆるりの目的がなまが分かつないか

もたしなはるその墓の中からおまの誕生が見える

新しい星々の表れが大空の底かりの中にある

それらの光の波は人間の目には見えぬが

それらは今、時々の暗さの外にふれられている

それらの輝きは朝や夕やの塵にならざる

それらの輝きの中は古い任才も新しい任才もある

そしてフアー、ティマよ、おまえの運命の星の輝きもある

(一九一二年)

112 朝露と星

ある晩 早ほしは露にこころ切り出した

毎朝 あなたは新しい朝めが目にでまゐる

あなたはさうとたくさん 世界を見ている

起きたり消えたりするそれらの跡を見ている

金星はその様子もある天候から聞いてくれる

人間の住み処は 天から非常は遠い所にあると

ゆれうにもその魅力的な土地の物語を話してくれ

月がその愛の歌を歌っている

星々よ、この世の花壇のこころを聞かぬいでくれ

花園などではなく、それは不平と不満の巣窟だ

そよ風は向うから吹いては来るが戻ってしまふため

聲は聞くが 真の喜び 暮んでしまふため

112 (解説)

この詩の中で早ほしは、朝にあら

てこの世の魅力的な様子が見えぬ

ゆれう、それについて露は星ほし

の期待に反して、絶望と疎外感に

満ちているこの世の様子を語る。

夕方にはなると輝き出し、朝になると
とこの世がなくなるといふのでな
く常に光り輝やいていく。

①すべてに持続性がなく仮である。

何と言えはいいか 夢が花壇を美しくするか
 熱のない小さな何かを眺みたいものだ 蕾は
 花は花鳥の嘆きの声を聞くことか できな
 い
 その根元から何かを真珠を拾いあげることか できな
 い
 歌う鳥は捕まえずら死してしまふ 久びいことか
 花の陰には刺かかっている ひびいことか
 病気の氷仙の目には 一つも濡れている
 心は眼を求めていながら 今の見に視力がない
 つがいの木は心とは不平の熱さで燃えている心だ
 つげの木の葉なので 見た目は自由そうだが
 星は嘆きの火花だ 人間が言葉でいえない
 わたしは天の涙だ 花園の言葉でいえない
 月は地球の回りを巡っている だがこのことをおぼやない
 同じように肝臓の傷の治療も こんらあるよ こんら考えている
 この世の仕組みの土台は風の上にある
 不平の絵は空甲に洋かぶ編り上にある

13 イダルナ包圍

ヨーロッパで真理と謬誤との間に戦いが起った時
 真理は剣を取っての試練に立ち向かわざるを得なかつた

② この世では他の人の苦しみを共に
 することはできない。

③ 動くことができないので、

多常緑樹で冬眠したらわれず緑色で
 ある。

④ 朝露のこと。

⑤ 他の人の志の治療など話かしてく
 れるか。

13 八解脱ノイダルナとトロコのアド
 ヲアノアルのことか かつてトロコ
 のカリブの府かあつた、一九一三
 年二月、ここはトルコ人の身を難
 れたが同年七月再び戻つた。

月軍は十字軍軍に包圍され
シマクリー將軍はイタルナの城塞に閉じ込められ、た
ムスリムの兵士たちの兵糧は尽きた。
希望の面は目前から隠された
ついにトルコ軍の長官の命を
武官令が町中に出された
トルコ軍の兵糧のたゆみはあつたゆきそのが集められた

鷹は告げよと求められ食した
だが町の律法学者がこのことを知ると
怒って、ソール山での雷のようになつた
異教徒の人手銃の使用はムスリム軍に禁忌し
このお触れが町じゅうに広まった

ユダヤ教徒やキリスト教徒の持ちこたへトルコ軍は皆一巻も
イスラーム教徒は神の命に従わねばならなかつた

ユダヤ教徒やキリスト教徒の持ちこたへトルコ軍は皆一巻も
イスラーム教徒は神の命に従わねばならなかつた

114 グラーム・カーティル・ルヒーラー

ルヒーラーはなんと残虐で残忍 復讐心の固まりだつたか
デイムール王の面目を短剣の先でえり取つた
婦人部屋の貴婦人たちに踊りを命じた この異教徒は
この残酷な行為を天地異変にも劣ることはなかつた

114 解説 イクバルはこの詩を歴史的
事實に基いて書いているが必
ずしも全部が全部正しい事
實であらうか
グラーム・カーティル・ルヒー
ラーはロヒール・カンド(ロ・P
州)の太守サヒト・ハーンの息

ムスリムを統下の地が占拠され
た時、難ムスリム被保護民キリス
ト教徒たちの物質に閉して供出の
問題が起きた事件に閉して述べて
いる。どんなに鋭くてもイスラ
ム法で合法でない物は手を出さ
せぬ法の定規を信長をイスラ
ム教徒として立派なトルコ人の
心の様子を述べている。
①真境とはトルコを指す、誤謬とは
ブルガリヤ、ルーマニア、ギリシ
アなど戦いをしかけてきたバルカ
ン諸国を指す。
②月がイスラーム教徒の印、
能く可かつた。
③イスラーム教徒の地区に住む非イ
スラーム教徒から徴収して、代わ
りに保護を手を、子兵隊を免除。

恥をかかせる命令の空をば果して可能であったか

皇軍は在るじやアスミシのようがこれら美女たちには

何れいふことか。こつ冷戦の考は彼またちを教養の道真にしてしまつた

その美しさは 太陽や月 星の目からも隠れていった

か弱は者たふの心は揺れた。それらの足は踊りの足つぎれたあわ

血の川が流れた。賢婦人たちの濡れた目から

この涙打つか。しばらく彼らの目も眺めに見入つてくれ

が加へて思ひなれ。涙から身をばすむた

立ち上がるに膝からその輝やく剣もはずれた

星をもしその空より輝くことも増々しているからさうして

短剣を前に置くに何か者々にふけて、いつかのさうして

まじり目から。何か既気が要求を求めているかのさうして

睡魔の水がその目より火花を消した

暴君の舌は悲しそつた眺めは和すかさを覚えた

またさう上がるも、テムールの聖婦人たちいかに

どうかみだるさんかたの運命をどうわたりでくれ

ゆたしな玉座の上で眠つたりは寝たなりなつた。見せかけの

というの作軍と指揮するもこの侍はさより思はばずと遠くは

わが思ひはさうなつた。さうしていれれば誰かテムールの女性か

ゆたしが眠つていれと思つて、あか短剣を引え抜き、わたりを殺すだろ

たかその秘密かとうどう分かつてしまつた。今までの長い歴史に

その名が不名者というもの。ゆたかテムールの一技からと

子で、ナジーブ・ウトラウーラ

四降で一世紀の年を渡り、

パットの戦いでナ

ジーブがマラウク

の軍勢を破つた。

間、マラウクは

ナジーブの命令

か其の死後、ムカ

アラムニ世と一

ドとその一様を

辱しめ死。しかし

カリテイルは恐

見ているだけだ

八年報復の機会

ウーテイルはラ

地し、シム・ア

をめぐり取つた

しめ打つたとい

はこれらのも事

ちいれ。

正ムカ皇帝シ

115 一つの村話

飼われてゐる鳥が野鳥にこうに言った
 あまえが羽根を持ってゐると言うならわたしはなにか
 あまえが空を飛ぶしやうならわたしも飛ぶもやだ
 おまゑが自由ならわたしも捕らわれてなごいだい
 飛ぶことは羽根を持つてゐるの特徴だ
 かぜ野鳥といふのは感張つてゐるのだ
 野鳥が自尊には大いに傷ついた

その残酷な言葉に聞くと、こゝろに言い始めた
 その通りだ、あまえも自由に飛べるのは
 だがあまえの飛ぶのは限度がある、城の上までだ
 あまえは野鳥の勇気を知らない
 あまえの暮らして地上だ、われら空と関係がある
 あまえは地上の鳥だ、食べ物を地上で探す、
 われらは餌を得るついで、星の所まで飛んでいそいで啄む

116 俺とあまえ

あか眼がけは見通してしまふ喜びを知らない
 あまえは眼差しは自然の秘密を心得てしまふ、だからどうした

115 「解説」

この詩でイクパールは家で飼われてゐる鳥と野鳥が会話を通して、人間が偉大でまよと派手な羽の美しい勇気があるといふ特徴を出している。
 小まげ事柄を使い、大まげ議論を出す、任オはイクパールの得意とする所である。

116 「解説」

この題でイクパールは二つの詩を書いている。この詩は最初の詩である。この中でイクパールは、この世で安楽に過そうが、苦しみの甲で過そうが、結果前者の

見よ かの水の行を おまんに見えるか

多の裏面目さか そり大胆さが驚きを起させん

おまにの祖先たちの眼光がそれに対し 描きしつらん

あの邊りか 今おまにの心の家の中へ住んでゐる

愚か者か おまにの住み処はもう一度塗り 賑やかれせよ

そして見よ 眞實を知るカリームが詩でどうも歌つてゐるか

おまにが誰かに新しした反抗 石水に流る者となれ

表りようにおまにが立つ所 石水に流る者となれ

18 シブリーとハリー

ある日イクトバルはムスリムに言つた

おまにの古れ歌りメロデーは新しい名詞のものとつて

文化はおまにのかつての敵の味方

そよ風をそよ水にヒッては石もなる

人間の帯目り鏡はもうい

聖人は事件の原因を探して

船橋色の天の界の痛みを治す

ムスリムよ 花園の昔の秘密を知る者に聞け

ひうして秋が戦つたか おまにの花園は

ムスリムはわたしの言葉を聞いて泣きかたつた

隠れた悲しみの秘密を明かすことが冷たい吐息となつた

子損言者ムハンマドのこと

子損言者スレイマーンの指環で祈り

名刺がついていんと

子損言者スレイマーンとあるがムスリムを

指す

子損言者をしつたなりて、顔をつ

けて子損言者の顔が涙が流れたので祈

りの祈り祈りだかなくつた

た。子損言者からかかぬいさるん

た。

〔解説〕一九一四年、シブリーとハ

リーは一月廿七日に亡くなった

た。こゝから両者はイクトバルと

同時代のインドの大陸のイスラ

ム教徒の知識人であった。イクトバ

ルは死した後に両人はムスリム

世界や社会の興起・崩壊に關し、

深い関心を持つてゐた。これらイ

スラム世界の輝きであった者の

死は、第一次に戦を地獄にイスラ

ム世界の悪い状態が更に深まる

前ふれらうでイクトバルの悲し

みは精神的衝撃をまたつたものであつた。この詩はその衝撃を表

見よ 秋の様子を ときい始めぬ

人をう木々の葉は 黄色にびびってしまつた

花園の秘密を知る人たちは沈黙してしまつた

その苦痛に満ちたまは心をはかすものであつたが

今花園の人々は沈黙を促して泣いてゐる

ハイリーも天國に旅立つ人になつてしまつた

今誰に勇気があるか 夜明けの間

夜明けは何を言つたか 花は何を開いたか

風は何をしるか

の進展

昔から人々で開つてきた

預言者ムハンマドの灯台とア・ラハブの火花とが

人をとけ去つたやうなもので語り高くあり反乱気味である

その本質とは困難に耐え苦難を求めあつたのである

夜明けの夜明けの歌である

数百年の段階を渡る 夜明けの夜明け

高層や低層 繰り返す研究の必要がある

さう思ひ土からアレッポをとり捨てるまで

雨期の雨と滴とふぶく火の間にある

このふぶくを絶えざる緊張で脱却はせよ

この水こそがアラブ即ちイスラーム其自体の熱情の秘密である

① ヨーロッパの文化。

② イスラーム文化。

③ 物事の原因・結果と早の動きは求

めるのでなく物理的の考えによる

人々。

④ 詩人、批評家、歴史家、哲学者と

多面的の活動。(一八五七—一九

一四年)

⑤ 詩人では作家、イスラーム

の盛衰を述べた大行詩の有名。

⑥ 一八七二—一九一四年)

⑦ 解説) 進歩とは絶えずの苦難や辛

苦と辛い水色くぐり抜けていく

時程らぬと進む、世界の中心に

我もそのやうな経過を経て再生す

るとしてゐる。

⑧ 預言者ムハンマドの赤い、彼れ

強く反対した人。

⑨ 夜明けの輝き。

⑩ 日々々々ワルシニア語で、

⑪ アレッポは鏡を産物として有る

⑫ 灯台とベルシニア語で、

⑬

下
① ぶどうや蜜を水にする筈は
② 早心を謀して 太陽を作らる

120 スイデーター

ある日預言者は人々に言った
おなたがたのうち、財産を拜つていふ者は神の道に就かされたし
この指示を聞え、ウマルはふかまびになり立ち上つた
當時 彼れはこゝろに何ぞかいう録貨があつた
ウマルは独り言を言つていた、スイデーターよりも少くす
先に行つてやるぞ、今日あたれは馬が
ついに預言者のところの財産をもつて来た
任事う知らぬは犠牲の精神が必要である
預言者は聞いた、ウマルよ
神への献身であつた心は満足か
いくらか自分の子供のなめ取つておいたか
親戚や愛する人のため分け前を取つておとりのえぬスリムた
ウマルは申し上げた、財産のうち分は子供たちのために
残つた半分、それは畑やわしいイスラーム共同体的ために
やめて預言者の教友もやつて来た
預言者に対する愛と忠誠は又一倍強かつた

③ 打つクはベルシヤ語、打つ
④ 聖人は心こゝろ、太陽と日、ぶどう酒
う意。

121 解説 この詩は六三一年十月、三
千の兵士を拜つて預言者ムハンマ
ドによって交戦されるダブーク遠
征の準備のため資金や武器の調達
が求められた、その時の出来事につ
いてである。そしてこの中で怪り
初代カリフとなるアブー・バクル
がいかに自己犠牲に當んでいんか
がウマルとの比較で述べられてい
る。

① 後にお代カリフとなるアブー・バ
クルの称号。
② 預言者ムハンマド。
③ 後の二代目カリフ。

④ アブー・バクル即ちスイデーター。

その忠実なる人もありとありゆるきを持てやうて早ん
世間も人の目も値打ちがあるさうに見ふるあらゆるきのを
奴隷の金も、硬貨も衣服も財産も

自慢のたてがみを持つ馬 駱駝 驛馬 驛馬也

預言者は言った、子供たちの中に、おぼれはならぬとい
ふるに、愛したるのその秘密を知つてゐる人けさい出した
月や星々の目があなたのせいで輝きを輝けています
目々のまぶらがあつたおかげでぼつていゝヨロヨロ

蝶には腐食で充分、夜驚鳥は口たて

マイノイイタには神の預言者で充分

121 現代文明：「フライズイ」の詩をもとにして

現代文明の酒ははたひんが熱がある

ムスリムの上色の体は菜となつて燃え上つた

それは借り物の老を吐き出して、燃やした

輝きを見せる太陽のさのりた、さのりた

若者の若者はそれで新しい仕方を得た

気取ることや、見せながらしや、自分さや、大胆さの

不意と思考に文化が起きた

だるでの詩の聲をきこくを笑いと考えた

122 預言者ムハレマド

121(解説)ムスリムの若者の上は、
した西洋文明の影響をうけて、
評である。イタバルはそれを愛
けらるべきで、バとして、
カようを考え、イタバルのきく
の詩の中で見える。

①宗教や民族に対する感情を、
「バ」もこの考えた。

新しい歌たちは自分の信じたことを忘れてしまつた。だが
魔術師の手並が、光景を魁力的に眺めさせた。

新しい生活は、さうさうな景しみを持たせて来た。

抵抗や、自画自賛や、悶えや、金欲の

新しい燭台の輝きでムスリムの奥の明かりが揺れた。

だが、あが古の経験は蝸に對して言う

「お嬢子、おまえはその熱を寧ろ冷かして置く

わたしのよう、心の熱があるなら自らの火で燃えよし

122 七き會の思ひ出

守宙の一つ下つゝ靴子は運命の囚人である

手おとせば毛織や無カに打し自らを隠すハールである

天の軋きも思ひのまよひでなく太陽や月の通りも思ひのまよひでない

水銀のようば星々もその歩みは思ひのまよひでだけ

簞の壺のま路は花園で壊れることである

花はしる草はしる花園であら長し開花しけりればなるぞい

夜鶯鳥の歌であれ良心の沈黙の声であれ

この世のしからずみの鎖はすべてのものか捕らわれぬ

月の上はこつじうにも出来ぬ、秘密が現れぬ

心の中で涙の洪水を乾いてしよう

⑤新しい西洋文化を指す。

⑥詩人フアイズイーのハルシア語の

詩から引用。フアイズイーはムガ

ル帝國第3代皇帝アクハル大帝へ

在位一五五六一一六〇五年の宮

廷での桂冠詩人（一五四七—一五

九五年没）。皇子たちを宮庭教師

も務めた。

122（解説）イクハールはこの詩を母親

の死に際して書いた。イクハール

の母親は重要な性格で貞潔な人で

あつたが、詩人書きはお出来なかつ

た、しかしイクハールの教育はけ

絶えずお義母している。

イクハールは守宙に於けるすべ

このものは神の意志と命令による

とよく理解していたにもかかわら

ず母親の死には耐える力があつた。

この詩は3連かうでまている長詩

であるが、それ故に各連から開え

人間が胸の中に喜びと悲しみの踊りが残らない
歌が残っても旋律の樂しみは残らぬ

知識と知恵は流し溜めぬという道具の強盗になる

つくり目覚めた心はダイヤウかけうにふるだけだ
わが花園に露のみずみずしさをなく

ぬか目は赤い涙の保持者でない

ああ残念 わたしは知っている 人間の苦痛の秘密を

不平の音がなくなつてしまつてゐる わたしの中の楽譜には

わか層の上に 時の華やかな音がなく

わか心には驚かず 笑わず 泣くことがなく

だからあなたの前影はいつまでも鈍く悲しみのメッセージ

ああ それは少く強かな知恵をそそげ費にしてしまつてゐる

溶れる涙で魂のものは永遠になつてゐる

苦痛の認識に石の心の理性は恥いてゐる

溜め息の息の波でわか鏡は輝やいてゐる

わたしはあなたの写真の奇跡に驚く

それは時の飛翔の方向を迷えさせてしまつた

それは過去と現在を同じところを持つてしまつた

それは子供時代をぬんしたまま蘇らせた

あなたの膝でありお前の命がめやされた時
その言葉はよくしゃべれなかつた

憂慮の糸が強く表れている。こ
のような感情の表現を別にすれば
この詩の最大の特徴は生死の重層
が述べられてゐることである。

それを水う連のテリマはつきの
通りである。

第一連は宇宙のすべては神の意志
によるというこの説明。

第三連は人間はすべてが神の意志
によることが分かる。感激を失な
うということ。

第二連は、母親の写真を見て、自
分の子供時代が思い出されること。

第四連は、母親の前ではどんなに
虫派な大人になつても子供である。

第五連は、優しい母親を思い出し
て、甘痛を述べてゐる。

第六連では、この世は苦痛の家であ
り、誰も死を逃れられないと言ふ。

第七連では死は人間生活と消す
ことは出来ないと言ふ。

第八連で神は人生の保護者と言ふ。

何か今でこれを話さううまには批評がある

真珠を降らすか目の涙が価値は違ふではない程のものである

學問がある人々の高尚な会話 熱年の分別

現世での名譽の輝き 若さの誇り

この世でのこの水う高所から降りて来てしまっている われらは今

母の愛は素直な子供になつてしまつてゐる

気が取らずに笑ひ 苦勞から解放された人となつてゐる

誰か今 故郷でわたしを待つてくれているだろうか

誰かわたしの手紙の来ないことを為をもんでくれているだろうか

あなたのお墓にこの嘆きを拜つて話さう

夜半の祈りなわたしを誰か思つていてくれるだろうか

あなたに着てくれわたしは星々のように高い運命となつた

物が祖先の家来は人々の尊敬の的となつた

この世について記された本で あなたが人生は黄金の頁だつた

あなたの人々は終始一貫してわたしにとつて信仰とこの世の教訓であつた

なうにあなたを愛する生涯わたしに尽くすだけだつた

わたしは恩返しが出来ないで居た今、あなたは遊んでしまつた

背丈が長つたようであつた若者

わたしよりずっと多くあなたを助けた必愛であつた若者

人生の出発点のなかで、わたしと肩をならべていた

彼は愛れおいてはあなたを写し、そしてわたしにとつてはわが右腕

第十連では人間の精神は滅する

とびたいと述べる

第十連で死は人生を新しくする

のといふ

第十一連で祈りのテーマを更に説

明する

第十連は夜明けの朝である

はうれ、人間も死んで再び生か

えると述べている

第十連は母親に於ける祝福である

①神が求めたことに従つてゐる

②即ち花が開花し果むこと

③神の意志

④ほんの物をそれらに影響を及ぼすこ

とはできない

⑤深きりれ、夜半過ぎに起きて信

うこの礼拝に於てはアツラーカ

らう思ひが多いと述べている

⑥イバールの兄のこと

その後もしあなたを恨み、どう仕度もなく子供のように泣いている
研えぬが、四六時中泣いている

だがあんなかあんな泣いたらう人生の畑に播いてくれた兄弟愛の種子
あなたとり別れを悲しんで、その死者受せさらに強固なものに成った

ああこの世は、老若男女にもり忍びやうか
人間は過去や未来のひとと多くの魔法の虜か

住まふことはなんど難しく、そしてお石こやぞしいか、死ぬことは
この世の花園の中でその風りよつればなんと安備か、死ぬことは

地震がある、寒害がある、飢饉がある、悲劇がある
日々の争はなんとも多く、これら嫁たちを養育しているか

金しい人々の荒ら屋は、金持ちの屋敷に、死か
荒野や村に、町や花園に、廃虚に、死か

死は静かな海にも混れを引き起す
波の胸に船は沈む

だが不平の余地もななく話す力もない
人生とは何か、首を絞める首飾か

この隙肉の中は鐘の音という不平を除く何もない
濡れた目という一つの物を除く何もない

だが訓練の時もやがて終わるだろう
あの旭天の幕の後に、さらに夏なつた時もある

この花園でバラやチューリップに胸を掻きむしりがあったとしても
夜鶯鳥が啼き起すまればならなくなつたとしても何か

クルアーンによれば、宇宙には7
つの天と7つの大地が存在し、そ
のすべてが神によって創造・管理
されている。9天とはこの世界の
上にある9層の天と神の玉
座を指して言うている。
意志のその苦しさを表わす表現。

その籠の中に秋の溜め息か閉じ込められていた。茂み
が水と緑いっけいの成りにしてしまおう。永遠の春風か
もしわれらの火花が踏めつけられた土の中で眠っているにしろそれか何か
もし土のこの一握りが一時の住み処だとしてそれか何か

人生の火の終わりは灰などがない

それはその運命が暖水でしよう。うな真珠などがない

人生とは自然の生命の観点からして何と愛すべきものか
生命を守ろうとする願望がすべて物の本性にある

もし人生の跡が死のきで消すことかできたとしたら

守衛の法則はそれを一般動機にしろなかつたら

もし死が安撫なら死はなんでもないもつと思ふ

眠りが生きていることに何の害も与えないように

愚か者よ、死の隠れた意味とはほかにある

空が一時的なものとしてれば、別のことか明らかになる

水の上の風の絵は花園のような眺めだ

荒れる波を壊して、泡を作る

だがそれは波の揺れまた河を隠してしよう

そして何と残酷に泡はその姿が消されてしまふか

もし風が泡をまた作れないとするなら

風は水を壊すのには配しないではいなかうたらう

風よ、この動きはほんの意図を待つか、創造の形式に

それは風が創造の上にかき持つ証拠である

眠りうように思ふ。

①風の中にたくさんの形を作る能力
があるこしう証拠である。

① 存在の本質とは願望のためは犠牲もけることではないか

それはよりよい種の探求となることではないか

あめあめかきかない水銀よ 輝やく空の星よ

その情熱が夜のお陰を受けているゆえに火花は気まぐれ

理性が驚くゆえに星々の寿命の長さ

人間の物語とはそれら星々の競べで一瞬の間

だがその視線が空をも越えていくのはこれら人間のうである

天使たちよりもその目的において純粋なのは

輝いている場合のように自然の寧ろ中にあるのは

空といふと一点にすぎないので その知性の広がりの中で

その不完全な知能が真理を求めて不覚であるのは

その心か人性の言葉のたの證であるのは

② の差は空の火花よりも小さいか

この太陽は星々よりも価値が低いか、

花の香より目けエウ中でも目覚めている

心と成長のため心を探るわせているか

この種子に隠れている人々の炎は

自らを見せ自らを成長させることは 抑うめられてゐる

暮め冷たさにも負けない

土中に閉じ込められてもその熱を失なわない

それは花とびつて夢から出てくる

あなかも死より生の衣服を得たかのように それは

③ 新しい物を求めることので古い物が犠牲になつていく。

④ 星は夜だけに見えるからで。

⑤ その限界や広さを推測できず時間

や空間にとらわれたい所。

⑥ 天使は聖なるものであるにもか

かわらず人間に跳びした。即ち天使

よりも人間の方が聖なるものである。

⑦ 人間の炎は死後も続く。

甚ほその散らばされた力をまとめる後を
天の首にまで纏はしごをかけら水ら解り

死は人生の時を新しくする名

眠りのゴコロの中で覚醒のメロセージとなる

歌ぶこゝに慣れた者が死を恐れるか

死はこゝの因で再び飛ぶために羽根を休める場だ

世の人々は言う 死の苦しみは癒やされないし

別離の傷は時の流れて癒やされるし

だが死者に對する悲しみがあるには

朝夕の巡りの鏡とは關係がない

死者への悲しみの瞳は時の魔法で終わらない

時は別離の剣の傷への膏藥ではない

何故と難を突然 頭は降りかかる

流が止めどなく人の目から流れ落ちる

心は嘆きや不満と絶えず關係を切り

目の流りある所かう心の血が流れる

人間は耐える力を欠くように見えるが

その本性に不可解な感じがある

すなわち人間の魂とは死ということを知らない

想は之目に見えなくとも その消滅はない

人生の道具は悲しみの炭で灰になる

だが火は 感情という土質な水で消し去れる

各時の経過に關係なく、絶えず流
れている。

を日の新から消えても死ぬことば消
滅でなく一時の別れである。

あゝ嘆きの抑えは、無名の沈黙などでない
①の自覚も慰めが、忘れることなどでない

果つ空の帳から朝が現れると

朝は夜の汚れを地平線の裾から洗いおとす

しみれたチニールリッパの花に、火の衣を付けさせる

戸のなぐつた小鳥たちに、さえずらせる

夜鷺鳥の胸の籠から歌が出る

数音の歌で朝風が満たされる

眠りは落ちていたバラ園や、山々や、海峡が

やがて生という花嫁と抱擁する

②もし夜の後に朝が来るといふことが定めなう

ゆが銀色の思考の網が、この世を覆い

それがわたしはあなたを思い出さないと、ええ

わが苦痛の心にはあなたを思い出さずして、満ちている

ちよこつとカアバで、泣きか祈りで満ちていらふように

その名が人生である善悪の連なり

その表れは無数の見出すことのない世界である

人生のそれそれの場面での習いは異なっている

現世に緩く来せも、一つの説話場である

そこは死の田畑にとりこも不毛だ
だが行動の種子にとりては危険打違している

③死の秘密を知る、こと。

④人間がどうして死んで再び生まると
えらなにか。

⑤カアバ聖殿。

⑥行為の場。

⑦死の関手はない。

自然の光は伴といふ暗黒の囚人で付ない
人間の想像の輪の広かりは狭くない

あなたの人を月光より明るかった

明け方の早よりあなたの旅はましかつた

夜明けの館よりあなたに暮場が光り輝やまますように

光で満ちてすように あなたへのこの土の寝床が

天があなたを墓の上に露を撒き散らしてくれすように

新しく出てくる緑がその家の見張り番をしてくれすように

(一九一四年)

123 太陽光線

夜明け わか視線があたりを見回してはいる

空に太陽の光線がらららと動き回っているのが見えた

わたしはその光線に聞いた「落ち着きない者よ

おまゝのいういうしてゐる命は何かそんな不安なのか

おまゝは稲妻の音が 空か

いの中奥のあつたの脱輪場つために去つてゐるヒコウの

それは隠れか それともおまゝの習性か 一体何だ

それか あるいはくらくか 探索か 一体何だ それほし

力が沈黙の人生には混然と照つておろす

あたしは朝の膝元でまてし水でふりこす

そこそこ人間は魂だけであり肉体
はついていない

現世では肉体というものがついて
いたりして行動や思考の範囲は狭か
つた

ここから出て向うの世界に行くこ
と。イクバルの母親の没年は、
一九一四年十一月。

123 (解説) 第一次大戦が連盟側の勝利

に終わるとその水を祝して一九一八
年十二月、詩会が開かれそこで記
した。

自然の風景を使って自分らメア
セージを入れる任意の詩を書
かれてゐる。詩の中で風景に託し

てイスタバム共同体の無気力を指
差し、以前風景を取り戻すよう

述べられている。最後の行句にそれか
表わされてゐる。

そんなが仮装に熱をあげて働く。収

わたしの運命はわつこわたしの混乱状態にさせています
光る望しみがいつもわたしの探索に向かわせています
雷光でけありません 見た目は火のようですわ わたしは
世界を燃らす太陽からの覚醒の伝言ですわ わたしは
層層とわつて人間の目に入つていきます
夜が眩したもうを 見させます わたしは

酔っているかなさんの中で正気を探す人はおられませんか
眠っているみなさんの中で自覚の喜かを持つ人はおられませんか
(一九一八年)

ウルフィー

ウルフィーの想像力が詩の言葉を造った
「ノーヤ」^{ノヤ}「ラービー」の驚きの家をも壊してしるうううう
愛うデーマで歌も詠んだ

目に今も赤い涙を流してしまふううう
ある日わが心は彼を夢でつむりううに不平を言った
「世の混乱の中がわが心は自覚してゐるううが目をさうたくなりました
世の人々の気持ちの変化が起きました」

ありかたでううううの感じが世間からなくなつてしまひました
詩人うう年の愛きは 聞く耳に重くのしかかりました
富うう人の目か目覚めの喜びを知らないのです

様か室か、収獲時れたらううう熱
か最高に達し、熱分転じて雷に乃
うううう、収獲物を破壊するうう
ううううがある

目を大きくみせ、美しくさせるも
ううう

ウルフィーは(一九一五年)

一九一五年イランのシーラーズで生
まれたヤルシア詩人。職を求めて
一五八六年インドに来てムガル帝
國第三代皇帝アクバルに任へ桂冠
詩人もなる。詩作はエニクで、
その思想の特徵は自尊心を重んじ
情熱的であり、イタバルの思想
と似てあり、イタバルはその窮
奮を受けける。
①イラレの有名な詩学者(一九一〇
一〇三七年)。
②トルコの詩学者(一八七〇一八九
五年)。

誰かの不平の甚ぐらいでどうして闇を遠ざけられるでしよう
夜通し安眠をむさぼる者も夜明けの明るく空は重くまですし
暮から戸かした 下世の人々は不平を言つた
声を大きくせよ 音楽の楽しみが得られぬのなら
駱駝ひまり歌声は更に大きく 駱駝の背の駕籠が重いなら

⑤ ウルフィーの詩より。

125 ある子紙への回答

欲があつてもわたしは走り回る勇気がない
ボジシマインの獲得と探し求めることと関係がある

感謝甚大 わか長質とは微妙な感情の表現に向き

感謝甚大 わか語げ人の粗探しをすることなく

わか語げ人々の心の田畑がまよ々しくなる

この世でわたしは地上に川の恵みをもたらす者かどう

政治のどつれは、あなだにいつの草や、こゝろで二

ゆたしの爪は愛の逸みで わか胸元がまよむるためのもの

王の座に所帯の願望は心が死んだ証だ

題の詩は声のわたり、フェイスがその秘密を明らかんした

「もしもあなたの願望がキズルとの同席なら」

アレキサンダーの目から隠れてくれ 命が水のようにに

⑥ 哲学の館。

125

〔解説〕イクハールはある時友人か
ら、役人は時々招待してないだろ
かとい、また裁判官には自分も
うことを聞かせようかとい、常日理
心押けておいたよ、何かとい、か
らその忠告の手紙を待たか、その
詩はそれに対する返事の手紙である。
イクハールの性格には清貧を重ん
じ、神に絶対の依存、そして自尊
心を尊ぶといふことがあつたか、
この詩にはイクハールの性格が遺
憾なく發揮されてゐる。

ヒントラウー教徒の人々はゴータム¹の言葉に關心を示さなかつた
その類例のない一粒の塵の価値を見分けず此をなかつた
残念 神の声れ耳を傾けられなかつたといふ人々不幸なことに
本は²その真実の甘さが分からぬ

彼は人生の秘密であつたものを明らかにした

だがインドの人々は思案の哲學のばせていた

神の灯明を輝いてゐるうけその雲ではなかつた

恵みの雨は降つたが 土地は受け取る能力が乏しかった

あるシネードラといふ人々は悲しみの家である

人間の苦痛はこの任み処の心には關係がない

バラモンは酔つてゐる 心を傲慢な油に

フツダの明かりは燃えてゐる 外の雲で

だが運命の時を経てインドの偶像寺院が輝き出した

アーガルの家がイブラーヒームの光で輝き始めたように

ついにまた起きた 神の唯一性の声が、パシジャブから

インドを一人の全能な人が 夢から愛までせた

〔解説〕イクバルはインド亜大陸
で二人の宗教改革者に賛辞を送つ

てゐる。ゴータム、フツダとナー

ナック(一四六九—一五三九年)

である。ヒントラウー教のカースト

制度は最初の抗議はゴータム、フ

ツダから起る。カースト制度に於

ける反対はすべからぬ人の平等は

この詩の中でも述べられてゐる。

フツダに続く二番目の改革は十八

世紀にナーナックにより開かれた

スィク教の中にある。この宗教は

イスラーム教の強い影響をもつて

ヒントラウー教の改革されたもので、

神の唯一性を信じ、カースト制度

の廃止がその宗教の大特色を帯びて

つてゐる。

①ヒントラウー教のカースト制度。

②ヒルマ、中国、タイ、日本など。

③一神教の寺院の様相を帯びて。

④カアバ神殿を建てた預言者で偶像

崇拜を批判した。アーガルはその

父親で偶像崇拝者。

127 不信仰とイスラーム

ミルザー・ダーニシの対句をもとに

ある日イクバルはムーサーに聞いた
「おなたの足跡のせいでシナイの谷は花園です」^{だか}

ナムルード王の火は今も世界で炎を上げています

「おなたの昔の情熱はなぜ目から隠されてしまったのですか
シナイ山の人が回答は「もしふまえがムスリムなら

見えないうつを捨てて前にあるものの虜になるな

「前にあるものが好きなら切りノルりような信仰が必要だ

「さもなければ灰になる。ふまえの人をうばは

「もしふまえが見えないう世界に心酔しているなら心配はないう

「フアラーシンの谷にテントを張り、神の恩寵を待っているがいつ

「前にあるものを輝ませた束の間だ、目に見えないものの力は永遠だ

「その真実性は愛と関係がある、作と心との関係がようい

「ナムルード王の炎はゆらめいている、今もなお、たか何だ

「蠟燭は煙の中で自かろうを添ふ、明るく輝きながら

「われらの光は石の光のように目から隠れているのがよいし

127 (解説) この持り最後のミルザー・

ダーニシの対句を使い偶像と神

の違いを説明している。対句の

中の蠟燭は偶像とし、それは目

に見える物がかやがて消える物、

光を神とし永遠に存在するもの

として、この詩全体が、ク

ルアーンク率領の心算、おまけ

く別部を述べられているムーブ

トとイブラーヒームの愛に言及

すること、神の愛の永遠性と信仰

大正を強調している。

「ふみミルザー・ダーニシはイ

ランクのマシャドお鼻のムルシア

は詩人であつたがムガル帝国皇

帝シラー・ジャハーンの時代に

インドに移住して来た。

①ムルサーのこと、シナイ山で神

の顕現を要求し、雷を打たれる。

②預言者イブラーヒームのこと、自

分の信仰の主張の余り、ナムルー

ドに火中投じこまれたが、お茶に

其偽を弁せられたある西歐人がこう書いた

物多きとしてその人は定評があつたが

「アジアはローマのアレクサンドロス大王の練兵場であつた

大王の雄略は天よりも高かつた

歴史は語る。ローマの大王の前では

ホールスヤダーラーがした主張は無敵だ、たゞとを

世界のこの空よりよくに輝やく王を

青空を驚いて見ている

だが今日 アジアで誰も彼を知らない

歴史家でさえ 彼が見分けられない

それと反しビラール あのエチオピア王子の卑しい者は

その性格は讀書者の光のようならぬに照らされ

世の暗よりようビラールの胸に託された

その声は 王も食者も従う者となつて来た

それと白人も黒人も入り交り

今水は金持ちの反逆にもしてまた

心をとろけさせずそのアザンシヤの聲は今も新鮮

何百年にも少なり どの年老いた人も聞き続けている

イクバルも 此れは誰の愛の恵みか

あのローマ人は消え どのエチオピア人が永遠を保たうは

128 (解説) この本の中でビラールが取

り上げられたのは二回目である。

詩の中でアレクサンドロス大王は

アザンシヤの王者のビラールの比較

がされ、神の道を行く者はこの世

が狭く限り大々の記憶に残るし言

う。

①三三七七年、アレクサンドロス大王

にタキシラで敗れたインドの王。

②三三二八年、アレクサンドロス大王

に敗れたイランの王。

③世俗的なびんが大王のこととして

ちやかたは消える。だが神の道に

殉ずる者は永遠に存する。

129 イスラーム教徒と現代教育

話人でリク・クミリーの詩を合んで

「頭の狂ったイスラーム教徒よ」と師の教えがあった
旅人に語り、世界の教には道真が必要だ

社会の教王は変わり、変化が起つた
かつて価値のあった人が、今は誰にも求められなくなり、まじまつた
おまえの輝いていた火の美は、そのせいで暗さも消えていふか

今は火花のまじまつた星の光も、少なくて小さくなつて、まじまつた
見えないものには忘る者もならず、目の前の物は狂う者もなれ
今は現在する物への影響が諸国境の人々の間で幅を利かせている
この因ではおまえの望みでは成切はおぼつかない

おまえの綱では古くなつて、まじまつた、飛ぶ鳥は素早く放物だから
この時代、教育こそが国の病気を救う薬だ
悪くは、まじまつた血に、教育こそがメスの働きをするし

道案内の指図であたしは、教育に魂を注いでいる
荒野を開拓するはほごぶるの命に従ふことが必要だ

だがよく見分けの利く目よ、あたしの不幸な様も見てくれ
「足かう刺を抜いていると、駱駝の寫眞が目から消えてしまつた
一瞬うつかりしていると、その間に、百年が過ぎてしまつた」

129

「解説」イクバルの教育詩は自ら

彼の養成と神と重なりために開う
べき能力の養成であつた。イクバ
ールはこの詩で当時の教育を批判
して、最後の行をベルシア詩人マ
リク・クミリーの詩句で締めくくつ
ている。

マリク・クミリーはイランのコム
出身で、九七七年インドのデカン
に東て、ビジャパールに在籍詩人
とリク・クミリーニ自身は「多量で大層
尊敬される」。

① 宗教教育に熱中するかわり、世俗の教
育を受けよ。

② アラビア詩やベルシア詩に代わつ
て英語を。

③ 英語教育に
を預けるの一人で、道案内で有名。

雲はあう日 花園で夢に言つていら

「わたしは一時期 天國の花園の夢の中にいりました

あなたが花園の夢を何かに覚悟を解わせるよりなすのです

ゆたしり驚さう目の中であが目は天國を見ているよ入です

この花園の管理人はむなしか女王さまと聞いておりました

荒野でもその方の足跡から花が咲き出ると聞いておりました

いつか一緒にその方から口をきいてはくれなを連れて行くてくはしませんか

「多分たりは隠してむねの泣きさうにして連れていつてくれませんか

驚はさうた 下ゆれうの王女さまとけ

その方のひと蹴りて石も輝やく空石になつてしまふ位です

だかあまゑの性終はさうかやかで尊しく 王女さまの様子には気がいかにあり

あまゑかわか仲間とけつてえさうで行くのは無理

しかしあまゑでもわか王女さまの所まで行くことはできます

何かさう痛めための熱い涙となれば

その方の眼差しけむハッラムの人々れとリイードラメッセル

悲しみは打ちまじりかれた人の涙水を真珠にしてしまひます

130 解説「イクバル」はこの寓意詩で

苦しんでいる人々を救ふ熱い涙を

涙でこぼす価値があると述べてい

る。

1860年、イマーム・フサインの

殉教があった月で、人々がフサイ

ンと他人で悲しむ月、即ち悲しむ

た泥む人々に打しての意。

③断食明けの夕陽をイスラーム

教徒にとっての祭り、即ち聖しい

の意。

131 サイプの詩をこゝにして

イクバルは、おまへは自分の筆をこゝに作つたか
 この花園の遊鳥と鳥と、その鳴き声の悪名を高めるもつた
 おまへは、アイマシの谷の火花を踏んでいる。だが
 この地よりシナイ山の種子が冬芽するのは無理だ
 夢は強い息でも花にたれない
 すべてが自分からを高めようとする願望を定めている砂では
 田、たことだ。花園の人々の気が飛つてしまつた
 長者の心が起さていない。若者も勇氣を見失つた
 目覚めてゐるはずの心が心の中で眠つてしまつていては
 救い手もとりまゐる水だ。甘い言葉も
 もし声をふさごていることが出来なければならぬこの花園より出ていけ
 といううちは砂漠の孤獨の方がずっとよい。この妻より
 「サイプは荒野で輝やいているのがよい
 彼の心では砂漠のまじこには木石打ちでまじこい」

132 天国での対話

隠れ天使がわたしに言った。天国である日
 シーラーズのサフデイーがハローウーにこゝに言った。たと

131 (解説) イクバルは、人々がいそ

ラムに關心を私あなつた。こゝに、ニんた状態では誰も私の
 詩に耳を傾けてくれないと失望
 感を表わしている。その失望感が
 サイプの詩から引用した最後の
 対句で最もよく述べている。
 サイプも生活の糧を求めない
 インドに生れたシリア詩人で、タ
 リーズではヨル、イスファハーン
 で学び、その後インドに来て、領
 事に優れた詩人であつた。一〇八〇
 年没。

132 (解説) こゝはインド・ムスリム

対しての西洋教育を受けたアイ
 バールの見解が表わされてゐる。
 その右めいイスラム世界の二人
 の先賢、一人はインドの詩人ハ
 リー(一八三七—一九一四年)

空を輝やかす詩の真珠の光で

月や星々の明かりを消してしまふ程の者よ

インドのイスラーム教徒の様子を語れ

途中であたばつてしまつたのか、目的地まで頑張ろうとして

その血筋の中には宗教の熱が今も残つて、いるのか

その叫び声の熱さげ空をも焦かして、いたかし

長老の言葉に、ハリーリ付大いに感銘し

泣きながら、言ひ始めた、詩の奇蹟を見せろ

年老いた天が、日々のハリージをめぐらし

教へて、導教が得られようとの声かして、来りし

しかし、それで、信仰の動機が、得て来りしん

世俗的な名を、得りしんか、イスラームの鳥は飛んで、行つてしま

宗教があれば、目的は、高きか、生ずれよ

若者の情は、身しく、物質的に、足りな

宗教によつて、人々の間に、調和が、得られ

イスラーム、共同体の、一致が、導教は、その、礎

花園の壁の基礎が、揺らぐ

開らぬ、花園の、終りか、始りか

イスラーム、共同体の、ガムが、ムの、東より、水を得ない

新しい、若木には、不信心の、仕方か、生じ

この、詩を、どうか、スリ、ア、の、前で、下さ

インドの、ムスリム、が、われし、を、降、を、す、人、と、考、え、ま、せ、ん、よ、う、れ

他は、トルシマの、火、符、サ、ア、デ、イ、ー、ハ

ム、ニ、一、の、頃、九、二、年、頃、を、選、ん、だ、

ハリーリ、は、一、八、七、九、年、有、名、な、大、行

か、詩、で、イス、ラ、ム、の、盛、衰、を、ま

いた、その、中、には、イス、ラ、ム

到來、以前、の、アラ、ブ、の、様、子、を、そ、う、後

イス、ラ、ム、が、興、こ、り、ハ、イス、ラ、ム

が、衰、え、し、た、徳、や、福、々、中、で、ハ、

イス、ラ、ム、教、徒、の、盛、衰、や、崩、壊、を、詳、し

九、世、紀、に、お、け、る、極、度、の、衰、退、も、こ、

ら、れ、ハ、ム、ス、リ、ム、の、前、進、り、を、め、

西洋、の、科、学、や、技、術、の、習、得、も、必、要、な

と、の、考、え、を、示、さ、れ、て、い、る、

オ、し、た、ハ、ハ、リ、リ、の、詩、を、言、ひ、

デ、イ、ー、は、イ、ン、ド、の、若、者、へ、の、西、洋、教

育、の、効、果、を、聞、い、て、い、る、西、洋、教

育、は、ム、ス、リ、ム、の、物、質、的、な、こ、と、で、は、多

く、を、な、し、な、か、ハ、イス、ラ、ム、の、文、化

的、宗、教、的、信、徒、が、ら、引、を、離、す、作、用

を、し、た、その、予、期、し、な、い、駭、回、を、ハ

リー、リ、に、六、番、目、以、降、の、灯、台、で、語、ら

せ、て、い、る、

ム、カ、の、壁、を、ス、ク、内、カ、ア、ハ、聖、殿

ヒ、サ、ア、イ、府、の、中、間、に、あ、る、泉、巡、礼

者、に、水、を、信、ず、る、所、

①

柱之尼刺の本から聖徳太子は得る水ない
筋いだき毛から 緋緋物はつくぬない

133 宗教

ミルザー・ハイダル詩をもとにして

西洋の哲学者の教はこころである
存在しないものを探求する者は愚かである

② せし形が見えないから 真実は何か

③ シヤイフもバラモシのようは偶像崇拜者になつてゐる

現代の学問の基礎は感じらるるさうう上にある

④ 今の時代 宗教という瓶は紛々である

⑤ 多くの宗教であるもの それば未熟な狂気

それて人々の頭がふかしく撥ま立てられてゐる

しかし人生の哲学者はこころにさう

完全なる師はそり秘密をこころに明かしてくれた

⑥ 下すての完全さと共に多少の混乱はさませの

完全な知恵者であろうし 狂気なしではいけない

134

解説 ① イスラームの基礎は神に對する愛は專づいてゐる。それ以上知性だけで神を知ることはできない。愛う狂気も必要である。従つて最後のハイダルの詩句はイクトールの考えをよく示してゐる。

② ハイダルはバトナ(インド)で生みれたウルシア詩人。十ろ句の詩句を作つたと言われ、詩人カーリフ(一七九七-一八六八年)にも影響を予る、一七四二年デリーにて没。

③ ムスリムの一つの宗旨を表現し、スーフイの師、長老をじり意。

④ イスラームの神の唯一性を信する者かたくなり多神教や不信仰かふえてきた。

② マデーナの旧名。ここに預言者ムハンマドの墓がある。
③ サアデーの詩より。

アラブの武装した若者たちは隊列を組んでいた
シリアの大地の花嫁は ビナイを待っていた
ある一人の若者は水銀のようい落ちるまきかなく
やうて来て軍の大村に向って言った
隊長ブーイド殿 ゆたしに戦いは行く許可を与えさせてください
わが忍耐と安心の杯が溢れこぼれまわした
わたしの不意です 預言者ムハンマドと別れて
愛では一瞬間の別れも許される事ではありません
わたしは預言者のもとへ参ります

もし何かメッセージがあれば喜んでお待ちいたします
この戦牲と戦身の様子を見てその日は濡れた
その日は鞘から抜いた抜き身のようにだった
大持は言った あまふはをういう若者がたか
老人にどうしてあまふの愛の誓いは尊敬しなげぬばならないか
預言者ムハンマドが神意があまふの誓いをかたえさせたくれまうか
あまふなんといか あまふの愛のありかは
あまふが預言者の誓いの間に着いたら
ぬたしの方からの挨拶とフタの言葉で中し上げてくれ

預言者がした約束 ぬたしは流されまうか
預言者がした約束 ぬたしは流されまうか
ぬたしは流されまうか
ぬたしは流されまうか

この詩は六三六年のヤルムーン戦争
この詩は六三六年のヤルムーン戦争
この詩は六三六年のヤルムーン戦争
この詩は六三六年のヤルムーン戦争

この詩は六三六年のヤルムーン戦争
この詩は六三六年のヤルムーン戦争
この詩は六三六年のヤルムーン戦争
この詩は六三六年のヤルムーン戦争

この詩は六三六年のヤルムーン戦争
この詩は六三六年のヤルムーン戦争
この詩は六三六年のヤルムーン戦争
この詩は六三六年のヤルムーン戦争

135 宗教

イスラーム教徒よ、その共同体を西洋の諸国とくらべるな
預言者のイスラーム共同性は、その構成が特別であるから
彼ら集団のよりどころは回や人種である
おまへの集団は宗教の力で安定している

宗教の裾がきから離れたら、集団はどこに行く
その集団が消えたら、イスラーム共同性をなくなる

136 木について、春の希望を持って

秋の季節に木から落ちてしまつた小枝は
春の雪でも、緑に生れぬ

その木には秋の季節が絶えることなど終焉
そしてその木は花や実とも関係がない

おまへの花崗にも秋の季節がある
花の袋に付着の花殻がない

葉は落ちて歌っていた小鳥たちは
おまへの木陰ある木々から飛び立つてしまつた

折れてしまつた枝から芽を
おまへのは気づかない、世の成り立ちを

135 (解説) イクバルにヒッ、その共同
性は地域や人種、言語を同一にする
者の集団でなく、イスラームと
いう宗教を通しての同一性を指し
ている。この考えれば、イスラーム
でヒンドゥー教徒とイスラーム教
徒が一緒になつて、回を成せぬ。

(一九一五年七月)

136 (解説) イクバルはイスラーム教
徒は集団から離れているイスラ
ームを批判することは出来ない、
集団から離れていく者は地獄に落
さ小るといふ、個人はイスラーム
共同性との関係を述べた。

イスラーム其同伴と深い關係を持つて
木々との關係を持つて春の希望を持つて

137 ^{メエラシ} 早天の夜

天から夕べの星の音がする
朝が曉拜する日は、今日夜の夜だ
と身がめまば、最高天まで一花びた
早天の夜ばムスリムにこうに教える

138 花

花よあまよえばなせに配しているのか、夜驚鳥の切れ切れの心を
才がよこよえは、自分の衣服のほころかを縫え
もし面目を誇りたいなら、この世の花園で
あまよえば刺れからま、て生さるようせよ
樵の木は庭園で自由でもあるが足を取られてもいる
そ水ば東轉う中で、自由を得ている
けうな心付ければ遠慮せず、辱めやれ
一滴や二滴の露などに感謝せず、林や萩をひくくり返してやれ

137 (解説) 早天とは預言者ムハンマド
が聖遺(ヒジエラフ)の前年七月二
十七日の夜、天に昇り、アツラ
の許まで達し、再び地上に戻つた
ことを指す。早天の夜を述べた
の詩はヨクルアーン、第1章を説
んぶ後イイクバールの感情を描い
ている。そしてイスラーム教徒が
聖女イレーザ預言者よりこうに神と
合一の境地にまで達せられること
を示唆している。

①朝も問題にすぎない程、今夜は凄
大な夜だ。

138 (解説) この詩は花や花園について

述べているように見えるが、イク
バルは花でイスラーム教徒を、
花園を社会の暗示として使ってい
る。花が誰かが飾りとなるため
はその内面をきれいにし、神や
預言者の飾りになるのが最高であ
るとしている。

それば決して自尊心の輝きなどにはなれはしむなれ 花園にホコホコを挿んで
誰かが帽子に付けた夕 誰かが首飾りにしてくれたりして

花園の花の蕾に雲はつぼりよ、うん言つて消えぬ

花折る人の暮かに耐える力があるなら 多し匂いを作れ

もしホコホコが紋を知らぬなら 多し匂いを作れ

まづ匂いと匂いの世界から願望を絶て

だがつぎの中で見よ そこにホコホコの人生の究極の完成が隠れてある。

誰の光のようなまじき人がホコホコを折つて襟元の飾りとするおどろかす。

② 神や禰言者ムハソマドを指す。

139 シエイクスピア

夜明けの朝焼けにひとり川の流水は鏡だ

夕暮水の歌はヒリク夕暮水の静けさは鏡だ

花びらは春の美しい鏡の鏡だ

酒を愛する者ひとり杯という花嫁のいる部屋は鏡だ

美は神の鏡を以て心は人の鏡だ

人間心のためあなたのため言葉の美しさは鏡だ

あなたを天に届く程の想像力が人間が真実が見える

あなたを輝やかしい知性は人間の最後の目的か

あなたを見よとすう目があなたを輝かす

太陽の輝きの中は太陽が隠れていろりを見たり

139 (解説) ミノルの法数書れよれはこ

の詩は世界中の詩人ガシエイクス

ピアハ一五六四一六八一六八〇に

つまずきをまくことか企てられ在時、

イクバルが書いたもの。イクハ

ブルはシエイクスピアの心理洞察

の深さを評価し、灯台の後半の

片句はそれか表わされている。

① シエイクスピアの後半第二のシエ

イクスピアはそれか表わされている。

② シエイクスピアの作中

③ シエイクスピアを指す。

世界の目からあななく存在は隠れて見
しあふたんの目は世界を裸にして見た

自然は己の秘密の保持にもしりつかれている
そういう秘密を知る人を誰も再び生み出さな
いだろう

知わたしとあなた

わたしはカリームのような自覚がなく
わたしはザリムリーの魔術で欺まられた
わたしは喉の中で燃えつきた声
わたしは願望の悲しみの話
わたしは愛の道徳の物語

わたしは願望の悲しみの話
わたしは愛の道徳の物語
わたしは願望の悲しみの話
わたしは愛の道徳の物語

わたしは願望の悲しみの話
わたしは愛の道徳の物語
わたしは願望の悲しみの話
わたしは愛の道徳の物語

わたしは願望の悲しみの話
わたしは愛の道徳の物語
わたしは願望の悲しみの話
わたしは愛の道徳の物語

わたしは願望の悲しみの話
わたしは愛の道徳の物語
わたしは願望の悲しみの話
わたしは愛の道徳の物語

知人解説の詩の意旨は

全イスラーム共同
心が崩壊し、異教
徒の力が強まって
しなつた。レガレ

今日のイスラーム
教徒でも再びヒラカ
ずれば、その理想
を達成できるとし

て、最後に神への
祈りで終わる。こ
の詩へのインスピ

レーションはクル
アーン第3章の
心算である。

①シナイムで神の頭
現を祀りたムラ
イの呼名で、神

と話をする人の意
で、ここでは詩人
としての役目を果

せなくなくてし
た本人を指す。
②神の唯一性を宣

べ、偶像崇拜を否定し
た預言者イブラー
ヒームの呼称。

ヒームの呼称。

世の戦場は新しくなく、戦いをなす敵も新しくない
一方に聖アリーの道を行く者、他方にマルハブヤアソタルに終つる者とある

ビフク恵みあるれ、アラブヤアソアラブの王よ、恵みを行つていろ
わが水に飲んだちは、おまへがアレキサンダーのよ、任道願をなさんとこのうの
（一九一八年）

（一九一八年）

141 捕囚

捕囚は尊敬の念を増す、捕らゑられる者の人格が高い時
シリア暦第七月の満月は、女貞に閉じ込められ、価値を得る

最上の鷹狩者とはいふん、な物が、それば血の一滴の因ヨリ
鹿のへその中に入り込められ、鷹の血に染まる

しかし自然は必ずしも何でも育てるわけではない
鳥と籠の世話になる鳥は少ない

カラスヤトシビの習は、この捕らゑ水の中にならぬ
こりませげた鷹と籠だけのものである
（一九一九年）

142 カリフの地位の物乞い

もし国が争許から消えるなら消させよ
不きえは神の命令に不誠實になるな

141 解説「キラーフアト運動の沈黙化」

が知られ、ムハンマド・アリー、
ジョウハルヒシヨーカー、ト・アリ
の二人が逮捕された。一九一九
年、両者が釈放される。各地で祝賀
会が開かれ、イクバルも参加して
その祝賀会を説き、また詩である。

シリア暦第七月、この月の雨が、
口に入る。と真珠が出るとは、
さかしていろ。

② ハルシア詩人ハーフス、の詩より
引用。

142 解説「第二次大戦で敗戦国にアフ
オスマン帝国のクリフの在統いつ
き、一九一八年十二月アムリト
サルでカリフ擁護委員会がイギリス
スに代表団を送り、カリフの保護を

（一九一九年）

かき之には歴史の知識がないのか
カリフ判の物乞いを始めたか、おまゝは
ぬれぬれが自分の血を使つて買つた
その王位は死すべしと云ふ、ムスリムにとつて
少が骨が砕けても恥ずかしくない
他の人から薬を患んでもうう程にはし

俯フマーユーン

(一九一八年)

おふフマーユーンよ、あなたの人生活完全燃えていた
あなたのお花ば、夜々灯明を増すものだった
あなたのお茶色の作ば、やせて薄いたじかつた
だがあなたのお運命精神は層のように輝やいていた
そのお弱い体の中に昇教が心があつた
らう、うじ一握りの土の中に天を覆つてしまふ花があつたように
だが賢明な心は死を少しも気にしな
夜の静けさの中に明日へう混乱以外、何もな
死を悪かな人は思える、人生の終りだ
だが人生のこの夜ば、永遠の生が始まり

詳たる訳送かされた。レカレイク
パールは単なる要求では駄目だ
してその譯文には反対でこの詩を
書いた。代表団は八月廿九日
命乞の金を浪費しただけで要求は
受け入れられず帰つて来た。
以下カリフ確證を完全クムル
向けてウキヤ。
パールシア語での詩。

43 (解説) フマーユーンは雅号、本名
はシャール・アインで高等裁判所
の裁判官を務めた。イクパールが
友人で一九一八年没。その息子が
父親を偲び二三年より有名なウル
ドゥー語雑誌田フマーユーンを
刊行。イクパールの詩も多数掲載
される。この詩は彼のため長歌。

①夜か過ぎ日が早り明るくなるまで
の混乱。

詩人

川岸である夜をたしほその思いに沈んでいた

心の奥底に一つの苦悩の世界を隠していた

夜は静まり返り 唇は咬さ止み 川は音をなく流れていく

川沿いか水の絵画の如く一瞬 戸惑いを覚えた

乳飲子が揺りかごで寝ているように

曇りし波も深い罅りに落ちているようだった

夜の麓かに暮り小島たちは捕らわれ

ちろちろする星々も月の呪文の魔となっていた

空然ゆたし道室内のヒズルを見る

老齢をむすの蒼々しい色つやは夜明けのようであった

永遠の秘密を求めるときとわたりは向つてさう

心の目が開いているなら 世界の眺めはブエーに覆われていない

ミルを聞くや心に最後の審判でどうな混血が起つた

わたしは探求好きだ。ん。そこでこうに話し始めた

ヒズルよ 世界を見通すあなた目の前にある台風は明らかだろうか

それら大混血は今 川で静かに眠っているか

貪者の船し 清い命しそして孤児の聲しを見て

ムーサーの如きも あなたの前では 故郷を茫然としている

144 (解説) この詩をイクバルは一九二二年四月のイスマーム護国軍の年次大会で詠んだ。

第一次大戦の終結は一般のレイスラム教徒にとつて新しい時代の始りとなった。トルコのオスマン帝国は徹底的に破壊され、首領のコンスタンティノールは連合軍の占領された。それ以外にトルコだけに限らずインドからモロコシまでのイスラム世界は不運と運が訪れた。インドではヒンズーファト運動が起り多数のイスラム教徒が投獄された。またアラブはイギリスの膏の毛とトルコは反逆し、メッカ、メズクナりの支配者はイギリスの資金援助者になった。このような状況の中でイスラム世界の形勢は新しい問題を生じてきた。イクバルはそれら問題に

預言者ヒズルの言葉を

基でムスリムの形を明かりを提示した。

この詩を聞くにめれたくさん

を提示した。

あはた住み処を捨てて砂漠を放浪している

あなただけの人をば日夜もなく 朝夕もない

人生の秘密とは何なりが 帝國主義とは何なりか

そして其を家と労働者の間の一の騒ぎは何なりか

アジアの古い秘録僧の上着はぼろぼろになった

新しく宮を得た民族の若者はマントを羽織っている

アレキサンダーは生命の水を欠いてはいるか

アレキサンダーの気持は今も急ぎ野郎

ハイシム家の一徒はムスタファーの宗教の名譽を売っている

土や血にまみれてトルコ人は悪教を誦している

火かあがっている イカラーヒームの子孫がいる

ヒズルよ 誰かまた誰かを試す種りなのか

ヒズルの答へ

荒野の放浪

なぜおまえはゆたしう荒野の放浪を驚くのか
休まないこの世にこそ 生きている証しだ
家を離れぬ者さ おまえはあの光景を見たことか
砂漠の中で隊を出發の令の鐘が鳴る時

の人が甚より推測しよれば二万人
をくだらなかつたという、幾つか
の打句の報告でイカバール自身
思いもせず進み、馳走も喰いた
いう。

最初この時う構えは、詩人ヒ
ズルの答への二部であつたが再考

の結果、後半を五つに分けその
れ題がつけられた。

このアルーンの中は詳細な名前
は多くは章の節の、ゆかりの
しもがたとわさる。

ヒズルは一度ムーサーと一語に旅
に出た。途中二つの事件が生じる

かヒズルは結果起る結果を知ら
らなかつた。しかレムーサーは

何が起こっているかと驚いた。つ
りムーサーは事件の結果の知識

がなかつた。

この結果の中で詩人はヒズルに
言ふ、あなただけが洞窟には今す

で持来現れる様子や出来事を見
ておしこまう、それ証拠はつきの

ことで得られる、ヒズルよ、あな
たは村を回りながら子供を無量の

まま殺してしまつた、またあな

だ

砂丘の上を鹿の何てやらも動けず、あつた歩をより、
夜露をしのぐ道具もたない夜堂、あの道標もなし旅路、
夜明けに水銀のようになおく星の現れは

大空の屋根から天使かぶりエルの顔の現れのように
砂漠の夕方の静寂の中でのあの日没
それにより、なみ一層輝やいた、かりーんの世界を見通す日は
そして水がある泉での隊商の休憩は

天竺の泉の回りに集う信仰篤まんなちのようた
愛に任う者は新しい荒野を求めての探索
だかおまえは在りぬで畑と栗椰子の鏡にしろかかまいるだけだ
絶えずる回教でこそ人生の杯は執りてくる

とれこそ悪かものよ 人生の巡りというそのだ

人生

人生とは獲得の勘定を越したその
人生とは時に生きた 時ハ命を犠牲にするものだ
それをあまえば今日や明日の尺度で量つてはたらない
絶えず在り絶えず動き回る者なり人生は常に新しい
もれを認めているならあまらぬはほえの世界を作れ
人生とはアダムの秘密 宇宙存在の心だ

はある場所でもたらし現の子供の家
り壁を強固にし、そのようにな
とをせしむか、あつたばあを
知っていた、しかしあつたは一勝
に救をしいたムーサーはその後
子を心配した。ムーサーはその後
にあつた秘密を知らなかつた、そ
こであつたに聞いた、じうしてそ
うなうかじ、じうしてあつたはこ
うしたかじ。即ち神はヒズルに物
を能く与えたが、ムドサリははあ
れを与えていなかった。

「食者の始れついでにはクルア
ーシ第1章の33節、「道命は
はつては同じく及ぶが、
現を壁しついでには同じく物
節れその記述がある。

③アレキサンダーはかつてヘルズに
生命の水の泉に案内されたがそこ
に今水は乾きかた。しかし
今なお健在で誓いを尽している。

ここでアレキサンダーとは遊覧家
や地主の苦心である。

④預言者ムハンマドの曾祖父の家系。

人生の眞實は石工の心に附け

ミルクウ川 斧 困い石である 人手とは
鎌属の中では水を減少して氷のなれ川となる
だが自由の中では人生は限りない途である
人生はそれ程の力だ 昇りかたなる
土塊の形の中に人生は隠れてゐるか
存在の海からあまれば泡のようになつ
この損害をなげろ 家でのあまれの鎖練こそ人生だ

かまゑが未熟である限りあまゑは土の心と固まりだ
あまゑが熟すと あまゑは無敵の剣となる

眞實のため心の中は死の湯がある心よ
まずその土の中入れ物の中に命をつくれ
火をつけよ 骨の物りこの地を空に
そしてその皮から自分自身の世界を作れ
人生の隠れた力を開くかにせよ

その火花が永遠の光を全むように
車の上上に太陽のようには輝やくだろう
バトクレーンレウ地がもう一度高価なレバーを産出するようには
その方へ夜の嘆まの天使を送れ

夜の早夜の中で その秘密が分かるようには
今は最後の審判の時 ありふらば最後の審判の時にいる
何か行爲を示せ 急げ者よ ありふらば大事なものの中にあるなら

今最後の審判の時 ありふらば最後の審判の時にいる
何か行爲を示せ 急げ者よ ありふらば大事なものの中にあるなら

今最後の審判の時 ありふらば最後の審判の時にいる
何か行爲を示せ 急げ者よ ありふらば大事なものの中にあるなら

この一語は第一流大戦頭、イザリ
スラハカのものにトルコオスマ
ン帝国からのアラブ族を運動を企
た

① 預言者ムハンマドの稱言
② 預言者アダムとノアを降くとい
スラムでは預言者の中で祖と考
えられてゐる ナムルドに火の中
に投げ込まれたが火が水になつた
とて有名 ヨシでサムスラムの志
多イブラーヒムを火に投げ込んだ
ことと有名だが こゝこゝではヨロ
バの意

③ クラアーン第3巻の節に「カハ
ムハムマド」は、明らに地上に上
に、は、ヨリとかれハザブリエル
を見出し、おかかアリエルなムハ
ンマドに空を現し啓示を予えたこ
とと有名。その故に現水とは故
録の中での希望ハザブリエル

④ カハムマドの意を第3巻に「われは
このように、天と地を三回ア
ラハムに示し、それとかれは悟り
かひらけてきた」とあり、第3巻
節ではヤクベレに「月、太陽、

⑤ 神を認識してゐるなら
⑥ 神の友の志で預言者イブラー
ヒムを稱言

⑦ 神の友の志で預言者イブラー
ヒムを稱言

⑧ 神の友の志で預言者イブラー
ヒムを稱言

⑨ 神の友の志で預言者イブラー
ヒムを稱言

さあかまへに話そつ それら諸王の執事を
帝國主義といふ力のある所彼の魔術である
彼征服民が夢から醒めると

また彼らを眺らしてしまふその石 征服者の魔術とは
マフムードの魔術の影をアッサーの目

首にかかつてゐる首飾を魁カザルと見せしめ
だがイスラエルの民が怒りて沸きたつと
サームリーの魔術もいつかムーサーにより壊される

首飾の座を倒し清い性情を持つ者なればさうしく
その唯一の者は統治者で残りばアーデルの彫った偶像である
諷刺でふまふの自由な性格を辱ある乃

誰かの偶像を作ることにほつたはばバラムン以上の異端だ
西洋の民もまゝは古い音楽である

その調子の中にはカエサルや音を除いては何もない
専制君主の神が民主主義の衣をまとひ足を踏み鳴してゐる
それが自由のサンアイアの天女をとおすは者エマのろ

議會 改革 平等 権利など
西洋医学の味は甘いか 効き目は既むきを借すものだ
會議での議論の激しさ ああ神よ

こゝれは貴王家の一つか 金づくりの

① 宇宙の証や宣言者アダム出現
は人生の奇蹟を表われてある。こ
の真実を知らぬに自らの世界を
作りぬばならぬ。

② 神の意志により作られた最初の人
間でありまた人類の始めの種で
である。クルアイン第2章30
節、第4章11節、第5章30
節、第6章11節、第7章11節

③ クルアイン第6章第11節
に於て、アダムが有れども、仰せ
に於て、アダムが有るうである
石エフアルハドは志する王妃
イリーノを愛し、石山を築り運河
を造りミルクラリを流せばおま
の志に従ふといふ言葉を直に受け
て運河を完成せられた。このよう
にん任困難であるつとにち向つて
いくのが人生である。

④ 宇宙の征伐、即ちこの宇宙にある
ものの秘密を知ることは、そしてそ
れを支配すること。

⑤ 高い官職、富、財産、名誉など、
は現世のアフカニスタンの地、ルビ
ーや高価の石の産出で有名。

この色と香りの煙氣を正徳園に思っている。おまえは
あつちが考へ、鳥籠を自分の菜と思つてゐる。おまえは

資本と労働

労働者の所に行き、わたしのメッセーヂを伝へよ
ヒズルか、ラメッセーヂか、これはず宙からのメッセーヂだ
おまえは狡猾な資本家に食ひくらうれてゐる
幾世紀にもわたつて、おまえの分け前は鹿の前の上にあつた
雷を作らさば報酬を得るには得てゐない

だが金持ちは貪し、へ者た多か善行をしてもらうよかんだ
アラムートの城塞の魔術師が来るにはハシッシの筆を早えん
うろとおまえは愚かにせられをさうめ路の板を考へてしまつた
人種、民族、教会、王國、宗教、資本の色

おまえの主人は、うろまゝ調合して庭事を作つた
愚か行者の犠牲になつて死んだ、愛の神々のせいだ
野い心地のよそで命の現世を無駄にした、おまえは
巧妙な任方で資本家は勝つた
いとまたやてく労働者は負けました

上り下り、世界の真まううの体方は新しい
東にも西にも今、おまえをちの時代の始りがある

僕たちが他に幾んかを得るにクラ
ーシ第20章第節に「予にこれに寄ら
たらが町に入ると、それを略奪し
ていしとある。

① ガズナ朝(九七九—一〇五七年)
一 在中史アジアで扱ふとせそのま
朝の最盛期を、九八〇—九八九
二〇三〇年)で、ヤシド北都はも
何層も遠征を繰り返した、アサ
トではその忠告の奴隷でここに
主が征服者の忠告であるうに對し
被征服民のことである。

② 祖孫者ム、サーヒキリス人の時代
の話で、ムリサーは一時期作み処
か遠くに離れてゐた、その間、
サームリという者が現われ、農民
民を作つた仔牛を神だと言つて、イ
スラエルの民に拜ませせた、ヤが
アムリサーを死、アムリサーの像か
を見え、サームリの像か
ら人々を離れ、放ら神の唯一性の存
へ向かわせ、クルアーン第20章
88、89、90の節を照
③ 神と考へてゐる。
④ アブラハムの父親で勝家。

志氣が即ち考ては凌をも受け取りたい

愚か考よ 誓のようにはおまへの誓にいつまで露を置いておくりか

民を主我の愛離り果は果しい

だがアレクサンダー大王ヤシムシート王のようは眼をそたらう

新しい太陽は大地の子宮から生ずれん

そよ 沈んだ星達の唾をけいつまで

人間性かすみの鎖を絶ら切つた

天厨みらの上放でアダムが目はいつまで泣くか

春はさく水をする庭軒にさう

バラの傷のれり^①高聖での丸置がいつまで続くか

愚か石地よ 燐台の目より離れていよ

自命り作終の光の如を輝やかせ

イスラームの世取

かせぬたしれトルコアラブの話をするのか

イスラーム教徒の若かや悲しみけぬたしれ隠されてはいない

三位一体の息子たちがカリールの遺産を持ち去つて

キリスト教の基礎の煉瓦にヒジャーズリエかたつた

赤色の帽子の者たちが世間で辱めを食つた

完全な誇りよ高き者たちであらうんか今日ば嘆願せざるを得ない

①ローマ皇帝、その中から皇帝の祝歌が始てくる。

②志す者か合け者は果てのげいば歌でいつまで聞くか

のしにあるう志でヘルシア活り誇の一部。

③イスラーム教の六位王行の一つ。

④イランのハサン・ビン・サバーハ

一三四年没)が建てた要塞。彼はその城を天園のように作つた。

町で人々にハシムを手を離かせ

てどの城に連ねて来た。そして自

命を預言者しきかせたという。

⑤労働運動の始まりを指す。

⑥高き者まの燐台。

⑦第一次大戦でアラブがトルコを逐逐切つた。それまで教首キムスリムに

貢献して来たオスマン帝国は粉々

ルになった。アラブ自身も海軍諸國

の奴隷になった。この連合件がこ

のようば我月星に誇りよめっている。

即ちアラブがトルコを逐切つた話。

ヨーロッパ酒をりかうルシアは買ひ続けている

その酒が瓶を空にしてしまふような強い酒を

西洋諸國の軍略でイスラーム王國体が細切れにされた
らうと金を發で切り刻むように

イスラーム教の血は氷のようになくなくなってしまつた
第二でまゝは皆まゝでいる 否、その心は自分の運命が分らないので

⑤ ルーミーは言った 古い運物を新しくするには

その土台をまず壊すこと 古い運物を新しくするには
自分が元から離れてしまつた だがイスラーム王國体の目が開いた

神はあるたに目を与へた 愚の考よ よく見よ

骨折用の石骨を求めると食より散れの方か、といひ
羽根のない鶏よ ソロモンの所比自分の要求など持つていくは

東洋の救済とはイスラーム王國体の固結にある

⑥ だがアジアの人々はこうと 今も無知のまままだ
政治を捨てて信仰の城塞に入れ

國家と常はメッカ聖域の保護による果定

メッカ聖域の監視のためイスラーム教徒は一つにたろう
ナイル川畔からカシニガルの地まで

肌の色や血の巨剣をさす者は皆でも消えちたろう
大なる天幕で生活する者であれ 高佐のペドウィンであらうと

人種がもしイスラームの宗教より重んじられてたら
世界かうよまゝは境のようにならぬと行つてしまつたはず

⑦ アッラーの友で積ずる者イブラーヒ
ームのこゝとトルコが支配してい

たアラブ、パレスチナ、シリア、
イラクなどの地が第一次大戦でア
ラブの東部からヨーロッパのキリ
スト教徒の勢力がトルコに入つた

⑧ アラブはトルコ反してキリスト
教徒勢力を退場し、トルコ政府を
終つて、トルコが領土は狭く
つた。

⑨ トルコ人は赤い色の帽子を愛用し
た。この帽子はもと元々アラム
スィムに行き渡つていたが、第一
次大戦でトルコの敗北によりその
帽子は卑しめられた。

⑩ 第一次大戦後、ムスリム世界はた
くさんの世俗的國家を建てた。

⑪ イランの思想家で神秘主義者詩人、
(一ニ〇〇九―七三年)

⑫ アッラーの護衛者ともあり王でも
あつた。聖書や真、人間などその
命令に従ひ、その前では疑念など
は何うも存在をなかつた。そのよ
うな力がある者が所へ歸く、自分

⑬ アッラーの護衛者ともあり王でも
あつた。聖書や真、人間などその
命令に従ひ、その前では疑念など
は何うも存在をなかつた。そのよ
うな力がある者が所へ歸く、自分

⑭ アッラーの護衛者ともあり王でも
あつた。聖書や真、人間などその
命令に従ひ、その前では疑念など
は何うも存在をなかつた。そのよ
うな力がある者が所へ歸く、自分

⑮ アッラーの護衛者ともあり王でも
あつた。聖書や真、人間などその
命令に従ひ、その前では疑念など
は何うも存在をなかつた。そのよ
うな力がある者が所へ歸く、自分

⑯ アッラーの護衛者ともあり王でも
あつた。聖書や真、人間などその
命令に従ひ、その前では疑念など
は何うも存在をなかつた。そのよ
うな力がある者が所へ歸く、自分

⑰ アッラーの護衛者ともあり王でも
あつた。聖書や真、人間などその
命令に従ひ、その前では疑念など
は何うも存在をなかつた。そのよ
うな力がある者が所へ歸く、自分

カリフの地位がこうせでもう一度強くなるわけ
どこからか探して持つてこい 祖先たちの心臓と肝臓を

隠れてゐる物と表れてゐる物との区別がでない人よ 目を覚ませ
アブー・バクルとアリーに捕らわれてゐる者よ 目を覚ませ

金には愛さが必要だった それで充分しつくしたとはいへ
今少し我慢して 不平の効用を見よ

あまよはぬ 川の流水の強さの絶頂を
今流水が流かぬに涙の鎖はなるか 見よ

イスラーム教徒が見たすべの人の解放の夢
今日イスラーム教徒である者よ その夢が正夢なる様子を

火焔にヒリ反は生存を道具である
この古い世界が死んでまた再生するその様子を

ゆかさ草の鏡の中で目を開き
やうてくる時代のかすかなイメージを思い浮かべて見よ

更んをこつ 争いの騒々しさをかたみある
運命の力の前では 計策を受ける 辱めを見よ

あまよはぬイスラーム教徒 胸を願望で満たし
いづも目く二つは アッラーは、約束をたがえたもうことばありやせんとの言葉を遣け

(一九二二年四月)

の要求など持つていくが、ここで
疑はムスリム、ソロセシは西欧列
強國の志、インドムス
リムはイギリスにヒラー

アラブの復讐を要求してゐた。ク
ルアーは第2章は節参照、

政治から身を引けというのでなく、
神のない西洋政治から離れよう志、

アブー・バクルは初代カリフハ
三二(三四)年でスニ派を代

表し、アリーは第四代カリフハ
五六(六一)年で初代イマーム、

シーア派を代表する。スニ派、
シーア派をいはいよくない。

シーア派は二回いよくない。
② ヨーロッパにける第二次大戦の
兆し。

③ クルアーは第3章は節参照、
だがは管轄したか、アルターも案
詳したもう、だが最をすぐ水花
諺者ばアラマであらわるとある。

④ クルアーは第3章は節参照、
引用。

185 イスラームの再興

岸々の輝らいていく光は明かると夜明けの証した
地耳鼓から太陽が昇り 眠けを傳へ時代が去った

東洋の死んだ血管に命の血が流った

この秘密をシイナーも アラーゴも知らなかつた

西洋の台風がイスラーム教徒をイスラーム教徒にした

海の波に沈められて真珠は新鮮さが現われるように

散座なムスリムはまた神の御前より贈り物をもらえられる

トルクマシ人を持つ秘蔵 インド人の知恵 アラビア人のような権者をか

賜りの影響が夢の中で手を取るなら 夜驚鳥よ

鳴き声をもう少し高あげ 任せたら殺り叫びが命からなにかと

を因り産むも 業ごも 投ごも問えて歌え

赤い三つまの軍命は水銀から融れられたいから

あの清い目はなぜ馬を殺りたてに見せられているか

その身には戦士の勇気が見えている筈なのに

夜驚鳥よ ナコークッアの花の中は願望の灯をこもせ

花園の一粒一粒を探索する殉教者ねせよ

イスラーム教徒の目の涙の中に四月の雨の跡を目がせじ

カリール・アッラーの海にまた真珠が生ずれるだろうか

イスラーム共同体の本はまた新しく綴じられ

イスラーム家の鼓はまた葉と葉をつけたらうら

185 (脚説) この詩は一九二三年三月間
後の第百回イスラーム朝護身會大
会で誦んだ。

一九二三年のイスラーム世界の
状況は過去数年に比べて悪化が
定心を与えるときであつた。トル
コはゼリヤに抗してその存続を
置かれて成功を得つた。

一九二二年九月ケマル・パシヤの
指導のもとでソマリヤを占領した。

この勝利をインド・ムスリ
ムは祝った。トルコはまたオスマン
リシヤもアダルナを襲撃した。

イラシヤも英・露に抗して革命の方
に向きつた。

エジプトはイ
サマスの保護政治を終わらせ、独
立宣言をした。モロッコでもスヤ
イレの力が弱まりつた。

インドではイギリスに對する積極的
運動が盛んになつた。

このよう
な多くのイスラーム國家が帝國を
美と祝福の鞭を振りつけた。

このゆゑに帝國主義の中心はま

シーラーズの老人がクブリーズとカープルの心をつかんだ
その心は花の匂いでその同行者を生んだ
もしオスマン帝国は悲しみの山が崩れおかして来ても何か悲しいか
悲しみの匂いは 数々の星の血で朝がなびるだろうから
世界の征服より世界を見ることの才が欲しい
肝臓が血にならないうる心の月に見える力が生かれない
数千年の間 木仏はそまそま目を注いでいる
だが難しい 花園に正しい洞察力を待つ人が生まれるのは
夜驚鳥よとえずれ ふよえの夜

鳩の優しい体の中に鳩の心が生かされるように
ふよえの胸に人生の秘密が隠されてる くれを言え
イスラーム教徒は 人生の情熱の物語を語ってきえ
永遠なる神の強さを手である ふよえは そいつで言である ふよえは
愚か者よ 確信せよ 疑念を疑っている ふよえは
青い空の上の向うだ イスラーム教徒の目指す所は
星々を空虚にして残して行く隊商だ ふよえは
このせは消える 人を一時 だがあまの初始まりから終りまで
神の最後の預言だから ふよえは たから 不死身だ ふよえは
ふよえの肝臓の血は ふよえの心臓の血を流るヘンナだ
ふよえの心臓は預言者イブラーヒーム 世界の創始者だ ふよえは
ふよえの心臓は人生の才能にかまかせられてる
世界の隠された宝の試金石だ ふよえは

生れたこの時分は 母の上からうつろつ
上からうつろつるに分けようめる。
1、新しい世界の吉報。一、二連め。
2、世界にあげるムスリムの位置。
三連め。
3、ムスリムの行動とその特徴。四、
五、七連め。
4、世界大戦の結果と影響。六連め。
5、西洋世界に対する懸念。八連め。
前章の四つの方向まで。
1、人間性の将来。八連の後半の三
つの方向。

ク、明るい未来。最後の九連め。
なお九連にある方向はすべてマル
シア語で書かれています。
① アズハヤスタシンのマハラで生
まれ、医者と哲学者として有
名(八九八〇〜一〇三七)。
② トルコ人の哲学者、第二のイブ
ラヒーム(一八七〇〜一九五四年)。
③ にも影響(一八七〇〜一九五四年)。
249

① 此の世から永遠の世までの存あり
預言者が一語に持つていた事物もそれ物もある

輝やホレミイスラム共同体の歴史が明かす
アジアの諸族の守り手はおまじである

もう一度字がなかせ 真実の 公正その 勇気の危機を
おまじは要求されるだろう 世界を指導者であることが
自然の意図とは イスラトム教徒の秘密とは

兄弟愛の宇宙的な故かり 愛の聖書である
色と血の偏見を壊してイスラム共同体内に入れ

トルコ人も残さず イラン人も残さず アフガレ人も残さず
おまじは花園の鳥たちと交わって 水柱のいづれまで生き、ていふつもりか

疑念に満ちた この世においてイスラム教徒の勇者の確信は
イサは荒野の踏思の夜に托鉢僧の場台となつてある

ローマ皇帝やイランの専制を止めさせたまの
それは何だつたか バイタルのカ プーガルの苦行 サルマーンの真実だ

イスラム共同体の事せばなんと堂々と道を歩んで来たか
幾世紀もの間 奴隷たちは戸の遠き間から見ていただけだった

人生の空定は強かな信仰からある この世で
ドイツよりも堅固であつた トルコは

灰のこの塵の中は確信が生れる
それは天使がブリエルの翼を付く

② トルコ、モンゴル人の一掃後武
事と政治力がある。

③ ヴルシアの詩人ウルフイー(一五
五五-一九一五年)の詩を引用。ウル
フイーはインドマムガル帝國皇帝
アクバルに仕える。

④ イスラーム教徒の心の中は。
⑤ ヴルシア文学ヤルドゥラウ文学の
中で四月の雨は真珠にほると言え
られてゐる。

⑥ アックラーの真の夜で
イスラーム共同体の祖、
預言者イブラーヒム。
のこと、ここでイス
ラーム教徒全体を指す。

⑦ 預言者ムハメドの會
社、父ハレム・アブド
マナフを名祖とする
血統上の分節単位でク
レイヴェを指す。

一部、即ちムハンマド
はここに属するうぐム
ズリム全体を指す。

⑧ イランのレーラーズに生きた
ヴルシア詩人ハーフィズ(一三
二六-一三九〇年頃)の詩より、

謀略状態では彼をたぐい 剣も管略も
破作の味が全じらるゝ 鏡も切れる

諒れ推測できるか 敬虔なムスリムが統の強さを
その目により 変えられぬ 運命か

神への接近 どの世での統治機 諸学の征服
こゝろは一体何か 信仰の要止の説明になるだけ

だがイブラーヒム のさうな見解を持つのは難しい
彼等かこつそり胸の中で然を揣いてしまふか

奴隷と主人の区別は人間を混乱させぬ
抑圧する者よ 恐れよ 神罰は厳しい

すばてのものゝ真実は一ツ 土であれ光であれ
もし物ゝ心か動かれれば太陽の血が流れたる

確固たる確信 永遠の行爲 世界を征服する愛
これこそ元人の聖戦にふいて 聖者の創である

聖者は他れ何を必要とするか 高い精神 純粋な性格
温かい心 絶望な目 何なりけい魂の他に

鷹の輝きももつて襲いかつたものが羽根や鱗冠を
タバの星は夕焼けの血の中に沈み出ました

海り下で泳ぐものが大海の中に埋められた
海りびんたを食うたものが真理と偽つて出てきた

錬金術を営つていたものが道の境を越えて
額を土の上で置いてた者が練金術師となつて出てきた

存不この洋でシーラズの志人とは

第一次大戦後のトルコ革命指導者、
トルコ共和国初代大統領(一九二

三)ニハギシとなつたムスタファ
ケマル・アタチユルクを指す、

アタチユルクはイラシ、カーブル
はアフガニスタンを指す、

第一次大戦で沢山のトルコ人がて
くつていゝ、

水仙の花はその形より目とされて
いるからルシア・ウルトウ大戦争

中で盲目とされていゝ、即ち目
をえられていゝか見えぬ、人間
は目を持っていゝか聖明を得る

れば幾つもの松院を経るこゝが必
要である。

⑬神のメッセジを伝える代弁者だ、
⑭聖教徒には行けぬ天界。

⑮おまえが消えれば神のメッセジ
なくなつてしまふので、

⑯人間が飾りけ留め、学業、試練、
⑰神の家を建てたのはイブラーヒム
だ、この世に再び神の家を建て

ればならぬとするこゝの子孫であ

めが運の郵便配人ば人生のメ、セージを持つてまら
 電気がニコラスを伝えたというはニコラスがなしてなつて出てまら
 カアハの保護人の無思慮のせいであアバは辱められ
 がトルコ軍の若者たちは先易の明を見せて出てまら
 空を飛ぶ天使たちを地上の人に見つてい
 地上の若者たちをわかれより生かすまし しつかりし 輝いて出てきた
 世界で信仰の篤い人ば大錫のようになつてい
 こらうで沁んでもあたらから出てくる 所から出て沁んでもこらから出てくる
 個人の確信こそイスラーム共同体の財産
 それこそイスラーム共同体の運命を招くカ
 んスリムとあまよふばこの宇宙の秘密、自分の目で輝け
 自我の秘教の保持者とばれ 神の代弁者とばれ
 彼等が人類を救ふにせむ
 友愛の誓をせよ 愛の言葉を語れ
 こはイントの あれはコラヤシンの これにアフカシの あれはトルコの
 海岸を飛ぶかしかるや、海岸を飛ぶかニんて境界なしんせよ
 ぶる三の羽根は色と人種の境にまみれてい
 神聖な鳥よ 飛ぶ前に羽根を振るわせよ
 自己に沈潜せよ 愚か者よ こ水が人生の秘教だ
 朔夜に能く出て永遠に流れ
 人生の戦場は鋼鉄の持剣を作れ
 愛の誓をせよ 輝くようになれ

- るべきを、
 近歩も拡大の可能性。
 ① ②の世の物質的の世界、
 ③ 預言者ムハンマドはアッラーの下
 に行き、あなたに僕たちを導いて
 望むようにして、
 来たムハンマドはアッ
 ラーにさうたろう。
- ④ イランのケルマーン地方の地で、
 この度には便宜さし兼遠さで有名。
 ⑤ 第四代カリフ、アリーの将。そ
 の志は獅子。
 ⑥ 預言者ムハンマドの教友、その敬
 度まで有名(六五三年没)。
 ⑦ 出陣はイランであつたがマデュー
 ナで預言者ムハンマドに会へその
 誠意まで有名(六五七年没)。
 ⑧ 第一次大戦でドイツとトルコは連
 合軍に敗れたが、トルコはムスタ
 ファー、ケマルの指揮で再をす。
 ⑨ 預言者ムハンマドの祈までひそか
 びて飛んでいけるカを持つ羽根。

山や荒野が道れまらぬ激しい洪水のよゝん流せ
花園がそれ果るなる花の小川とせよ

あまのの知識や愛の限界はない

自然の樂者の中であまの以上のとんない声はない

今も人間は帝國主義の哀れな獲物だ
なんといふ惨劇が人間か人間を狩獲するとは
現代文明の輝きは目を眩ませる

だがこの任掛けは飾り物の種だ
西洋の學者が自慢した知恵の老物は
貪欲な者の血に濡れた手にある戦いの創である
深謀遠慮の魔術では強固なれない

世界にふいてその文明の基礎が資本主義であるもうけ
人間を活ける為此より夫回にもなる 地獄にもなる
この世のそのほその住人は天使でもなく悪魔でもない

芝居島にさすをすることを教へ 花の層を明けさせよ
あまのほこの花園にほり 春の光と風だから

また起つた アジアの心から 愛うよ花が
大地は輝やくオアシスの衣装を身につけたトルコ人の練兵場だ
またれ 命を賣う者が出てきた

① しばらくして 花れらの上を隊商が通つれ
② 忘れぬ人よ 悲しい鳥の音が花をからした
③ なが香が来た 志人が来た 空気が来た

④ 太陽や月、星がその一切の礎を
ひたすに神の唯一性を唱えよこと

⑤ その新果は革命や反乱である。

⑥ 神と自分に対する確信。

⑦ 第一一次世界大戦の時、ギリシヤ。

⑧ 第一一次世界大戦の時、トルコ。

⑨ イヤリスの主張を受けたギリシヤ。

⑩ トルコ。

⑪ アラババムスリムであつたが、
スライム、イヤリス、如連合軍と一
緒にやりトルコに反復をひるがえ
した。その結果トルコのイスラ
ム帝國は終つた、それアッラフ

も西歐諸國の奴隷となつた。

⑫ クルアーン第三章の第17、アッラ
ーの道う花めん、後世に承る者を、
死んだと思ふな、ト、その解り
で扶養され生きてゐるしとある。

⑬ 故には激しく強く、及ばはやまし
く、クルアーン第三章の第20を照

⑭ 人間を指す。

⑮ ユリスフが投げたオムタ井戸に隊
内の到来は彼の人生の転換期であ
つた。同じように西洋文化がその

春の雲が谷や砂漠に天幕を張った
噴水の音が山の頂上からうして来た

カーネーション

水たしげ物が身をふよふに任す かつこの聖杯を喝らせ 酌人よ

といふうは歌うたいの心 田を列をなしてやうて来た

隠遁者から謝水ていよ 一して恐水す杯をあけよ

後からその古い枝から夜鶯鳥の声かして来た

ハドルとアナインの話を愛する者にしてやれ

その隠れた神祕の力かわが目に明らかん見えて来た

かりーんり枝は再びわれらの血でうるふ、ている

愛の市場でわれらの金が通用する。も命かうて来た

殉教者聖堂の上にチーリップの花びらをまこく

たせなうその血けわがイスラーム共同体の小枝の成長に役立つ

さう花の水を注ごう 一して杯に酒を注ごう

えの屋根に朝水月をいれ 新しい基礎を作らう

聖堂性を先介った現在、イスラーム

共同体の中以秘密語がある。

クルアーン第12章第1節を照。

以下最後の対句まですべてベルシ

ア語で書きわれている。

⑤ 種言者ムハンマドは六二四年、甲

を率いてマヤカ軍と戦い勝利した。

この勝利によりマヤカにたい

る地位を確とした。

⑥ 六三〇年マッカを占領したムハン

マドは同年、ヒジャズ地方南部

にれるハワーズィンと戦い勝利

した。クレアール第1章第1節

に於てそれの言及がある。

⑦ 種言者イブナーヒームの呼称でこ

こではイスラーム共同体の意思。

⑧ ヘルシア詩人ハーフィス(三三三

六二二九。年頃)の詩を引用。

146 かザル

かザル

朝風よ 毛布にくらまっていたる者の所へ行つてわたしのメッセージを伝える

力を失なつたイスラーム共同体の手から宗教をなくした 世界もなくなつた

霧らつたの波に 岸はメッセージを与え 1. 預言者ムハンマド、

海との一体はまた遠い おまえは川の途中で混然していたの神の一件、

カイスよ 是々名譽は驚龍の幕で存在する 至聖龍の幕が上かればすべて明らか

驚龍がなくなつたら 名譽もライラもなくなつた にかり愛を樂しみおまえも行く

滴には動くことを止めると真珠になる誇りがあった る。イスラームの増殖別々もこれ

だが我々の混然がなくなつたり 川の混然もなくなつた

イクバールの唇から出ているが分らない、この声付は誰のものか 混然も一つを樂しみである。

安心のメッセージも得られたか 寧の心は揺れもした ② 神の声である、

かザル

① 私は神の代弁者であるうで私の言葉 葉の中に寧のくちくち精神のなごみ

も心を熱くするものもある。

鳥を鷲島の歌は耳をなす

花園の賑わいの騒ぎの中に沈黙がある

西洋の酒よ ふまへの酒杯の初ま目は

助人は笑顔を浮かべ 寧はうが無き涙と見る

2. 外面と内面は違ふ。即ち外面は葉

にまねにたまされるが注意を喚

起し、内面即ちイントウ意を況を

見せられはならぬといとしてゐる、

③ 商人即ちヨーロッパ人は寧はう

この世の悲しきや哀う中であなた達の居場所が分かたない
どの世を生むことも罪だ。なにか、あなた達は隠れてい
る。

残念。世の人の心臓と考えているものは心臓でなく
人間の胸の中で静かに混濁を起す息である。

人生の道を歩め、しかし空を引よ締め、歩め
つまり何か酒屋の店が肩に乗つてゐると考えて

その息でデリーもライポールも賑わつてゐるのに
残念イクトパールも、あの夜驚鳥も今は黙つてゐる

ガザル 3

任った夜驚鳥よ、おまえの嘆きは今もまだ未熟だ。

おまえの胸の中にそれをもう少し今もまだ抑えておけ

理性は熱している。もし善悪の区別ができるなら

燃え、もし善悪の区別ができるなら今もまだ未熟だ

燃え、もし善悪の区別ができるなら今もまだ未熟だ

理性は層根に巻いて眺めに今もまだ見られてゐる

愛は志の使ひの逆事にして反応する

理性は志の逆事、今もまだ分らない

愛の習い自由でこの世に志を燃やして

おまえは、この世の偶像寺院の鏡を今もまだ身には付けてゐる

即ちアッアの人々を騙し、アッ
アの人々はその歴史に負けてい
ない。
多神。

① 瓶一本でも買われれば平衛念庵を
失ふ、てすべて空しくなる。

② イクトパールの人で七くつた
ミルサー、アルシャド、ガール
ガニーを思い浮かべて、詩人
がよく詩会で詩を詠んだ。

3

① 自分が理性と愛の境を明ら
かにしている。即ち理性が完全
になると人間を危険から遠ざけ
ようとするが、愛はその反対で
ある。

② 預言者イブライヒム・シムアルシ
リアのニムロッドもその間に出
来ず、仏教にエルクアッラーハ
の愛に誠実である、預言者エ
ルにより火刑に処せられたが神の
助けで火が冷たくなったという。

③ ヒンドラー教徒が首や脇下に老
くびね、即ち未結ぶれた奴隷の
ような人生をおまえに相対しく
行い。

茶酒とのわたしの言葉は業人的人は腹を立てて言ふ
おまへの心の中はその後ろ心配か今もまだある
人生の輝りは絶えざる筈である

春の雲よ けちけちした雲の思ひはいつまで
わかぬのち、リッブは今もまだ夢の酒杯だ

よその國の酒を飲んでいらぬが酒はアエブりなれん
酒を飲む人は少しの酒杯に今もまだ尻込みをする
花園のそよ風はイクハールの知らずを待つてくる
今の今 挿えられた者は胃の下で今もまだ振えている

カザル

パールを頬から取り粟を餅るようになせよ
太陽 月 星の目に輝きを見せるようになせよ

パールを取ってわたしの心に夜を提示すようになせよ
熱い息の如き唇 死ををきき返らす奇蹟

おまへの胸にもしうれがあるならその奇蹟を見せるようになせよ
いつまでシナイ山でふーサーのよりな食事をすまうら
自分の存在で シナイ山の巻を現すようになせよ

④愛の難しい段階に渡りて言ひ記を
すると、酔人である導師は、旅の
最後の辛痛は考えたと板を切る。

⑤人生の苦しみは思ひは付かないで決まり
何歳まで生きたかでは無い。
⑥神よ、わが民族はあつたの感みを
待っている。

⑦若者は邪イスラームの学問を学ん
でいる、私はイスラームを教えて
いる。それ故にクマッセルジを認
めている。

⑧愛う磨いたイクハール。

4 ①パールで見えずその存在が否定さ
れていくので。

②キリストが死者をよみがえらせろ
者としておられるヘクルアーノ奇
事(奇蹟)。

③シナイ山で神の顕現を求め、稲妻

おまゝの土のかげらでカアバが作れるように
おまゝの心をカリスト教徒の生活がう離まよ々にせよ

この花園で限度を越えることはよくない

誘ふなら自分の美の仕方でするよういせよ

オズイカシタルのよう存自脚心を おまゝは待て

お水からとつせでグーラーのよう輝きを望むようにせよ

イクパールよ いつかグーラーの所へ着けるがう

もう幾日か、さらし毒をさすよっていくようにせよ

カサレ

おまゝの春風が吹いてきた イクパールよ 歌を歌え

おまゝの草なら花になれ 花なら花園になれ

おまゝは土のかげら、その一つ一つの熱で

歩き回れ 広かぬ 広い荒野になれ

おまゝは愛というものだ、おまゝの価値は測り知れない

おまゝの人は空を見つめて、この園ではおまゝは空の

なせおまゝの調心は楽器のペールに隠れてゐるのだ

おまゝは華やかな歌だ、おまゝの人の耳に聞かせるよ

賢明な旅人よ、もしおまゝの道に

花園があるなら雲になれ、砂漠があるなら台風になれ

となつて現れた神によつて失神せ
せられる。

① 自身の人生をよしとして。

② 西洋文明の影響を受けた生活。

③ この世では中庸と中庸がよい。

④ アレキサンダー大王へ紀元前三五
五—三二三年の事。

⑤ 古代イランの王

⑥ ペルシアの高原でマジニヌーンが志
した事。

⑦ 人間は時を利用し成功するよう
に活動しなければならぬ。

⑧ 神は土塊のおまゝにも道徳と歌
の宝を与えてくれている。

⑨ おまゝは神への愛に満ちた真珠
のようだが、その正しい評価が
されてゐない。

⑩ 神を預言者に対する愛かおまゝ
の血を流れている。世界中の
異教徒はイスラームを信じてゐる。

⑪ すべての人がおまゝから安らぎ
を得るよういせよ。

肉体的の通過が旅の装備への意着に隠れている。
もしどこかの地が目的なら、旅の装備は壊してしまえ

ガズル

持ち運ばれていく神よ、時には旅の装備を着て隠れよ
わが無力の類には救われぬ、旅の装備が揺れ動いている

あはれもメロデーか、事柄の蛇腹の沈黙の中は隠れてあるのば
おまへはそれを大事にしておくれ、おまへの鏡だがその鏡は
壊れると、鏡作りの目にさらし愛しくおまへようだから

場面の廻りを回りながら旅は言った、旅のついでに効果は
おまへの情緒的な話にも、わが身を渡かす旅の装備を
この世のどこにも遊遊場がなかった、たとへばどこかで得たもので
わが家を壊すわが罪を許しは慈悲深いおまへの意の中でしたか
愛の中にある情熱がない、美の中にある気さくれがない

ガズルが問えも、アヤサーズの巻を繋ぎよせられもない
わたしが跪拜をしたら、地獄から声かして来た
おまへの心は偶像崇拜、おまへが何を得られるか、祈りから

目的地に到達するに必要なのは
旅の装備でなく、勇気や意志で
あるのだ

① 神はいろいろな場面に現れ出ている、
その物質的な神を見たいので、
その願いが叶う神である旅の装備。
② 神は神に對する言葉と、
イスラーム教徒に對する
おまへの二通りにもと
ある。

③ 心のこと。まの志、即ち神への志
で心を壊すと鏡作り、即ち神が更
に悪みを増す。

④ ムスリムの中にかつてのような指
導者もなく、神に對する熱烈
な愛を抱く者もなくなつた。

⑤ クルアーン第三章の神の「アッ
ラーはまことにあらゆる罪を許す
したもう」とある。

⑥ ガズルが問うたマフムドへ在位た
九八(七九三)で鏡のフック
に手を愛した。

⑦ マフムドの友人。

網にかうまっても花冠の鳥が歌っていた。あ、何というこじ
心の中で悶していた嘆きの声は唇の下で止まっていた。

③ あなたの姿では昔まつ心を慰めることは出来なかつた
今更の夜明けのすずり泣き、今更の夜半の溜め息ばかり

③ 神もいな、偶像もない、寺院や聖殿の敵もない
どこにも今アッラットの解が伏せず、アブドラーハブの異端もない

わが聖者がたし、アッラブの傷ついた心と心へ
わたしは忠誠を誓う殉教者、わたしの声はアラビヤ風

ガズル 8

ムスリムよ、お前は物質的裝飾の心をとりわけ選んでいる
だが少しだけ、そのことから心を自由にさせよ

だが行動の基礎は愛に置け
ムスリムよ、常れ目より祈に

④ アッラトは約束をたがえうれることはありませぬ、その一節を置け
アクバル・アラール・アバーディトからラメッセーシとは
アッラトの約束は直度である、心がかた外あよう

④ 自由を求むる者が外に奴隷となつて
回や民族の向上のため何かをして
てその結果はどうか。

④ 予を自分の中に取り入れ、一
つにたつことを望む、この目的が
達せられぬ限り、安心はなし。

④ 灯台には人々が宗教に閉心を示さ
なく、たこを表わしている。

④ 第四代カリフ・アリーへ六五八
一六〇一年の勅令。

④ 預言者ムハンマドの敵対者。
④ ウルトラーグを指す。

④ たえずイスラーム教徒へとつて
一ジを出しているのだ。

④ 成功は神の恩恵によるので。
④ 神の存在について批判する。

④ クルアー、第三章を抄写より。
④ クルアー、第四章は節より。

44 諸語詩

1.

東洋では原則が宗教になる
だが西洋ではその水うが機械になる
われわれの所には一もない
そこでは一が三になる

2.

少又たらば歩程を学んでいゝる
イスラーム民族は自らを改めざる道を見出し
西洋の任方がわれに入り
東洋の任方を邪と考えていゝる
このドラマはほんのシーンを夏せるといへばなるだろう
わかみ目程のよるのを待つていゝる

1 東洋では尊重されるが実行がけつた
わがない。西洋ではその逆である。

2 対句に出ている一、三の数は具
体的に何々示されていゝない。宗教
として東洋では神々唯一性であ
るが今それを尊重するものはい
ない。西洋ではそれか三位一體とし
てある。また金をとすやがこれか
いもたのり何うは三レビール改
つていゝる。また人とすれば西洋は
産り結婚して家種が三人にたると

2 ① インドで英語教育が始まるのは一

八五七年イギリス大反乱以降である。

② 意味の「幕か上がり劇が始まる」

意味の「イスラームのハルカ」を

取る。即ち少女が英語を学ばな

ら西洋文化を学ば、その時、種を

覆つていゝるハルカもとる。即ち西

洋文化が従来のイスラーム文化を
破壊する。

① シヤイフとバルダの擁護者でない

どういふ誤でカレッジの学生達は疑念を抱くりか

昨日 説教の中でシヤイフは「つまりと言つた

バルダは殆ど誰れ知してある

是し男が女になつたら

問をなくさういふこととなる

啓明は男男性諸君よ

君たちれ自利心がたつたり 女性カバルダを望むめ日か

じきんこついう時代も来る 女性の子供を持つかわり

議会の議定はけるれめれ 女性が投票を望む日か

西洋の教育は勇猛心を振れさせせる

最初の教訓はカレッジで座つて法螺を吹くことである

インドにあるのはたまたまから買つこと

アフガン人も同からアフガン産の薬を持ってやつて来る

① イスラーム教の長者、神託を義者の師。シヤイフは常に女性の

バルドを支持して来た。学生達はシヤイフを悪く言う。レカレ

今後はバルダは必要ないと言つた。附せたら男性が女性化してしまつたので。カレッジの学生を皮肉つてゐる。

① イクバルは人生をくれそれの人か果すべき義務の分別と考へ

ている。それ故女性の果すべき任事の一つは家を守ることを入

れている。それを捨てること、本来の持徳を失なうことと考へ

ている。このよう考へを可決

私の秘戒白の中で述べてゐる。

① インドには産業の発達がないの意、

② 低階層階級の意、

③ インドの人々を指す、

④ インド人はインド人のこの上な

⑤
わたしの菓子はと言えは長官のブイツの先を打ぬること
長官の言い草は、こら、わたしの教物の上を這い回ろう
西洋人ば言う、駭世は不恰好な動物だ
水中はいい、米牛は鏡の角を擗っている

6

事師か金に困ってモ悲しむことばない
新しい文化の新しい頭を下やればよい
聖戦に反してたくさん書かされた
今度ば逸礼を悪いとイふ文を書けはよい

7

西洋文化に酔着り病人に**カキ**と云って効めがあるか
病身を治すためにばそれを出して云ってやれ
こら、いつ時もある、先生に教えてもらうたぶらには
心を野う物として答し出すやまか、考えた時モ
おが時は**カキ**、こらに有った、教えてもらうた後
マスタールに、**カキ**を出して下さい、とさう風に

い違徒も好かず増く当る。即ちイ
キリス人の靴を履いてやうても床
の敷物を傷つけろなと言ふ能た。
② イスラーム教徒を指す。
③ ヒントゥーム教徒、ヒントゥーム教徒
はイスラーム教徒よりモイソドル
不いてイギリスに反抗して、死か
イギリスの社会はイスラーム教徒
よりよかつた。
④ 当時一部のイスラーム教徒の學者
ヤクルーフが聖戦の反対の立場を
取り柵子を出し表っていた。
⑤ イスラーム教徒の互行の一つ、**×**
ツカを指することばイスラーム教
徒の起願の一つである。

7
ワウトルドール語で昔からの菓の言ひ
方。新しい文化の底が、菓と
自国語でさうクモ好よくない。

⑥ 月謝の勸定書さ。

これ終わりかあるのか 一つで置物だければなるなら
 日本から 傘やハシカチ マフラーや衣類まで
 もしこれはいづれでも目をつぶってやられるなら
 やがてやがて来る カールから死体清浄人 日本から自装束まで

ゆかり東洋の金しい住居の心は 西洋に夢中である
 ① 今こでは概はすべてカラ又製 ところでは古い土製のもの
 この時代すべてが消えさるるなら 残るものはた
 ② 自分の道に自分の主張で立つもの あるいはその意志が堅固なもの
 ジャイフマバラモレンもよく聞いてくれ 賢者が何と云うているか
 ③ 天はこれら二匹をまいた所から突を授けたのだ
 ④ 一時期 両者は固い愛の絆で結ばれ 愛の習性もあつた
 ⑤ たが今では大論争 カルトラーレヒンデラー カレバーニーヒジャ
 トカーを巡り

① 西洋の見解・考え方はかうなの
 ような釋きがある。だが東洋の人
 化りような皮は深さはない。
 ② ジャイフマバラモレンはイスマム教徒の長
 者、バラモレンはヒンドゥー教徒
 の最上位の者。
 ③ 当時インドで国語を何語にするか
 の争いがあった。イスマム教徒
 のカウルラーカ、ヒンドゥー教徒
 のヒンデラーカ。
 ④ 屠殺するに際し神の名を唱える位
 オカイスラム教徒の、一撃をみ
 之首と胴体を切り離してしまふの
 かスイク教徒の仕方である。

現象と証人と目撃の本質は一つであるし

① ガーリアンのこの言葉が正しいなら 何の不思議もないはずだ

② ジャイフ殿 あなたは何かお聞はなつてたはずだ

③ 横像殿にいま者か昨日 蛇アバにしろ人達は何とおっしゃつていましるか ④ 存在の唯一性は無うな

⑤ わたしたちは惚れつづいムスリムクオカに取聞きたいです

⑥ もしあなたがお偶像を愛するのなら バラモンには打つて殺せば何ですか

① われわれの争元から世界の権勢もなくなつてしまつた

② われわれの心から東世の考えも消えてしまつた

③ 財産争奪制度のため ジャイフ殿も開つていた

④ だが聞いてみよ 贈与するための財産があるのかどうか

① ウッドラウーの著の大評伝(一七六七—一八六九年)

② イスラーム教義の長考

③ ヒンドラー教義を指す

④ イスラーム教義を指す

⑤ 存在の唯一性は無うな

⑥ ガーリアンの打つて殺す片句は

はればバムスリムが偶

像である非ムスリムの人

を殺す者であるやうな

ムスリムは好ましくな

い状態にあり現世での東世

の恩恵が得られないと述べて

る

⑦ 財産を子孫以外にば譲渡できない

家産ワクフ法でこの法案をカーエ

デ・アナムが一九一一年に中央議

会に提出、型を二二を可法、この

法の目的はムスリムがヒンドラー

の高利貸より財産を奪うためのも

のであった

12 ① 西洋に留学して志意はなつた長者

わたしは自殺多志志をほのめがすと英國女性は言つた
男よと化めになつた男よ 病にもないことは言わなひで

② 勇気も剣もたたくせに、自殺の方ばどうなるの
絶望の苦痛が分かつたわ、あんたの度を超した
わんしは言つた、悪人よ少く金を都合してくれ
③ 都金で雇って来るから、運送からアブカン人を

13

① アラブのヤカ分が分かんずかれば、思ひがたつた
かれうが得たもの、それは逆れり小ない特の攻撃した
② 西洋では駭駝の呼ぶ名は砂漠の船である
③ トルコ人はこの艦隊を少しも利用しなかつた

14

① インドルを以て議会は政府の一部である
② それはわか政治の完成の始りである
われわれは金を食ふであつた、それはわれわれの仕事であつた
今や金持ちも、そのサワールの仕事を習う程である

へう皮肉。
③ 自殺のため剣もなく、また剣も
使えなくなつてしまつた、死イソトウ
人々におする皮肉。
④ 中下かの不金の死めれ人殺しの事
助けにくるインドの運送り人々の
表れされおする皮肉。

286

① 第一次大戦の前、オスマン帝国が
西洋列強国と戦つてた時のこと、
イクバルもこの事に關して賛成
の意を表している。

② トルコは駭駝を次出便えは西洋諸
國に軍事力で劣る事はあつた。

④ イイギリスはインドの人々を除々に
議會での代表権を与へ始める、選
挙も始まる、金持ちはヤササで選挙料
めに奔走し始める。

⑤ サワールには二つの意味がある、
意味一、物乞いをする、即ち乞食
のようた選挙で投票を頼む。
意味二、議會で質問する。

↑
帝國議會の議員に於ては難しくない

① 票は得られぬだろう。たかぶ金を得らぬのだらうか。
② ミルサー・カリーブはさすかにはうまい。
③ アーサーは何を食んで生きていけばいいのだろう。つかと

① 忠誠の証拠はつむること以上に何かあるか

② あつらんへの愛が打ちぬれば、③の虐待は我慢できな

い。合衆国中でわれわれは何かそれとて言葉がある

④ だが、コレクターの顔を見抜いて言われぬならない

⑤ 証明書は取つておけ。子孫の進歩には打つたらうか

⑥ 今午前にいやりがあるが分からぬ。今後とも人に同じであるか

⑦ 地上にインド人の居場所がない

⑧ だがこの世界で海の底はあいてゐる

⑨ 錨のない小船のように命令がうらま

⑩ 停泊してゐるとも言われぬし、出航しろともしやわれぬし

15
① イギリス統治の時代、インドに出

て来たインド人も議員になれた。

② 議員にしろレテリルに住まう中はず、

生活量の問題もあつた。

③ ラトルトラーの詩の大詩人（一七九七

一八六九年）。

16
① イギリス人の役人。

② あつらんへの道徳の余り、同国人で

あるインド人も私を虐待する。

③ イギリス統治下での徴税官。

④ 仕事を止める時、雇用主に仕事も

りを証明してもらつた。

⑤ 計分4で当時南アフリカで起つた

人種差別事件を示し、インド人進

歩の動機があつた。

⑥ インド人はいやいやりス人の思いのま

ま動く。

導行はイスラーム教徒の行動について説教しだから言うた
インドの異教徒たちは高志に精を出しすぎている

多神教徒から買う者は自ら多神教徒になる

だがわが民族は理性と正気な定いてしまっている

異教徒のものから買わぬは物に不浄である

よく聞け、もしイスラーム教徒の真実を聞く耳を持つならば

酒飲者を一人、説教の場にまじっていら

彼はひとり説教の悪名は大層耳にありのことだから

彼は言い出した、みい、そのようは制限があるとは

食べたり飲んだりする物の初産で

わたしは言った、万人の困ったこととてな

インドでは信者皆らを集める位の人を酒売りから

2. あ見よ、東洋の劇業はいつまで続くか

宗教の瓶の代りに杯や酒類を握っている

狂気の治癒は現代式教育のメスです

わが外科医は固く血管から血を抜き取ってしまっている

17. それ故異教徒や多神教徒から買
ている。

を酒をいっもヒンドゥー教徒から買
つていたぞ。

⑤ イスラーム教徒のこと。異教徒か
ら買わずにイスラーム教徒から買
えばいいので。導行や言葉では異
教徒が手は活れている。イスラ
ム教徒については何も言っていない
の。

18. ⑥ 西洋への取引まで。

⑦ イスラーム教では酒はタバコ、し

かしイスラーム教徒が飲んでいま

まイギリスを指す。

⑧ イスラーム共同件の中に決める宗

教の思考。

① 雄牛はある日駝につまらうように話しかけた

世界中のどんなものも一つ所に止まっておりません

わたしは自分の髪を細く切つて悪名を得てしまいました

あなたもあなたの髪を細く切つてしまふと聞いております

② イントであなたは政治的な面を重んじます

アブが飲運のせいでアラブの砂漠で彼はなくなつてしまつた

まううまであなたは雄牛との交遊を避けていました

あなたを垂れ下がる唇に注意せよの音もありません

あなたは今目をしたら親切にするのはどうしてですか

駝はこの話を聞くに和ずかしそうに言いました

あなたに好意を抱く者の中にわたしも入つております

あなたに飛びはねは駝たちの羨望の的ですよ

あなたに反乱の効き目が森じやうに広がりやうです

同じ森の中の長い間も死したことはないでござります

だが何もなく靴は早ば借りて食べたいを状態です

山羊 駝 牛 チーター オオカミに口バト

19 ① ヒントラー教徒を指す。

② イスラム教徒を指す。

③ イギリスやインドのムスリムを重んじていた。

④ イギリスはアラブのムスリムを尊重してはいない。

⑤ ムスリムがヒントラー教徒のコン

グレスは和ゆりつつあつた。

⑥ フレグレスの狼と運動を指す。
⑦ 今まで狼と運動に参加した人々。

庭師が一ツッ色にわらふ、うにも敷きたら、
どうして花園の鳥たちは一ツク声にならなれですか

われらにもその杯を争てください、いいことですか
あなたも酔えますようは、あなたの間も酔えますようは

「ハーフェイスの切水ぬれの腕をびんぐらか、酒で色づけし
酔いどれになつたハーフェイスをバード・ズへ連れていけ」

20

ある夜、敗れわたしたまふた

そり不公平か出ま事だつて

「ゆたしん、一滴の血しか与えたくもありません
一晩中のアカのお返しのしるしとして

ながさう地まは、残酷にも
飲んでしまひました、喜ぶより、血を」

21

この新しい一節が、監獄からゆたしの上れ降りて来ん
ギータートのアビクルアインが、クルアインの中はギルターがある

① インドのヒンドゥー教徒とイス
ラーム教徒の指導者。
② ママツマツ宗教、伝承の人、言葉
を裏にする人。
③ コングレスの上層階級の呼び。
④ ハルシニア詩人ハーフェイス（三
三六、一九〇五年）、この詩を使
い、インドのムスリムは自分の
宗教を捨てて、インド・コング
レスに参加して自由運動の身
を捨てねばならぬかと自問し
てゐる。

てゐる。

20

① 地すりの残酷さを皮肉つてゐる。才
た一般の人に打しても、小さい事
に打しては厳しく硬するが、大き
な事に打っては許してしまふこと
への皮肉である。

21

① カンデーは非暴力運動をしてヒ
ラーハフアト運動の失敗の後、進
退されぬ。一九二二年監獄から一
之を脱すため、ヤムを精製し新し
い生命に燃せつた。その内容は、
クルアインとギータート研究の結

シヤイフヒバラモンの和議はなんじよいか
能るその教いで、とらうが負でも向うが勝でもなかつた
ハドリーは以前より、ヒントウ一寺院に對シ不快感を示していた
マスティーターはイスラーム寺院より勝たぬ、頑なな性格である

32

命が消れても冥途は身かゝ離れぬ
フヤで宗教の本質はこの一つである
有れども同じ穴のむじり
高利貸しも地主も 役人も

22
ニウセで労働者と資本家が相討時した
その見よ、しんな願望の血が流れるか
しんが知恵や理性を巡らしても、混乱を起さず争いは
止まることか出来ない、おまえたちは怒いでいたでばないか
背いた尻すへて、^{おま}軍勢が四方に出あつた
ムスリムが目よ、クルアーンに説明をよく見よ

果、向方の本の教へは同じといつ
ものであつた。

ヒントウ一教徒のこし。
イスラーム教徒のこしで、^{ヒン}ジヤイ
の考えには反對とし、^{ヒン}ジヤイ
は法くムスリムリゲをま境し
た。な不討句うはクルアーンと
ギターを同じとする人たちの
感想である。

22
高利貸しは債務者の血を吸つてい
る。地主は耕作者の、役人は人々
の血を。

23
クルアーン第1章の第1節より。労働
者と資本家を闘いが起ころうとし
ている。
ヒンが、^{ヒン}ジヤイとヒンが、^{ヒン}ジヤイ
ことと二つの長短を述べ、
クルアーン第2章の第1節より。四方へ
の労働者、地主、地主、地主、
労働者、労働者の間に混乱が始ま
つていゝ。どうなるか少しし合
らぬ。

シリアウ國境から立ち上つた、あのいつもの飲んべえが
 屏酒屋ヲすんで、ワミヲリを棚の上に置おこりにして
 もしこ水が本歩なら、なんとお代り場か

この青い空が、一瞬にして色を変える

カインの脚は今、治療のことに氣を使わなくてはならぬ
 新しい治療の腹に耐えられない痛みがある

アーサー・ハーンはインドから代表團を呼んでいる

こ水が腹に薬なのか、ハレスチナ・イラフの消化のための

ある日、小作人と地まの間で言い争いがあつた
 両者とも土地は自分のものだと言ひあつていた
 小作人は言つた、畑とは耕す人のものだ

地まは言つた、おまゝの頭は正氣か

そこでわたしは土地に、おまゝは誰のものだ、と聞いてみん

土地は言つた、わたしはこ水だけが確信してありませう

地まも小作人も混成するでしようか

こ水は大地の下にあるもの、それほみな大地の所有です

24 子フランスを指す。

（全歩時イギリスの外務大臣、

25

25 亡くならぬ地まも小作人も大地の
 中に入つてきて、やがて大地の一
 部になつてしまふ。

止ら上かつて捨ててしまふ。外の路地へ
新しい文化の卵は齎つてゐる

選挙 議員 議会 議長

自由は實を大きく作つた

大工の旦那も一緒にすりむいてしまつた
まわめて鋸かつたので、ヨロロバの鋸は

26 エイギリス人を指す。選挙、議員た
どを伴つてくれれば、イギリス人
がける限り、それらは別の作用を
するだけである。
③ それらつものを使つて仕事を
機会を得たインドの人。

工場を経営者ばかりだらないな、卑しい者だ

賛記の聲で、智の言葉、なほ相志しくなれ

神の命に上れば、下人間は、智カしたことの信かれば、何もかも得ることはでませし

どうして労働者の智力の果實を食介てしまふのか、資本家は

功のクルアーン第2章第29節

昨日わたしは工場でこゝういふ会話を耳にした
言ひ強、建て、小屋の工場の中は工員だけの寛ぎの場があるか

28 エイギリス人はインドで買つたものを
流布せせると口実でそれを作ら

政府は立派なカウンスル・ホールを作らせたらしい
町に一つも娯楽場がなかつたという理由で、資本家たちの

29

マスケットを建ててしまった。た、た一晩で、信仰篤い人々が
巾か心は罰あり、長い間さくらんとした祈りの人に任せなかつた
見事なマスケット・ファイナル・サートシーは賢辯を述べた
おまえは名と出自からしてヒジャーズ、心の赤はヒジャーズには
目は響かぬことがある。だが泣くのかどうして凄しいか
肝臓の血との混合で泣か赤く染まらなかつた時
イクバルは偉大な説教師だ。その話には心を魅了する
言葉のヒーローにはなつたが、行動のヒーローにはなれなかつた。

それか、そこは資本家たちだけの
意見の交換の場であり人々のため
には何の役にもなれない。

29

① ラーエールのシャワー・アトラと
門の外、ヒントウー教徒の公用地
に一夜にしてマスケットが建てら
れ、今も残っている。

② マスケットを建てたこととれ打ち
することとは別である。

③ 第二次大戦後、イギリスはファイ
ナルを知人のイラク王へ在位一ス
ニール・ニニ、ヒラーフ・ト運動
の反逆者イクバルは考えている。

④ 一八三七年北アフリカルス・ファイ
ー・アラバー・フナート建設。
アルシエリ・アラウスラム・教の信
者。

⑤ 聖地メッカ・メダイナのあり所を
始すか、ここはイスラーム教徒。

※ 29 はかすん型式の寓意である。

詩集『歌集』の出版を告げる銅鑄の音口ヒイクパール

片岡弘茂

1、詩集『パール』の出版

『歌集』の出版を告げる銅鑄の音口ヒイクパールへハセ大（一九三八年）の一番有名な詩集で、彼の名声の礎石となった。その名聲は他の著作によっても増すが、この詩集が『パール』のシヤイフ・グラーム・アリー・アンド・サンズ出版社から一九二四年初めて出版されたから、手元にある一九三二年版に至るまで三の版を数え、その発行部数は一五万七千に達している。その版権が切れる一九八八年までにはさらに毎年、およそ五千冊ずつ出版され、現在までには少なくとも見據もつても三〇万冊以上出版されていると推定される。これはインド・パキスタンでは到底考えられない部数で大バスターの栄といえる。というものはインド・パキスタンでは初版の冊数は千冊が普通で、五百冊でも決して珍しくはいからである。

それ以前にもイクパールの有名な詩集『自我の秘義』、『忘我の秘義』がそれぞれ一九一四年、一九一五年に出版されていた。さらに一九二三年には『東洋へのメッセー』が出版されていた。しかしこれら三冊ともパールシヤ語で非常にくどくどした。そこで一九二四年、ラビドラー語のこの詩集『パール』がラーブが著ると、人々は敬慕してそれを手にしヒイクパールの名はさらにインド、ジャウ、すみずみまで知られることになった。

この詩集の人氣と魅力の理由はつぎのようによらる。

(1) この詩集は、その水自体やさしいとは言えないが、イクバールの他の詩集と較べて比較的容易である。

(2) この中にはある叙情定型的詩が、自由詩の多くは何年も前にインドで有名になつていたので、そしてその詩分の幾つかがラーポールからインドのハイカラ・バードで人々の愛唱するものとなつていた。

(3) 高貴な美の色あひつあるがザルやナズムもある。そこでインドのイスラーム教徒のほかに、インドジャウのヒンドラー教徒や他の宗教の人達にも好んで読まれた。

(4) この中にはイクバールからラーポールの「イスラーム保護協会」の年次大会で読んだ幾つものガナルやナズムがあり、それらは既に人々の間で人氣を博している。(「神への不平等」など)

(5) この中にはダーク(一八三一年)やアミール(一八八一年)の書き方もあり、その書き方は当評人々に好まれていた。

(6) この中でイクバールはクル・ナーナックやシェリト・ラーム・チャンドラなどいろいろなイスラーム教徒でない著者の讃歌も書いていた。

(7) この中の多くの詩はロバート・グラーの出版より何年も前に、さまざまの雑誌に掲載されてきた。冒頭にある詩「ヒマラヤにもその一つで、一九〇一年にラーポールから出ていた有名な雑誌「マクガザン」に掲載されて誰も気づいていなかった。その他、この詩集の前号までの詩、すなわちイクバールがイギリスへ留学するまでの書きものはほとんどいかなる雑誌やナズムがその雑誌に紹介されていなかった。

3、時代別の特徴

詩集ヨハンゲ・グラードは、イクバールが一九二四年までは書いた詩の自選である。イクバールはこの詩集を三つの時期に分けている。最初を書き始めより一九〇五年まで、第二期は一九〇五年から一九〇八年まで、第三期は一九〇八年の後から出版の一九二四年までである。それ以外の時期の特徴を以下のようによびあてるこゝかである。

第一期（書き始めより一九〇五年まで）

イクバールはラーホー、カレント・カレックで、一八九八年哲學のM・Aを終えろと、その後オリエンタル・カレッジで文學や哲學を学んだ。その詩作は學生時代から始り、詩会で詩を詠む大衆は少時有名だった。

(1) この時期にイクバールは民族主義の氣持を一番強く出してゐる。ウルドゥー語の詩で民族主義に關して書かれたものの中で、イクバールの「苦痛の聲」以上によいものは少ないと述べている。他に「ヒマラヤ」太陽し、「インドの飛し」など。

(2) この時期のガズルにはゲーグやアマールからウの影響が濃く見える。イクバールはガズルから詩作を始めだが、當時ゲーグからガズルの漆削を受けていた。

(3) いくつかりの詩はエマソシ（一八九〇年）やロングフェロー（一八九七〜八二年）、テニス（一八九〇年）など西洋の詩人の詩とオホにして書いている。

(4) 歴史と背景描写に優れた詩を書いている。（「華やかな花」山の雪、「朝の太陽」など）

(5) 「環境」や「人間」自然の望しなど詩は思ひの深さと真面目さがある。

(6) 子使のたのめ詩を書いている。それらの中でほむべきかしい言葉は使われていない。詩に教訓が含まれており、子供向けでなく誰にでも好まれ、今日では歌にたり愛唱されてゐる。

（「飛鳥」と絶し「山とリス」「蛙」と山草、「子使の祈り」インドの子使たちの歌しなど）

(1) 初期の時代、イクバルは自然をよく観察し、その興味を抱いている。

(2) 自らの進むべき道を模索している。『夢やみ花』や『朝や夕陽』の中にもその一端が見える。

(3) 当時イクバルはヒンドゥー教徒とイスラーム教徒との間に生うれつつあった互いの不信感の因惑を示している。『苦痛の音』をいじりながらわがら。

(4) 民族主義の影をまきながら書いた詩ではウルシア語系の単語が代わりにはインドー語系の単語が多用されている。

(5) この時代の作品にも多少、哲学的な面があり、人生の目的、その結果、死後の姿、自然、愛などについて述べている。それらより詩の中にも後で哲学者人として大成する片鱗が見える。

(『マズムン』、『新月』、『人間と自然の字』など)

(6) ヨーロッパに行く時、デリー・クニ・サーム・デー・イン・オウリヤ(一八八八—一九二四年)の巻を指して、その巻を詩にした。それはイクバルが初期より宗教指導者になり、敬意と信頼感を寄せ、予言者への愛を詩にこめて示す。

(7) 初期においてアクバル・アラール・デー(一八四六—一九二一年)の書名から書かれた。だがザリフ(一八七九—一八九九年)がバイダル(一八四四—一八七三)の影をから抜け出たように、イクバルもまたその影をから抜け出る。

第三期(一九〇五年から一九〇八年まで)

ロバート・ゲラーというこの期の作品はイクバルがヨーロッパに留学するまでかかれたものである。

一九〇五年、イクバルはイギリスに赴き、ケンブリッジ大学で哲学を学び、優等賞を得た。さらにはドイツのミンデン大学に行き、そこで哲学の博士号を得た。ロンドンではまた弁護士の資格も得ていた。

カ下る様子が顯著に表れている。一九〇七年の書いたガザルク「一九〇七年三月」の甲の一行で「まのようになさうする」。

わたしは夜の暗黒の中、引き出して出ていくだろう。ばうばうになつた隊商を
わが溜め息は火花とならう。わが息は炭に成るだろう。

イクバルがここですって、いることは、やがて新世國家ハイキスターンへとも行く。

(4) イクバルは世界の解放はイスラームの原理を流布することにより可能だと考え始めた。
そこでイスラーム教団の間、情熱を起こさせ、覚醒させる持を書いた。「スイクローリア（シ
リ島）」はそのような持である。この持の中でイクバルが島を語りかけているもの、それ
はイクバルの情熱を表れである。

おまゝの苦しみをおわしれ話してくれ、わたしも苦しい

おまゝが目的地とした、わたしはその隊商の見張り人だ

インドのヒンドゥー教徒たちはイクバルのこの変化を知らず不快感を示し始めた。
(4) ヨーロッパの存在により、イクバルは西洋文明は神々各處に基かいて、必ず衰退
が起ると考えた。イクバルは當時つかりよくな預言的言葉を述べた。

あなた文化は、自分と剣で自殺をするだろう。

弱い奴は出まていゝ草は、決して堅固にはなれないだろう。(ガザルクより)

(5) イクバルは愛や忠を人生の中で重要視し、おまゝを愛している。

愛かおまゝに悶えの聲しさを知らせたらう

愛の人々にも愛の燃焼のようは悶えの聲しさを手えよ。(「マクマセージ」より)

(6) 初期においてイクバルは道を歩き道が分る行かた、しかしヨーロッパの行進、目
的意識を手にするこゝかできた。それが一つおのようになさう。

迷宮よ、わたしはやさきになつて探した花
辛いなこゝ、わたしははとうと、その花を手に入れた。(「お会いにより」)

イクバルの後の作戦を見ていくと、この「花」とはクルアーンのスッサージである、その
浪布にイクバルは生涯、専心した。

①この時代、人生とは行動、努力であるべきと考えた、つぎの打撃の中にはもそ表されてい
る。

この世での人生とは動きからある
この世の習いとは昔から続いている (7月7日)

人生の秘密を幸せられたロズルに聞け
ほんた物でも生きろ 終わりをま努力で (7月7日)

②この時代、イクバルはヒンドラー・ナシコナリズムに別れを告げ、その代わりイスラ
ムの宗教を始めた、イスラーム教徒の共同体の基礎は固めて宗教である。

アラブの創造者はそれをむくことも要なつて作つた
われら民衆の塔の基礎は固く一致でけい (7月7日)

③ヨーロッパは海中、イクバルの中に生じた考えを押しして親友アアドル・カーディルに
送った。詩の題は「アアドル・カーディルに宛てて」であった。この詩の中にはイクバルの
将来を指し示す具体的な考えがある。その中の幾つかの打撃を示すつぎのようである。

その命り衣を中固の偶像寺院から取り上げてしまふ
つべりの者をデーデーヤサルマーの顔の心酔者にしてしまふ
ここびデーデーヤサルマーはイスラーム教徒を表している。

見エ ヤスィブではイスラームの輪軸は役立たなくなつてしまった
カイスに新しい神れを知らせてやろう

カイスとはイスラームに悪い熊かれ者であつたが、イクバルはカイスである人々がイスラーム

ムを求めたことを履つてこのように言う

環燭のようになきよう 世界の空で

自から燃えよ 他への目を明かせてしまふ

ミニアは自らイスラームで遊ばし、他人もイスラームを示そうと言つてゐる。

第三期（一九〇八年帰国後から一九二三年まで）

ヨバリーシゲ・ダラーロの第三期の部分はイクバルがヨーロッパから帰つて来たから、一九二三年までの間に書いたものである。

一九〇八年、ラーズに居るし、しばらくの間、母校のカバメント・カレツジで非常勤講師

師として哲學と英語を教えた、その間、アリーガル・カレツジの教師として組もう水の話もあつたが実現せず、正業として晩年まで筆桿を続けた。

この時代の特徴はつぎのようである。

川詩の中の言葉は明瞭でシンプルにばつた。その視点は宇宙的となり、作品の中の情熱や美しさかより多く出てくると共に、哲學的思想も鮮明となつた。

①イクバルのクルド人語入の詩はベルシア語の影響が大だ。當時不朽の名作と言われ、日自然の秘苑、忘我の秘苑をそれそれ一九一四年、一五年に、そして日東洋人のメッセ

ージ四を一九二三年はベルシア語で書いてから、イクバルはベルシア語での詩作に傾倒した、その影響、長詩「イスラームの再興」は最後の連を、環燭と詩人は出だしの部分でベルシア語で書いた。

②言葉と其の思想にも社会主義や革命の考えが鮮明に表れている。この期の作品には花葉詩の影響が大きい。また詩の中で月や花、あるいは星などに話しかける以形のような様子は姿を消した。それらのテーマの多くは、人生や自我、神や愛などになった。そして確信を持って世界を自らのメッセージを出している。「イスラームの再興」の中にそのような詩句がある。

③

④

ムスリムをみよえはこの宇宙の秘密 自分の目で輝け
自然の秘教の保持者となれ 神の代弁者となれ

自己に沈没せよ 愚か者よ これが人生の秘教だ

朝晩の籠園から出て永遠にたれ

(9) 預言者ムハンマドに対するイクバルの信仰は強かった、そしてそれは最後の息を引か
るまで増々強くなっていき、たよりに見える。さらにメッカの地を愛していた、それがつま
みかきも合かる。

わたしは言った 人生は死のペルルの中にある

真珠は便桶の中に隠れているように

(「ヒジャーズの病院より」)

他の人々とはよ この人生のメッセージを

わたしはヒジャーズのエの中です探そう

(10) この時代、たくさん語りの中でイクバルは世界がイスラーム教徒の様子を述べている、
イクバルが一九〇八年ヨーロッパから帰るとイスラーム世界を揺がす事件が一つ一つと起ま
った。

一九〇六年、イランで立憲革命が起ると、その後の国内の混乱に乗じてイギリス、ロシア
などがイランの内政、外交に干渉し始めた。

一八〇一年、イタリヤがたいした理由もなくトリポリを攻撃し、イギリスもこれを支援した。
一九一二年、バルカン諸国はイギリスの指示のもとに、オスマン帝国に宣戦を布告した、
一九一三年、イギリスはインドのカーンアルの魚市場の近くにあったマシットを爆弾攻撃
のため取り壊した。イギリスのこの行為はインドのイスラーム教徒の感情を踏みにじった。

一九一五年、トルコが第一次大戦に反連合國側として参戦すると、イギリスはアラブをトルコに封して戦せせた。

一九一九年、イギリスはトルコを分割せよとせむる政略を組んだ。一九二一年、ヤリシヤを秘密裡に援助して、トルコを戦せせた。

ロバート・グラーブのこの期に詩作はなほ、イクバルはイギリスのイスラーム教徒を敵視するこれら一連の動きを見て、その詩の中に、イスラーム教徒の心情を表現した。それを示すにはつぎの対句一つで充分である。

モレオスマン帝國に悲しみの山が崩れかかつて来ては何が悲しいか
悲しむなびない 數十名の骨の血で朝が生じるだろうから

(6) 一九一八年以降、イクバルの考案の中は広ま、思考の高さ、感情の強さ、感覺の鋭さを生じた。そしてイクバルは詩人を越えて預言者となった。それは「道案内のヒズル」の中、その預言的傾向は、つまり見える。

(7) 愛を自分の道に取り入れた。そしてその詩作はイスラームの布教と宣伝の立場を取つた。確固たる確信、永遠の行為、世界を征服する愛

これら、その人生の聖戦において勇者の剣である (「イスラームの再興」より)
(8) その視点は世界的なものでした。それをつぎの対句が示す。

中國もアラブもみな イントもみんなわれらの國

われらにイスラーム教徒 全世界がわれらの故國 (「イスラーム世界連帯の歌」)
(9) イクバルは詩力をもって、イスラーム教徒の心の中はやる気を生じさせようとし、希望と確信のメッセージを送つた。そしてイスラーム崇拜の感情を高まらせ、と同時にイスラーム教徒の西洋文化の危険性も知らせた。へ「イスラーム教徒の若者へクスピチ」
「イスラーム教徒へ」(太陽光線「行」)

(3) この時代、一オでウルドラ一之堂の視野を広げるような詩も書けり、イクパールの名を不
満にいう詩も書いた。「神への不平」。「不平の答え」。「蟻湯」と詩人。「道草のヒズル」。「亡
き母の思い出」。「イスラームの再興」など、これらに匹敵する詩はウルドラ一文学の中でも少
ないにせられている。

(4) イスラームではすべての宗教の優れた指導者を尊敬することを教えている。イクパールも
イスラームの宗教にもかかわらず、一九〇五年以降そうであつたが、一オでイスラームの聖者
を讃える詩を分けば、必ず他の所で他の優れた宗教指導者を讃えている。

(5) この時代、イクパールは自我の哲学を拡大してハルシア語で自我の秘教を著すかこの
考えは以前からあつたを考えてよい。「人間と自然の密」。「鳥と堂」。「ラーナイ」の序文
で「イスラームの再興」など自我の哲学が見えらる。

(6) この時代のカズルにも情熱と肉欲の様子があつた。

4. 内容から見た特徴

イクパールが一九三九年に出した詩集「カブリエルの聖口」の序文が詩は完全な域に達してゐる
が、「カブリエルの聖口」もイクパールを第一級の詩人として認めさせる多くの優れた点を指
す。

「カブリエルの聖口」の中には自由詩が一回四篇、叙情定型詩が二八篇、その他が二八篇あ
る。その内容は以下のように入詩である。

(1) 自然の光景を背景にした心理的詩、「カヒマラマ」。「華やかな花」。「山の雲」。「朝の大
陽」。「月」。「堂」など。

(2) 民族愛の感情を吐露した國や民族についての詩や民族を行動にかりたてる詩。(「インドの子供たちの歌」「新しい詩」「イスラーム世界運轉の歌」「祖國愛」「イスラーム教徒の若者へのスピーチ」「インドの新月」など)

(3) 道徳的な美点を想起せよという教訓を令んだ詩。(「善れたたし」「聖徳と破戒」「乳飲み」と「王家の墓」「朝露と星」など)

(4) 歴史的事象を、歴史上の人物について述べている詩。(「ピラール」「スイクリヤ」「イスラーム諸都市」「預言者ムハンマドの詩で」「ファアティマ・ビント・アブドゥラト」「アドリアノル包圍」「ゲラム・カディム・ルビラール」など)

(5) 哲學的な考えを表明している詩。(「蠟燭」「海の波」「人間の身の上話」「堂」「子供と蠟燭」「愛」「悲しみの声」「悲しみの哲學」「星の宴」「人間」「進展」など)

(6) 願いのことを述べている詩。(「一つの願ひ」「旅人の願ひ」「祈り」など)

(7) ヲルシア詩の考えを更に敷衍した詩。(「ミルザ・ガリブ」「ウルファイ」「シエイクスピア」など)

(8) インドの有名宗教的指導者の偉大さを述べた詩。(「ミルザ・ガリブ」「ダーグ」「シブリー」「ハーリー」など)

(9) 當時の重要な社会的・政治的問題について述べた詩。

第二の特徵は、ウルシア語の種文や單語の使用が多い。もしウルドゥー語の代わりにウルシア語を一、二語入れれば、ウルシア語の詩になつてしまふものも少なくはない。第三の特徵は、目バインガ、ダラーの多くの短句が人々の心に訴へ、詩のように入心愛喝されてゐる。フズルネズの如きもの一例である。

ウルドゥーの老髪髮は今も 拂ふ必要にしてゐる
この蠟燭は 残の身を 焼く情熱を 求めてゐる (「ミルザ・ガリブ」)

わたしが跪拜をした。地面から声かして来た
おぼろの心は偶像崇拜、おぼろの何を得られるか、祈りから
(146「カザル」)

謀慮状態では役立たない、剣も第幾と
確信の叫びが生じらば、鎖も切れる。(「イスラームの再興」)

誰か推測できるか、敬虔なムスリムが腕の強さを
その目に示し、変えらるる、運命か。(「イスラームの再興」)

理性の見張りが心と是れあるうけい、
だが時には、心を並べて放してやれ。(「カザル」)

こわろく好むの他、「神への不平」や「不平の答へ」、「囃場」と詩人として道案内のヒズル
などの詩を人々によく覚えており、宗教的性質より詩人で執筆を込めて読む。
第五の特長は、神秘主義の影響が初期よりイクトバルにあり、神の唯一性やその濃さ、そ
してこの考えが「コワロク詩集」が「プリエルの翼」の中に鮮明に出ている。

一九二四年、つぎのように述べている。

托鉢僧の考えとは、人をとは

救たれる矢である、だが百から遠くは無い。(「カザル」)

このことは既に一九〇四年以前にそのように述べている。

狩人もその通り、暴力の器もその通り
カアバ聖殿の屋根も、その屋根も鳥もその通り。(「囃場」)

妙の唇はワせてはならない 古めかしい秘愛は
また始めてはならない あの音フリの神とその綱の語は (「環燭」より)

頑固な顔は目をほぐくことがわたしに起まてこないように

愛を起こせるよがすべてり中に見えてこないように

(「朝の太陽」より)

見るから見せよの要求がソール山であつた

おまゝを分かつているかによ 決定がなせぬたか

(「ソール山」より)

もし見たいとする願望がおまゝの目を開かせたなら

道ごしにある友の足跡の様子を よく見よ (「ソール山」より)

第六の特徴 コバーンゲ・ダフィーの中の評は年代順になつてゐるが、順に最初から見て

いくと、イクバールの人間性やその変化の様子に分かる。

(1) 若い時、ガズル詩人として有名だつた。

(2) イギリス又留學中の時、愛国主義者の演説や著書ものに影響されて、英國インドの歴史を喜んだ。

(3) しかし、ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒が争ふ方の相違を見て、因習を感じ始めた。そしてどうにもならぬフツツと云う。

心は熱く、いかにしても安んずるを得られない

サレンスの流水よ、わたしをここに沈めさせてくれ (「苦痛の聲」より)

(4) ヨーロッパに行つて、イスラームによる革命の重要性を感じた。イスラームの兄弟愛を再

識してその様子をばった。

(イギリスのイスラーム教徒に対する敵意を感じ、イクバルはその純粋性を確するに努めた。一九二二年、フギーに言う。

三位一体の息子がカトリックの遺産を持ち去って

キリスト教の基礎を揺るがし、シスターズの土がなくなった

カバレーンゲ・ダブローの申しは西洋、特にイギリスによるイスラーム教徒の敵視が明瞭に出ている。

第七の特徴　ヨバレーンゲ・ダブローがイクバルは西洋文化について述べ、それに感ぜられたいように忠告している。

現代文明の輝きは目を眩ませる

だがこの仁徳は紛い物の輝きだ (イスラームの再興により)

第八の特徴　人間の愛についての考察も多い。このこともしイクバルの詩を不滅なものにしてている。

第九の特徴　ハーリー(一八七〇-一九一一年)が一八七九年、大行詩を書いてウルドゥー語

で改革詩を始めたように、イクバルは一九二二年、コ達室内のヒズルを書いて革命詩を始めた。今日でも被抑圧者や労働者に打って味オする声があること、その中の一つがよいな詩がよく引用される。

おまえは狡猾な家畜に食いをさらされてきた

後世に託すわたくし　おまえの分け前は鹿の角の上にある

アラムートの成金の悪術師がオマエにハシンの業を手伝

するしおまえは愚かに水をざる砂糖をばりて煮えてしまった

出てよ今 世界の果ての任方は新しい
東にも西にも今 約束したちう時代の始まりがある

やがてイクパールのウルトラ詩は二の曰パリンゲ・グラードに代わり、曰ガアリエルの響き
(一五三大号)へと続く。

イクパールの詩はウルトラ詩に新しい方向と生命を与えた。従来の悶々とした志の悩め、
人々への絶望、悲嘆の感じを与えた詩に代わり、力強さと希望を与えた。イクパールの詩は
解放の詩であり自由を旗じるしてあった。その詩は現代も人々を鼓舞し続け止まない。

Кирбейэ (Kiribeyé)

Төрөлүмө (Törölümö lie Törömörhuda Kiribé)

Ипбир, *Bəng-e-Darē*, Shaykh Ghulām Afi and Sons' Publishers, Lākōre, 1972.

Китибейәт-е-Һәуилә (Kitibeyät-e-Hawile)

Әд. Дәктәр Мухаммад Ипбир, *Bəng-e-Darē*, Sang-e-Meer, Lākōre, 1992.

Ипбир, *Kulliyät-e-Iqbāl*, Iqbāl Akademi Peshawar, Lākōre, 2000.

Шәраһ (Sharah)

Әд. Prof. Yüsf Salim Chishtī, *Sharah Bəng-e-Darē*, 'Iskhat Publishing House, Lākōre, 1972.

Әд. Муһини Ghulām Rasūl Nēhr, *Maqālāt Bəng-e-Darē*, Shaykh Ghulām Afi and Sons, Lākōre, 1997.

Әд. Дәктәр Аф-Ди-Һасән, *Bəng-Darē*, Shaykh Muhammad Basir and Sons, Lākōre.

Әд. Дәктәр Шаһид Аһмад, *Shāhid Bəng-e-Darē*, Popular Publishing House, Lākōre, 1990.

Әд. Дәктәр Кәүһәһ Һәмид Үзәдһини, *Sharah Bəng-e-Darē*, Sang-e-Meer Publications, Lākōre, 2006.

Әд. Кәүһәһ Аф-ди-Һәәид Үзәдһини, *Asar Bəng-e-Darē*, Alhamra, Lākōre, 2001.

Әд. Асәр Үзәди, *Kulliyät-e-Iqbāl*, Shaykh Muhammad Basir and Sons, Lākōre.

Төрөлүмө (Törölümö)

Әд. V.G. KERMAN, *POEMS FROM IQBAL*, John Murray, London, 1958.

Әд. D.I. MATTHEWS, *IQBAL A SELECTION OF THE URDU VERSE*, HERITAGE PUBLISHERS, New Delhi, 1993.

Әд. P.M.A. Khalil, *Gird of The Marching Bell*, Taryab Iqbal Printers, Canada, 1997.



詩集 ^Pバーレン ^ガ・^ガラ ^ラ音田
2008年5月25日
著者 シャイフ・ムハンマド・イクバル
訳注者 片岡弘次
印刷 大東文化大学国際関係学部第2研究棟事務室
発行 大東文化大学国際関係学部ウルドゥー語片岡研究室
〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560